
白 岡 市

赤砂利／宿赤砂利

総合交付金（河川）工事（隼人堀川・埋蔵文化財整理業務委託）
埋蔵文化財発掘調査報告

2 0 1 8

埼 玉 県

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 赤砂利遺跡第8次調査遠景（西から）



2 赤砂利遺跡第9次・宿赤砂利遺跡調査遠景（西から）



1 第2号土器埋設遺構出土土器（第8次調査）



2 谷部出土土器群（第8次調査）

序

埼玉県は首都東京に隣接し、高次の都市機能と交通利便性を備える一方で、豊かな自然環境にも恵まれています。特に、河川が県土の面積に占める割合が全国一の本県では、河川にかかわる様々な施策が求められています。埼玉県5か年計画では、危機や災害に備えるため「治水対策の推進」を図るとともに、豊かな自然と共生する社会をつくるため「川の再生」などの取組みを進めるとしています。

隼人堀川は旧菖蒲町を源とし、大落古利根川に合流する一級河川です。流域は農業地域として発達していますが、近年急速に進む都市化に合わせ、河川の整備も周辺環境の改善や水辺空間の利活用を図りながら進められています。

隼人堀川の河川改修事業地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数所在し、今回発掘調査を実施した赤砂利遺跡、宿赤砂利遺跡もその一つです。発掘調査は、河川改修事業に伴う事前調査として埼玉県の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、縄文時代中・後期を中心に、近世までの数多くの遺構や遺物が発見されました。特に縄文時代中期では、竪穴住居跡の配置から大規模な環状集落の存在も予想されます。隣接する清左衛門遺跡の成果と合わせれば、約4,500年前から1,000年以上の長期にわたって集落が営まれていたことが分かりました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、埼玉県県土整備部河川砂防課、埼玉県杉戸県土整備事務所、白岡市教育委員会並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成30年3月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 塩野谷孝志

例 言

1. 本書は、白岡市に所在する赤砂利遺跡(第6・8・9次)・宿赤砂利遺跡(第1次)の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。
赤砂利遺跡(第6次)
白岡町大字彦兵衛字八幡66-3番地他
平成22年4月26日付け 教生文第2-5号
赤砂利遺跡(第8次)
白岡町下野田176-3番地他
平成24年4月26日付け 教生文第2-15号
赤砂利遺跡(第9次)・宿赤砂利遺跡(第1次)
白岡市上野田916番地他
平成26年2月25日付け 教生文第2-53号
3. 発掘調査は、単人堀川の総合治水対策特定河川工事業に先立つ埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、埼玉県の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 各事業の委託事業名は、下記のとおりである。
発掘調査事業(平成22・24・25年度)
「総合治水対策特定河川工事(単人堀川)事業地内埋蔵文化財発掘調査」
「総合交付金(住宅)工事(単人堀川・事業地内埋蔵文化財発掘調査業務委託)」
「総合交付金(河川)工事(単人堀川・事業地内埋蔵文化財発掘調査業務委託)」
整理報告書作成事業(平成27・29年度)
「総合交付金(河川)工事(単人堀川・埋蔵文化財整理業務委託)」
5. 発掘調査・整理報告書作成事業はI-3に示した組織により実施した。
発掘調査は、赤砂利遺跡第6次調査を平成22年3月29日から平成23年3月31日まで西井幸

雄・新屋雅明・松本美佐子が、第8次調査を平成24年5月1日から平成24年9月7日まで吉田 稔・大和田暲が担当し、第9次及び宿赤砂利遺跡第1次調査は平成25年11月11日から平成26年3月31日まで吉田・魚水 環が担当して実施した。

整理・報告書作成事業は、平成27年10月1日から平成28年3月31日まで吉田・大谷 徹・砂生智江が、平成29年9月1日から平成30年3月31日まで宮井英一が担当して実施し、平成30年3月22日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第443集として印刷・刊行した。

6. 発掘調査における基準点測量は、株式会社新日本エグザ、中央航業株式会社に委託した。
7. 発掘調査における空中写真は、株式会社シン技術コンサル・株式会社東京航業研究所・中央航業株式会社に委託した。
8. 巻頭図版の遺物写真撮影は、小川忠博氏に委託した。
9. 発掘調査における写真撮影は西井・新屋・松本・吉田・大和田・魚水が行い、出土遺物の写真撮影は宮井が行った。
10. 出土品の整理・図版作成は吉田・大谷・砂生・宮井が行い、村山 卓・水村雄功の協力を得た。
11. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、中・近世資料を村山、他は宮井が行った。
12. 本書の編集は宮井が行った。
13. 本書にかかる諸資料は平成30年4月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
14. 発掘調査や本書の作成にあたり、下記の機関、方々から御教示、御協力を賜った。記して感謝いたします(敬称略)。

白岡市教育委員会

奥野麦生 杉山和徳 松崎慶喜

凡 例

1. 本書におけるX・Yの数値は、世界測地系に基づく標準平面直角座標第Ⅸ系（原点北緯36°00′00″、東経139°50′00″）における座標値を表し、各挿図に記した方位はすべて座標北を示している。各調査区基準杭の座標値は、下表のとおりである。

第6次調査区	D-5グリッド北西杭
	X=1340.000m
	Y=-12630.000m
第8次調査区	F-6グリッド北西杭
	X=1420.000m
	Y=-12770.000m
第9次調査区	J-8グリッド北西杭
	X=1510.000m
	Y=-12850.000m

2. グリッドの設定は10m×10m基本グリッドを設定した。また、グリッド名の表記には、アルファベット（A・B・C…）と算用数字（1・2・3…）を用いた。各調査区の設定状況は、遺跡の概要欄に示す。
3. 本書の本文、挿図、表、写真図版に記した遺構の略号は以下のとおりである。
- S J…住居跡 S I…竪穴状遺構
- S D…溝跡 S K…土壌 P…ピット
4. 本書における挿図の縮尺とスケールは以下のとおりである。例外については、その都度図中

に縮尺とスケールを示した。

全体図	1 : 400
遺構図	1 : 60
出土遺物微細図	1 : 30
縄文土器実測図	1 : 4
縄文土器拓影図	1 : 3
土製品実測図	1 : 3
石器実測図	2 : 3 1 : 3

5. 遺構図では、焼土範囲を網掛20%で表した。また、土器実測図の中の網掛けは、縄文など地文の施された範囲を示した。
6. 遺物観察表の表示方法は以下のとおりである。
- ・口径・器高・底径はcm単位である。
 - ・（ ）内の数値は推定径を示す。
 - ・[] 内の数値は残存高を示す。
 - ・胎土は、含まれる鉱物等のうち特徴的なものを記号で示した。
- A : 赤色粒子 B : 白色粒子 C : 長石
- D : 角閃石 E : 石英 F : 砂粒子
- G : 黒色粒子
7. 遺構断面図に表記した水準数値は、すべて海拔標高（単位m）を示す。
8. 本書に使用した地形図類は、国土地理院発行の1:50,000地形図、白岡市発行の1:2,500都市計画図を使用した。

目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	2. 竪穴状遺構	194
1. 発掘調査に至る経過	1	3. カ跡	206
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	4. 土器埋設遺構	206
(1) 発掘調査	2	5. 土城	209
(2) 整理・報告書の作成	3	6. 溝跡	239
3. 発掘調査・報告書作成の組織	4	7. ビット列	243
II 遺跡の立地と環境	5	8. 谷部	244
1. 地理的環境	5	9. グリッド出土遺物	251
2. 歴史的環境	6	VI 赤砂利遺跡第9次調査の遺構と遺物	255
III 遺跡の概要	9	1. 住居跡	255
IV 赤砂利遺跡第6次調査の遺構と遺物	13	2. 土城	261
1. 住居跡	13	3. 溝跡	263
2. 土城	53	4. グリッド出土遺物	269
3. 溝跡	60	VII 宿赤砂利遺跡第1次調査	272
4. 谷部	62	1. 遺跡の概要	272
5. グリッド出土遺物	63	VIII 調査のまとめ	273
V 赤砂利遺跡第8次調査の遺構と遺物	74		
1. 住居跡	74		

写真図版

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	5	第8図 第1号住居跡遺物出土状況	17
第2図 周辺の遺跡	7	第9図 第1号住居跡出土遺物(1)	18
第3図 遺跡位置図	10	第10図 第1号住居跡出土遺物(2)	19
第4図 赤砂利・宿赤砂利遺跡全体図	11	第11図 第1号住居跡出土遺物(3)	20
(赤砂利遺跡第6次)		第12図 第1号住居跡出土遺物(4)	21
第5図 赤砂利遺跡第6次全体図(1)	14	第13図 第1号住居跡出土遺物(5)	22
第6図 赤砂利遺跡第6次全体図(2)	15	第14図 第1号住居跡出土遺物(6)	23
第7図 第1号住居跡	16	第15図 第1号住居跡出土遺物(7)	24

第16図	第1号住居跡出土遺物 (8)	25
第17図	第1号住居跡出土遺物 (9)	26
第18図	第2号住居跡 (1)	27
第19図	第2号住居跡 (2)	28
第20図	第2号住居跡遺物出土状況	29
第21図	第2号住居跡出土遺物 (1)	30
第22図	第2号住居跡出土遺物 (2)	31
第23図	第2号住居跡出土遺物 (3)	32
第24図	第3号住居跡	33
第25図	第3号住居跡遺物出土状況	34
第26図	第3号住居跡出土遺物 (1)	35
第27図	第3号住居跡出土遺物 (2)	36
第28図	第4号住居跡	37
第29図	第4号住居跡遺物出土状況 (1)	38
第30図	第4号住居跡遺物出土状況 (2)	39
第31図	第4号住居跡出土遺物 (1)	40
第32図	第4号住居跡出土遺物 (2)	41
第33図	第4号住居跡出土遺物 (3)	42
第34図	第4号住居跡出土遺物 (4)	43
第35図	第5号住居跡	45
第36図	第6～8号住居跡	46
第37図	第6号住居跡	47
第38図	第7号住居跡	48
第39図	第8号住居跡	49
第40図	第9号住居跡	50
第41図	第9号住居跡遺物出土状況	51
第42図	第5～9号住居跡出土遺物	52
第43図	土塋 (1)	54
第44図	土塋 (2)	55
第45図	土塋 (3)	56
第46図	土塋 (4)	57
第47図	土塋出土遺物 (1)	58
第48図	土塋出土遺物 (2)	59
第49図	土塋出土遺物 (3)	60
第50図	第1号溝跡	61
第51図	溝跡出土遺物	62
第52図	第2号溝跡	62

第53図	グリッド出土遺物 (1)	64
第54図	グリッド出土遺物 (2)	65
第55図	グリッド出土遺物 (3)	66
第56図	グリッド出土遺物 (4)	67
第57図	グリッド出土遺物 (5)	68
第58図	グリッド出土遺物 (6)	70
第59図	グリッド出土遺物 (7)	71
第60図	グリッド出土遺物 (8)	72
第61図	グリッド出土遺物 (9)	73

(赤砂利遺跡第8次)

第62図	赤砂利遺跡第8次全体図 (1)	74
第63図	赤砂利遺跡第8次全体図 (2)	75
第64図	赤砂利遺跡第8次全体図 (3)	76
第65図	赤砂利遺跡第8次全体図 (4)	77
第66図	赤砂利遺跡第8次全体図 (5)	78
第67図	第1号住居跡	80
第68図	第1号住居跡出土遺物 (1)	81
第69図	第1号住居跡出土遺物 (2)	82
第70図	第2号住居跡	82
第71図	第2号住居跡出土遺物	83
第72図	第3号住居跡 (1)	84
第73図	第3号住居跡 (2)	85
第74図	第3号住居跡出土遺物 (1)	86
第75図	第3号住居跡出土遺物 (2)	87
第76図	第4号住居跡	88
第77図	第4号住居跡出土遺物 (1)	89
第78図	第4号住居跡出土遺物 (2)	90
第79図	第4号住居跡出土遺物 (3)	91
第80図	第5号住居跡	92
第81図	第5号住居跡出土遺物 (1)	93
第82図	第5号住居跡出土遺物 (2)	94
第83図	第5号住居跡出土遺物 (3)	95
第84図	第5号住居跡出土遺物 (4)	96
第85図	第6号住居跡 (1)	97
第86図	第6号住居跡 (2)	98
第87図	第6号住居跡 (3)	99
第88図	第6号住居跡出土遺物 (1)	99

第89图	第6号住居跡出土遺物(2).....	100	第126图	第15号住居跡出土遺物(4).....	135
第90图	第7号住居跡(1).....	102	第127图	第16号住居跡.....	137
第91图	第7号住居跡(2).....	103	第128图	第16号住居跡出土遺物(1).....	138
第92图	第7号住居跡出土遺物(1).....	104	第129图	第16号住居跡出土遺物(2).....	139
第93图	第7号住居跡出土遺物(2).....	105	第130图	第17号住居跡(1).....	140
第94图	第8号住居跡.....	106	第131图	第17号住居跡(2).....	141
第95图	第8号住居跡出土遺物.....	108	第132图	第17号住居跡出土遺物.....	142
第96图	第9号住居跡(1).....	109	第133图	第18号住居跡.....	143
第97图	第9号住居跡(2).....	110	第134图	第18号住居跡出土遺物.....	144
第98图	第9号住居跡出土遺物.....	110	第135图	第19号住居跡.....	145
第99图	第10・11号住居跡.....	111	第136图	第19号住居跡出土遺物.....	146
第100图	第10号住居跡(1).....	112	第137图	第20号住居跡.....	147
第101图	第10号住居跡(2).....	113	第138图	第20号住居跡出土遺物.....	148
第102图	第10号住居跡出土遺物(1).....	113	第139图	第21号住居跡.....	150
第103图	第10号住居跡出土遺物(2).....	114	第140图	第21号住居跡出土遺物.....	151
第104图	第10号住居跡出土遺物(3).....	115	第141图	第22号住居跡.....	152
第105图	第11号住居跡(1).....	116	第142图	第22号住居跡出土遺物.....	152
第106图	第11号住居跡(2).....	117	第143图	第23号住居跡.....	153
第107图	第11号住居跡出土遺物(1).....	118	第144图	第23号住居跡出土遺物(1).....	154
第108图	第11号住居跡出土遺物(2).....	119	第145图	第23号住居跡出土遺物(2).....	155
第109图	第11号住居跡出土遺物(3).....	120	第146图	第23号住居跡出土遺物(3).....	156
第110图	第12号住居跡.....	120	第147图	第23号住居跡出土遺物(4).....	157
第111图	第12号住居跡出土遺物.....	121	第148图	第23号住居跡出土遺物(5).....	158
第112图	第13号住居跡(1).....	122	第149图	第24号住居跡.....	159
第113图	第13号住居跡(2).....	123	第150图	第24号住居跡出土遺物(1).....	160
第114图	第13号住居跡出土遺物(1).....	123	第151图	第24号住居跡出土遺物(2).....	161
第115图	第13号住居跡出土遺物(2).....	124	第152图	第25号住居跡.....	162
第116图	第14号住居跡(1).....	125	第153图	第25号住居跡出土遺物(1).....	163
第117图	第14号住居跡(2).....	126	第154图	第25号住居跡出土遺物(2).....	164
第118图	第14号住居跡出土遺物(1).....	127	第155图	第26号住居跡(1).....	166
第119图	第14号住居跡出土遺物(2).....	128	第156图	第26号住居跡(2).....	167
第120图	第14号住居跡出土遺物(3).....	129	第157图	第26号住居跡(3).....	168
第121图	第14号住居跡出土遺物(4).....	130	第158图	第26号住居跡(4).....	169
第122图	第15号住居跡.....	131	第159图	第26号住居跡(5).....	170
第123图	第15号住居跡出土遺物(1).....	132	第160图	第26号住居跡(6).....	171
第124图	第15号住居跡出土遺物(2).....	133	第161图	第26号住居跡(7).....	172
第125图	第15号住居跡出土遺物(3).....	134	第162图	第26号住居跡出土遺物(1).....	172

第163図	第26号住居跡出土遺物 (2) ……………	173
第164図	第26号住居跡出土遺物 (3) ……………	174
第165図	第27号住居跡 ……………	175
第166図	第27号住居跡出土遺物 ……………	176
第167図	第28号住居跡 ……………	177
第168図	第28号住居跡出土遺物 ……………	178
第169図	第29号住居跡 ……………	179
第170図	第29号住居跡出土遺物 (1) ……………	180
第171図	第29号住居跡出土遺物 (2) ……………	181
第172図	第30号住居跡 ……………	182
第173図	第30号住居跡出土遺物 (1) ……………	183
第174図	第30号住居跡出土遺物 (2) ……………	184
第175図	第31号住居跡 (1) ……………	185
第176図	第31号住居跡 (2) ……………	186
第177図	第31号住居跡出土遺物 ……………	187
第178図	第32号住居跡 (1) ……………	188
第179図	第32号住居跡 (2) ……………	189
第180図	第32号住居跡出土遺物 ……………	190
第181図	第33号住居跡 ……………	191
第182図	第33号住居跡出土遺物 ……………	192
第183図	第1号竪穴状遺構 ……………	193
第184図	第1号竪穴状遺構出土遺物 ……………	194
第185図	第2号竪穴状遺構 ……………	195
第186図	第2号竪穴状遺構出土遺物 ……………	195
第187図	第4号竪穴状遺構 ……………	196
第188図	第4号竪穴状遺構出土遺物 ……………	197
第189図	第5号竪穴状遺構 ……………	198
第190図	第5号竪穴状遺構出土遺物 (1) ……………	199
第191図	第5号竪穴状遺構出土遺物 (2) ……………	200
第192図	第6号竪穴状遺構 ……………	201
第193図	第6号竪穴状遺構出土遺物 (1) ……………	202
第194図	第6号竪穴状遺構出土遺物 (2) ……………	203
第195図	第6号竪穴状遺構出土遺物 (3) ……………	204
第196図	第6号竪穴状遺構出土遺物 (4) ……………	205
第197図	第3号竪穴状遺構 ……………	205
第198図	第7号竪穴状遺構 ……………	205
第199図	第1号炉跡 ……………	206

第200図	第1号炉跡出土遺物 ……………	206
第201図	第1～3号土器埋設遺構 ……………	207
第202図	第1号土器埋設遺構出土遺物 ……………	207
第203図	第2号土器埋設遺構出土遺物 ……………	208
第204図	第3号土器埋設遺構出土遺物 ……………	209
第205図	土城 (1) ……………	211
第206図	土城出土遺物 (1) ……………	212
第207図	土城出土遺物 (2) ……………	213
第208図	土城 (2) ……………	214
第209図	土城 (3) ……………	215
第210図	土城出土遺物 (3) ……………	217
第211図	土城 (4) ……………	218
第212図	土城 (5) ……………	219
第213図	土城 (6) ……………	220
第214図	土城出土遺物 (4) ……………	221
第215図	土城 (7) ……………	223
第216図	土城 (8) ……………	224
第217図	土城出土遺物 (5) ……………	225
第218図	土城出土遺物 (6) ……………	226
第219図	土城 (9) ……………	227
第220図	土城 (10) ……………	228
第221図	土城出土遺物 (7) ……………	229
第222図	土城出土遺物 (8) ……………	230
第223図	土城 (11) ……………	231
第224図	土城 (12) ……………	232
第225図	土城 (13) ……………	233
第226図	土城出土遺物 (9) ……………	234
第227図	土城出土遺物 (10) ……………	235
第228図	土城出土遺物 (11) ……………	236
第229図	第1号溝跡 ……………	239
第230図	溝跡出土遺物 ……………	239
第231図	第2・3号溝跡 ……………	240
第232図	第4・5号溝跡 ……………	241
第233図	第6～8号溝跡 ……………	242
第234図	ピット列 ……………	243
第235図	谷部 (1) ……………	244
第236図	谷部 (2) ……………	245

第237図	谷部出土遺物 (1)	246
第238図	谷部出土遺物 (2)	247
第239図	谷部出土遺物 (3)	248
第240図	谷部出土遺物 (4)	249
第241図	谷部出土遺物 (5)	250
第242図	グリッド出土遺物 (1)	252
第243図	グリッド出土遺物 (2)	253
第244図	グリッド出土遺物 (3)	254
(赤砂利遺跡第9次)		
第245図	赤砂利遺跡第9次・宿赤砂利遺跡 全体図 (1)	255
第246図	赤砂利遺跡第9次・宿赤砂利遺跡 全体図 (2)	256
第247図	赤砂利遺跡第9次・宿赤砂利遺跡 全体図 (3)	257

第248図	第1号住居跡 (1)	258
第249図	第1号住居跡 (2)	259
第250図	第1号住居跡出土遺物	260
第251図	土壌	261
第252図	土壌出土遺物	262
第253図	第1・2・5号溝跡	263
第254図	第3・4・8～10号溝跡	264
第255図	第6・7号溝跡	266
第256図	溝跡出土遺物	267
第257図	グリッド出土遺物 (1)	270
第258図	グリッド出土遺物 (2)	271
(宿赤砂利遺跡)		
第259図	宿赤砂利遺跡北西調査区	272
第260図	遺構分布状況図	274

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧表	7
(赤砂利遺跡第6次)		
第2表	第1号住居跡柱穴計測表	26
第3表	第2号住居跡柱穴計測表	29
第4表	第3号住居跡柱穴計測表	34
第5表	第4号住居跡柱穴計測表	44
第6表	第5号住居跡柱穴計測表	44
第7表	第6～8号住居跡柱穴計測表	52
第8表	第9号住居跡柱穴計測表	53
第9表	住居跡出土遺物観察表	53
第10表	土壌出土遺物観察表	58
第11表	土壌一覧表	58
第12表	溝跡出土遺物観察表	61
第13表	グリッド出土遺物観察表	73
(赤砂利遺跡第8次)		
第14表	第1号住居跡柱穴計測表	79
第15表	第1号住居跡出土遺物観察表	82
第16表	第2号住居跡柱穴計測表	83

第17表	第2号住居跡出土遺物観察表	83
第18表	第3号住居跡柱穴計測表	87
第19表	第3号住居跡出土遺物観察表	89
第20表	第4号住居跡柱穴計測表	92
第21表	第4号住居跡出土遺物観察表	92
第22表	第5号住居跡柱穴計測表	93
第23表	第5号住居跡出土遺物観察表	96
第24表	第6号住居跡柱穴計測表	101
第25表	第7号住居跡柱穴計測表	103
第26表	第7号住居跡出土遺物観察表	107
第27表	第8号住居跡柱穴計測表	107
第28表	第9号住居跡柱穴計測表	110
第29表	第10号住居跡柱穴計測表	115
第30表	第10号住居跡出土遺物観察表	117
第31表	第11号住居跡柱穴計測表	118
第32表	第11号住居跡出土遺物観察表	118
第33表	第12号住居跡柱穴計測表	121
第34表	第12号住居跡出土遺物観察表	121

第35表	第13号住居跡柱穴計測表	126
第36表	第14号住居跡柱穴計測表	130
第37表	第14号住居跡出土遺物観察表	130
第38表	第15号住居跡柱穴計測表	136
第39表	第15号住居跡出土遺物観察表	136
第40表	第16号住居跡柱穴計測表	139
第41表	第16号住居跡出土遺物観察表	139
第42表	第17号住居跡柱穴計測表	141
第43表	第17号住居跡出土遺物観察表	141
第44表	第18号住居跡柱穴計測表	142
第45表	第19号住居跡柱穴計測表	146
第46表	第19号住居跡出土遺物観察表	146
第47表	第20号住居跡柱穴計測表	148
第48表	第20号住居跡出土遺物観察表	149
第49表	第21号住居跡柱穴計測表	149
第50表	第21号住居跡出土遺物観察表	149
第51表	第22号住居跡出土遺物観察表	152
第52表	第23号住居跡柱穴計測表	154
第53表	第23号住居跡出土遺物観察表	158
第54表	第24号住居跡柱穴計測表	160
第55表	第24号住居跡出土遺物観察表	160
第56表	第25号住居跡柱穴計測表	165
第57表	第25号住居跡出土遺物観察表	165
第58表	第26号住居跡柱穴計測表	169
第59表	第26号住居跡出土遺物観察表	172
第60表	第27号住居跡柱穴計測表	175
第61表	第27号住居跡出土遺物観察表	177

第62表	第28号住居跡柱穴計測表	178
第63表	第28号住居跡出土遺物観察表	179
第64表	第29号住居跡柱穴計測表	180
第65表	第29号住居跡出土遺物観察表	180
第66表	第30号住居跡柱穴計測表	183
第67表	第31号住居跡柱穴計測表	186
第68表	第31号住居跡出土遺物観察表	186
第69表	第32号住居跡柱穴計測表	189
第70表	第32号住居跡出土遺物観察表	190
第71表	第33号住居跡柱穴計測表	192
第72表	第33号住居跡出土遺物観察表	192
第73表	第1号竪穴状遺構出土遺物観察表	195
第74表	第4号竪穴状遺構柱穴計測表	197
第75表	第5号竪穴状遺構柱穴計測表	199
第76表	第6号竪穴状遺構出土遺物観察表	202
第77表	第7号竪穴状遺構柱穴計測表	205
第78表	土城出土遺物観察表	236
第79表	土城一覽表	237
第80表	ビット列柱穴計測表	243
第81表	グリッド出土遺物観察表	254
(赤砂利遺跡第9次)		
第82表	第1号住居跡柱穴計測表	259
第83表	第1号住居跡出土遺物観察表	259
第84表	土城一覽表	262
第85表	第1・2・5～10号溝跡出土遺物観察表	268
第86表	グリッド出土遺物観察表	271

写真図版目次

巻頭図版1	1 赤砂利遺跡第8次調査遠景 (西から)
	2 赤砂利遺跡第9次・宿赤砂利 遺跡調査遠景(西から)
巻頭図版2	1 第2号土器埋設遺構出土土器 (第8次調査)

	2 谷部出土土器群(第8次調査)
(赤砂利遺跡第6次)	
図版1	1 調査区全景(東から)
	2 調査区全景(西から)
図版2	1 第1号住居跡
	2 第2号住居跡

	3	第3号住居跡	2	第15号土壇
図版3	1	第1号住居跡遺物出土状況	3	第16号土壇
	2	第1号住居跡炉跡	4	第17号土壇
	3	第2号住居跡遺物出土状況	5	第18号土壇
	4	第2号住居跡炉跡	6	第19号土壇
	5	第2号住居跡埋甕	7	第1号溝跡
	6	第3号住居跡遺物出土状況	8	第2号溝跡
	7	第3号住居跡炉跡	図版9	1～3 第1号住居跡出土遺物
	8	第3号住居跡埋甕	4・5	第2号住居跡出土遺物
図版4	1	第4号住居跡	6	第3号住居跡出土遺物
	2	第5～8号住居跡	7・8	第4号住居跡出土遺物
	3	第9号住居跡	図版10	1 第1号住居跡出土遺物 (1)
図版5	1	第4号住居跡遺物出土状況	2	第1号住居跡出土遺物 (2)
	2	第4号住居跡炉跡 (1)	3	第1号住居跡出土遺物 (3)
	3	第4号住居跡炉跡 (2)	図版11	1 第1号住居跡出土遺物 (4)
	4	第4号住居跡炉跡 (3)	2	第1号住居跡出土遺物 (5)
	5	第5号住居跡炉跡	3	第1号住居跡出土遺物 (6)
	6	第6号住居跡炉跡	図版12	1 第1号住居跡出土遺物 (7)
	7	第7号住居跡炉跡	2	第1号住居跡出土遺物 (8)
	8	第8号住居跡炉跡	3	第1号住居跡出土遺物 (9)
図版6	1	第1号土壇	図版13	1 第1号住居跡出土遺物 (10)
	2	第2号土壇	2	第1号住居跡出土遺物 (11)
	3	第3号土壇	3	第1号住居跡出土遺物 (12)
	4	第4号土壇	図版14	1 第1号住居跡出土遺物 (13)
	5	第5号土壇	2	第2号住居跡出土遺物
	6	第6・7号土壇	3	第3号住居跡出土遺物 (1)
	7	第8号土壇	図版15	1 第3号住居跡出土遺物 (2)
	8	第9号土壇	2	第4号住居跡出土遺物 (1)
図版7	1	第10号土壇	3	第4号住居跡出土遺物 (2)
	2	第10号土壇遺物出土状況 (1)	図版16	1 第4号住居跡出土遺物 (3)
	3	第10号土壇遺物出土状況 (2)	2	第4号住居跡出土遺物 (4)
	4	第10号土壇遺物出土状況 (3)	3	第4号住居跡出土遺物 (5)
	5	第11～15号土壇	図版17	1 第5～9号住居跡出土遺物
	6	第11号土壇	2	土壇出土遺物 (1)
	7	第12号土壇	3	土壇出土遺物 (2)
	8	第13号土壇	図版18	1 土壇出土遺物 (3)
図版8	1	第14号土壇	2	土壇出土遺物 (4)

3 第1号溝跡出土遺物

(赤砂利遺跡第8次)

図版19 1 1区北西側全景 (南東から)

2 1区北西側全景 (北西から)

3 2区全景 (北西から)

図版20 1 2区全景 (南東から)

2 1区南東側全景 (南東から)

3 1区南東側全景 (北西から)

図版21 1 第1号住居跡

2 第2号住居跡

3 第3号住居跡

図版22 1 第4号住居跡

2 第5号住居跡

3 第6号住居跡

図版23 1 第7号住居跡

2 第8号住居跡

3 第9号住居跡

図版24 1 第5号住居跡炉跡 (1)

2 第5号住居跡炉跡 (2)

3 第6号住居跡炉跡 (1)

4 第6号住居跡炉跡 (2)

5 第7号住居跡炉跡 (1)

6 第7号住居跡炉跡 (2)

7 第8号住居跡炉跡

8 第9号住居跡炉跡

図版25 1 第10号住居跡

2 第11号住居跡

3 第12号住居跡

図版26 1 第9号住居跡炉跡

2 第10号住居跡炉跡

3 第10号住居跡埋甕

4 第11号住居跡炉跡

5 第11号住居跡埋甕 (1)

6 第11号住居跡埋甕 (2)

7 第13号住居跡炉跡

8 第14号住居跡炉跡

図版27 1 第13号住居跡

2 第14号住居跡

3 第15号住居跡

図版28 1 第16号住居跡

2 第17号住居跡

3 第18号住居跡

図版29 1 第15号住居跡炉跡 (1)

2 第15号住居跡炉跡 (2)

3 第15号住居跡炉跡 (3)

4 第15号住居跡遺物出土状況

5 第17号住居跡炉跡

6 第18号住居跡炉跡

7 第19号住居跡炉跡

8 第20号住居跡炉跡

図版30 1 第19号住居跡

2 第20号住居跡

3 第21号住居跡

図版31 1 第22号住居跡

2 第23号住居跡

3 第24号住居跡

図版32 1 第21号住居跡炉跡

2 第21号住居跡埋甕

3 第23号住居跡炉跡 (1)

4 第23号住居跡炉跡 (2)

5 第25・30・32号住居跡

図版33 1 第25号住居跡炉跡 (1)

2 第25号住居跡炉跡 (2)

3 第30号住居跡炉跡 (1)

4 第30号住居跡炉跡 (2)

5 第30号住居跡炉跡 (3)

6 第30号住居跡炉跡 (4)

7 第32号住居跡炉跡

8 第26号住居跡炉跡

図版34 1 第26号住居跡

2 第27号住居跡

3 第28号住居跡

図版35 1 第29号住居跡

2 第31号住居跡

	3	第33号住居跡	5	第27号土壇
図版36	1	第27号住居跡炉跡	6	第28号土壇
	2	第28号住居跡炉跡	7	第29・30号土壇
	3	第29号住居跡炉跡	8	第31号土壇
	4	第31号住居跡炉跡	図版41	1 第32・33号土壇
	5	第1号竪穴状遺構	2	第34号土壇
	6	第2号竪穴状遺構	3	第35号土壇
	7	第4号竪穴状遺構	4	第36号土壇
	8	第5号竪穴状遺構	5	第37号土壇
図版37	1	第7号竪穴状遺構	6	第38号土壇
	2	第1号炉跡	7	第39号土壇
	3	第1号土器埋設遺構	8	第40号土壇
	4	第2号土器埋設遺構	図版42	1 第41号土壇
	5	第1号土壇	2	第42号土壇
	6	第2号土壇	3	第43号土壇
	7	第3号土壇	4	第44号土壇
	8	第4号土壇	5	第45号土壇
図版38	1	第5号土壇	6	第46号土壇
	2	第6号土壇	7	第47号土壇
	3	第7号土壇	8	第48号土壇
	4	第8号土壇	図版43	1 第48号土壇遺物出土状況
	5	第9号土壇	2	第49号土壇
	6	第10号土壇	3	第50号土壇
	7	第11号土壇	4	第51号土壇
	8	第12号土壇	5	第52号土壇
図版39	1	第13号土壇	6	第53号土壇
	2	第14号土壇	7	第54号土壇
	3	第15号土壇	8	第56号土壇
	4	第16号土壇	図版44	1 第57号土壇
	5	第17・18号土壇	2	第58号土壇
	6	第19号土壇	3	第59号土壇
	7	第20号土壇	4	第60号土壇
	8	第21号土壇	5	第61・62号土壇
図版40	1	第22号土壇	6	第63号土壇
	2	第23号土壇	7	第64号土壇
	3	第25号土壇	8	第65号土壇
	4	第26号土壇	図版45	1 第66号土壇

	2	第67号土城		7	第125・130号土城
	3	第68・69号土城		8	第126号土城
	4	第69号土城遺物出土状況	図版50	1	第127号土城
	5	第70号土城		2	第129号土城
	6	第71号土城		3	第131号土城
	7	第75・76号土城		4	第132号土城
	8	第78~81号土城		5	第134号土城
図版46	1	第80号土城遺物出土状況		6	第135号土城
	2	第82~88・93・95号土城		7	第136号土城
	3	第89・91・94号土城		8	第139号土城
	4	第90号土城	図版51	1	第140号土城
	5	第92号土城		2	第141・142号土城
	6	第96・138号土城		3	第143号土城
	7	第97号土城		4	第144号土城
	8	第98号土城		5	第145・146号土城
図版47	1	第99号土城		6	第147号土城
	2	第100号土城		7	第148号土城
	3	第101号土城		8	第150号土城
	4	第102号土城	図版52	1	第151号土城
	5	第104号土城		2	第152号土城
	6	第105・106号土城		3	第153号土城
	7	第107・108号土城		4	第154号土城
	8	第109・110号土城		5	第156号土城
図版48	1	第111号土城		6	第157号土城
	2	第112号土城		7	第170号土城
	3	第113号土城		8	第173~175号土城
	4	第114号土城	図版53	1	第2・3号溝跡
	5	第115号土城		2	第4号溝跡
	6	第116号土城		3	第5号溝跡
	7	第117号土城	図版54	1	谷部
	8	第118号土城		2	谷部土層断面
図版49	1	第119号土城		3	谷部遺物出土状況
	2	第120号土城	図版55	1	第5号住居跡出土遺物
	3	第121号土城		2	第6号住居跡出土遺物
	4	第122号土城		3	第10号住居跡出土遺物
	5	第123号土城		4	第11号住居跡出土遺物
	6	第124号土城		5	第14号住居跡出土遺物

	6	第15号住居跡出土遺物	図版66	1	第12号住居跡出土遺物
	7・8	第21号住居跡出土遺物		2	第13号住居跡出土遺物 (1)
図版56	1	第23号住居跡出土遺物		3	第13号住居跡出土遺物 (2)
	2	第30号住居跡出土遺物	図版67	1	第14号住居跡出土遺物 (1)
	3	第32号住居跡出土遺物		2	第14号住居跡出土遺物 (2)
	4	第1号竪穴状遺構出土遺物		3	第14号住居跡出土遺物 (3)
	5	第5号竪穴状遺構出土遺物	図版68	1	第15号住居跡出土遺物 (1)
	6	第6号竪穴状遺構出土遺物		2	第15号住居跡出土遺物 (2)
	7	土壇出土遺物		3	第15号住居跡出土遺物 (3)
	8	第1号土器埋設遺構出土遺物	図版69	1	第15号住居跡出土遺物 (4)
図版57	1	第1号住居跡出土遺物 (1)		2	第15号住居跡出土遺物 (5)
	2	第1号住居跡出土遺物 (2)		3	第16号住居跡出土遺物 (1)
	3	第2号住居跡出土遺物	図版70	1	第16号住居跡出土遺物 (2)
図版58	1	第3号住居跡出土遺物 (1)		2	第17号住居跡出土遺物 (1)
	2	第3号住居跡出土遺物 (2)		3	第17号住居跡出土遺物 (2)
	3	第3号住居跡出土遺物 (3)	図版71	1	第18号住居跡出土遺物 (1)
図版59	1	第4号住居跡出土遺物 (1)		2	第18号住居跡出土遺物 (2)
	2	第4号住居跡出土遺物 (2)		3	第19号住居跡出土遺物
	3	第4号住居跡出土遺物 (3)	図版72	1	第20号住居跡出土遺物 (1)
図版60	1	第4号住居跡出土遺物 (4)		2	第20号住居跡出土遺物 (2)
	2	第5号住居跡出土遺物 (1)		3	第21号住居跡出土遺物
	3	第5号住居跡出土遺物 (2)	図版73	1	第22号住居跡出土遺物
図版61	1	第5号住居跡出土遺物 (3)		2	第23号住居跡出土遺物 (1)
	2	第5号住居跡出土遺物 (4)		3	第23号住居跡出土遺物 (2)
	3	第6号住居跡出土遺物 (1)	図版74	1	第23号住居跡出土遺物 (3)
図版62	1	第6号住居跡出土遺物 (2)		2	第23号住居跡出土遺物 (4)
	2	第7号住居跡出土遺物 (1)		3	第23号住居跡出土遺物 (5)
	3	第7号住居跡出土遺物 (2)	図版75	1	第23号住居跡出土遺物 (6)
図版63	1	第7号住居跡出土遺物 (3)		2	第23号住居跡出土遺物 (7)
	2	第7号住居跡出土遺物 (4)		3	第24号住居跡出土遺物 (1)
	3	第8号住居跡出土遺物 (1)	図版76	1	第24号住居跡出土遺物 (2)
図版64	1	第8号住居跡出土遺物 (2)		2	第25号住居跡出土遺物 (1)
	2	第9号住居跡出土遺物		3	第25号住居跡出土遺物 (2)
	3	第10号住居跡出土遺物	図版77	1	第25号住居跡出土遺物 (3)
図版65	1	第11号住居跡出土遺物 (1)		2	第25号住居跡出土遺物 (4)
	2	第11号住居跡出土遺物 (2)		3	第26号住居跡出土遺物 (1)
	3	第11号住居跡出土遺物 (3)	図版78	1	第26号住居跡出土遺物 (2)

	2	第26号住居跡出土遺物 (3)
	3	第26号住居跡出土遺物 (4)
図版79	1	第26号住居跡出土遺物 (5)
	2	第27号住居跡出土遺物 (1)
	3	第27号住居跡出土遺物 (2)
図版80	1	第28号住居跡出土遺物
	2	第29号住居跡出土遺物 (1)
	3	第29号住居跡出土遺物 (2)
図版81	1	第30号住居跡出土遺物 (1)
	2	第30号住居跡出土遺物 (2)
	3	第31号住居跡出土遺物 (1)
図版82	1	第31号住居跡出土遺物 (2)
	2	第32号住居跡出土遺物 (1)
	3	第32号住居跡出土遺物 (2)
図版83	1	第33号住居跡出土遺物 (1)
	2	第33号住居跡出土遺物 (2)
	3	第1号竪穴状遺構出土遺物
図版84	1	第2号竪穴状遺構出土遺物
	2	第4号竪穴状遺構出土遺物
	3	第5号竪穴状遺構出土遺物 (1)
図版85	1	第5号竪穴状遺構出土遺物 (2)
	2	第6号竪穴状遺構出土遺物 (1)
	3	第6号竪穴状遺構出土遺物 (2)
図版86	1	第6号竪穴状遺構出土遺物 (3)
	2	第6号竪穴状遺構出土遺物 (4)
	3	第6号竪穴状遺構出土遺物 (5)
図版87	1	第1号跡出土遺物
	2	土壇出土遺物 (1)
	3	土壇出土遺物 (2)
図版88	1	土壇出土遺物 (3)
	2	土壇出土遺物 (4)
	3	土壇出土遺物 (5)
図版89	1	土壇出土遺物 (6)
	2	土壇出土遺物 (7)
	3	土壇出土遺物 (8)
図版90	1	土壇出土遺物 (9)
	2	土壇出土遺物 (10)

	3	土壇出土遺物 (11)
図版91	1	土壇出土遺物 (12)
	2	土壇出土遺物 (13)
	3	土壇出土遺物 (14)
図版92	1	土壇出土遺物 (15)
	2	溝跡出土遺物
	3	谷部出土遺物

(赤砂利遺跡第9次)

図版93	1	調査区全景 (北西から)
	2	調査区全景 (南東から)
図版94	1	第1号住居跡 (1) (北西から)
	2	第1号住居跡 (2) (北西から)
	3	第1号住居跡 (3) (南東から)
	4	第1号土壇
	5	第2号土壇
	6	第3号土壇
	7	第4号土壇
	8	第5号土壇土層堆積状況
図版95	1	第1・2・5号溝跡
	2	第1号溝跡
	3	第2号溝跡
	4	第5号溝跡
	5	第3・4号溝跡
	6	第6・7号溝跡
	7	第8号溝跡
	8	第9・10号溝跡
図版96	1	第1号住居跡出土遺物 (1)
	2	第1号住居跡出土遺物 (2)
	3	溝跡出土遺物
図版97	1	グリッド出土遺物 (1)
	2	グリッド出土遺物 (2)
	3	グリッド出土遺物 (3)

(宿赤砂利遺跡)

図版98	1	調査区全景 (南東から)
	2	調査区全景 (北西から)
	3	調査区全景 (南東から)

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、新たに平成29年度からの5年間の県政運営の基本となる『埼玉県5か年計画—希望・活躍・うるおいの埼玉—』を策定し、各分野での施策に取り組んでいる。このうち生活の安心を高める分野では、「危機や災害に備える」という基本目標を掲げ、台風や集中豪雨などにより引き起こされる浸水被害や土砂災害から県民の生命や財産を守るために治水・治山対策や土砂災害防止対策を進めている。

こうした中で、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

総合治水対策特定河川工事（隼人堀川）における埋蔵文化財の所在及び取扱いについては、埼玉県杉戸県土整備事務所から平成21年9月7日付け杉整第555号で、埋蔵文化財の所在の有無及び取扱いについて、生涯学習文化財課長あて照会があった。

これに対して生涯学習文化財課は工事の進捗状況に応じて試掘調査を実施し、その都度、回答を行った。その結果、埋蔵文化財の存在が確認され、それぞれやむを得ず現状変更する場合は、記録保存のための発掘調査の必要がある旨を回答した。

本報告に係る工事箇所には赤砂利遺跡・宿赤砂利遺跡が所在している。

その後、杉戸県土整備事務所と生涯学習文化財課はその取扱いについて協議を重ねたが、現状保存が困難であることから、記録保存の措置を講ずることになった。発掘調査は公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（以下「事業団」）が実施機関としてあたることになった。

埼玉県知事からの文化財保護法第94条第1項の規定に基づく発掘通知及び事業団理事長からの法第92条第1項の規定に基づく発掘調査届に対する県教育委員会教育長からの勧告及び指示通知は次のとおりである。

発掘通知に対する勧告

平成22年4月26日付け 教生文第4-58号

平成24年7月31日付け 教生文第4-459号

平成26年2月25日付け 教生文第4-1615号

発掘調査届に対する指示通知

平成22年4月26日付け 教生文第2-5号

平成24年4月26日付け 教生文第2-15号

平成26年2月25日付け 教生文第2-53号

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

赤砂利遺跡の調査は、第6次調査を平成22年度、第8次調査を平成24年度、第9次調査を平成25年度にそれぞれ実施した。調査面積は第6次調査1,496㎡、第8次調査3,052㎡、第9次調査1,250㎡(宿赤砂利遺跡を含む)の合計5,798㎡である。

なお、宿赤砂利遺跡第1次調査は、赤砂利遺跡第9次調査と併せて調査を実施した。

調査の経過は以下のとおりである。

【平成22年度】

赤砂利遺跡第6次調査は、平成22年4月から清左衛門遺跡第5次調査(A・B区)と併行して、実施した。両遺跡の調査に当たっては、華人堀川に架かる大徳寺橋と義理橋の間にA区からF区の調査区を設定したが、両遺跡は、最も北西側のA区中央部の埋没谷によって隔てられ、上流側が赤砂利遺跡、下流側が清左衛門遺跡となる。

4月上旬に発掘事務所の設営と併行して、調査区の保護と安全確保のため囲柵工事を行い、4月中旬から下旬にかけて重機による表土掘削を実施し、併せて4月下旬には基準点測量を業者に委託し、基準杭を打設した。その後、4月末から人力による遺構確認作業を開始し、縄文時代中期の住居跡や土壌などの遺構を検出した。

5月上旬から遺構精査を行い、5月中旬からは遺構の断面図・平面図などを作成し、写真撮影を行った。6月下旬までに遺構の精査・記録作業を終了し、6月末に重機による調査区の埋め戻しを行い、本遺跡の調査を終了した。

【平成24年度】

赤砂利遺跡第8次調査は、平成24年5月から8月まで調査を実施した。調査地点は第6次調査区の上流側、大徳寺橋の西側に位置する。調査区は華人堀川を挟んで左岸側を1区、右岸側を2区と呼称した。

調査の工程上、1区は上流側と下流側に分け

て、反転しながら調査を進めた。まず、5月上旬から重機によって上流側の表土掘削を開始した。5月中旬から人力による遺構確認作業を行った結果、縄文時代中期後半を中心とする住居跡が重なり合うように検出された。遺構、遺物とも予想を上回る量であったが、6月下旬までに遺構の精査および記録作業を終了した。

6月末から7月上旬にかけて2区、そして1区下流側の順で重機による表土掘削を行い、その残土を用いて調査の終了した1区上流側の埋め戻しを行った。

1区を反転している間に2区の遺構確認作業を行い、引き続き遺構精査・記録作業に着手した。また、表土掘削の終了した1区下流側の調査区でも、1区上流側から続く、縄文時代中期後半の住居跡群や土壌などが多数検出された。7月中旬から8月にかけて遺構の精査・記録作業を進め、8月23日に空中写真撮影を実施した。

8月下旬までに遺構の精査・記録作業を終了し、器材の撤収、発掘事務所の撤去及び調査区の埋戻しを行い、8月末にすべての作業を終了した。

【平成25年度】

赤砂利遺跡第9次調査及び宿赤砂利遺跡第1次調査は、平成25年12月から平成26年3月にかけて調査を実施した。

調査地点は華人堀川左岸に位置し、善我学校橋の下流側で、第8次調査区の上流側にあたる。上流側の調査区の狭い部分が宿赤砂利遺跡第1次調査区、下流側の調査区の広い部分が赤砂利遺跡第9次調査区にあたる。

12月上旬に発掘事務所を設営するとともに、調査区の保護と安全確保のため囲柵工事を行った。その後、重機による表土掘削を上流側から下流側に向けて12月上旬から12月下旬にかけて実施した。調査区は善我中学校の造成に伴い厚く客土が盛られており、現地表面から遺構確認まで深さ2m以

上で、調査区全体の約3分の2は埋没した自然の谷が入り込み、その西側台地部分が宿赤砂利遺跡、東側台地部分が赤砂利遺跡に該当する。

先に表土掘削の終了した宿赤砂利遺跡から人力による遺構確認作業を始め、遺構精査・記録作業を行った。引き続き、赤砂利遺跡側の遺構精査・記録作業を進め、2月26日に空中写真撮影を行い、3月上旬までに遺構の精査・記録作業を終了した。

3月上旬から中旬にかけて調査区の埋戻しを行い、3月下旬に発掘器材や出土遺物を撤収した後、発掘事務所を撤去し、3月末にすべての作業を終了した。

(2) 整理・報告書の作成

整理・報告書の作成作業は、平成27年度が平成27年10月1日から平成28年3月31日までの6箇月間、平成29年度が平成29年9月1日から平成30年3月31日までの7箇月間実施した。

【平成27年度】

平成27年度は、赤砂利遺跡第8次調査で検出された縄文時代の竪穴住居跡33軒を中心にコンテナ60箱の遺物を対象として実施した。

10月から3月にかけて出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業を行った。また併行して、発掘調査で記録した遺構の断面図や平面図等を照合し、修正を加えて第二原図を作成した。その後、第二原図をスキャナーでコンピューターに取り込み、画像編集ソフトを用いて遺構ごとにトレースし、土層説明等を組み込んで、印刷用の版下とした。

12月から復元した遺物の中から特徴的な遺物を抽出し、3月まで遺物の実測や拓本作業を行った。また、1月からは遺物実測図のトレース作業を開

始し、順次遺物図版の作成を3月まで行った。

2月から遺構写真図版の作成を開始し、3月に遺物写真撮影を行い、併せて遺物写真図版を作成した。また、原稿の執筆・割付作業を行った。

【平成29年度】

平成29年度は、赤砂利遺跡第6・9次調査で検出された縄文時代の竪穴住居跡10軒とその他の遺構についてコンテナ38箱の遺物を対象として実施した。

9月から10月まで出土遺物の水洗・注記を行い、引き続き遺物の接合・復元作業を行った。併行して、遺物の実測や拓本を12月まで実施した。実測は、大型のものは機械実測で素図を作成し、小型のものや土製品などは手作業と写真実測を併用して行った。土器片については拓本と断面図とを組み合わせて実測図を作成した。

第二原図の作成も9月から10月まで行った。実測が終了した遺物は順次トレースを進め、仕上がった遺物トレース図はスキャナーでパソコンに取り込み、1月まで遺物挿入図の版下を作成した。

原稿は9月から執筆を開始し、併行して割付け作業を実施した。11月に遺物の写真撮影を行い、1月にかけて遺構写真とともに写真図版を作成した。1月末に原稿を印刷業者に入稿した。

なお、図面や写真などの記録類や遺物は、2月に整理分類のうえ、埼玉県文化財収蔵施設の収蔵庫へ仮収納した。

報告書は、2月上旬から3月上旬にかけて3回の校正を経て印刷を行い、3月末に事業団報告書第443集「赤砂利／宿赤砂利」を刊行した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成22年度（発掘調査）

理 事 長	藤 野 龍 宏	調査部	
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	調 査 部 長	小 野 美代子
総務部		調 査 部 副 部 長	昼 間 孝 志
総 務 部 副 部 長	金 子 直 行	調 査 第 二 課 長	細 田 勝
総 務 課 長	田 中 雅 人	主 査	西 井 幸 雄
		主 査	新 屋 雅 明
		主 査	松 本 美佐子

平成24年度（発掘調査）

理 事 長	中 村 英 樹	調査部	
常務理事兼総務部長	根 本 勝	調 査 部 長	昼 間 孝 志
総務部		調 査 部 副 部 長	剣 持 和 夫
総 務 部 副 部 長	富 田 和 夫	調査監兼調査第一課長	瀧 瀬 芳 之
総 務 課 長	矢 島 将 和	主 査	吉 田 稔
		主 査	大和田 瞳

平成25年度（報告書作成）

理 事 長	中 村 英 樹	調査部	
常務理事兼総務部長	大 嶋 紳一郎	調 査 部 長	昼 間 孝 志
総務部		調 査 部 副 部 長	剣 持 和 夫
総 務 部 副 部 長	富 田 和 夫	調査監兼調査第二課長	赤 熊 浩 一
総 務 課 長	藤 倉 英 明	主 査	吉 田 稔
		主 査	魚 木 環

平成27年度（報告書作成）

理 事 長	樋 田 明 男	調査部	
常務理事兼総務部長	木 村 博 昭	調 査 部 長	金 子 直 行
総務部		調 査 部 副 部 長	細 田 勝
総 務 部 副 部 長	瀧 瀬 芳 之	主幹兼整理第二課長	吉 田 稔
総 務 課 長	安 田 孝 行	主 幹	大 谷 徹
		主 幹	砂 生 智 江

平成29年度（報告書作成）

理 事 長	塩野谷 孝 志	調査部	
常務理事兼総務部長	川 目 晴 久	調 査 部 長	赤 熊 浩 一
総務部		調査部副部長兼整理第二課長	吉 田 稔
総 務 部 副 部 長	黒 坂 禎 二	主幹兼整理第一課長	大 谷 徹
総 務 課 長	曾 川 浩 二	主 任 専 門 員	宮 井 英 一

Ⅱ 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

埼玉県は、関東平野の北西部に位置する内陸県で、地形的には、大きく県西部の山地・丘陵地帯と東側の平野部に分けられ、秩父盆地を取り囲む標高1,500～2,000mの山々が連なる秩父山地からは数多くの河川が平野部に注いでいる。また、平野部の中央には、北西―南東方向に細長く大宮台地が横たわるが、その西側は、荒川をはじめとする多くの河川によって開析された荒川低地によって山地部から分断され、北から東にかけては、利根川や渡良瀬川水系の開析による加須低地、中川低地などの沖積低地が広がっている。

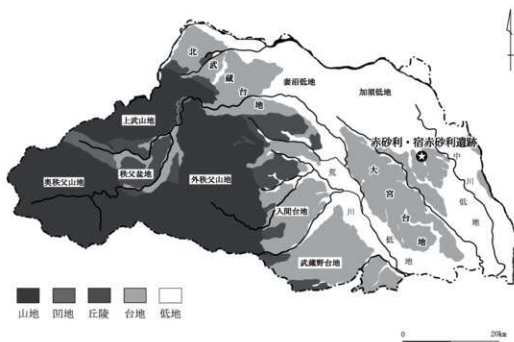
そして、遺跡のある白岡市は大宮台地北東部に位置するが、より詳細には、広義の大宮台地の北東部を構成する笠原支台、および白岡支台と慈恩寺支台の北半を占めている。これらの台地は、関東造盆地運動の影響を受けて北側の標高を減ずる

とともに、元荒川、古利根川およびそれらの支流による開析が進み、特に慈恩寺支台東縁部では樹枝状の小谷の発達が著しい（第2図）。

このような地形の特徴は、遺跡の分布にも顕著に現れる。数多くの小谷によって分断された台地上には数多くの遺跡が残されているが、その多くが台地の縁辺部に偏っており、往古の人々が低地を見晴らす高台や谷頭を好んで占拠したことが分かる。

赤砂利遺跡（1）およびその北西に埋没谷を隔てて隣接する宿赤砂利遺跡（2）は、JR宇都宮線白岡駅の東方約3kmの白岡市上野田・下野田・彦兵衛地区に所在する。

両遺跡は、白岡市内をほぼ北西から南東に流れる隼人堀川の改修工事に伴って調査された遺跡であるが、隼人堀川自体は久喜市柴山沼の東方にあ



第1図 埼玉県の地形

った皿沼の開拓のための排水路として江戸時代に開削されたもので、現在は同市弁天沼から春日部市梅田本町で大落古利根川に合流するまで凡そ17 kmに及ぶ。上流部は日川の旧流路跡に沿って台地縁辺部を南東方向に流れるが、大日橋の付近から樹枝状の谷が台地内部に入り込み、宮代町立前

2. 歴史的環境

慈恩寺支台および白岡支台を中心に、遺跡周辺の歴史的環境を通時的に概観する。

旧石器時代の遺跡は、この地域では極めて少なく、白岡支台西縁部に集中する。山遺跡(3)をはじめ耕地遺跡(4)やタタラ山遺跡(5)、南鬼窪氏館跡(6)などでナイフ形石器や角錐状石器、尖頭器が出土している。慈恩寺支台では、本遺跡の東方内陸部の小笠原遺跡で、ソフトローム中から2点のナイフ形石器が出土している。また、小笠原遺跡と小谷を隔てた対岸に当たる宮代町逆井遺跡(7)では、大宮台地唯一の細石刃の製作跡が発見された。

縄文時代に入ると、草創期の遺跡として、宮代町前原遺跡(8)から微隆起線文土器や表裏縄文土器が出土している。

早期の撚糸文期ではタタラ山遺跡、中妻遺跡(9)で土器片が採取されている。続く、沈線文期の遺跡は白岡市内では未確認であるが、逆井遺跡、金原遺跡(10)では住居跡が検出されている。条痕文期に入ると遺跡数、遺構数ともに急増する。山遺跡や茶屋遺跡(11)、本田下遺跡(12)、タタラ山遺跡で炉穴や住居跡、竪穴状遺構がまとめて検出されているほか、蓮田市黒浜地区の天神前遺跡(13)では、炉穴に伴ってハイガイ、マガキの貝層が検出されている。また、宮代町道仏北遺跡(14)では住居跡7軒が検出されている。

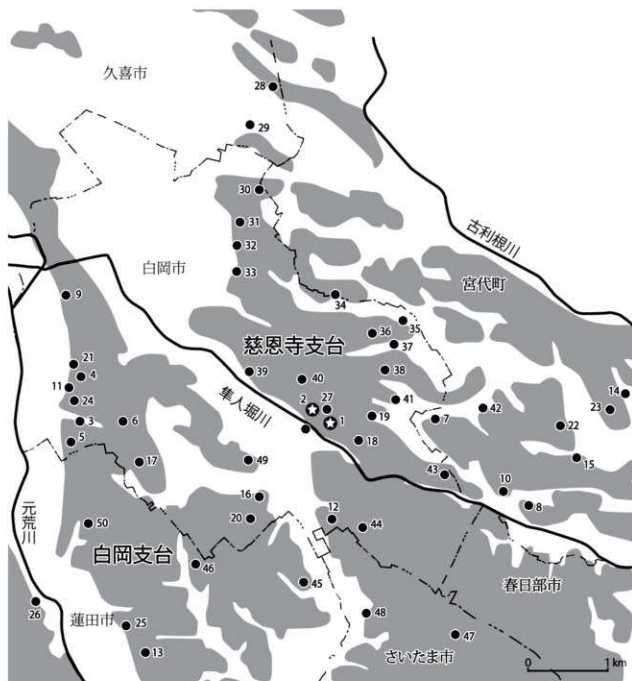
前期の花積下層式期になるとタタラ山遺跡では、50軒を超える住居跡や炉穴が検出され、県内でも屈指の規模の集落であることが明らかとなった。

原中学校付近まで台地の内部を東流する。両遺跡は、この谷の北側の台地縁辺部に位置しているが、さらに北側には標高9 m程の台地が広がり、南西側は、かつて大日沼と呼ばれた低地に向かって緩やかに傾斜している。低地との比高差は約3 mである。

また、中妻遺跡では関山式期の住居跡が1軒検出されている。前期後半になると蓮田市黒浜地区の貝塚群が卓越するようになる。関山式後半から黒浜式にかけて形成される貝塚を伴う集落が、大宮台地における該期の拠点であったことは明らかである。続く、諸磯Ⅱ式期になると、茶屋遺跡やタタラ山遺跡で住居跡や土壌等が検出されるものの、集落規模は縮小傾向にある。

この他に宮代町道仏北遺跡、地蔵院遺跡(15)では、前期前半から後半にかけての住居跡が検出されている。

白岡市内で再び集落跡が確認されるようになるのは、中期後半の加曾利E式期からで、市内では遺跡数57とピークを迎える。白岡支台の山遺跡は市内屈指の加曾利EⅡ～Ⅲ式の大規模集落で、これまでに住居跡が30軒近く確認されている。本田下遺跡では、加曾利EⅢ式期の住居跡からヤマトシジミ・マガキ主体のブロック貝層が検出され、C14年代測定で約4,300年前の所産と判明した。同じ慈恩寺支台先端の春日部市花積貝塚などとともに、海退期にある大宮台地の中期貝塚として貴重である。鶴巻遺跡(16)では加曾利EⅡ～Ⅲ式の良好な土器組成をもつ住居跡が検出された。この他にタタラ山遺跡、沖山西遺跡(17)などでも一定規模の集落が展開するようになる。中でも赤砂利遺跡では、これまでの発掘調査の成果から中期後葉の加曾利E式を中心とした環状集落であることが明らかになってきた。隣接する清左衛門遺跡(18)では中期前葉の勝坂式の住居跡1軒と加



第2図 周辺の道跡

第1表 周辺の道跡一覧表

1 赤砂利道跡	2 宿赤砂利道跡	3 山道跡	4 入耕地道跡	5 タタラ道跡
6 南鬼窪氏館跡	7 逆井道跡	8 前原道跡	9 中妻道跡	10 金原道跡
11 茶屋道跡	12 本田下道跡	13 天神前道跡	14 道仏北道跡	15 地藏院道跡
16 鶴巻道跡	17 沖山西道跡	18 清左衛門道跡	19 上小笠原道跡	20 前田道跡
21 正福院貝塚	22 宿源太山道跡	23 道仏道跡	24 新屋敷道跡	25 梯山道跡
26 荒川附道跡	27 大徳寺	28 下早見道跡	29 太田袋道跡	30 上宿道跡
31 高岩本村道跡	32 西田端道跡	33 忠恩寺道跡	34 新田道跡	35 諏訪道跡
36 中通道跡	37 本田東道跡	38 原道跡	39 宮山道跡	40 宿本村道跡
41 鶴ヶ曽根東道跡	42 山崎山道跡	43 海老島道跡	44 外記山道跡	45 江ヶ崎貝塚
46 雅楽谷道跡	47 裏慈恩寺東道跡	48 鹿室中宿道跡	49 四ッ谷道跡	50 稲荷山道跡

曾利E式の住居跡4軒が検出されており、台地屋線に沿って小グループで構成する住居跡群が点々と所在することが推定される。

この他に中期前半の遺跡である道仏北遺跡では、集落中央部に集石を伴う土壌を中心に3軒の住居跡が検出されている。

後期から晩期になると、一遺跡において膨大な遺物量を伴う遺構や遺物包含層が形成される事例が増加する。上小笠原遺跡(19)は、後期前葉の「ハ」字状の入り口部をもつ住居跡が検出されている。清左衛門遺跡は中期から晩期にかけて営まれた大規模集落で、水場遺構が付属し、さらに晩期の石冠や人面土版が出土したことも有名である。前田遺跡(20)は、晩期の墓域群が検出された。入耕地遺跡では、環状盛土遺構の存在が明らかとなると共に多くの遺物が出土した。

弥生時代から古墳時代にかけては、遺跡の分布が全体に希薄となる。白岡市内では、元荒川に面した白岡支台西縁部の入耕地遺跡をはじめ、中妻遺跡、正福院貝塚(21)、茶屋遺跡、タタラ山遺跡で、古墳時代前期の一定規模の集落展開がうかがわれ、正福院貝塚では方形周溝墓が検出されている。

また、慈恩寺支台北東の宮代町山崎山遺跡では前期の鍛冶工房跡が検出され、県内最古の事例とされる。また、宿源太山遺跡(22)、地藏院遺跡でも前期の住居跡検出されている。中期の遺跡は、山崎山遺跡、道仏北遺跡、道仏遺跡(23)等で住居跡が検出されている。このうち道仏北遺跡では2軒の住居跡が検出され、石製勾玉や高坏・埴・甕等が出土している。

後期では、道仏遺跡で100軒を越す住居跡が調査されている。剣形品や有孔円板等の石製模造品が多数出土しており、当該地域における中核的な集落であったことが推定される。また、道仏遺跡から低地を挟んだ南側には姫宮神社古墳群が所在

していることから、その造営主体であったと考えられる。この他に古墳群としては、慈恩寺支台南東端に円墳を主体とする春日部市内牧塚内古墳群が所在している。

奈良・平安時代も、新屋敷遺跡(24)やタタラ山遺跡で数軒の住居跡が確認されている。中妻遺跡では、これまでに8～9世紀の住居跡が15軒ほど調査され、墨書土器や瓦なども出土している。最近の調査では大量の鉄滓や羽口の出土した8世紀の精錬工房跡なども検出されており、周辺に製鉄遺跡の存在を予測させる。周辺の山遺跡や南鬼窪氏館跡、沖山西遺跡では、8世紀末から9世紀代の炭焼窯がまとめて検出されており、周辺地域で調査されている製鉄遺跡との関連性が注目される。

白岡・蓮田両市及び伊奈町周辺における古代の製鉄関連遺構の存在をうかがわせる事例として、蓮田市楮山遺跡(25)、荒川附遺跡(26)があるほか、伊奈町の大山遺跡では大規模な製鉄炉が発見されている。

中世では、入耕地遺跡で堀に囲まれた14～16世紀の館跡とともに船載陶磁器をはじめとする中世遺物が多数出土している。赤砂利遺跡の北側には、中世寺院である大徳寺(27)が所在し、新田義貞らが鎌倉幕府討伐の戦勝祈願に立ち寄ったことや、その後の北条方の残党による焼き討ちに遭い、本尊の大日如来がころうじて村人により寺前の「大日沼」に隠され、焼失を免れた記録が「大徳寺縁起」に記されている。また、寺の東側を走る道路が、鎌倉街道中ツ道のルートの一つに比定されている。

一方、白岡支台は中世の騎西郡に属し、武蔵七党野与党の有力一族である鬼窪氏が本拠地を置いた地として知られている。遺跡周辺に所在する白岡八幡宮や正福院などは、その草創や社殿造営に同氏との関わりを伝承している。

III 遺跡の概要

赤砂利遺跡・宿赤砂利遺跡は、白岡市内をほぼ北西から南東に流れる隼人堀川の改修事に伴って調査された遺跡であるが、隼人堀川自体は干拓のための排水路として江戸時代に開削されたものであるため、中世以前の遺跡との直接的な関係はない。しかし、隼人堀川が遺跡付近から台地内部に入り込むように開削されているため、時に台地縁辺部に立地する遺跡も分断される結果となっている。

遺跡の範囲は、善哉中学校を北西端とし白岡市上野田地域を中心とする範囲であるが、両遺跡は浅い埋没谷によって分けられ、南東側の清左衛門遺跡とも、同じく幅50m以上の埋没谷によって隔てられている。

今回の発掘調査は、河川改修工事に伴うものであるため、隼人堀川の左岸を主体に延べ400mに及ぶ範囲が調査対象となっているが、調査区の幅は広いところで15m程度である。

実際の発掘作業は、南東側の清左衛門遺跡に隣接する部分から北西方向に向かって進められ、平成22年（赤砂利遺跡第6次調査）・24年（赤砂利遺跡第8次調査）・25年（赤砂利遺跡第9次・宿赤砂利遺跡第1次調査）の3年度に亘った。

赤砂利遺跡第6次調査

清左衛門遺跡第5次調査と並行して行われた。調査区確認面での標高は、8.7m～9.0mである。グリッドの設定は、10m×10mを基本とし、北西隅を起点に南方向にアルファベット（A～G）、東方向に数字（1～11）を付し、両者を組み合わせてグリッドを特定した。

基準杭としたD-5グリッド北西杭の座標は、X=1340.000m、Y=-12630.000m（北緯36°00' 43" 1852、東経139°41' 35" 5905）、標高は9.100mである。

第6次の調査では、縄文時代と近世の遺構が発見された。

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡9軒と土壇18基で、調査区中央部東寄りに分布する。遺構の時期は、出土した遺物より中期後葉が主体である。

なお、調査区の東西端及び中央で谷状の地形が確認されており、特に東側は、隣接する清左衛門遺跡と本遺跡を隔てる埋没谷であり、60m以上の区間に遺構が検出されなかった。因みに、清左衛門遺跡では縄文時代前期から晩期の住居跡が発見されているが、主体となる後・晩期（安行期）の遺構はより谷頭に近い部分にまとまっており、本遺跡と同じ中期後葉の遺構は、この埋没谷を隔てた対岸で4軒検出されているだけである。従って、中期後葉では、集落の占地に当たっては、低地に面した、より開けた場所が選ばれているようである。

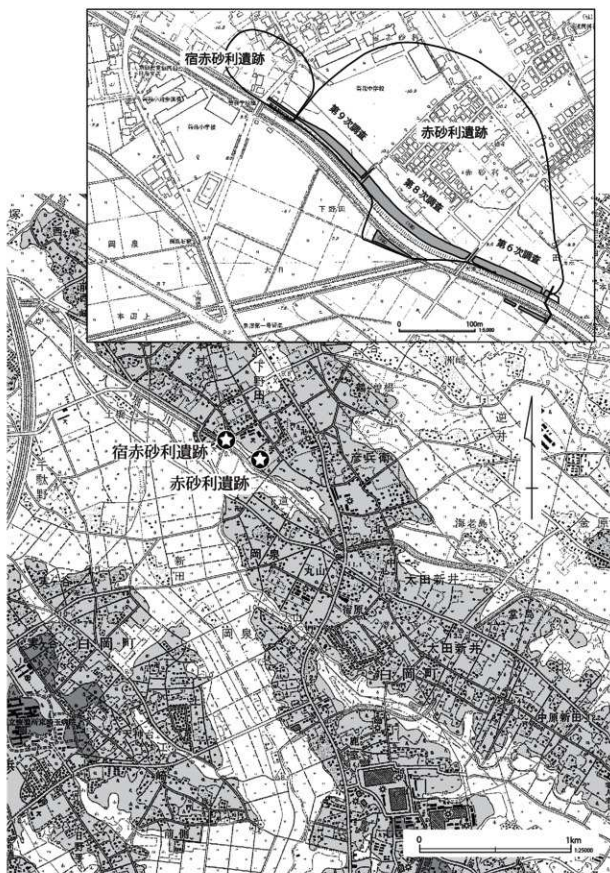
近世の遺構としては、溝跡が2条検出されている。出土遺物は少ないが、近世陶器類が出土していることから、少なくとも溝の廃絶時期は近世以降と考えられる。

赤砂利遺跡第8次調査

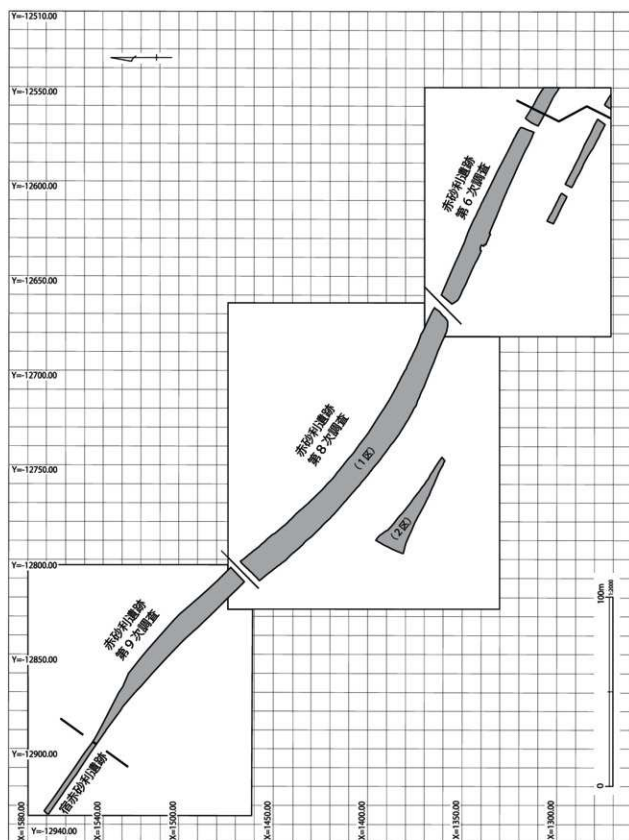
第6次調査の北西側に続く約170mの部分で、一部右岸も調査対象となっている。調査区確認面での標高は、8.3m～8.8mである。グリッドの設定は、10m×10mを基本とし、北西隅を起点に南方向にアルファベット（A～L）、東方向に数字（1～16）を付し、両者を組み合わせてグリッドを特定した。

基準杭としたF-6グリッド北西杭の座標は、X=1420.000m、Y=-12770.000m（北緯36°00' 45" 7745、東経139°41' 29" 9946）、標高は8.877mである。

第8次調査では、縄文時代と古代、近世の遺構



第3図 遺跡位置図



第4図 赤砂利・宿赤砂利遺跡全体図

が発見された。

縄文時代の遺構としては、竪穴住居跡32軒、竪穴状遺構7基、土壇170基であり、この他に炉跡1基、ピット列1基、土器埋設遺構3基および谷地形による縄文時代後期の包含層などが検出されている。遺構の時期は、縄文時代中期後葉から後期中頃が主体となり、遺構の多くが重なり合うように構築されているが、調査区中央西寄りに土城群のみで住居跡が検出されなかった部分があり、第6次調査から続く中期後葉の住居跡の分布をみると、大規模な環状集落の存在も想定される。

また、縄文時代後期的大型住居跡が1軒検出されているが、これは出入口部の左右に「ハ」の字状の柱穴列を伴う特殊な形状の住居跡で、少なくとも2回の建て替えが想定される。

近世の遺構としては、溝跡8条と土壇6基が発見された。いずれも出土遺物は少なく所属時期は明瞭ではないが、溝跡はいずれも現在の地割に並行する方向で見つかっていることから、区画溝として機能していたものと思われる。

赤砂利遺跡第9次調査

第8次調査の北西側に続く左岸の細長い調査区で、北西側の宿赤砂利遺跡に隣接する。長さは200m近くあるが、幅は最も広いところで10m程度である。確認面での標高は、凡そ6.8m～8.3mであるが、地形的には調査区中央部が谷底となり、第8次調査から続く東南端との比高差は1.5m程もあり、北西の宿赤砂利遺跡に向かって再び高度を回復する。グリッドの設定は、宿赤砂利遺跡と共通に設定した。10m×10mを基本とし、北西隅を起点に南方向に数字（1～12）、東方向にアルファベット（A～N）を付し、両者を組み合わせ

てグリッドを特定した。

基準杭としたJ-8グリッド北西杭の座標は、 $X=1510.000\text{m}$ 、 $Y=-12850.000\text{m}$ （北緯 $36^{\circ}00'48''$ 6909、東経 $139^{\circ}41'26''$ 7943）、標高は7.853mである。

第9次調査では、縄文時代と近世の遺構が発見された。

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡1軒と土壇6基で、調査区南東端でまとまって検出された。遺構の時期は縄文時代中期後葉が主体で、第8次調査で検出された集落の北西端に当たると考えられる。

近世の遺構は溝跡が主体で、調査区東南端から中央の谷部にかけて10条が検出されたが、第8次調査の溝跡と同様に現在の地割に対応するものはむしろ谷部分に集中しており、東側で標高の高い部分のものは畑の畝跡と思われる。

宿赤砂利遺跡第1次調査

本遺跡は、赤砂利遺跡の北西側に隣接する遺跡で、赤砂利遺跡とは浅い谷地形によって隔てられている。今回の調査区は、赤砂利遺跡第9次調査区に続く長さ約45m、幅3m弱の細長い範囲である。赤砂利遺跡北西側の谷部分から高度を増し、標高は8.5m前後であるが、遺構や遺物は検出されなかった。標高値の推移からは、遺跡の中心はさらに北西側なるものと予想される。

グリッドの設定は、南東側に隣接する赤砂利遺跡第9次調査と共通に設定した。

基準杭としたF-5グリッド北西杭の座標は、 $X=1540.000\text{m}$ 、 $Y=-12890.000\text{m}$ （北緯 $36^{\circ}00'49''$ 6625、東経 $139^{\circ}41'25''$ 1951）である。また、補助杭No.11（ $X=1550.000\text{m}$ 、 $Y=-12904.000\text{m}$ ）上の標高は8.607mである。

IV 赤砂利遺跡第6次調査の遺構と遺物

1. 住居跡

第6次調査では9軒の竪穴住居跡が検出されており、縄文時代中期6軒、後期1軒、不明2軒である。主たる時代は縄文時代中期後葉に属する。

第1号住居跡（第7～17図）

D-4・5グリッドに位置し、北側の壁の一部を第6号土壌によって壊されている。

平面形は、円形もしくは楕円形を呈すると思われるが、南側半分は調査区域外である。

炉跡は、住居跡中央部より1基検出された。中央部には、キャリバー形土器の口縁部（第9図1）が正位に据えられており、底面（6層下面）は被熱のため赤く硬化していた。なお、炉体土器の周囲には、80cm×85cm程の掘り込み（7～9層）及び2.1m×1.7m程の浅い掘り込み（10層）が検出されているが、いずれも炉を設置する際の掘り方と考えられる。

柱穴は8本検出され、うち1本（P4）は炉跡の掘り方部分（10層下面）で検出され、他は住居跡床面での検出であるが、いずれも20cm前後と浅く、主柱穴は確認できなかった。

遺物は、確認面から覆土中にかけて多量に出土しているが、炉体土器も含めほとんどが加曽利EⅢ式段階であることから、遺構の時期も同期に比定される。

1は炉体土器である。キャリバー形の大型土器の口縁部付近を利用したものでほぼ全周する。口縁部文様帯は、貼付隆帯と沈線による大小の楕円区画文によって構成され、その下位には2本及び3本沈線による懸垂文が13単位施され、内3か所に蔵手状の懸垂文が施されている。地文は単節RLの縄文が施される。

2も1と同様の土器であるが、文様帯下端を明瞭に区画せず、幅1cmほどの鋭角工具による複数の凹線によって無文帯を作出している。下位に

は2本沈線による懸垂文が垂下し、懸垂文内は磨り消される。

3は口唇上に小突起が配されるもので、口唇下には凹線刺突が押し引き状に連続し、直下から懸垂文が垂下する。縄文は単節RLの縦位回転である。

4・5は口唇直下から「J」字状のモチーフが施されるもので、モチーフ間は磨り消される。縄文には0段多条の単節RLが用いられる。

6～8は懸垂文の施される胴部破片で、懸垂文間は磨り消される。6は大型土器で、14単位の懸垂文が施されている。炉跡付近からの出土で、表裏面とも被熱の痕跡が著しい。7は小破片であるが、2種の地文が併用されるものである。蛇行する条線文が施された後で単節RLの縄文が施文されており、意図的な文様構成が認められる。

9・10は内湾する無文の口縁下に凹線が巡るもので、同一個体の可能性が高い。地文は浅く細かい条線文である。

13～19は炉周辺から出土した土器である。

20～43はキャリバー形土器で、貼付隆帯と沈線によって口縁部文様帯が構成されるものである。

20～32は口唇直下が内湾する口縁部破片、33～43は口縁部文様帯下端部の破片で懸垂文が垂下する。

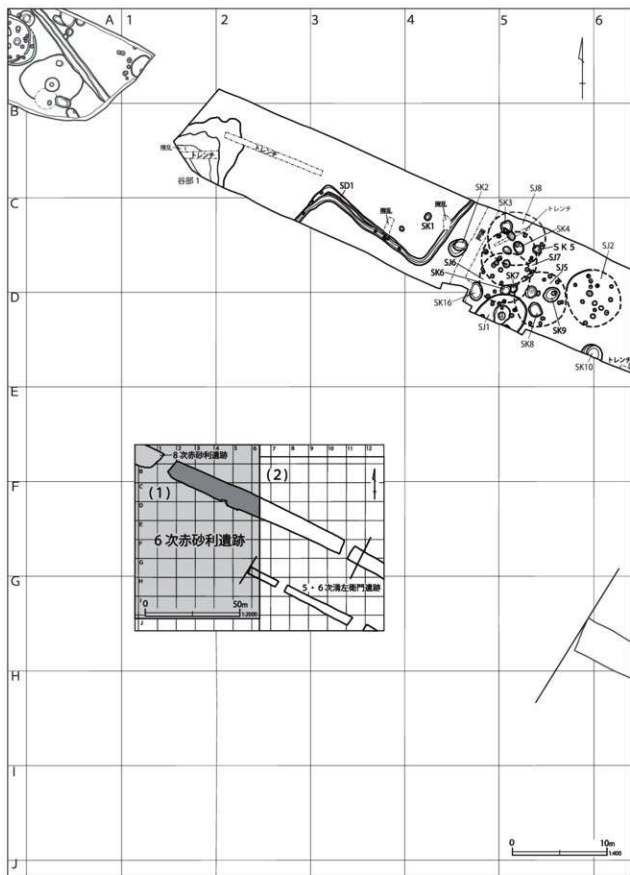
44～47は胴部破片で曲線的なモチーフが施文される。

48～62は一段もしくは二段の連続刺突文が巡るもので、48～55は口縁部破片、56～62は頸部付近の破片で、連弧文系の土器であろう。

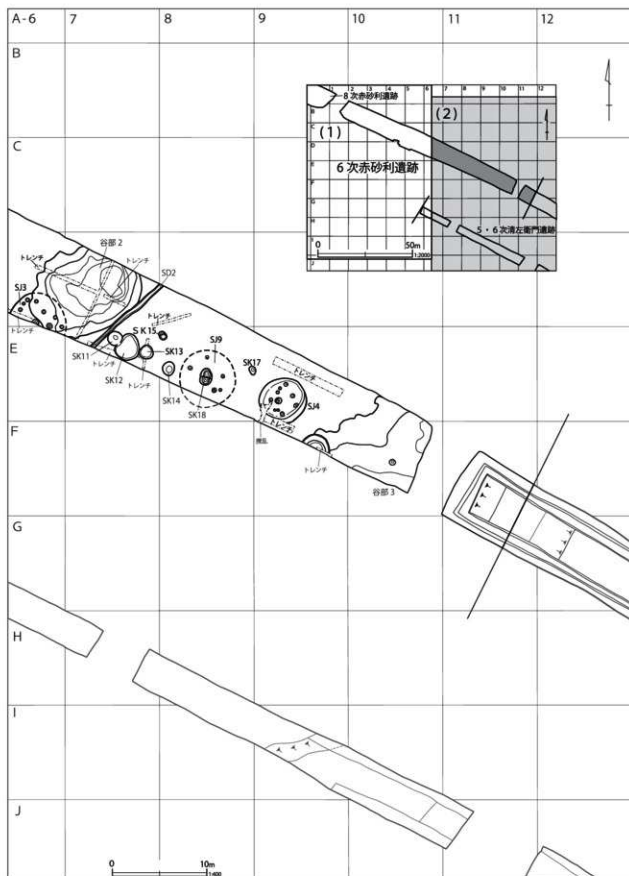
63～97は口縁部文様帯をもたないものである。

63～76は口唇直下から沈線によるモチーフが展開する。76は波状口縁である。

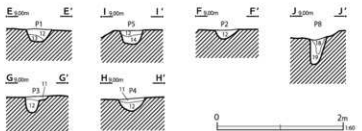
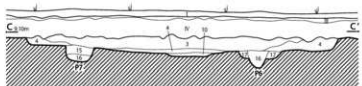
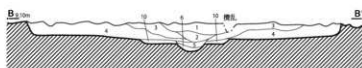
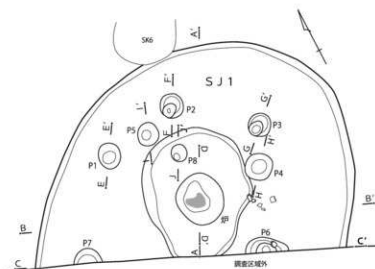
77～82は口唇下に沈線を一条巡らせ、その下位



第5図 赤砂利遺跡第6次全体図 (1)

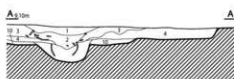


第6図 赤砂利遺跡第6次全体図(2)



- I 耕作土
II 暗褐色土
IV 暗褐色土

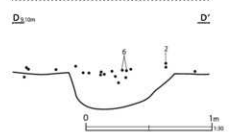
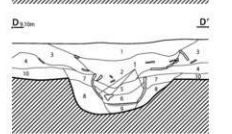
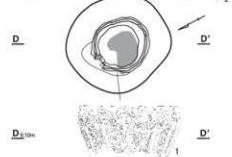
- S J 1
1 暗褐色土 (炭化物粒子 (φ0.3 cm) 微量 しまりあり 粘性ややあり)
2 暗褐色土 焼土粒子 (φ0.1 ~ 0.5 cm) 多量 炭化物粒子 (φ0.3 cm) 少量 しまりあり 粘性ややあり (I 層より弱い)
3 暗褐色土 暗灰色土・ローム土 多量 しまりあり 粘性ややあり
4 暗褐色土 ローム粒子 (φ0.1 ~ 0.5 cm) 中量 しまりあり 粘性ややあり
5 暗褐色土 ローム粒子 (φ0.1 cm) 少量 しまりややあり 粘性ややあり (が覆り方)
6 暗褐色土 焼土粒子 (φ0.2 ~ 0.3 cm) 中量 しまり強 粘性ややあり 焼けて強く締まっている (が覆り方)
7 暗褐色土 焼土粒子 (φ0.1 cm) 少量 炭化物粒子 (φ0.3 cm) 微量 ローム粒子 (φ0.2 cm) 中量 しまり強 粘性ややあり (が覆り方)
8 暗褐色土 焼土粒子 (φ0.2 ~ 0.3 cm) 多量 焼土ブロック (φ3 cm) 少量 ローム粒子 (φ0.2 ~ 0.3 cm) 中量 しまり非常に強 粘性なし (が覆り方)
9 暗褐色土 焼土粒子 (φ0.1 ~ 0.3 cm) 多量 しまり強 上面は赤く焼けて締まり、硬化部が形成されている (が覆り方)
10 暗褐色土 ローム粒子・ブロック (φ0.5 ~ 1 cm) 極少量 しまり強 粘性ややあり (が覆り方)



炉 (上面)

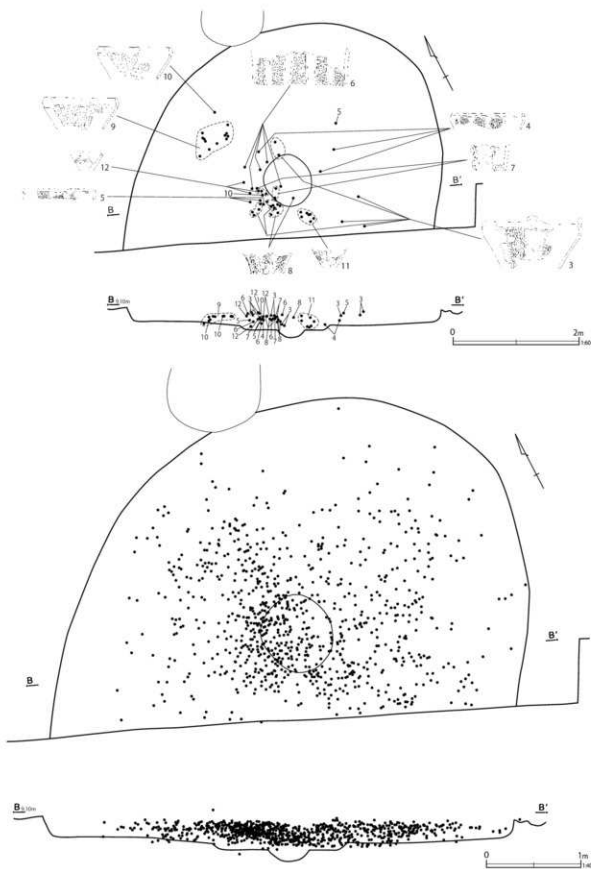


炉 (下面)

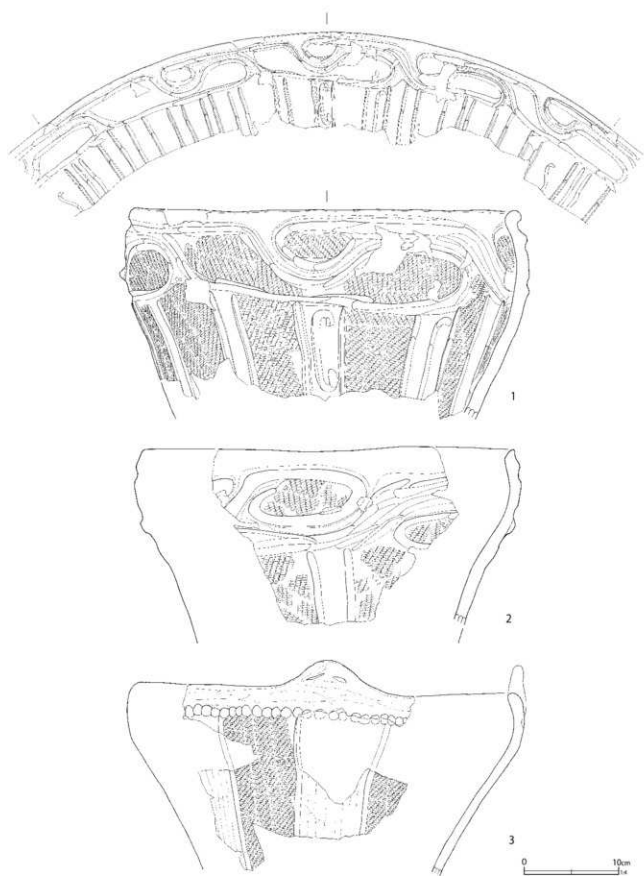


- ビット
11 暗褐色土 ローム粒子 (φ0.1 ~ 0.2 cm) 少量 しまりややあり 粘性なし
12 暗褐色土 ローム粒子 (φ0.1 ~ 0.2 cm) 中量 暗褐色土 中量 しまりややあり 粘性あり
13 暗褐色土 暗褐色土 少量 しまりあり 粘性あり
14 暗褐色土 ローム粒子 (φ0.2 cm) 少量 しまりややあり 粘性ややあり
15 暗褐色土 ローム粒子 (φ0.3 cm) 中量 しまり強 粘性ややあり
16 暗褐色土 焼土粒子 (φ0.1 cm) 微量 炭化物粒子 (φ0.1 cm) 微量 ローム粒子 (φ0.2 cm) 中量 しまり非常に強 粘性ややあり
17 暗褐色土 ローム粒子 (φ0.1 cm) 少量 しまり強 粘性ややあり
18 暗褐色土 暗褐色土 少量 炭化物粒子 (φ0.4 cm) 微量
19 暗褐色土 ローム粒子 (φ0.2 ~ 0.3 cm) 中量 しまり強 粘性あり
20 暗褐色土 ロームブロック (φ1 cm) 多量 暗褐色土 少量 しまりあり 粘性あり

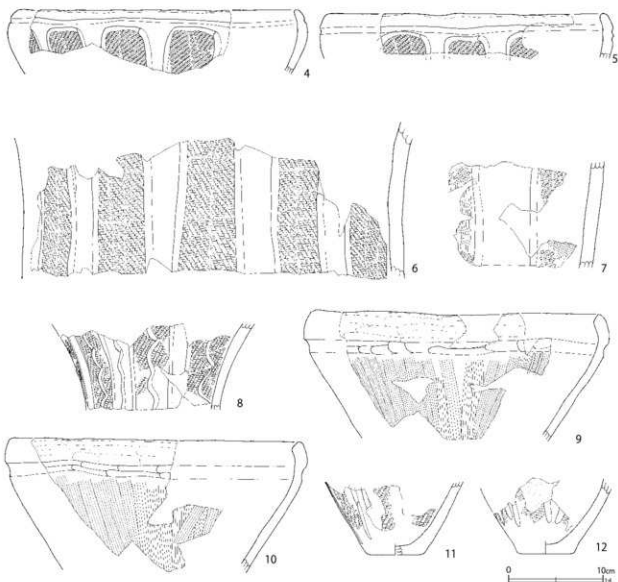
第7図 第1号住居跡



第8图 第1号住居跡遺物出土状況



第9図 第1号住居跡出土遺物 (1)



第10図 第1号住居跡出土遺物(2)

には地文もしくは懸垂文が施されるものである。

83～96は口唇下が幅の広い無文帯となるもので、両耳壺の口縁部の可能性もあろう。

98～155は胴部破片で、二本もしくは三本の沈線による懸垂文が垂下するもので、懸垂文内は磨り消される。

156～166は地文縄文が施される破片で、156～158には懸垂文の垂下が認められる。

167～189は地文に条線文が用いられるものである。183～185は短弧の連続施文である。

190～197は後期堀之内1式の資料である。

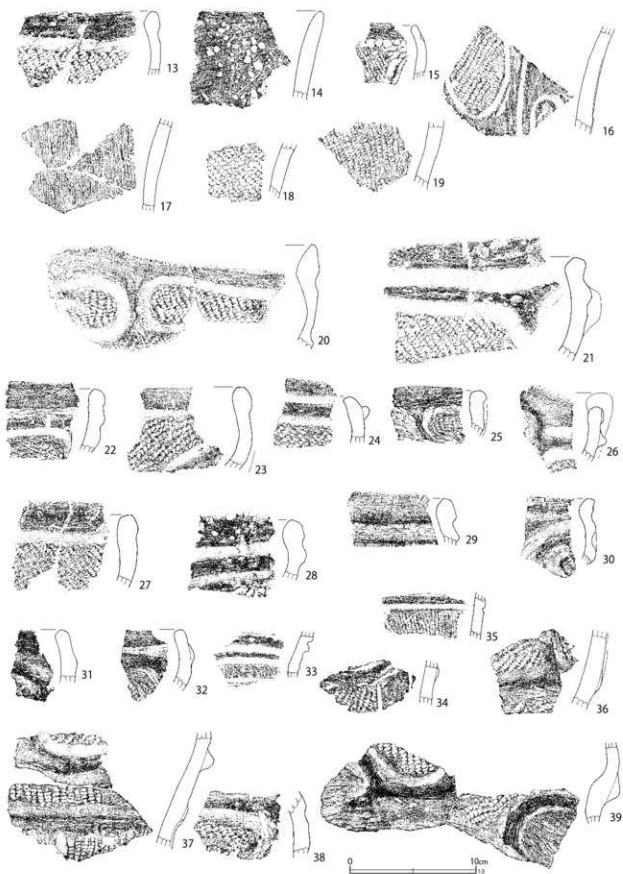
190・191は葎手状モチーフの一部であらう。

192～196は微細な沈線による曲線のモチーフが展開するもので、197は堀之内1式の口縁部把手である。

198～202は斜格子状沈線文が施される破片で、加曾利B2式であらう。

211～219は、出土した石器である。

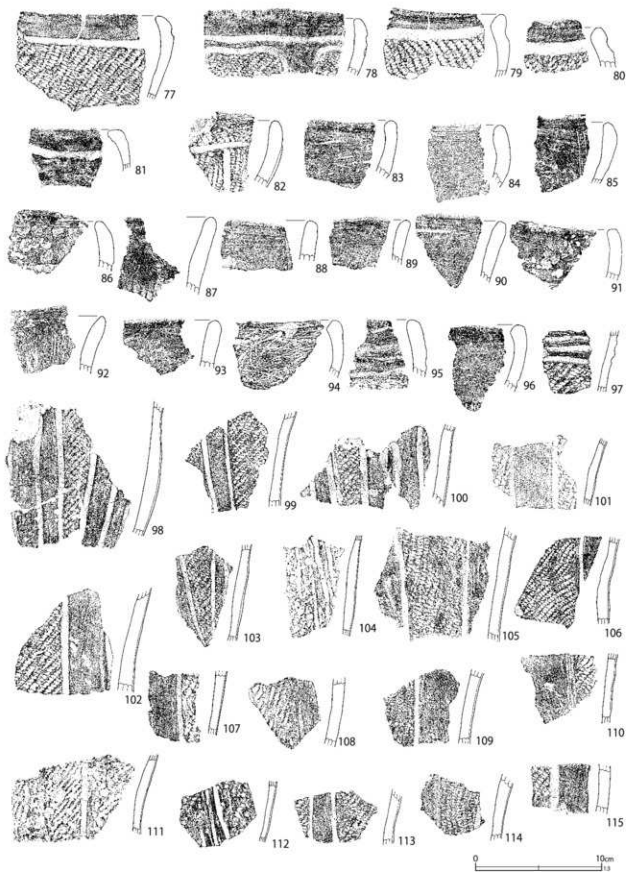
211～215は石鐏である。211・212は基部に大きく挟りをもつもので、211は完形である。213は細身の石鐏で先端部と基部を欠損する。214は基部に挟りをもたない細身のもので、先端部と左脚部を欠損する。215は石鐏の未製品で、片面の一部に自然面を残している。



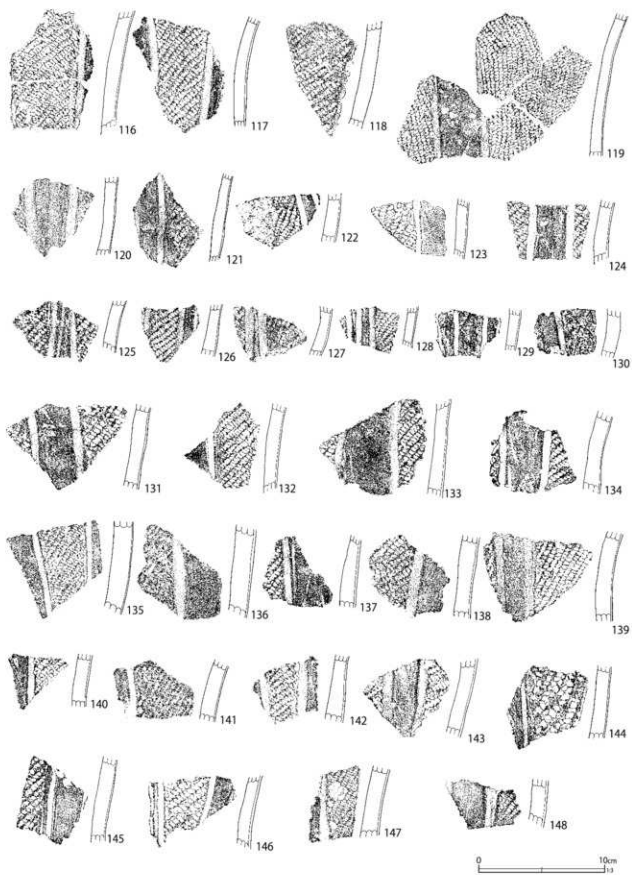
第11图 第1号住居跡出土遺物 (3)



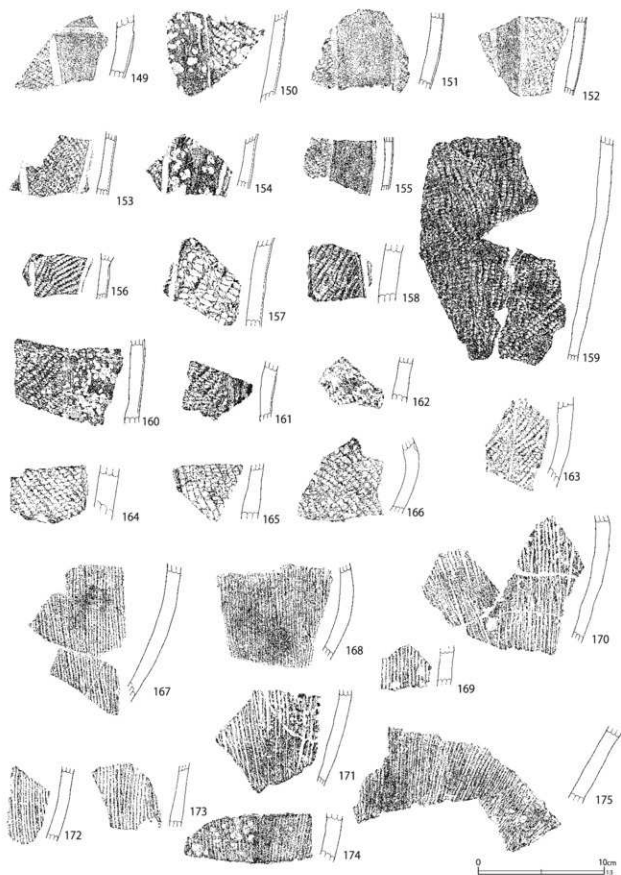
第12图 第1号住居跡出土遺物(4)



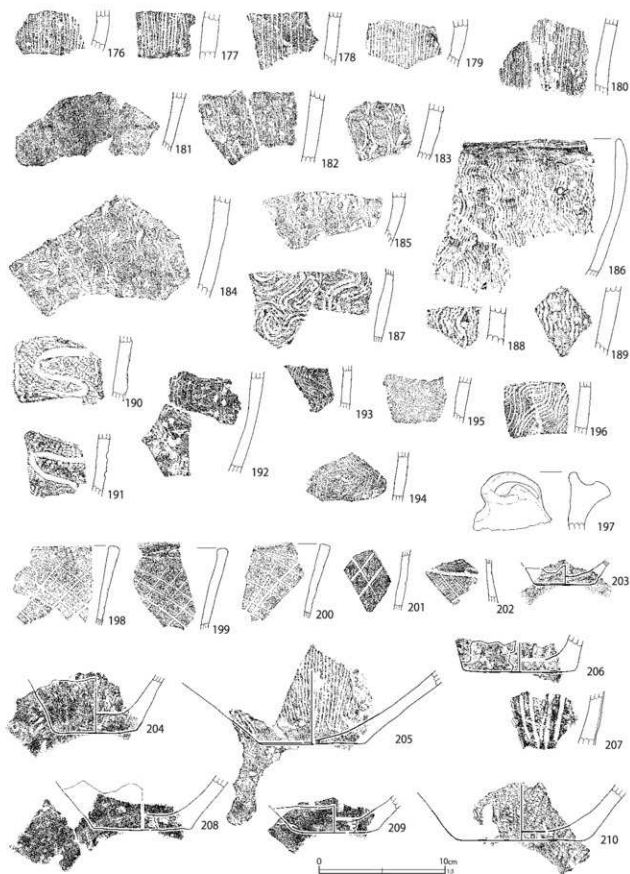
第13图 第1号住居跡出土遺物 (5)



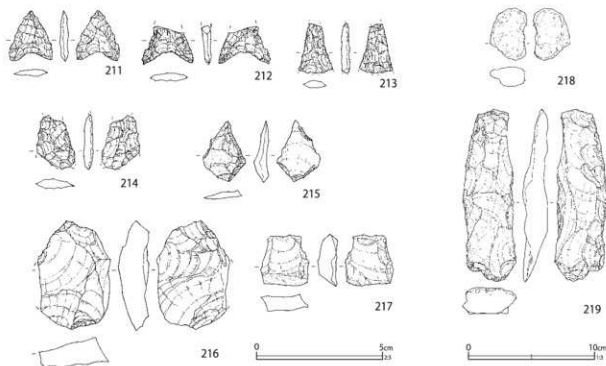
第14图 第1号住居跡出土遺物(6)



第15图 第1号住居跡出土遺物 (7)



第16图 第1号住居跡出土遺物(8)



第17図 第1号住居跡出土遺物（9）

216は楔形の剥片であるが、石核として用いられたものかもしれない。217は剥片で、裏面に二次加工の痕が認められる。218は軽石類である。表面と側面が丁寧に面取りされており、全体で縦長の楕円形を呈するものと思われる。219は打製石斧である。長さのわりに細身であるが、大きく欠損した側縁の一部に調整を施して再利用したものと思われる。刃部は大きく乱れており、使用による欠損が顕著である。

第2号住居跡（第18～23図）

C・D-5・6グリッドに位置する。重複する遺構はないが、掘り込み（残存する覆土）が非常に浅く、遺構範囲の認定が非常に難しいものである。掘り込みが確実な北側壁部分以外は、各土層断面での観察及び柱穴の分布状況から、破線で図

示したような、凡そ6m×5.5mの楕円形の遺構範囲が想定される。

炉跡は1基検出され、住居跡中央やや北西寄りに位置すると思われる。炉の中央に据えられた土器には、大型土器の胴部上半で上端が外側に開く部分が利用されており、全周が残されていた（第21図1）。また、その周囲には径60cm程の掘り込みを伴っており、土器を設置した後に周囲を埋め戻したものと思われる（3・4層）。炉床面（7層下面）は被熱のため赤く硬化している。

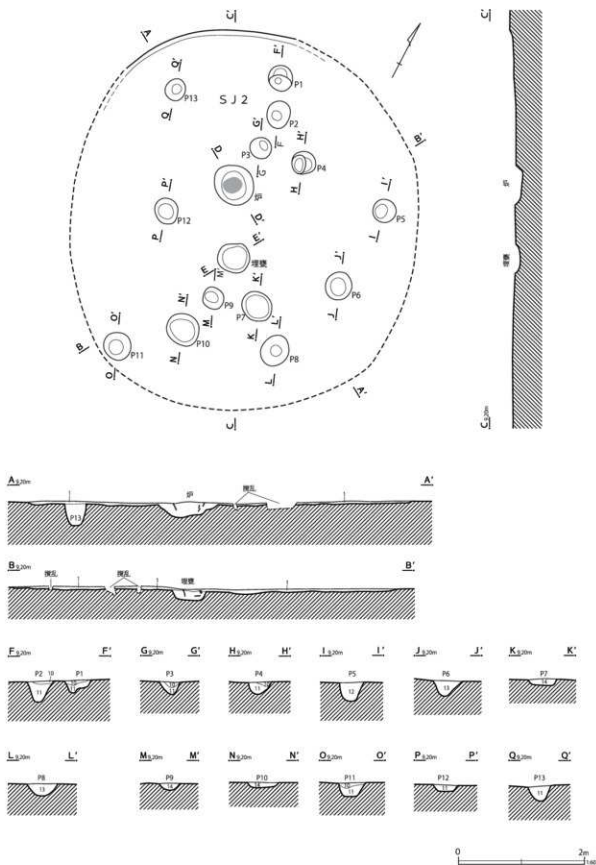
炉跡の南東側1m程の場所で埋蔵が検出された。径50cm程の不整形形の掘り込みを有しており、キャリバー形土器の上半部が正位に埋設されていた（第22図2）。但し、炉体土器の残存状態が非常に良かったのに比べて埋蔵の破損率が高いこと

第2表 第1号住居跡柱穴計測表

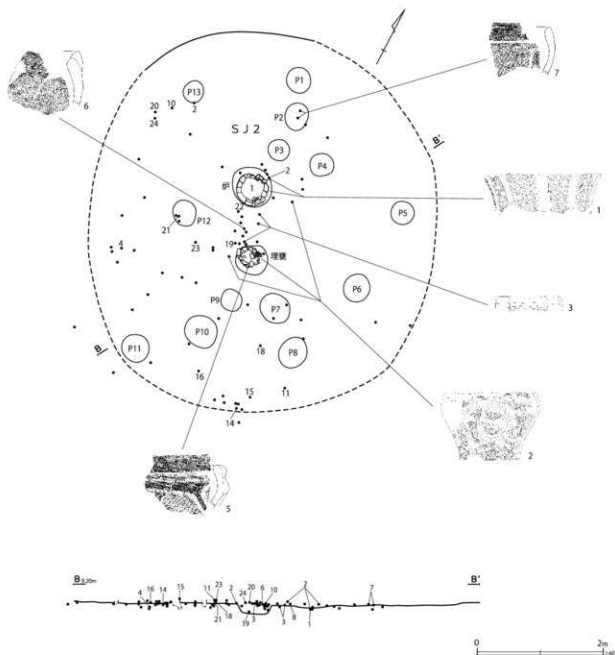
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	41	37	17
P2	38	37	14
P3	36	36	26

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P4	42	41	20
P5	36	35	24
P6	(65)	(19)	26

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P7	45	(23)	25
P8	27	24	38



第18图 第2号住居跡(1)



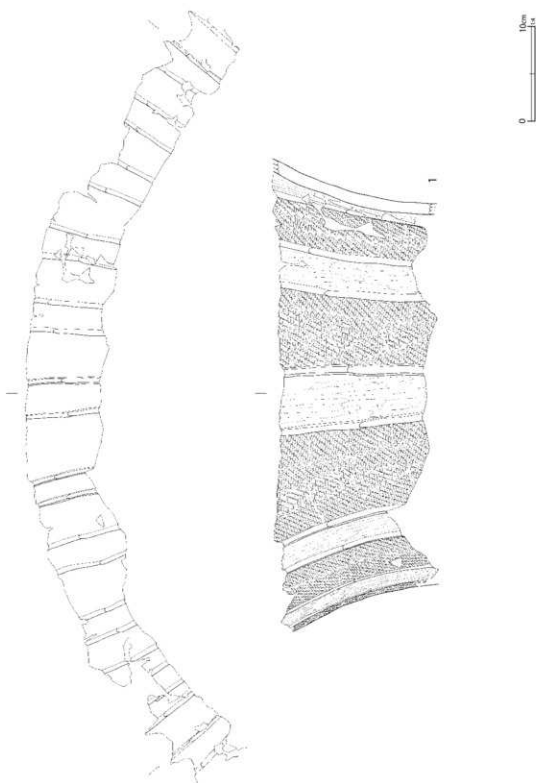
第20図 第2号住居跡遺物出土状況

第3表 第2号住居跡柱穴計測表

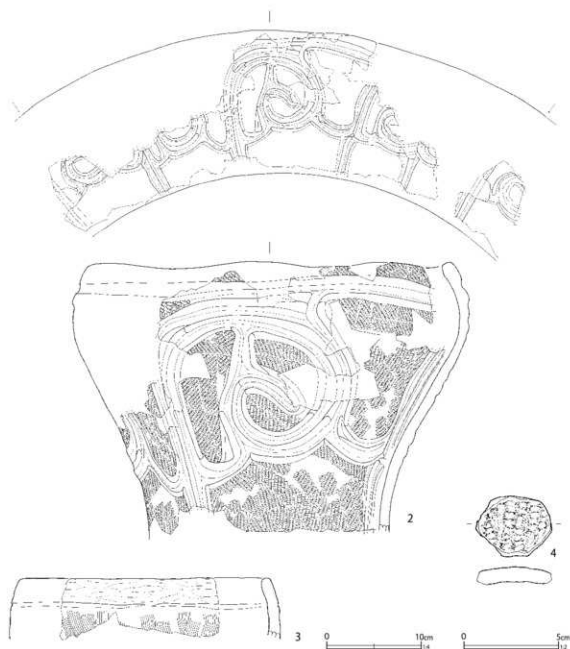
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	41	39	28
P2	43	37	30
P3	37	32	30
P4	37	34	17
P5	38	36	27

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P6	45	42	24
P7	50	43	12
P8	50	43	18
P9	34	30	9
P10	54	48	8

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P11	46	40	21
P12	41	35	10
P13	34	32	22



第21图 第2号住居跡出土遺物（1）



第22図 第2号住居跡出土遺物（2）

配されるようである。地文縄文は単節RLで、沈線下に横位に施した後、縦位に施文されている。

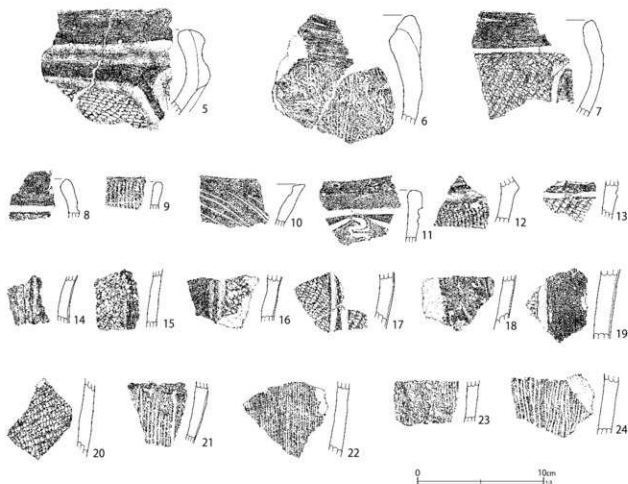
9は無節Rの燃糸文が縦位に施されるもので、夏島式と思われる。

10は波状口縁と思われ、内削ぎ状に整形された口唇内面には凹線が引かれる。

11は肥厚した口唇下を沈線で画し、蛇行沈線を中心とするモチーフが描かれるようである。縄文

は、単節RLの細かい縄文の横位回転である。

13～24は破片資料である。13は頸部破片で2本沈線が横走し、14～19は沈線による懸垂文が施される胴部破片で、懸垂文内は磨り消される。20は単節RLの縄文が縦位に施文される。21～24は地文に条線文が施されるもので、21は堀之内式の粗製土器であろう。



第23図 第2号住居跡出土遺物（3）

第3号住居跡（第24～27図）

D・E-6グリッドに位置し、南西側半分は調査区域外である。

覆土の堆積は非常に薄く、壁の立ち上がりは北西側の一部でしか確認できなかった。これは、遺構の北側から東にかけて浅い谷が形成されていたため、確認面自体が北東方向に傾斜したことによるもので、床面下の土層自体が流出しているようである。

炉跡は、住居跡中央の調査区際で1基検出されたが、一部は調査区外である。土器の埋設等を伴わない地床炉で、炉床（5層下面）は被熱のため赤く硬化しているが、埋土自体には焼土は少ない。

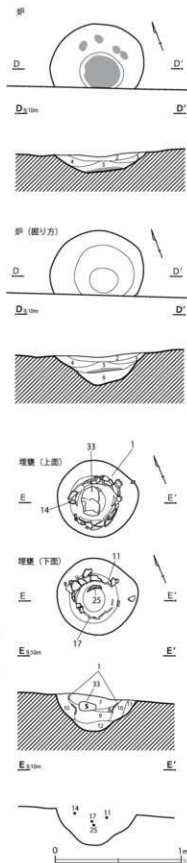
炉跡の南東側で埋甕が1基検出された。直径60cm程の楕円状の掘り込みに、いわゆる両耳壺

の上半部が逆位に埋設されていることから、あるいは本遺構に伴わない可能性もあろう。また、特記すべきは、埋設土器中央の底面（9層下面）上に大型の石が置かれていたことである。

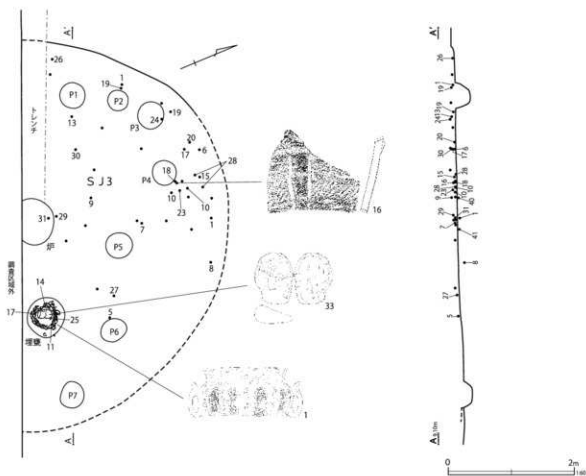
柱穴は、床面から7本検出されたが、いずれも浅く、主柱穴は確認できなかった。

遺物の多くは1層中から出土しており、本遺構に伴うものと考えられる。従って、遺物数は比較的少なかったが、本遺構の時期としては、主体を占める加曾利EⅢ式期としたい。

1は埋甕とした両耳壺で、下半部を欠損する。幅広の無文の口縁部は丁寧に整形されており、肩部以下には、沈線による蕨手状と逆「U」字状のモチーフが交互に10単位（把手の両側に5単位ずつ）配されるようである。



— 33 —



第25図 第3号住居跡遺物出土状況

2～7は口縁部破片である。

2～4・8～10は口縁部文様帯を有するキャリパー形深鉢の破片である。8～10は頸部付近の破片で、いずれも貼付隆帯が横走る。

5は口唇直下に引かれた2本沈線内に交互刺突が施されており、連弧文系の土器であろう。

6・13は後期堀之内1式、7は安行3b式に比定されよう。

11・12・14・17・25は、埋甕付近から出土しており、同一個体の可能性が高い。

14～25は縄文あるいは懸垂文の施される胴部破片である。14～22は並行沈線による懸垂文が垂下し、沈線間は磨り消される。

23～25は縄文のみが施されるもので、23・24は単節RLの縦位回転である。25は単節RLの縦位回転の他に条の方向が異なる部分があり、風化が著しく明瞭ではないが、単節LRの原体のようである。

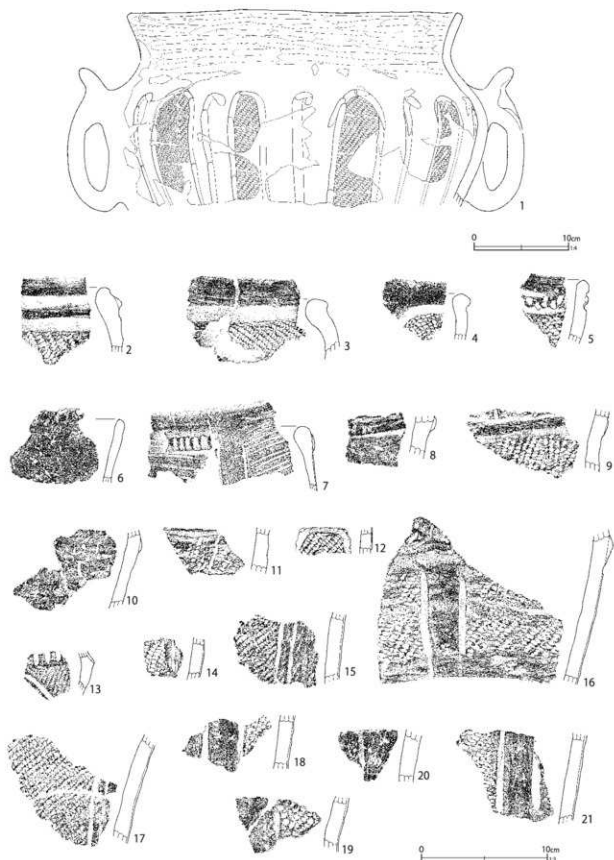
26は緻密な集合沈線、27は幅広の浅い沈線が施されるもので、堀之内式であろう。

第4表 第3号住居跡柱穴計測表

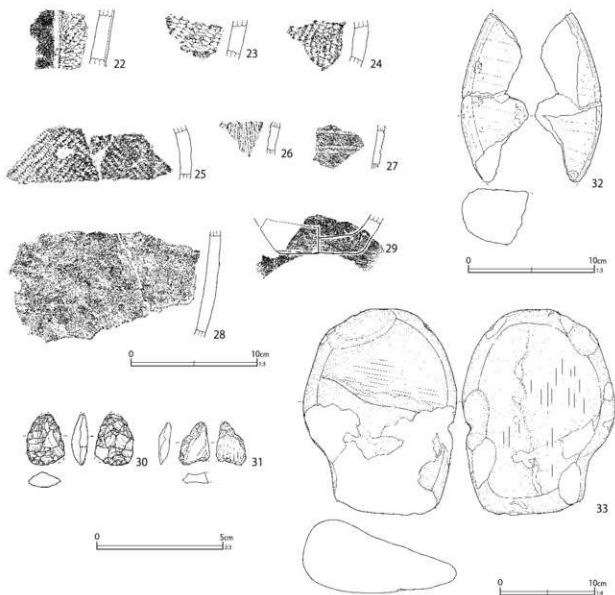
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	42	42	25
P2	36	31	14
P3	44	42	22

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P4	40	37	18
P5	43	41	20
P6	41	36	14

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P7	43	37	15



第26图 第3号住居跡出土遺物(1)



第27図 第3号住居跡出土物(2)

30～33は出土した石器である。

30は石鏃で、基部は抉りをもたず、むしろ曲線的に仕上げられている。やや肉厚で調整は粗い。

31は二次加工痕の認められる小型の剥片であるが、右側を大きく欠損しており、下端には使用痕も認められる。

32は石皿の小破片で、本品自体が2破片の接合品である。表面の一部に敲打痕が認められる。

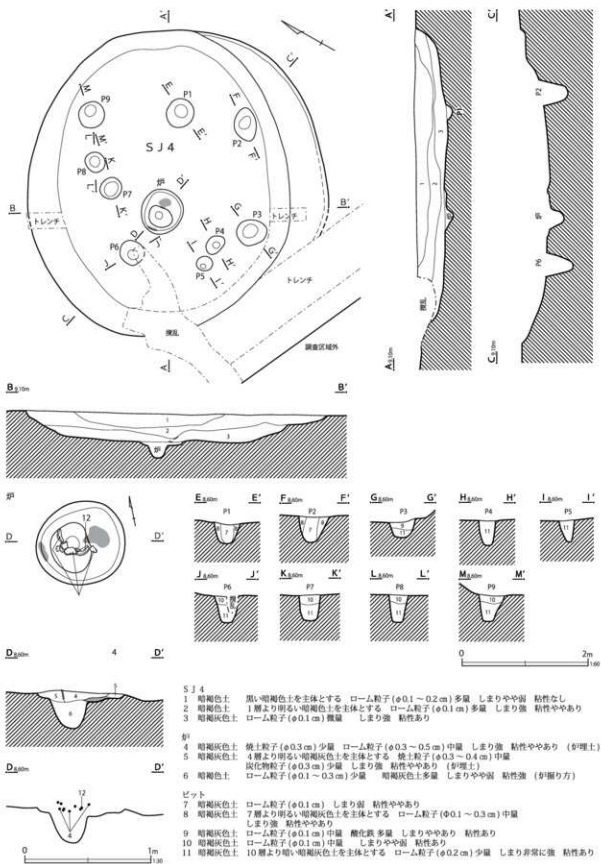
33は大型の石器で形状から台石としたが、使用痕等は明瞭でない。埋甕内部の埋土上層部から図の表面(左側)を上にした状態で出土している。

図の下半部は被熱の痕が顕著で、剥落も著しい。

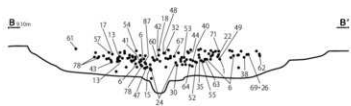
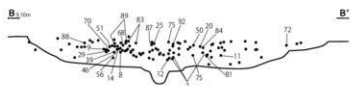
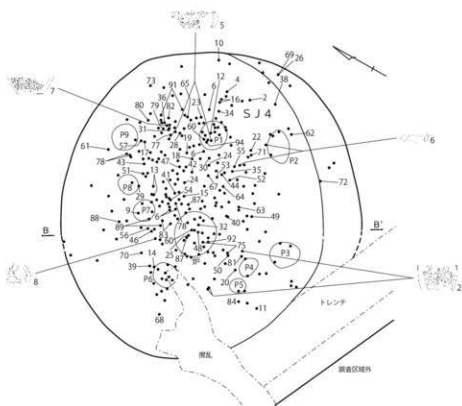
第4号住居跡(第28～34図)

E-9グリッドに位置し、他の住居跡とは異なり、50cm前後の深い掘り込みを有する。平面形は、凡そ5m×4mの楕円形を呈するが、南東側に浅いテラス状の施設が検出されている。また、住居跡自体の壁も直立するようには検出されず、全体的に搗鉢状の掘り込みとなった。

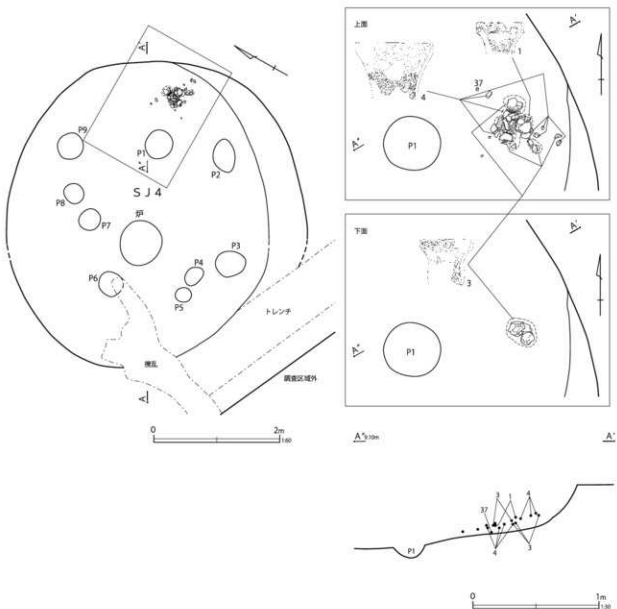
炉跡は、中央やや南西寄りに検出された。西側に深い掘り込みを有するが、覆土の観察からは炉としての使用時には埋められていたものと思われる。



第28図 第4号住居跡



第29図 第4号住居跡遺物出土状況(1)



第30図 第4号住居跡遺物出土状況(2)

る。炉跡の中央部には、南が膨らむような弧状に立て並べられた土器片が10点ほど残されていた。本来は全周していたと思われるが、焼土化した部分が土器片列の外側に検出されていることから、当初地床炉として使用していたものに土器片を加えて改修したものと推測される。

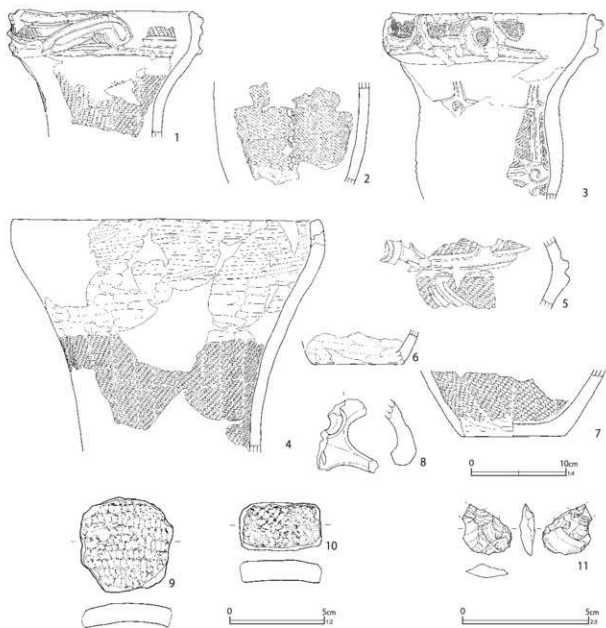
なお、P1の北東側の床上から土器片が集中して出土しているが(第30図)、その一部は炉体土器としたもの(第31図4)と接合している。従って、住居の廃絶時、あるいは廃絶後に炉体土器の

一部が抜き取られて廃棄されたものと考えられる。

柱穴は、床面で9本検出されたが、いずれも40cm程の深い掘り込みのものである。位置的にはP1～3・6・9などが主柱穴の候補となろう。

遺物は多量に出土しているが、小片が多いため図示できたものは必ずしも多くないが、本遺構の時期としては、炉体土器をはじめ、主体を占める加曽利EⅡ式期としたい。

1はP1の北東側の床上で潰れたような状態で出土したものである。貼付隆帯によって口縁部文



第31図 第4号住居跡出土遺物 (1)

様帯を画し、「S」字状のモチーフが配される。縄文は、単節R Lが施され、口縁部文様帯の下位は無文部分が残される。

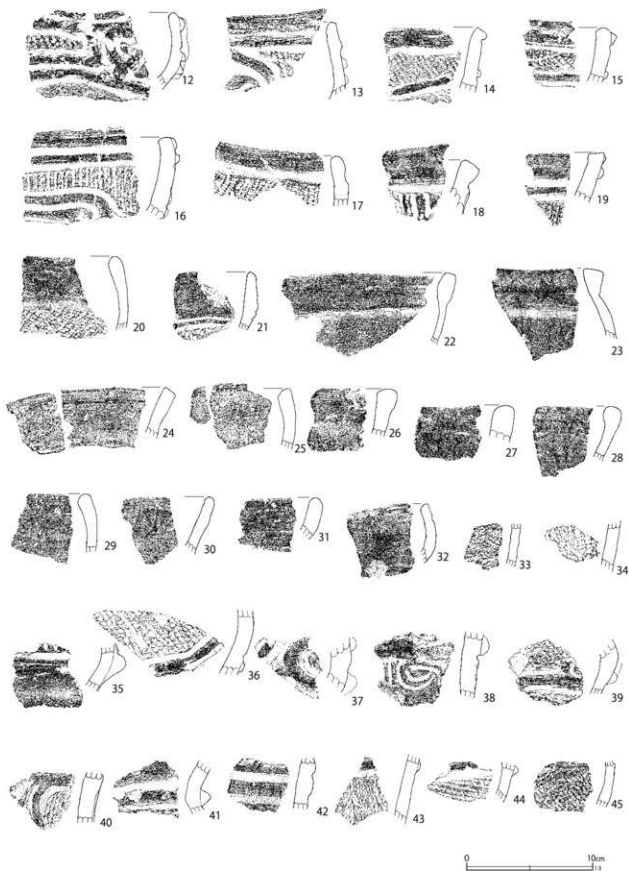
2は無節Lの縄文が施されるもので、胴部下半の破片であろう。短弧を連続して施した蛇行懸垂文が垂下する。

3も1と同様にP 1の北東側の床上で出土したもので、貼付隆帯によって画された口縁部文様帯に「S」字状のモチーフが配されるが、口縁部・胴部ともに、蕨手状の沈線多用した大木8b的

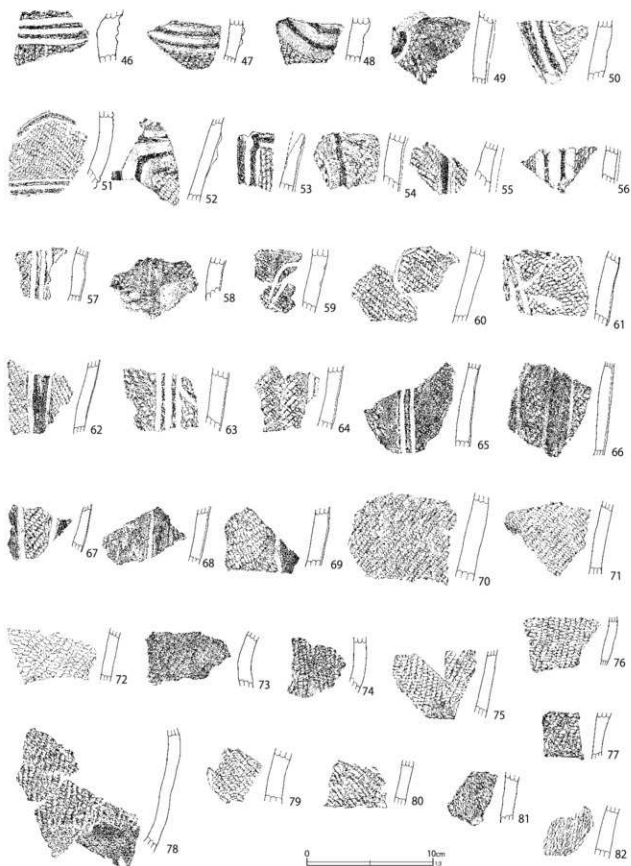
なモチーフが描出されている。また、口縁部文様帯の下位は、明確には画されないものの無文帯が残されている。地文には単節L Rの原体が用いられ、口縁部では横位回転、胴部では斜位回転で施文される。

4は炉体土器である。口縁部が内湾しながら開く深鉢で、下半部が欠損する。地文には単節R Lの縄文が縦位に施文されるが、口唇下の12cm程は丁寧に磨かれて無文帯となっている。

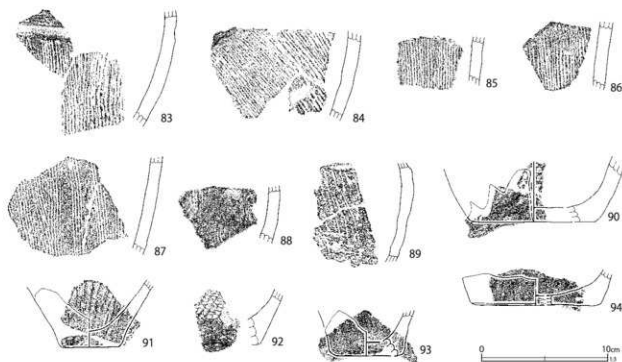
5は隆帯による口縁部文様帯の下端部分である。



第32図 第4号住居跡出土遺物(2)



第33图 第4号住居跡出土遺物(3)



第34図 第4号住居跡出土遺物(4)

地文は単節R Lの縄文の縦位回転で、文様帯の下位には沈線による弧状のモチーフが配される。

6・7は深鉢の底部で、8は橋状把手であるが、多くを欠損する。

9・10は土製円盤で、9には単節R L、10には単節L Rの縄文が施されている。なお、長方形を呈する10は、側面(断面)が丁寧に磨られている。

11は小型の剥片であるが、二次加工痕が顕著に認められることから、小型石器の未製品と思われる。

12~32は口縁部破片である。

12~16・18・19・36~44は貼付隆帯による横S字文を基調とした口縁部文様帯を描出するもので、地文は12・15が単節R L、14・36が0段多縄の単節L R、16・19・40・43・44が無節Lの燃糸文、18が短沈線である。

17・20・21は無文の口縁下に沈線が巡るもので、沈線下には縄文が縦位に施される。

22~32は無文の口縁部破片である。

33・34は前期黒浜式であろう。33は無節Rの原体を2本単位で絡げた付加条、34は粗い単節R Lの縄文である。

35は浅鉢形土器の肩部、36~46はキャリバー形土器の口縁部から頸部付近にかけての破片である。

47~50は隆帯及び沈線によって渦巻き状のモチーフを描く胴部破片である。

51は連弧文系の土器で、地文は複節R L Rの縄文が横位に施される。

52~56は貼付隆帯による懸垂文が垂下するものである。

58~69は沈線による懸垂文が垂下するもので、懸垂文内は磨り消されるのは66~69のみである。

70~82は地文縄文のみの破片で、79・80が単節L R、81・82が燃糸文、他は単節R Lの縦位施文である。

83~89は地文に条線が用いられるもので、87は5条1単位の条線が明瞭である。

90~94は底部破片を一括した。

第5表 第4号住居跡柱穴計測表

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	46	43	34
P2	54	34	41
P3	48	41	26

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P4	34	24	39
P5	25	24	34
P6	40	36	41

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P7	34	33	41
P8	33	30	43
P9	43	41	41

第5号住居跡 (第35・42図)

C・D-5グリッドに位置する。

確認面で炉跡を検出したが、住居としての掘り込みや覆土は確認できず、平面形は不明である。

炉跡は、1.3m×1.2m程の不整形の掘り込みを有するもので、平坦な底面のやや北側寄りの47cm×43cm程の範囲が被熱のため赤く硬化していた。

柱穴は、図示した10本が本遺構に伴うと思われるが、いずれも浅く明瞭ではない。

遺物は、炉跡内から土器片7点が出土している(第42図1～7)。

1は大型土器の口縁部破片で、幅狭の無文部の下端に低い隆帯が巡るようである。2は縦位に施文された単節R Lの縄文の上に蛇行懸垂文が施される。3は縄文のみの破片で、単節R Lの縦位回転である。4は複節R L Rの地文上に懸垂文が施されるもので、懸垂文内は磨り消される。

5は1単位5条の条線文が縦位に施される。

6は単節R Lの縄文に幅7mm程の凹線が引かれるものである。

7は底部の小片である。

以上、1～5は加曽利E式期に属するもので、

6は後期堀之内式と思われる。

第6～8号住居跡 (第36～39・42図)

C・D-4・5グリッドに位置する。

第1号住居跡の北側部分で重複して検出されたもので、第5号住居跡と同様に、確認面で炉跡と柱穴の一部を検出したが、竪穴住居跡としての掘り込みや覆土を確認することができなかったものである。

第6号住居跡 (第37・42図)

炉跡は、直径約0.8mの不整形の掘り込みを有するもので、底面のやや南寄りには40cm×50cm程の範囲が被熱のため赤く硬化している。

柱穴は明瞭ではないが、図示した6本が本遺構に伴うと思われる。

炉跡から出土した遺物は少なく、僅か3点である(第42図8～10)。

8は単節L Rの縄文が縦位に施される胴部破片で、破片の両側に太めの沈線が垂下するが、沈線間は磨り消されない。

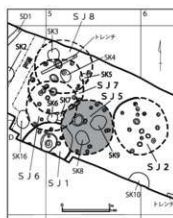
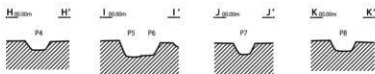
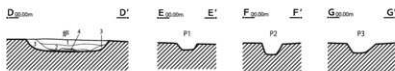
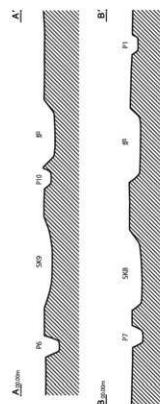
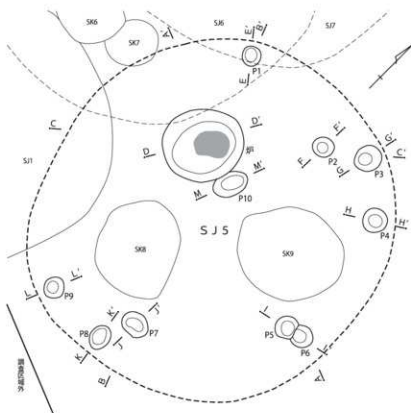
9は頸部付近の破片と思われる、横走る沈線の下位に2本単位の沈線が垂下している。地文は明瞭でないが、条線文が斜位に程起こされるようである。

第6表 第5号住居跡柱穴計測表

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	32	30	10
P2	34	32	17
P3	45	37	13
P4	38	37	14

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P5	38	35	25
P6	36	35	21
P7	47	31	17
P8	42	28	15

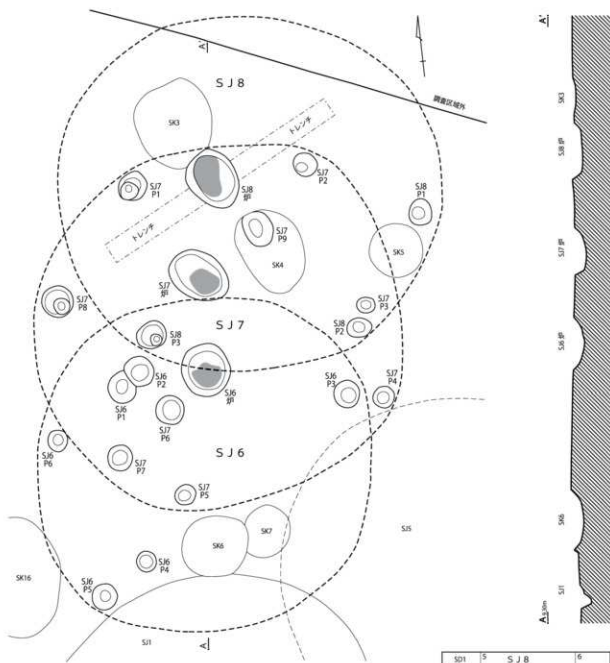
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P9	33	32	8
P10	58	(34)	12



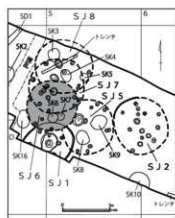
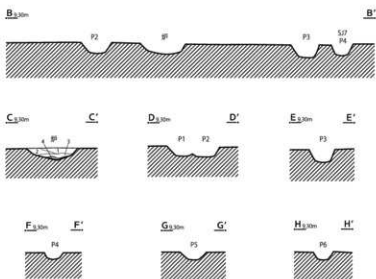
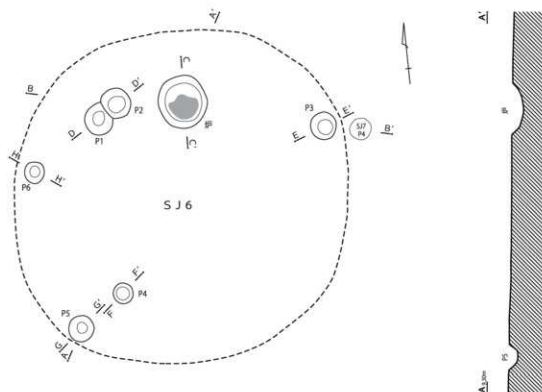
S J 5 Ⅱ

- 1 暗褐色土 ローム粒子(φ0.3～0.5cm)少量 焼土粒子(φ0.1cm)微量
腐化物粒子(φ0.1cm)微量 しまりややあり 粘性ややあり
- 2 暗褐色土 ローム粒子(φ0.3～0.5cm)少量 焼土ブロック(φ1cm)少量
しまりあり 粘性ややあり
- 3 暗黄褐色土 暗黄褐色粘質土を主体とする しまりあり 粘性あり
- 4 暗赤褐色土 焼土層

第35図 第5号住居跡

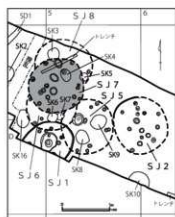
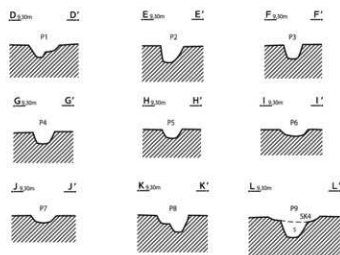
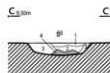
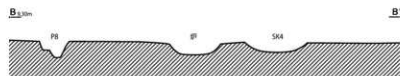
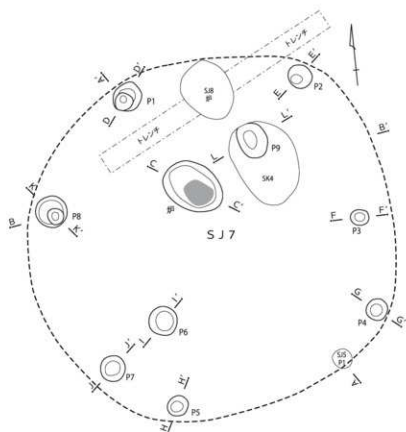


第36図 第6～8号住居跡



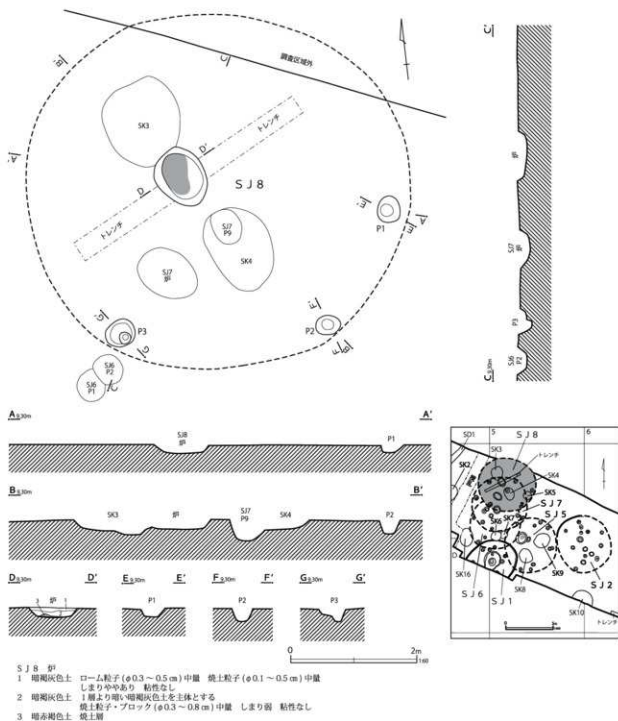
- SJ 6 跡
 1 暗褐色土 ローム粒子 (φ0.3 ~ 0.5 cm) 中量 焼土粒子 (φ0.3 cm) 少量
 2 暗褐色土 ローム粒子 (φ0.3 ~ 0.5 cm) 中量 焼土粒子 (φ0.3 cm) 微量
 3 暗褐色土 ローム粒子 (φ0.3 ~ 0.5 cm) 少量 焼土粒子 (φ0.1 ~ 0.3 cm) 中量
 4 暗赤褐色土 焼土層

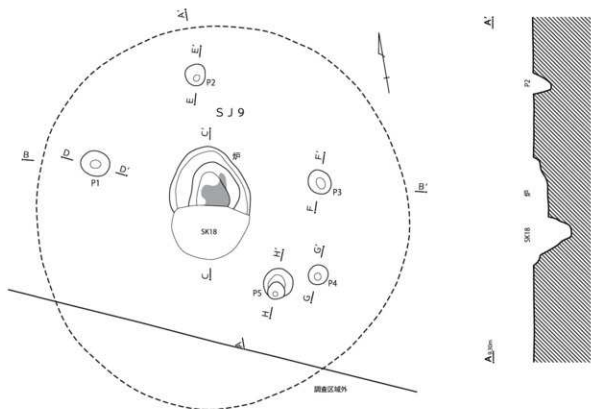
第37図 第6号住居跡



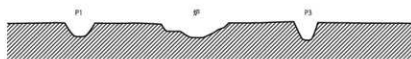
- S J 7 群
- 1 暗灰色土 ローム粒子 (φ0.3 ~ 0.5 cm) 中量 しまり弱 粘性なし
 - 2 暗灰色土 焼土粒子・ブロック (φ0.3 ~ 0.8 cm) 中量 しまり強 粘性ややあり
 - 3 暗褐色土 ローム粒子 (φ0.3 ~ 0.5 cm) 少量 しまり弱 粘性なし
 - 4 暗赤褐色土 焼土層
- ビット
- 5 暗褐色土 ローム粒子少量 暗褐色土中量 しまりややあり 粘性ややあり

第38図 第7号住居跡



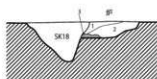


B-B' 30m



B'

C-C' 30m



C'

D-D' 30m



D'

E-E' 30m



E'

F-F' 30m



F'

G-G' 30m



G'

H-H' 30m



H'

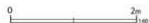
SJ9 8P

- 1 暗褐色土 焼土粒子 (φ0.2~0.5 cm) 中量 暗褐色土中量 しまり弱 粘性なし
- 2 暗褐色土 ローム粒子 (φ0.2~0.3 cm) 多量 焼土粒子 (φ0.1~0.5 cm) 少量
- 3 暗赤褐色土 しまりややあり 粘性ややあり

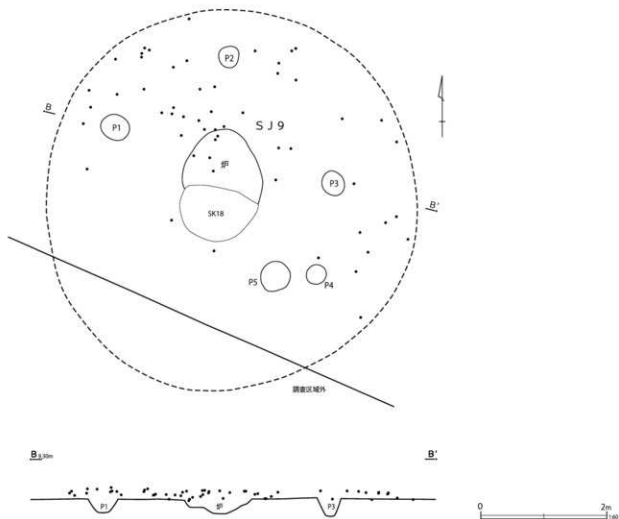
3 暗赤褐色土 焼土層

ビット

- 4 暗褐色土 ローム粒子 (φ0.2~0.5 cm) 少量 しまり弱 粘性なし
- 5 暗褐色土 ローム粒子・ブロック (φ0.1~0.8 cm) 中量 しまりややあり 粘性ややあり
- 6 暗褐色土 ローム粒子 (φ0.1~0.3 cm) 多量 しまり強 粘性ややあり
- 7 暗褐色土 ローム粒子 (φ0.3 cm) 中量 しまり強 粘性ややあり



第40図 第9号住居跡



第41図 第9号住居跡遺物出土状況

柱穴は明瞭ではないが、図示した9本が本遺構に伴うと思われる。

灰跡から出土した遺物は少なく、僅か2点である（第42図11・12）。

11は口縁部破片で、口唇直下から浅く細かい条線文が施されるものである。

12も条線文が施される胴部破片で、施文の1単位には間隔の異なる4条が認められる。

以上、両者とも後期堀之内式に属するものと思われる。

第8号住居跡（第39・42図）

灰跡は、0.9m×0.7m程の楕円形の掘り込みを有するもので、平坦な底面の北西寄り40cm×

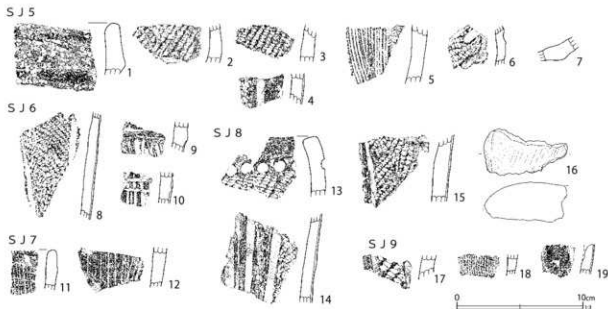
65cm程の範囲が被熱のため赤く硬化している（3層）。

柱穴は、図示した3本が本遺構に伴うものと思われるが、予想される住居跡範囲の西側は攪乱によって壊され、北側は調査範囲外であることから、柱穴の配置も明瞭ではない。

灰跡からの出土遺物は4点であるが、比較的破片は大きい（第42図13～16）。

13は口縁部破片である。角頭状の口唇下に1.5cm程の無文帯を有し、その下位に凹形の刺突が連続して巡る。地文には単節RLの縄文が縦位に施される。

14は3本沈線による懸垂文が施されており、懸



第42図 第5～9号住居跡出土遺物

垂文内は磨り消される。地文縄文は、単節R Lの縦位回転である。

15も同じく懸垂文の垂下するもので、懸垂文内は磨り消されるようである。地文には、単節R Lの縄文が縦位と斜位にほどこされている。

16は出土した石器で、磨石の小片である。炉跡からの出土であるが、被熱の痕は認められない。

以上、いずれも中期加曾利EⅢ式期に比定されるものである。

第9号住居跡（第40・41・42図）

E-8グリッドに位置し、南西側は調査区域外である。

確認面で炉跡と柱穴の一部を検出したが、住居としての掘り込みや覆土は確認できず、平面形は不明である。

炉跡は、南側を第18号土壌によって壊されているが、東西約1.3m、南北（現長）0.9mと大型の掘り込みを有する。緩やかな二段の掘り込みが認められ、平坦な底面の中央部分が被熱のため赤く硬化しているが（3層）、その範囲は不整形である。

柱穴は5本検出されたが、いずれも浅く、主柱穴は確認できなかった。

炉跡から出土した遺物は少なく（第42図17～19）、遺構の時期は特定できない。

17は懸垂文の施される胴部破片で、地文縄文は単節R Lの縦位回転である。

18は捺糸文土器で、無節Rの捺糸文が施される。

19は胴部破片で、内部が磨り消される懸垂文部分であろう。

第7表 第6～8号住居跡柱穴計測表

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
SJ6-P1	52	44	15
SJ6-P2	50	47	15
SJ6-P3	42	41	21
SJ6-P4	33	32	10
SJ6-P5	41	39	12
SJ6-P6	35	31	13

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
SJ7-P1	47	44	18
SJ7-P2	40	35	26
SJ7-P3	29	26	21
SJ7-P4	35	34	16
SJ7-P5	31	30	13
SJ7-P6	45	45	9

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
SJ7-P7	40	38	9
SJ7-P8	50	49	25
SJ7-P9	(57)	(47)	33
SJ8-P1	43	35	13
SJ8-P2	40	33	20
SJ8-P3	48	41	19

第8表 第9号住居跡柱穴計測表

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	47	37	21
P2	33	32	29

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P3	40	34	28
P4	31	29	25

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P5	46	46	25

第9表 住居跡出土遺物観察表

遺構名	棟図	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
SJ1	17	211	石鏃	2.0	1.7	1.0	1.0	チャート	母出土
SJ1	17	212	石鏃	[1.5]	2.0	0.4	0.9	チャート	
SJ1	17	213	石鏃	[2.0]	[1.4]	0.4	0.8	チャート	
SJ1	17	214	石鏃	[2.2]	[1.6]	0.4	1.5	チャート	
SJ1	17	215	石鏃	2.4	1.7	0.6	1.3	チャート	
SJ1	17	216	剥片	2.1	2.0	0.8	3.5	チャート	
SJ1	17	217	剥片	4.3	[3.0]	1.2	15.7	チャート	
SJ1	17	218	軽石類	4.2	[2.9]	1.6	4.3	軽石	
SJ1	17	219	打製石斧	13.7	4.3	2.1	105.5	頁岩	
SJ3	27	30	石鏃	2.0	1.5	0.6	20.0	チャート	
SJ3	27	31	剥片	1.7	[1.2]	0.8	0.8	黒曜石	埋篋内 未製品
SJ3	27	32	石皿	[13.5]	[5.1]	[4.6]	241.0	安山岩	
SJ3	27	33	台石	[21.8]	16.2	7.8	2836.0	砂岩	
SJ4	31	11	剥片	[2.0]	[2.0]	0.6	1.8	チャート	
SJ8	42	16	磨石	[3.7]	[6.6]	[3.5]	75.3	安山岩	

2. 土壌

第6次調査では18基の土壌が検出された。うち出土遺物によって縄文時代と確認できたものは13基である。いずれも住居跡の分布域から大きく外れることはなく、土壌のみが集中するような状況は確認できなかった。また、同分布域には近世の溝跡も検出されていることから、近世に属するものの存在も考えられるが、形状や覆土の状況からは確認できなかった。

第2号土壌 (第43・48図)

当初大型の土壌として調査を進めたが、2基の土壌の重複であることが判明した。土層の観察から、2Aとした南西側の遺構が新しい。

遺物は少なく、小破片が6点出土している(5～10)が、いずれも中期加曽利E式である。5は口縁部の無文帯下端に沈線が引かれるものである。6・8の縄文は、6が単節RL、8が単節RLの縦位施文である。9・10は地文に並行沈線文が用いられており、曾利系の土器と思われる。

第4号土壌 (第43・48図)

浅い土壌で、第7号住居跡の柱穴を壊して造られている。

遺物は少なく、僅か3点であるが(11～13)、いずれも加曽利E式に比定される。

11は貼付隆帯によって渦巻文及び楕円区画文が描出されており、キャリパー形土器の口縁部文様帯の一部であろう。区画内には単節RLの縄文が横位に施文される。

12は並行沈線文が用いられる曾利系の土器、13は地文に条線文が用いられる。

第5号土壌 (第43・47図)

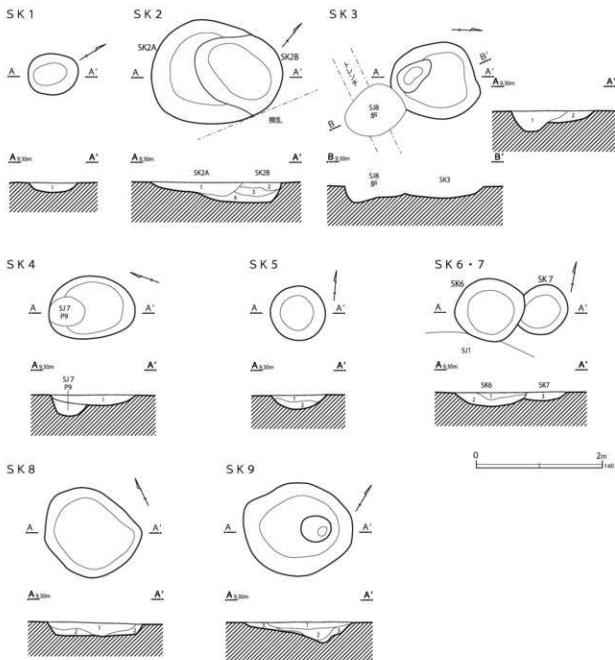
遺物は、石鏃が1点出土している(3)。

薄手で基部に挟りもち、刃部は丁寧に調整が施されている。

第8号土壌 (第43・48図)

第5号住居跡と重複するが、新旧関係は不明。

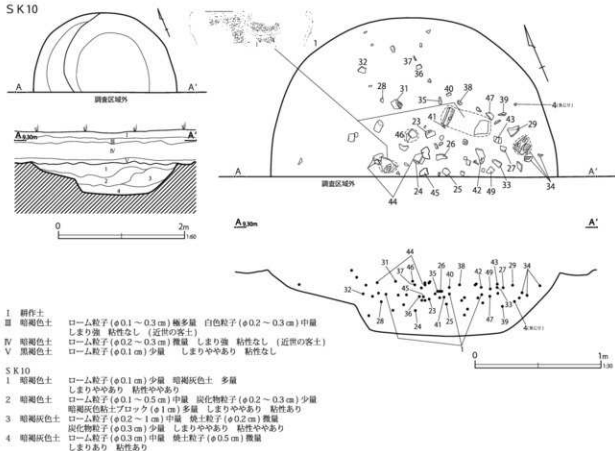
遺物は少なく、5点出土しており(14～18)、



- SK 1**
1 暗褐色土 暗褐色の砂質土を主体とする しまりややあり 粘性ややあり
- SK 2 A・2 B**
1 暗褐色土 ローム粒子 (φ0.2 cm) 少量 暗褐色砂質土少量 しまりあり 粘性ややあり (2 A)
2 暗褐色土 暗褐色土少量 しまりややあり 粘性ややあり (2 B)
3 暗褐色土 炭化物粒子 (φ0.3 cm) 微量 しまりあり 粘性ややあり (2 B)
4 暗褐色土 ローム粒子少量 3層より暗い暗褐色を呈する しまりあり 粘性ややあり (2 B)
- SK 3**
1 暗褐色土 炭化物粒子 (φ0.3 cm) 微量 しまりあり 粘性ややあり
2 暗褐色土 ローム粒子 少量 1層より暗い暗褐色を呈する しまりあり 粘性ややあり
- SK 4**
1 暗褐色土 ローム粒子中量 暗褐色土少量 しまりややあり 粘性ややあり

- SK 5**
1 暗褐色土 暗褐色の砂質土を主体とする 暗褐色土少量 しまりややあり 粘性ややあり
2 暗褐色土 暗褐色の砂質土を主体とするローム粒子・暗褐色土少量 しまりややあり 粘性ややあり
- SK 6・7**
1 暗褐色土 ローム粒子 (φ0.2～0.3 cm) 中量 しまりあり 粘性やや強
2 暗褐色土 ローム粒子少量 しまりあり 粘性ややあり
3 暗褐色土 ローム粒子 (φ0.3 cm) 少量 しまりあり 粘性あり
- SK 8**
1 暗褐色土 ローム粒子 (φ0.3 cm) 少量 しまりややあり 粘性ややあり
2 暗褐色土 ローム粒子 (φ0.3 cm) 中量 しまりややあり 粘性ややあり
- SK 9**
1 暗褐色土 ローム粒子 (φ0.2～0.3 cm) 少量 しまりあり 粘性ややあり
2 暗褐色土 ローム粒子 (φ0.2～0.3 cm) 中量 しまりあり 粘性ややあり
3 暗褐色土 暗褐色土少量 しまりあり 粘性ややあり

第43図 土壌 (1)



第44图 土壤 (2)

14が堀之内1式、他は加曾利E式段階と思われる。

14の蛇行沈線は蕨手状モチーフの一部であろう。15は単節R Lの縄文が斜位に施文される。16・17は懸垂文の施される胴部破片で、いずれも単節R Lの縦位回転である。18は無文の胴部下端の破片で、僅かに懸垂文が看取される。

第9号土壤 (第43·48图)

第5号住居跡と重複するが、新旧関係は不明。

出土遺物は4点である(19~22)。

19~21は厩付隆帯を用いた口縁部文様帯の一部である。19は大型土器の口縁部下端と思われ、隆帯による楕円区画文の一部である。20は口縁部文様带上端の破片と思われ、地文縄文は単節RLの横位施文である。21は同じく文様帯下端の破片と思われ、区画内には条線文が施される。

いずれも加曾利E式段階であろう。

第10号土壩 (第44・47・48图)

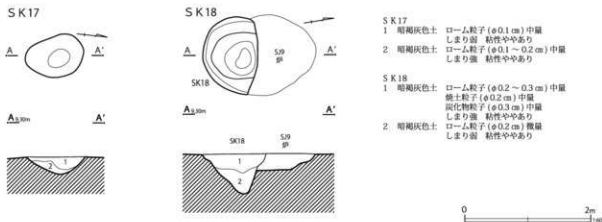
直径が2 mを超える大型の土塊であるが、南側は調査範囲外である。

平面形は現況で半円形を呈するが、西側が浅いテラス状になるもので、最深部は52cmの掘り込みをもつ。

出土遺物も多く、1～3層を主体に60点を超える遺物が出土した。

1・23・24・28～30は貼付隆帯を用いた口縁部文様帯の一部である。

25・31は口唇の直下に逆「U」字状のモチーフが配されるもので、やや新しい様相を呈する。25の地文は単節RLで、縦位及び斜位に施文される。31は逆「U」字状のモチーフ間に蕨手状の懸垂文が配されるようで、地文は単節RLの縦位回転である。33～35は貼付降量によるモチーフが混在す



第46図 土壌 (4)

る胴部破片。36～46は地文縄文と懸垂文が施された胴部破片で、懸垂文内は磨り消される。47～49は地文に条線文が用いられるものである。

なお、石鏝が一点だけ出土している (4)。薄手で基部に大きなU字状の抉りをもち、側縁は翼状に緩やかなカーブを描く。

第11号土壌 (第45・49図)

東側で第12号土壌と重複するが、新旧関係は確認できなかった。

遺物は1点のみで (50)、弧状の沈線が施されたもので縄文時代後期の所産であろう。

第12号土壌 (第45・47・49図)

西側で第11号土壌と重複するが、新旧関係は確認できなかった。

出土遺物は比較的多い (2・51～53)。

2は単節RLの縄文が施された底部で、土壌底面直上の破片が接合しており、本遺構に確実に伴うものである。51は単節RLの横位施文で、堀之内式と思われる。52・53は加曽利E式の土器で、地文は52が単節RL、53が条線文である。

第13号土壌 (第45・49図)

出土遺物は4点で (54～57)、すべて加曽利E式段階のものである。

第14号土壌 (第45・49図)

出土遺物は、後期と思われる底部破片が1点の

みである (58)。

第15号土壌 (第45・49図)

小型の土壌で、時期は不明である。

遺物は小片で、59・60は単節RLの縄文が施される中期の土器、61が単節LRを横位に施文する後期の土器である。62は無節Lの擦糸文が施される早期前葉の擦糸文土器である。

第16号土壌 (第45・49図)

北西側の一部は攪乱によって壊されている。

遺物は少ないが (63・64)、いずれも加曽利E式段階である。

63は波状口縁に沿って円形刺突が連続し、下位に「」字状のモチーフが配される。64は並行沈線の施される曽利系の土器である。

第17号土壌 (第46・49図)

小型の土壌で、遺物は1点のみである。

65には単節LRの浅い縄文が横位に施されている。縄文後期の土器であろう。

第18号土壌 (第46・49図)

底面の狭い逆円錐形の掘り込みで、第9号住居跡のガ跡を壊して造られている。

出土遺物は3点で (66～68)、66には懸垂文が施され、縄文はいずれも単節RLの縦位施文である。68は無文である。加曽利E式段階であろう。

SK10



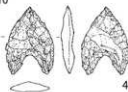
SK12



SK5



SK10



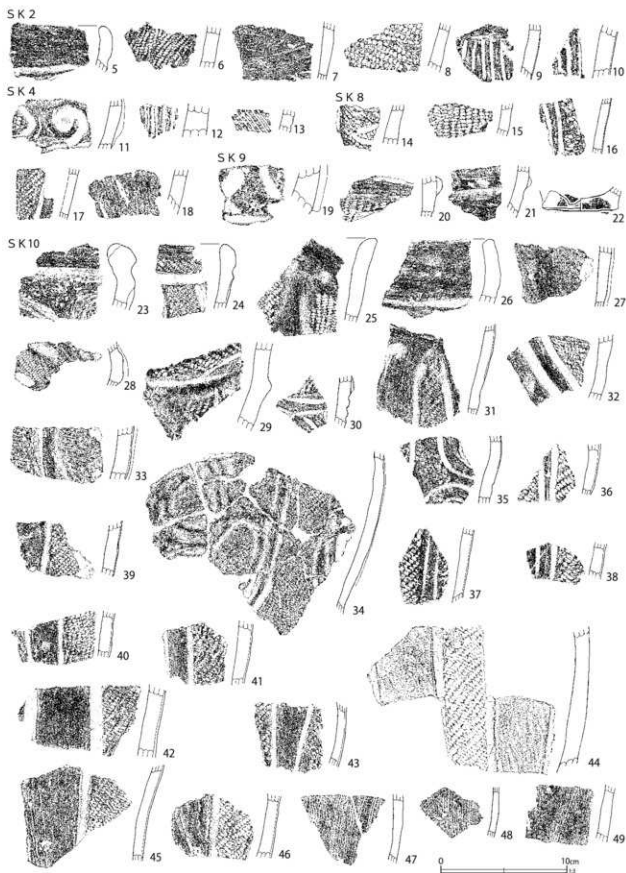
第47図 土城出土遺物 (1)

第10表 土城出土遺物観察表

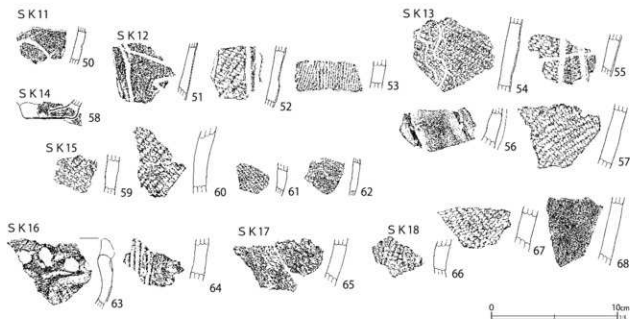
遺構名	棟号	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
SK5	47	3	石鏃	2.7	2.0	0.4	1.4	チャート	
SK10	47	4	石鏃	2.7	1.9	0.5	2.0	チャート	

第11表 土城一覧表

遺構番号	グリッド	平面形	長軸方位	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
SK1	C-4	楕円形	N-19° -E	78	65	14
SK2	C-4	楕円形	N-51° -E	206	159	31
SK3	C-5	楕円形	N-11° -E	143	120	34
SK4	C-5	楕円形	N-21° -W	137	97	32
SK5	C-5	円形	N-90°	88	83	21
SK6	C・D-5	円形	N-68° -E	(112)	100	21
SK7	C-5	円形	N-53° -E	85	74	13
SK8	D-5	楕円形	N-25° -W	153	127	21
SK9	C・D-5	楕円形	N-47° -E	168	145	30
SK10	D-5・6	不明	N-66° -W	225	(122)	44
SK11	E-7	円形	N-33° -E	150	(147)	31
SK12	E-7	楕円形	N-14° -E	282	(229)	28
SK13	E-7	楕円形	N-75° -W	148	137	17
SK14	E-8	楕円形	N-0°	147	124	51
SK15	E-7・8	楕円形	N-34° -W	93	72	17
SK16	C・D-4	楕円形	N-2° -W	190	130	20
SK17	E-8・9	楕円形	N-16° -W	92	64	27
SK18	E-8	楕円形	N-69° -W	117	100	59



第48图 土城出土遗物(2)



第49図 土壌出土遺物（3）

3. 溝跡

第6次調査の遺構の内、近世に属するものとしては溝跡が2条検出されている。SD1はクランク状、SD2は直線的に調査区を横断するものであるが、いずれも現代の地割に並行する方向で検出されていることから、水利利用の他に、区画溝跡として機能していたことが考えられる。

第1号溝跡（第50・51図）

第1号溝跡は、調査区の西側、C-2グリッドからC-4グリッドにかけてクランク状に検出された。総延長約27m、深さ20cm前後の比較的浅い溝である。溝跡底面の比高差は明瞭ではないが、西側の方が僅かに深いことから、水利利用の溝だとすれば北東から南西に向かって緩やかに流れていたものと推測される。

また、西側部分で二重に流路が検出されていることから改修工事が行われたものと推測されるが、土層断面の観察からは内側（南側）の流路の方が新しいようである。

なお、溝跡内より10基のビットが検出されているが、溝跡検出時に確認できなかったことから、本遺構に伴う施設、もしくは本遺構より古い遺構であると思われる。

出土遺物は、いずれも近世に属するもので、3

点を図示した（1～3）。

1は若杉文を施す肥前系磁器湯呑形碗の口縁部破片である。

2は肥前系磁器筒形碗の体部下位破片である。

3は肥前系磁器雪輪草花文の粗製碗で、断面の一部が砥具に二次利用されている。

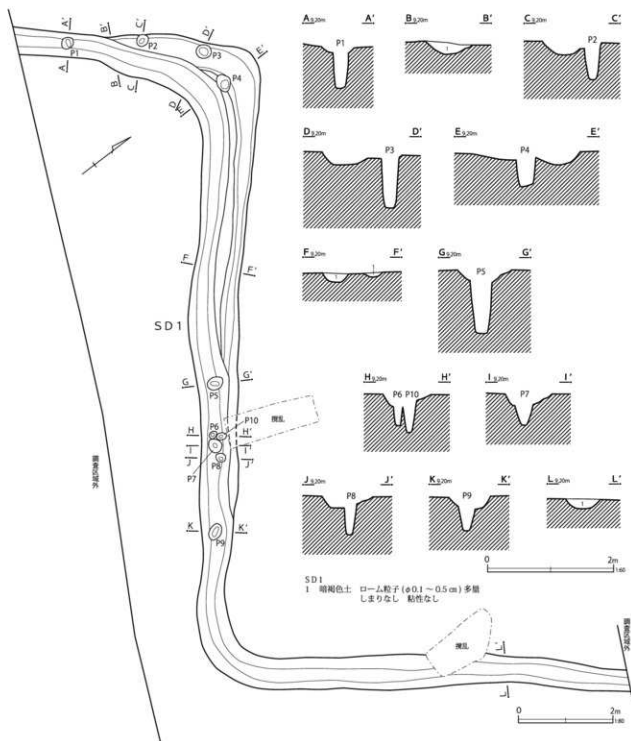
非掲載遺物として、鉄軸が施された瀬戸美濃系陶器片壺甕類胴部破片1点（舟徳利か）、用途不明の鉄製品1点が出土している。

陶磁器類はいずれも近世のものであり、湯呑形碗が出土しているので、溝の最終埋没は19世紀前半に降ると考えられる。

第2号溝跡（第52図）

第2号溝跡は、調査区中央部のD・E-7グリッドにおいて、調査区を横断するように北東-南西方向に7.4mに亘って検出された。幅36～58cm、深さ13～19cmの直線的な溝で、底面の標高値は北側の方が僅かに低い。西側の谷部に並行するような流路であるため明瞭ではないが、水利利用の溝とすれば南西から北東方向に流れていたものと推測される。

遺物の出土はない。

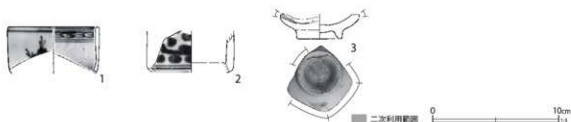


第50図 第1号溝跡

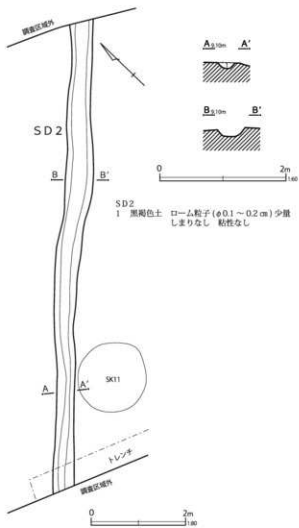
第12表 溝跡出土遺物観察表

遺構名	棟図	番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土 (%)	残存 (%)	焼成	色調	備考
SD1	51	1	磁器	碗	(7.1)	[3.7]	-	-	10	普通	白	肥前系 内外面施釉、染付 19C前(湯呑形碗)
SD1	51	2	磁器	碗	-	[3.3]	-	-	5	普通	白	肥前系 内外面施釉、染付 18C後(筒形碗)
SD1	51	3	磁器	碗	-	[2.0]	3.5	-	20	普通	-	肥前系 内外面施釉、外面染付 転用砥具 18C(梅樹文碗)

SD 1



第51図 溝跡出土遺物



第52図 第2号溝跡

4. 谷部

第6次調査では、遺構検出面において調査区の西端、中央、東端の3箇所で見谷状の地形を検出した。

谷部1 (第5図)

B-1・2グリッドに位置する。

調査区西南隅で確認された谷地形である。

調査区の北側寄りから南西方向に緩やかに下がる谷状地形で、勾配は凡そ4.3%である。なお、自然地形の傾斜自体も、第1号溝跡の西端付近より始まっており、付近に縄文時代の遺構も検出されていないことから、少なくとも縄文中期以前から比較的新しい時期まで谷状の地形が残存していたものと思われる。

谷部2 (第6図)

D-6・7グリッドに位置する。

調査区中央部で検出された谷状の地形で、D-7グリッド中央部に向かって落ち込んでいる。緩い傾斜は第2号住居跡東側から始まっており、凡そ6%の勾配で谷底に向かっていく。等高線の状況からは、比較的範囲の狭い窪地状の地形と思われるが、第3号住居跡が影響を受けていることから、少なくとも縄文時代中期の段階では谷地形は存在していなかったと考えられる。

谷部3 (第6図)

E-10・F-9~11グリッドに位置する。

調査区東端で確認された谷状の地形で、他の2つよりも規模が大きく、緩やかに東側に下がる地形である。基本的には、東側に隣接する清左衛門遺跡と本遺跡を隔てる埋没谷の西端と考えられる。第4号住居跡の東側に遺構が検出されておらず、谷の東側も清左衛門遺跡の西端の遺構まで約60mを隔てていることから、縄文時代中期段階から谷地形として集落の占拠から外されていたものと考えられよう。

5. グリッド出土遺物

遺構外から出土した縄文土器・石器・陶磁器等を一括する。

(1) 縄文土器

第Ⅰ群土器 (第54図)

縄文時代早期の燃糸文土器を一括する。

7は肥厚する口縁が大きく外反するもので、単節R Lの縄文が口唇上で横位に、口唇下では斜位に施される。井草1式である。

8～14は無節Rの燃糸文が縦位に施されるもので、夏島式であろう。出土位置はD・E-6グリッドに集中する。

第Ⅱ群土器 (第54図)

縄文時代前期の土器を一括する。

第1類土器 (15～17)

前期初頭の花積下層式である。胎土に繊維を多く含み、15には単節R L、16には単節R Lと単節L Rの異なる原体が用いられている。

第2類土器 (18～22)

前期前葉の関山式である。18は口縁部で、口唇部の微細な羽状縄文下に配された篋状工具による無文帯に貼付文が付される。19・22は胴部破片で、19には付加条、20・21には単節L R原体によるループ文、22には篋状工具による押引文が施される。

第3類土器 (23・24)

前期後葉の土器群である。23は細かい沈線文が施される頸部破片で諸磯C式である。24は無節Lの縄文が異方向に施文されており、前期末葉と思われる。

第Ⅲ群土器 (第54図)

縄文時代中期前葉の土器を一括する。

第1類土器 (25)

中期初頭の五領ヶ台式である。地文には微細な沈線が交差し、弧状の沈線文が施される。

第2類土器 (26～29)

いわゆる勝坂系の土器群である。26は貼付隆帯上に押引文が連続する。藤内式に相当しよう。27

～28は沈線による横帯文が構成される井戸尻式である。29の地文は0段多条の単節R Lである。

第Ⅳ群土器 (第53～58図)

縄文時代中期後葉の土器を一括する。本調査で最も主体的に検出されたものである。

第1類土器 (30～31)

加曾利E I式である。30は口唇直下の破片で沈線によるモチーフが描かれる。31は貼付隆帯が用いられ、地文縄文は単節L Rである。

第2類土器 (1・32～35)

加曾利E II式段階の土器である。1は口縁部文様帯に単節L Rの縄文のみが施され、頸部は無文となる。32～35は、いわゆる連弧文系の土器である。32・33は口唇下に円形の刺突が連続して巡るもので、34・35には弧状のモチーフが見られる。地文は、32・35が条線文、33が単節R L、34が単節L Rである。

第3類土器 (2・36～83・85～194)

加曾利E III式及び加曾利E IV式に相当するもので、本調査で最も出土量の多いものである。

36～48はキャリバー形土器で、口縁部に貼付隆帯による文様帯が横位に展開し、その直下から懸垂文が垂下するものである。39には単節R Lの縄文と短沈線が併用されている。46は大型の深鉢である。

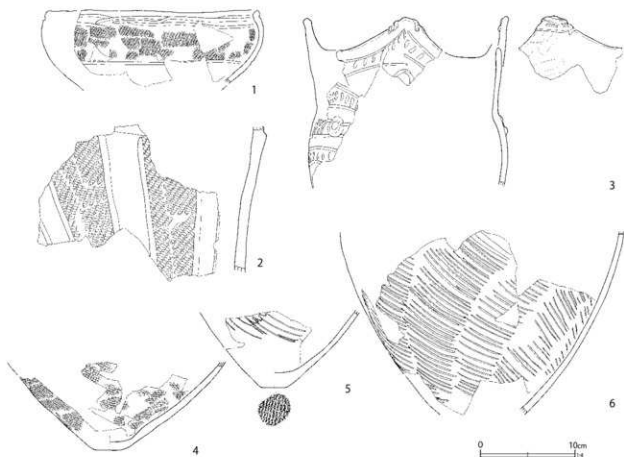
49～62は口唇下に幅狭の無文帯をもつもので、多くは下端が横走する沈線で画される。

63～65は幅広い無文口縁が直立するもので、いわゆる両耳壺である。

66・67は口唇上に小突起を有し、多くは4単位の小波状となるものである。

68は、いわゆる異系統の土器で、大木9 a式のモチーフが使用されている。

69～71は口縁部文様帯をもたないもので、加曾利E III式の新段階に当たる。いずれも地文には単節R Lの縄文が用いられ、口唇直下では横位、そ



第53図 グリッド出土遺物 (1)

れ以下では縦位に施されるもので、逆「U」字状のモチーフが配されている。

72～83はいわゆる加曾利EⅣ式の段階に比定されるものである。72～77は波状口縁となるもので、特に72～74・76は小突起状の波長部から口唇下に深い凹線が施されるものである。78には口唇直下から単節L Rの縄文と沈線文が施される。79～83には楕円形の区画モチーフが配されるようである。

85～100は貼付隆帯及び沈線等によって胴部に渦巻き状のモチーフが展開するものである。隆帯は2本単位を基本とし、両側には沈線が引かれる。なお、94・98は微隆帯間が凹線となるもので、やや新しい様相を呈する。

101～103は貼付隆帯による懸垂文が垂下するものである。なお、103には無節Lの燃糸文が施さ

れており、やや古い様相を呈する。

2・104～147は沈線による懸垂文が垂下するものである。104～116は2本または3本単位の沈線が垂下するが沈線間は磨り消されず、2・117～147は、懸垂文内が磨り消されるものである。

148～169は縄文のみが施される胴部破片である。148～155・157は単節R L、156・158～165は単節L R、166は無節Lの縄文が施される。

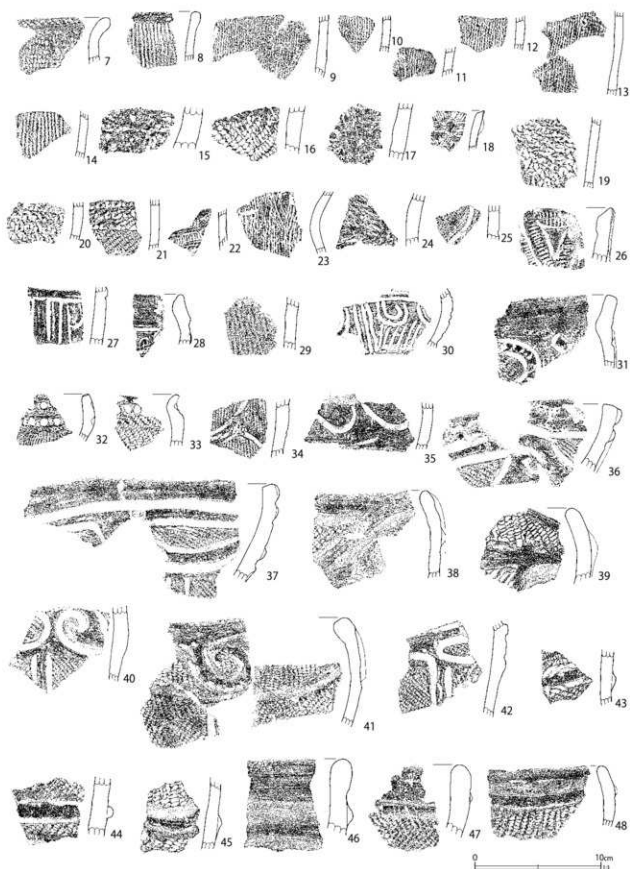
170～184は地文に条線文が用いられるものである。

185～187は地文に並行沈線文が施されているもので曾利系の土器であろう。

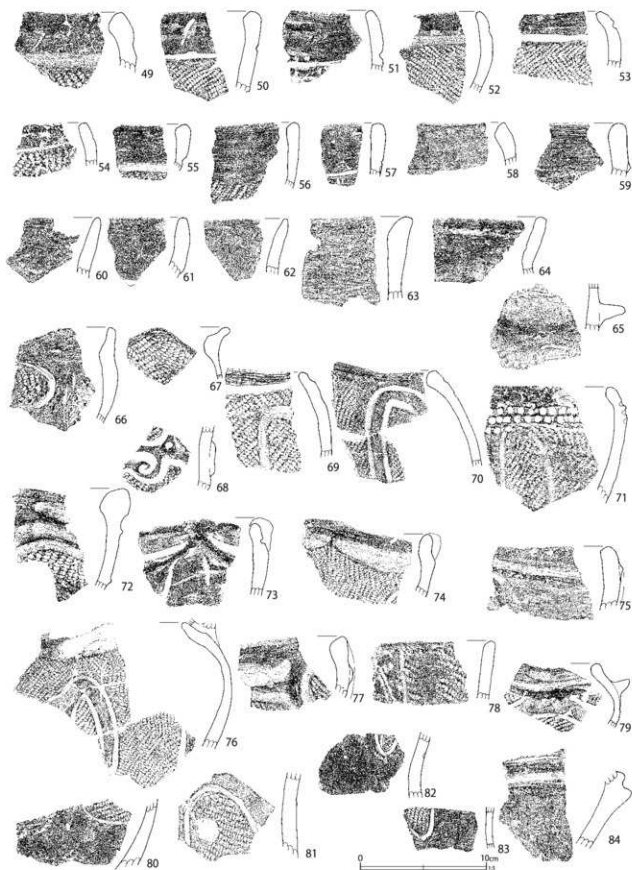
第V群土器 (第53・55・59図)

縄文時代後期の土器を一括する。

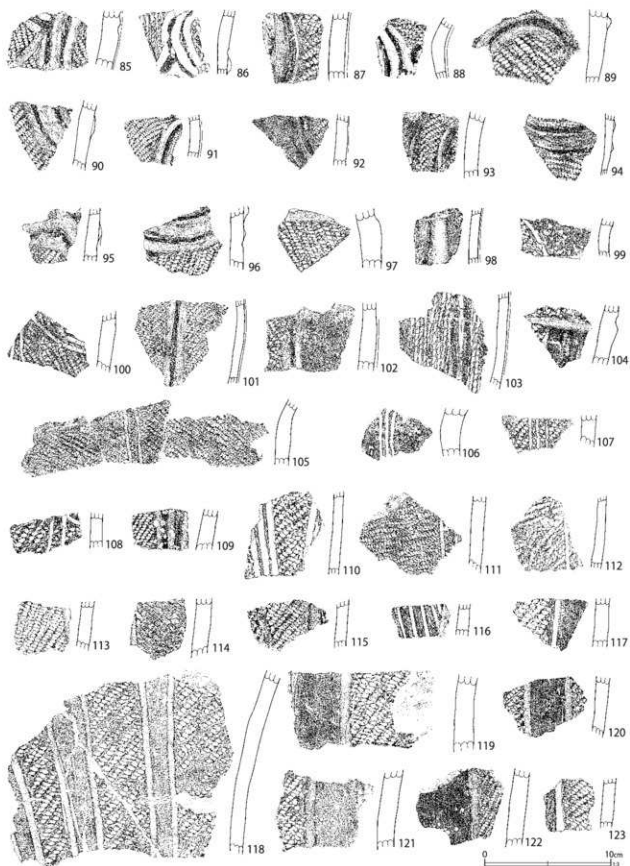
第1類土器 (195～197)



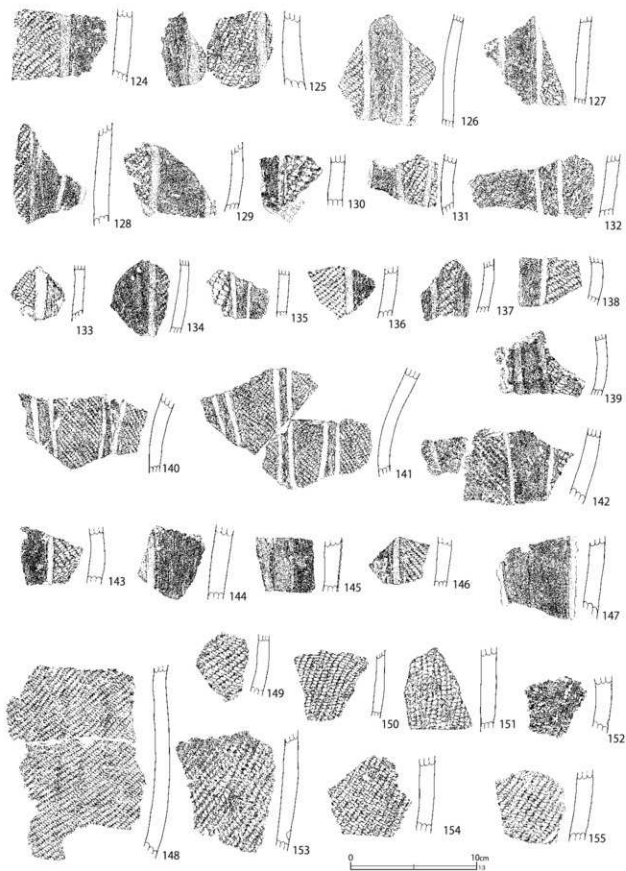
第54図 グリッド出土遺物 (2)



第55図 グリッド出土遺物 (3)



第56図 グリッド出土遺物 (4)



第57図 グリッド出土遺物 (5)

後期初頭の称名寺式である。195は磨り消し縄文帯が曲線的に施される。196・197は沈線によるモチーフ内に列点文が施されるものである。

第2類土器 (84・198～215)

後期前葉の堀之内式である。198～202は集合沈線文や条線文が施されるもので堀之内1式、203～205は堀之内2式、84は浅鉢形土器、210は瓢形土器であろう。

第3類土器 (216～222)

後期中葉段階の土器である。216・217は加曾利B1式、218は加曾利B2式であろう。219は注口土器である。222は曾谷式と思われる。

第4類土器 (4～6・223～229)

後期安行式に比定されるものである。223～225は安行1式と思われる。223は単節RLの緻密な縄文が口唇下に横位施文される。226は沈線文と縦長の貼付文をもつもので安行2式と思われる。6は粗製土器、4には単節RLの縄文が横位・斜位に施される。

第Ⅵ群土器 (第53・59図)

縄文時代晩期の土器を一括する。

3・230～235は晩期安行式に比定されるものである。3・230・231・234は、沈線による区画内に窠状工具による刻みが施されるものである。232は無文の折り返し口縁で粗製土器であろう。232以外の土器は安行3c式に比定されよう。

(2) 縄文時代の石器 (第60・61図)

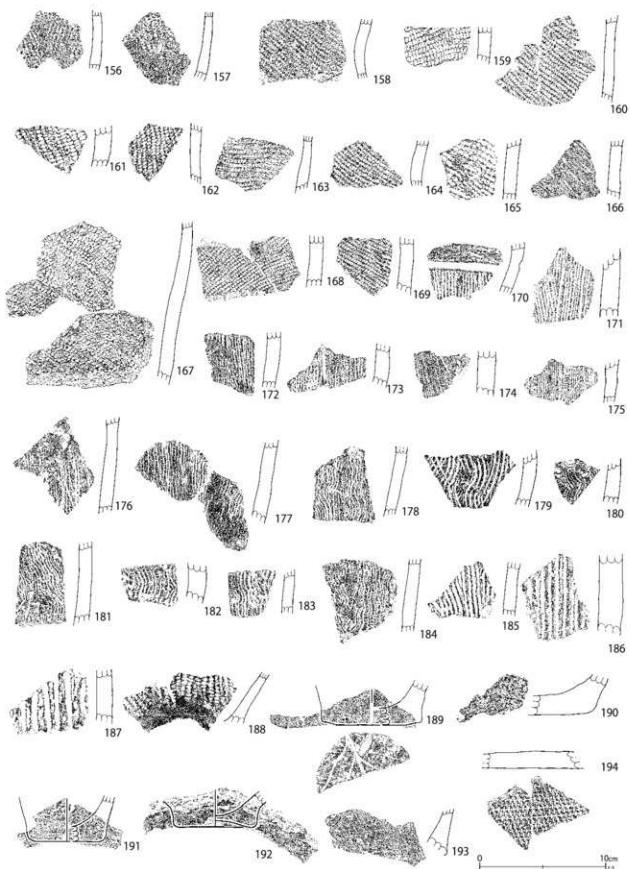
236～244は石鏃である。いずれも基部は無茎で挟りを有するものである。237～239は基部に大きな挟りをもつもので、刃部の調整は非常に細かい。242は弧状の側縁から更に脚部が広がる形状であるが、基部を欠損する。細かい調整が施されるのは先端部のみである。243は基部に逆U字状の挟りを有する完形品で、側縁は鋸歯状に調整が施されている。244は左脚部と右脚部先端を欠損するが、基部に深い挟りを有する大型品である。245

は石核である。純度の高い黒曜石で、自然面はごく一部に残されるのみである。246は石鏃の先端部で、基部は欠損する。247は二次加工痕の見られる剥片で、側縁の一部には使用痕も認められる。248はいわゆる分銅形の打製石斧である。側縁の挟り部分は摩耗が顕著である。また、大きく欠損した刃部に細かい剥離痕が見られることから、欠損後も続けて使用されたものと思われる。249は蛇紋岩製の大型磨製石斧で、丁寧に作られた優品である。基部上端には、強い打撃によると思われる欠損があり、刃部から4cm程の部分には、表裏とも顕著な使用痕が認められる。250～253は磨石である。250は小型品で、全体的に三角柱状を呈しており、下端には微細な敲打痕が認められる。251は上端に敲打痕が認められる。なお、下端の小穴は、石材に含まれていた鉱物の離脱痕と思われる。252は表裏面とも凹部があり、側縁には敲打痕が認められる。253は薄手の大型品で、鉄分の付着が著しい。表裏に敲打痕が認められる。254～257は石皿である。254・255はいずれも小片で全体の形状は明確ではないが、両者とも裏面に凹部が認められる。256は石皿中央部近くの破片であろう。257は皿部との境に明瞭な稜線をもつもので、全体的に被熱の痕が認められる。

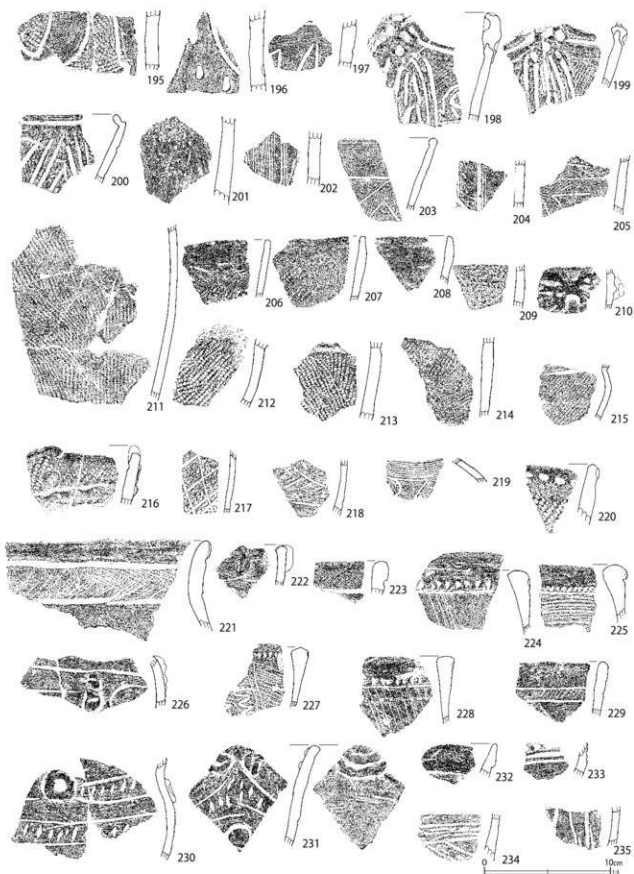
(3) 近世の遺物 (第61図)

258は肥前系磁器の広東碗で18世紀末頃のものである。

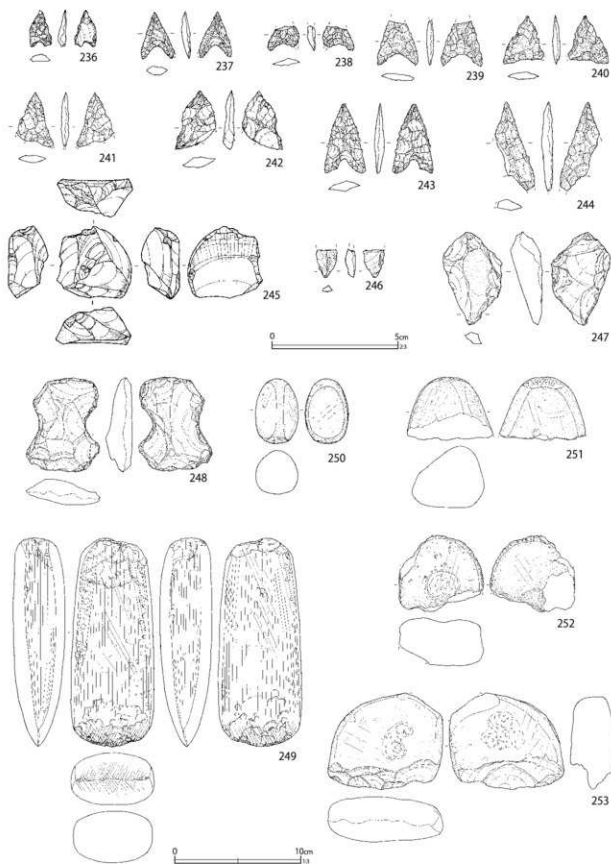
非掲載遺物では、中世の常滑焼甕破片がD-6グリッドから1点出土した。他の陶磁器類は近世以降のもので、17世紀代の瀬戸美濃系陶器天目茶碗片1、18世紀代の肥前磁器粗製碗片2、皿類破片1、鉄釉甕片1、18～19世紀の土師質土器脚台付火鉢片1、19世紀中葉以降の地方窯産陶器燗德利1が出土している。全体的には18～19世紀代の土地利用に関わる遺物が多い傾向にある。



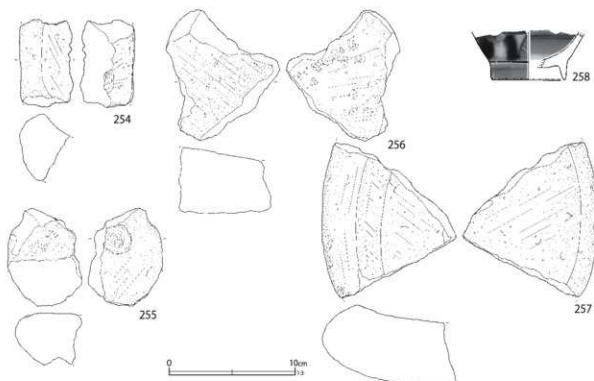
第58図 グリッド出土遺物 (6)



第59図 グリッド出土遺物（7）



第60図 グリッド出土遺物 (8)



第61図 グリッド出土遺物 (9)

第13表 グリッド出土遺物観察表

遺構名	棟図	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
グリッド	60	236	石鏝	1.4	0.9	0.3	0.3	黒曜石	
グリッド	60	237	石鏝	1.8	[1.3]	0.3	0.5	チャート	
グリッド	60	238	石鏝	[1.0]	1.3	0.3	0.3	チャート	
グリッド	60	239	石鏝	[1.8]	1.6	0.6	0.6	黒曜石	
グリッド	60	240	石鏝	2.0	[1.6]	0.3	0.6	黒曜石	
グリッド	60	241	石鏝	[2.2]	[1.5]	0.3	0.7	黒曜石	
グリッド	60	242	石鏝	[2.3]	[1.6]	[0.5]	1.3	チャート	
グリッド	60	243	石鏝	2.8	1.6	0.4	1.2	チャート	
グリッド	60	244	石鏝	[3.6]	[1.5]	0.4	1.6	チャート	
グリッド	60	245	石核	2.9	3.0	1.6	12.4	黒曜石	
グリッド	60	246	石鏝	[1.1]	[0.8]	0.4	0.4	黒曜石	
グリッド	60	247	剥片	3.3	2.4	1.3	8.4	チャート	
グリッド	60	248	打製石斧	7.5	5.8	2.1	86.1	ホルンフェルス	
グリッド	60	249	磨製石斧	16.5	6.6	4.1	859.7	蛇紋岩	
グリッド	60	250	磨石	5.1	3.4	3.5	82.5	安山岩	
グリッド	60	251	磨石	[5.0]	[6.8]	[4.9]	168.9	デイサイト	
グリッド	60	252	磨石	[6.0]	6.7	4.0	175.2	安山岩	
グリッド	60	253	磨石	[7.7]	[9.1]	3.6	355.6	角閃石安山岩	
グリッド	61	254	石皿	[7.0]	4.3	5.6	144.9	安山岩	
グリッド	61	255	石皿	[7.8]	[5.9]	5.2	189.8	安山岩	
グリッド	61	256	石皿	[10.4]	[9.0]	5.4	490.8	ホルンフェルス	
グリッド	61	257	石皿	[12.3]	[10.7]	6.8	759.4	安山岩	
グリッド	61	258	磁器 碗	器高[3.8]底径(5.6)(cm) 残存10% 焼成良好 色調白 瀬戸美濃系 内外面施釉、染付19C前(広東碗)					

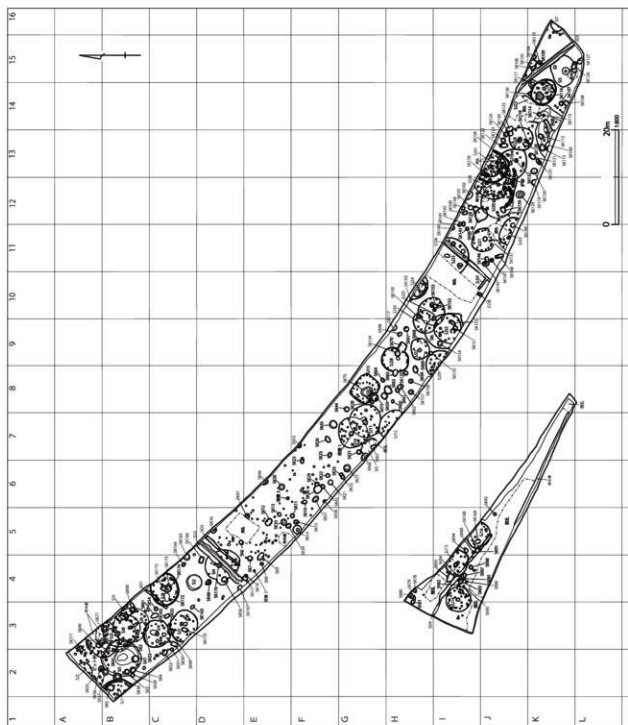
V 赤砂利遺跡第8次調査の遺構と遺物

1. 住居跡

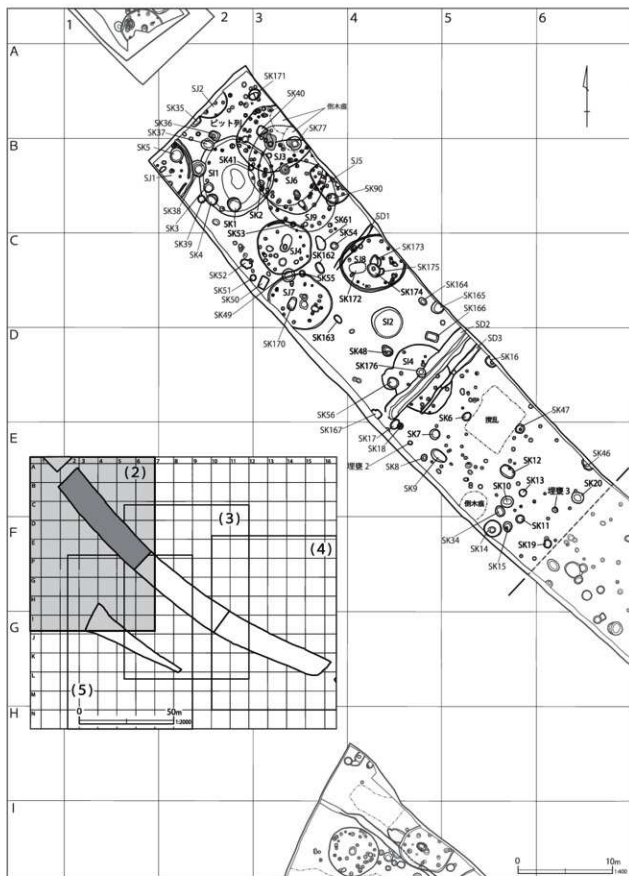
第8次調査では33軒の竪穴住居跡が検出されている。時期別には、縄文時代中期27軒、同後期4軒、古代1件、不明1軒となり、縄文時代中期、

特に中期後葉の加曽利EⅢ式期の遺構が主体的である。

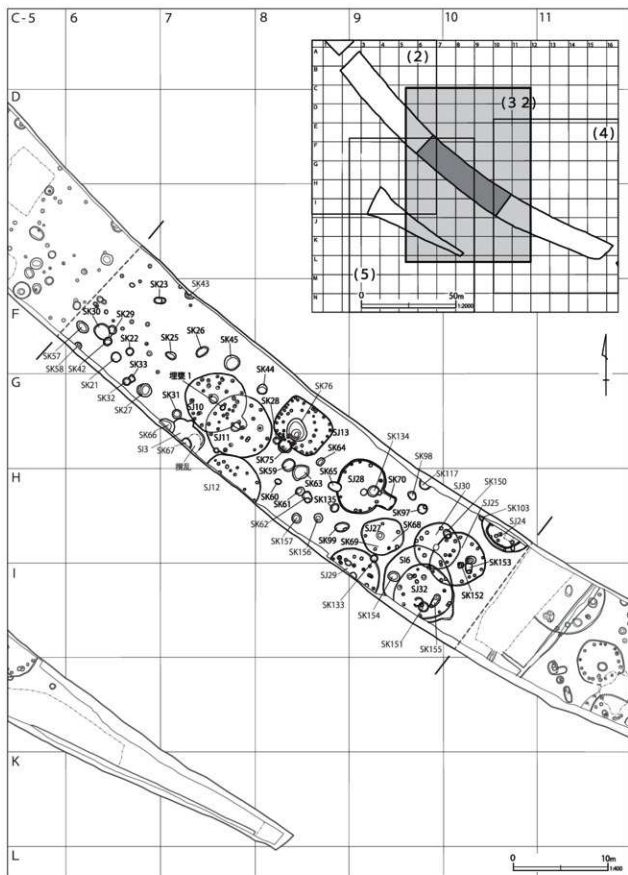
また、その分布状況をみると、D-5～F-7



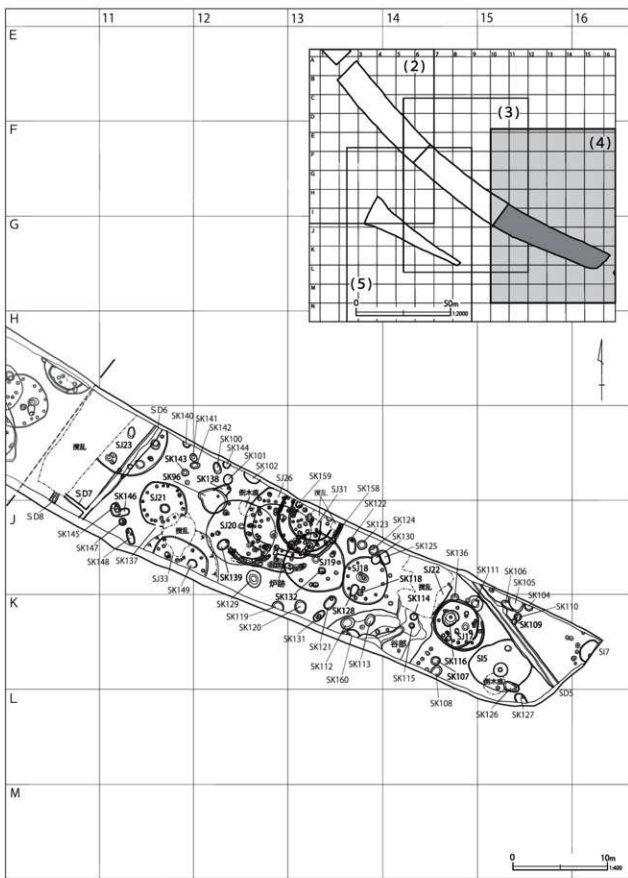
第62図 赤砂利遺跡第8次全体図（1）



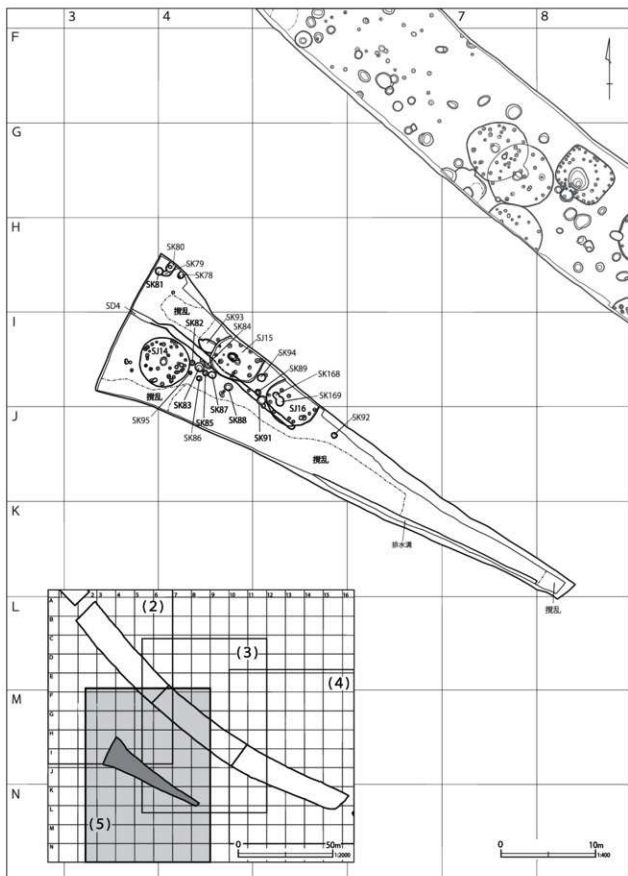
第63図 赤砂利遺跡第8次全体図 (2)



第64図 赤砂利遺跡第8次全体図（3）



第65図 赤砂利遺跡第8次全体図(4)



第66図 赤砂利遺跡第8次全体図 (5)

グリッドにかけて、土壌のみで住居跡が検出されなかったエリアが存在し、縄文時代中期後半に特徴的な環状集落を彷彿とさせる。但し、住居跡の分布は同エリアの両側で均等でなく、その東側においてより密であることが見てとれる。なお、縄文時代後期の遺構は、さらに東側（10列～14列）に集中しており、各時代で占地に変化があるようである。

第1号住居跡（第67～69図）

B-1・2グリッドに位置し、調査区の西端で検出された。重複する第38号土壌を壊して構築されているが、第5号土壌との関係は不明である。

北西及び南西側が調査区域外のため、平面形は不明だが、壁溝が全周するようである。なお、覆土の土層で4層とした部分は、本遺構より新しい土壌状の掘り込みである。

灰跡は検出されなかった。

柱穴は10本検出されたが、いずれも浅く、支柱穴は特定できなかった。

なお、床面上で検出された比較的大きな掘り込みをSK1とした。覆土の観察からは本住居跡に伴う遺構と思われるが、用途は不明である。

出土遺物は多くなく、いずれも破片資料である。本遺構に確実に伴うものは特定できないが、主体を占める土器片より、本遺構は中期加曽利EⅢ式の住居跡と考えたい。

1～9は口縁部破片である。1～6は貼付隆帯及び沈線によって口縁部文様帯を構成するもので、地文は3が複節RLR、4が単節RL、5が単節LRである。

9は口唇の外側に隆帯を貼付して肥厚させた上部に凹線を施すもので堀之内1式と思われる。

10～13は隆帯が貼付されるもので、口縁部文様帯を構成する破片である。

14・18～22は頸部付近の破片で、口縁部文様帯の下端を巡る沈線が施されている。

23・24・26は口唇下に円形の刺突が連続して行われるもので連弧文土器である。また、15～17・20・25は沈線による弧状のモチーフが描かれるもので、連弧文系の土器であろう。

27～37は地文縄文と2本ないしは3本の懸垂文が垂下する胴部破片で、懸垂文内は磨り消される。地文は、27～32・35が単節RL、33・34・36・37が単節LRの縦位施文である。

38～41は地文縄文のみが認められるもので、38・39は単節RLの縦位施文、40は複節RLRの斜位施文、41は然糸文を縦位に施している。

42は沈線による渦巻き状のモチーフに沿って径3mmほどの竹管様工具による円形刺突文を連続施文するものである。地文は単節LRの縦位施文である。

43～49は地文に条線文が用いられるものである。43～48は直線的な条線が密に施され、49には曲線的な条線が縦位に施文されるが、47・48は特に細かい。

なお、43は貼付隆帯が横走しており、頸部付近の破片と思われる。

44には沈線による円形のモチーフが見られるが、懸垂文の一部であろう。

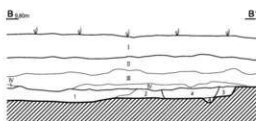
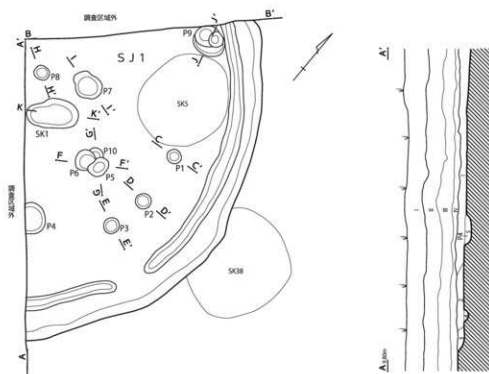
石器は1点のみ出土している。第69図51は、チ

第14表 第1号住居跡柱穴計測表

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	24	23	8
P2	13	13	7
P3	26	24	8
P4	50	(31)	12

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P5	17	(15)	13
P6	33	24	18
P7	50	40	19
P8	25	25	12

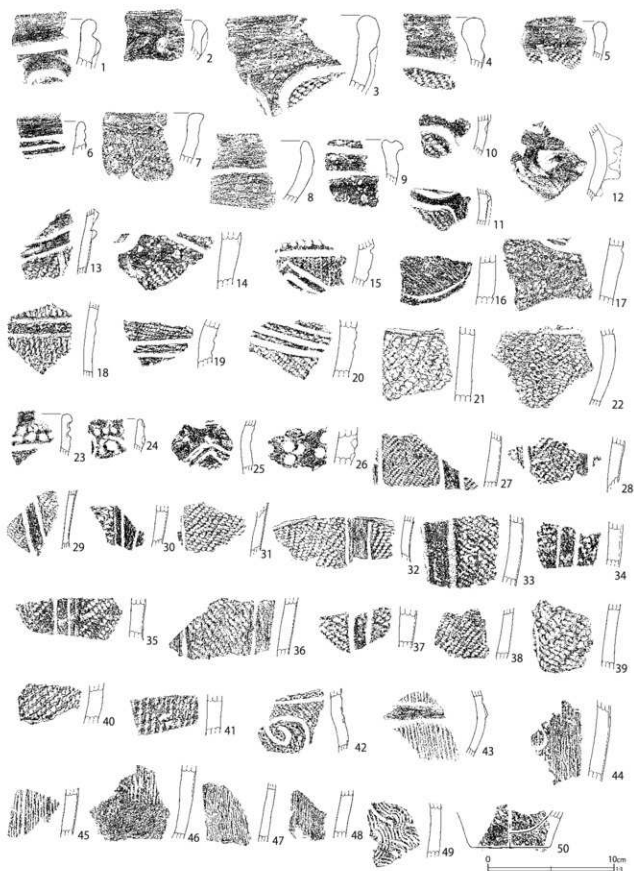
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P9	53	44	37
P10	(19)	(9)	不明



- I 灰褐色土 耕作土
 II 黄褐色土 近世の客土 白色粒子少量 粘性弱い
 III 暗褐色土 近世の客土 白色粒子やや多し 粘性強い
 IV 黒褐色土 黄色土粒子多量 しまり強い
 a 暗褐色土 ローム粒子少量 しまり強い
 本遺構より新しい遺構の覆土
- S J 1
 1 暗褐色土 ロームブロックやや多い (φ 10 mm) ローム粒子少量
 炭化物微量 しまり弱い
 2 暗黄褐色土 ロームブロック少量 (φ 5 mm) 炭化物少量 しまり強い
 3 暗褐色土 ロームブロック (φ 20 mm) 多量 ローム粒子少量
 炭化物微量 しまり強い
 4 黄褐色土 ロームブロック (φ 10 mm) 多量 しまり弱い 埋填土
 5 黄褐色土 ロームブロック (φ 10 mm) 少量 炭化物微量
 6 黄褐色土 ロームブロック (φ 20 mm) 多量 しまり弱い



第67図 第1号住居跡



第68图 第1号住居跡出土遺物(1)

第15表 第1号住居跡出土遺物観察表

遺構名	棟図	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
				(cm)	(cm)	(mm)	(g)		
SJ1	69	51	スクレイパー	[1.5]	[2.8]	0.7	3.2	チャート	



第69図 第1号住居跡出土遺物(2)

チャート製のスクレイパーで、刃部は鈍角な片刃に作り出されている。

第2号住居跡(第70・71図)

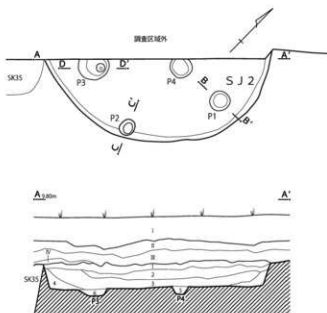
A-2グリッドに位置し、調査区の西端で検出された。

北西側は調査区域外のため平面形は確定ではないが、ほぼ円形を呈するようで、調査区際で径3.6mを測る小型の住居跡である。

重複する遺構はない。

が跡は検出されなかった。

柱穴は4本検出されたが、いずれも浅く、主柱



第70図 第2号住居跡

穴は特定できなかった。

出土遺物は少なく、いずれも破片資料である。本遺構に確実に伴うものは特定できないが、主体を占める土器片より、本住居跡の時期は、中期後葉加曾利EⅡ式期段階とした。

1～8は口縁部破片である。

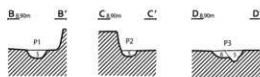
1～3は小片であるが貼付隆帯による口縁部文様帯を有するものと思われる。

4～6は口唇下に2ないし3条の沈線が巡るもので、地文はいずれも単節LRの縦施文である。また4の右端には沈線が施されている。

7は破片の下半部を大きく剥落するが、幅広の無文の口縁が直立するもので、両耳壺の可能性もある。

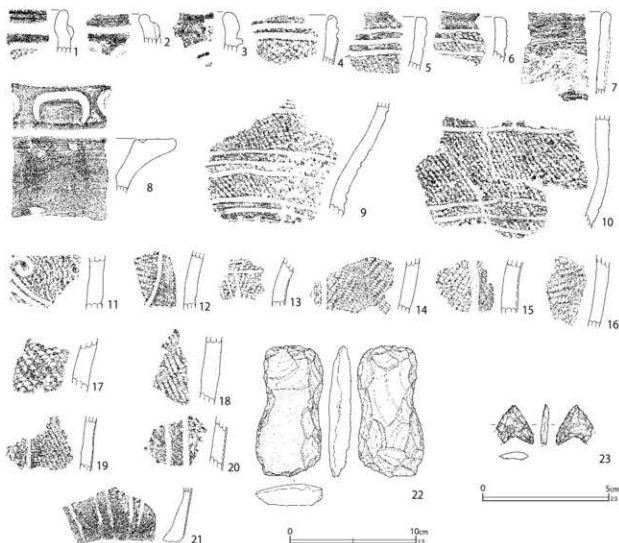
8は大型の浅鉢形土器の口縁で、内外面とも丁寧に磨かれ、口唇の内面には「C」字状の深い沈線文が連続する。

9・10は大型の胴部破片である。3条単位の沈線が複数段巡るもので、9の最上部の沈線は弧状



- I 灰褐色土 餅作土
II 黄褐色土 近世の客土 白色粒子少量 粘性強い
III 暗褐色土 近世の客土 白色粒子やや多し しまり強い
IV 黒褐色土 黄色土粒子多量に含む しまり強い
- S J 2
1 暗黄褐色土 ローム粒子多量 粘性強い しまり強い
2 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量 焼土粒子多量 しまり強い
3 暗黄褐色土 ロームブロック(φ5mm)少量 焼土粒子微量 しまり強い
4 灰褐色土 ロームブロック(φ10mm)少量 炭化物微量 しまり強い
- ビット
5 暗褐色土 ロームブロック(φ5～10mm)やや多 焼土粒子微量 しまり強い
6 灰褐色土 ロームブロック(φ3mm)少量 しまり強い





第71図 第2号住居跡出土遺物

を呈し、10の下位の沈線は緩い波状となるようである。連弧文系の土器であろう。地文は、いずれも単節L Rの縦位施文である。

11は沈線による渦巻文が胴部に描かれるもので少し古い様相を呈する。地文は、単節R Lの縄文が斜位に施される。

12は胴部に沈線による曲線的なモチーフが描かれるもので、沈線間は磨り消される。地文は単節L Rの縦位施文である。

13～15は地文縄文と沈線による懸垂文が施されるもので、地文は単節R Lの縦位施文である。15の懸垂文内は磨り消される。

第16表 第2号住居跡柱穴計測表

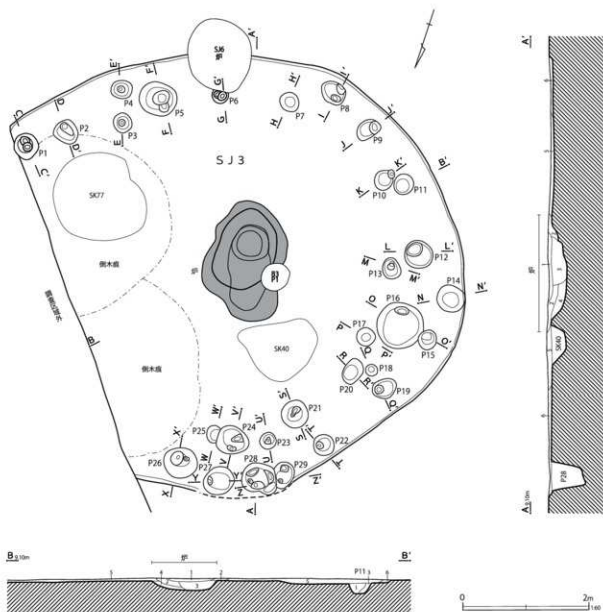
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	33	30	13
P2	27	23	9

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P3	48	(28)	17

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P4	35	(24)	11

第17表 第2号住居跡出土遺物観察表

遺構名	棟号	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
SJ2	71	22	打製石斧	10.4	5.3	1.8	122.0	ホルンフェルス 黒曜石	
SJ2	71	23	石鏃	[1.6]	[1.5]	0.3	0.6		



- SJ3・P1
- | | | | | |
|---------|------------------------|---------|----------------------|------------------------|
| 1 明赤褐色土 | シルト質 焼土粒子多量 炭化物粒子少量 | ビット | 7 褐色土 | 粘質 炭化物粒子少量 暗褐色土小ブロック少量 |
| 2 暗赤褐色土 | 粘質 焼土粒子中量 炭化物粒子中量 遺物含む | 8 暗褐色土 | シルト質 炭化物粒子少量 しまりに欠ける | |
| 3 暗褐色土 | 粘質 炭化物少量 焼土少量 | 9 暗黄褐色土 | 粘質 暗褐色土主体にロームブロックを含む | |
| 4 暗褐色土 | 粘質 炭化物少量 | 10 黄褐色土 | 粘質 ロームブロック多量 | |
| 5 暗褐色土 | 粘質 炭化物粒子少量 しまりに欠ける | | | |
| 6 暗黄褐色土 | シルト質 ローム土と暗褐色土の混土 | | | |

第72図 第3号住居跡(1)

16～19は縄文のみが施文されるもので、16が単節R L、17～21が単節L Rである。

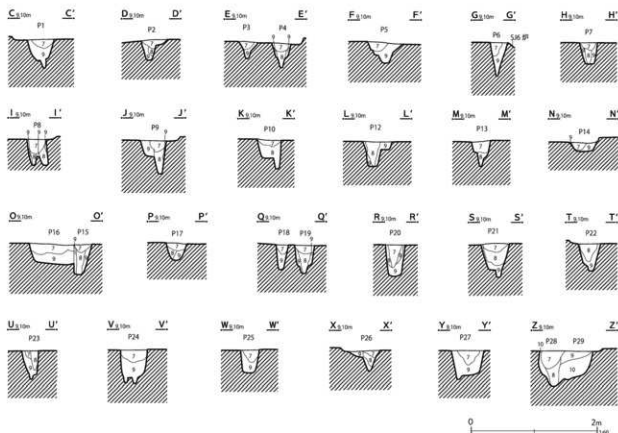
20・21は底部付近の破片である。

石器は2点出土している。

22は打製石斧である。いわゆる短冊形であるが、

側縁はわずかに括れる。

23は黒曜石製の小型石鏃である。基部は無茎で、挟りを有する。片脚を欠損するが、表裏から丁寧な調整が施されている。



第73図 第3号住居跡(2)

第3号住居跡(第72～75図)

A・B-2・3グリッドに位置する。

北東側の一部は調査区域外のため平面形は確実ではなく、主軸方位も明確ではないが、北西壁際のピット群を本住居跡の入り口に関連する施設と考え、およそ6.8m×6.2mのほぼ円形を呈する住居跡である。

重複する遺構は多いが、第6号住居跡に壊されており、第1号竪穴状遺構及び第40・41号土壇より新しい。

灰跡は、中央やや西寄りに検出された。付帯施設をもたない地床であるが、南北に長く大きな掘り込み(約1.9m×1.1m)を有しており、土層の観察から少なくとも2回以上の作り直しがあったと思われる。

柱穴は29本検出されたが、深さや配置からは、P1・6・9・12・16・20・21・24・26及びP15・19・28などが主柱穴の可能性が高い。従って、柱

穴の配列は北西側で二重になっており、住居の拡張工事を行った可能性もあろう。

出土遺物は少なく、いずれも破片資料である。本遺構に確実に伴うものは特定できないが、主体を占める土器片より、本住居跡の時期は、中期後葉加曾利EⅢ式期段階であろう。

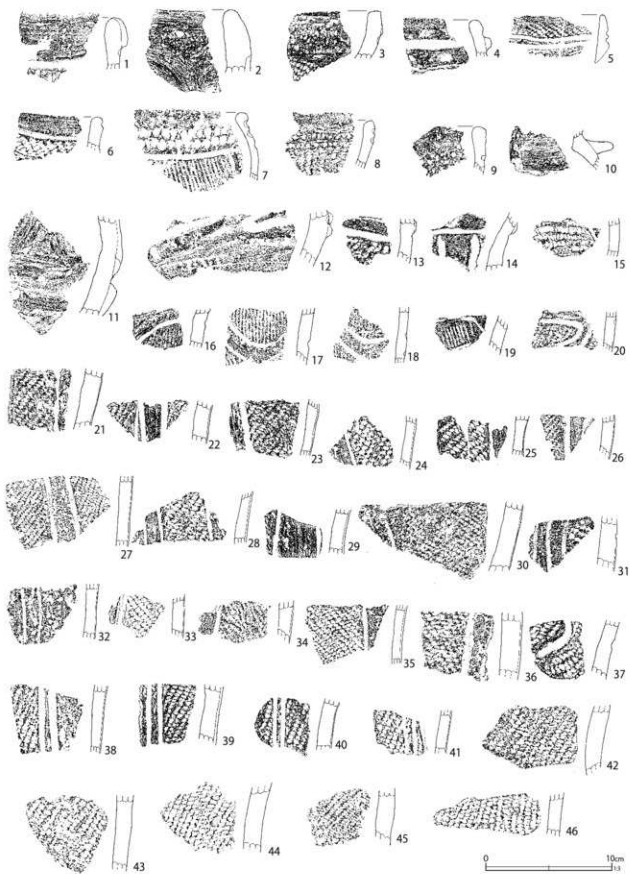
1～9は口縁部破片である。

1～6・11～15はキャリパー形土器で、貼付隆帯によって口縁部文様帯が構成されるものである。

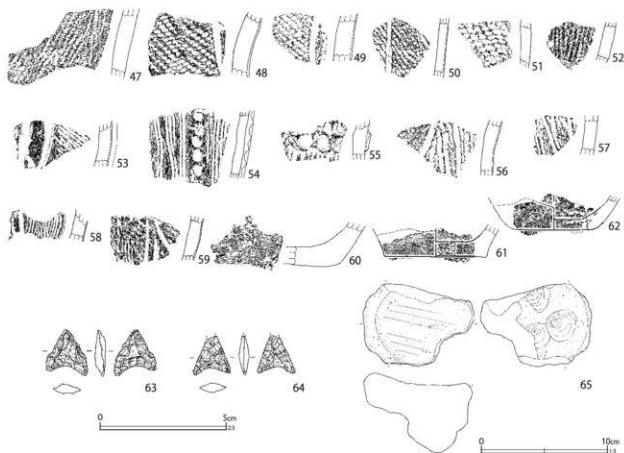
7～9・16～20は連文系土器である。口唇下に円形の刺突が連続して行われ、胴部には沈線による弧状のモチーフが見られる。7・16・17の地文は撚糸文である。

10は丁寧な作られた浅鉢形土器で、肩部に突出した隆帯が巡るものである。

21～36は2本単位の沈線を基本とする懸垂文が垂下するもので、懸垂文内は磨り消される。



第74图 第3号住居跡出土遺物 (1)



第75図 第3号住居跡出土遺物（2）

37～52は地文縄文及び沈線による懸垂文の施される破片であるが、沈線間は磨り消されない。37は蛇行懸垂文である。縄文原体は、37～47が単節RL、48～50が単節LR、51は複節RLで、52は無節Lの燃糸文である。

53～59は地文に条線が用いられるものである。

53～55は隆帯が貼付され、隆帯上には円形の押

捺が加えられる。

63・64は無茎の石甕で、基部に挟りをもつものである。63はチャート製で、左脚がやや短い。完形品である。64は黒曜石製で先端部を欠損する。やや肉厚だが、側縁の調整は細かく丁寧である。

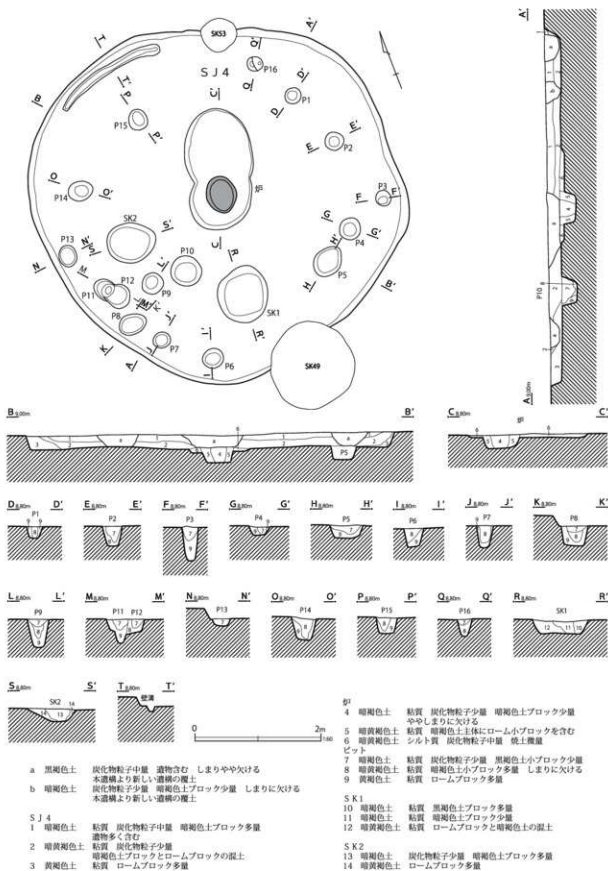
65は石皿の一部で、裏面には深い漏斗状の凹みが認められる。

第18表 第3号住居跡柱穴計測表

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	43	38	48
P2	40	32	33
P3	32	30	28
P4	35	28	39
P5	60	53	33
P6	28	27	56
P7	32	30	35
P8	43	33	32
P9	40	28	54
P10	36	29	47

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P11	33	32	18
P12	47	43	41
P13	34	29	25
P14	44	44	16
P15	32	30	50
P16	75	73	44
P17	30	30	24
P18	20	19	40
P19	40	31	45
P20	42	30	54

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P21	43	42	52
P22	34	33	35
P23	27	26	45
P24	52	44	53
P25	27	(18)	36
P26	54	49	33
P27	50	42	44
P28	58	52	55
P29	42	(31)	47



第76図 第4号住居跡

第19表 第3号住居跡出土遺物観察表

遺構名	棟図	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
					(cm)		(g)		
SJ3	75	63	石鏃	1.9	1.7	0.4	1.0	チャート	
SJ3	75	64	石鏃	[1.5]	1.5	0.4	0.6	黒曜石	
SJ3	75	65	石皿	[6.6]	[8.8]	6.5	244.4	安山岩	

第4号住居跡 (第76～79図)

B・C-3グリッドに位置する。

確認面から30cm程の掘り込みを有する住居跡で、平面形は約5.8m×5.7mの不整形を呈する。北側で2m程の長さで壁溝が検出された。また、土層断面でa・bとしたものは、本遺構より新しい土域状の掘り込みである。

重複する遺構には第49・53号土域があるが、いずれも本住居跡よりも新しい。

炉跡は、中央やや北寄りに検出された。地床炉であるが、掘り込みが23cmと深く、また埋土に焼土を含まないことから、使用時には土器等が用いられていた可能性がある。なお、付帯する南北に長く浅い掘り込みは、いわゆる掘り方であろう。

柱穴は16本検出されたが、深さや配置からは、P2・3・6～7・11・14～16などが主柱穴の可能性が高い。

床面上で検出された比較的大きな掘り込みをSK1およびSK2としたが、SK1で10層とした

ものは、柱穴状の攪乱である。

出土遺物の主体を占める土器片より、本住居跡の時期は、中期後葉加曾利EⅢ式期段階であろう。

1・16・35は並行沈線文を多用する曾利系の土器である。なお、1は他の遺構(SJ7・SJ8・SK172)の資料と接合していることから、住居廃絶後に廃棄されたものと思われる。

2～12・24～34は貼付隆帯によって口縁部文様帯が構成されるキャリバー形土器である。

13～15は無文帯下に凹線の巡る大型土器の口縁。

17・18は幅広の無文の口縁が直立する両耳壺。

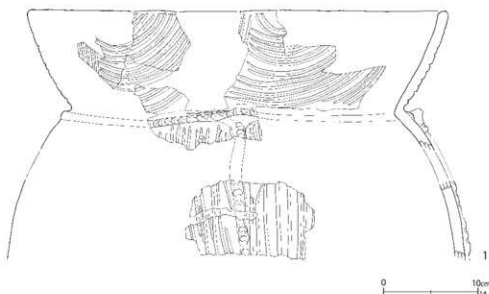
19～23は口唇下に列点文が施されるものなど、連弧文系の土器と思われる。

36～58は地文縄文及び懸垂文が施される胴部破片で、いずれも懸垂文内は磨り消される。

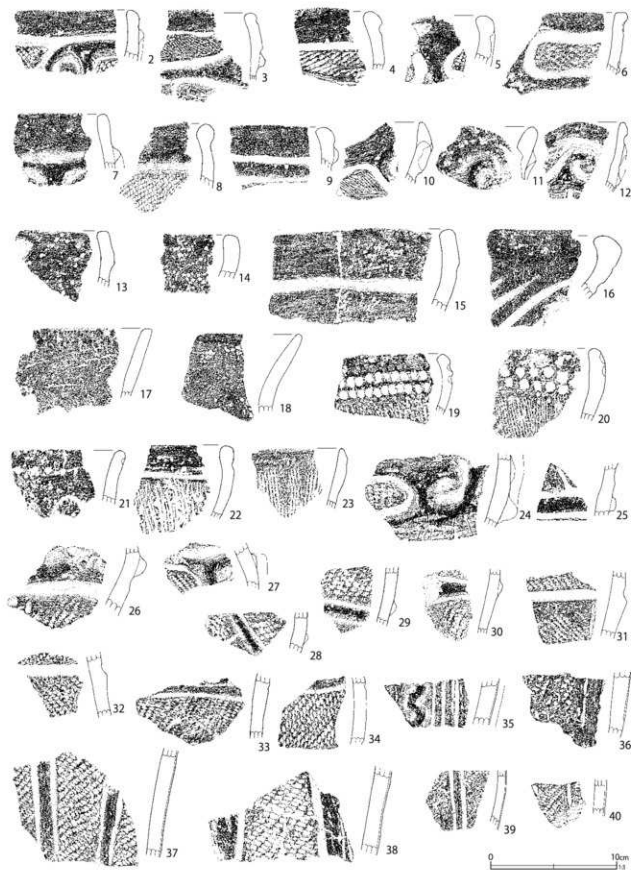
59～62は地文に条線が用いられるものである。

石器は5点出土している。

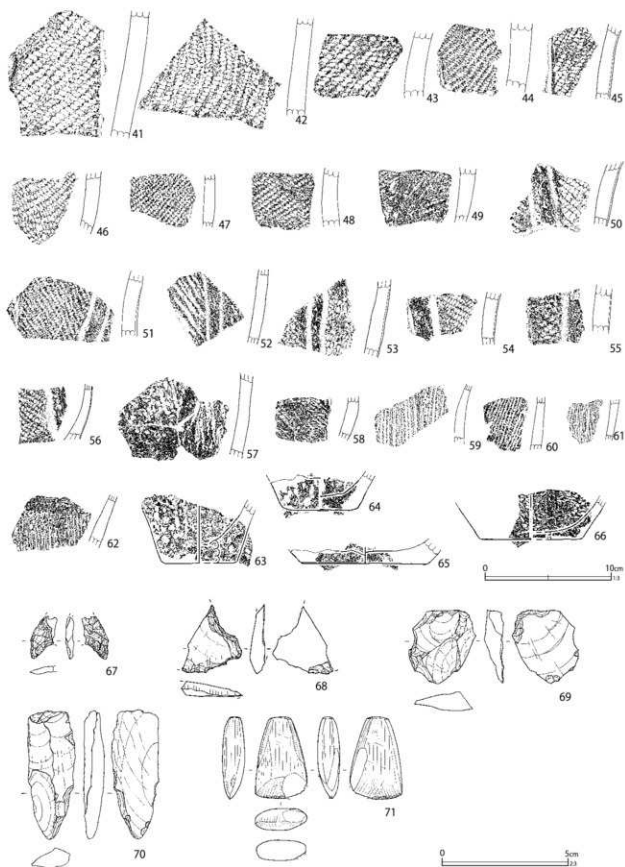
67は石鏃の脚部である。基部は無茎で袂りを有する。68は主として片刃の調整が施されており、



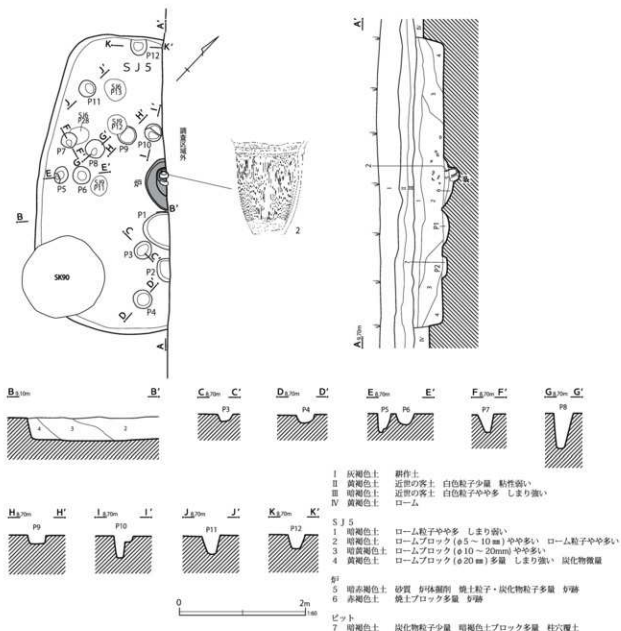
第77図 第4号住居跡出土遺物(1)



第78图 第4号住居跡出土遺物(2)



第79図 第4号住居跡出土遺物(3)



第80図 第5号住居跡

第20表 第4号住居跡柱穴計測表

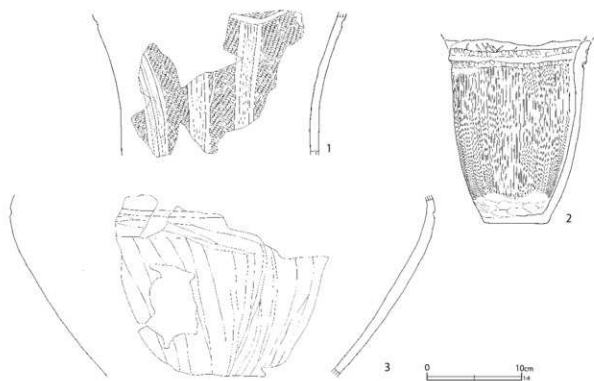
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	26	25	18
P2	30	29	32
P3	26	25	55
P4	36	33	13
P5	53	41	20
P6	35	32	28

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P7	30	25	32
P8	44	34	32
P9	35	33	44
P10	48	48	42
P11	(42)	31	37
P12	(37)	29	23

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P13	33	27	11
P14	40	32	36
P15	33	30	25
P16	25	22	23

第21表 第4号住居跡出土遺物観察表

遺構名	坪図	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
SJ4	79	67	石鏃	[1.7]	[1.1]	0.4	0.5	黒曜石	脚部
SJ4	79	68	スクレイパー	[2.7]	[2.4]	[0.6]	2.5	流紋岩	
SJ4	79	69	剥片	2.9	2.7	0.8	5.5	チャート	
SJ4	79	70	剥片	5.1	1.9	0.8	9.0	流紋岩	
SJ4	79	71	磨製石斧	4.4	2.8	1.2	19.7	砂岩	小型



第81図 第5号住居跡出土遺物（1）

いわゆる横型石匙の一部と思われる。

69・70は剥片である。二次加工痕はほとんど認められない。

71は小型の定角式磨製石斧である。欠損部分は使用による破損と思われる。

第5号住居跡（第80～84図）

B-3グリッドに位置する。

調査区北東壁に掛かって検出されたもので、北東側の半分は調査区域外のため平面形は明確ではないが、現況では隅丸方形を呈するようである。長軸は4.7mで、確認面からの深さも約38cmと深く、覆土の残存率も高い。

第90号土壇・第6・9号住居跡と重複関係にあるが、いずれも本遺構よりは新しいようである。

炉跡は、調査区北壁に掛かって検出された。これも北東側の半分は調査区域外である。北東―南西方向に長い楕円形を呈するようで、北西寄りに深鉢の胴部が出土している（第81図2）。やや傾いた状態での出土であったが、上部の断面は磨滅しており、内外面ともに被熱の痕跡が顕著である。

柱穴は12本検出されたが、P7・8・11以外は浅く、深さや配置からは主柱穴を特定できなかった。

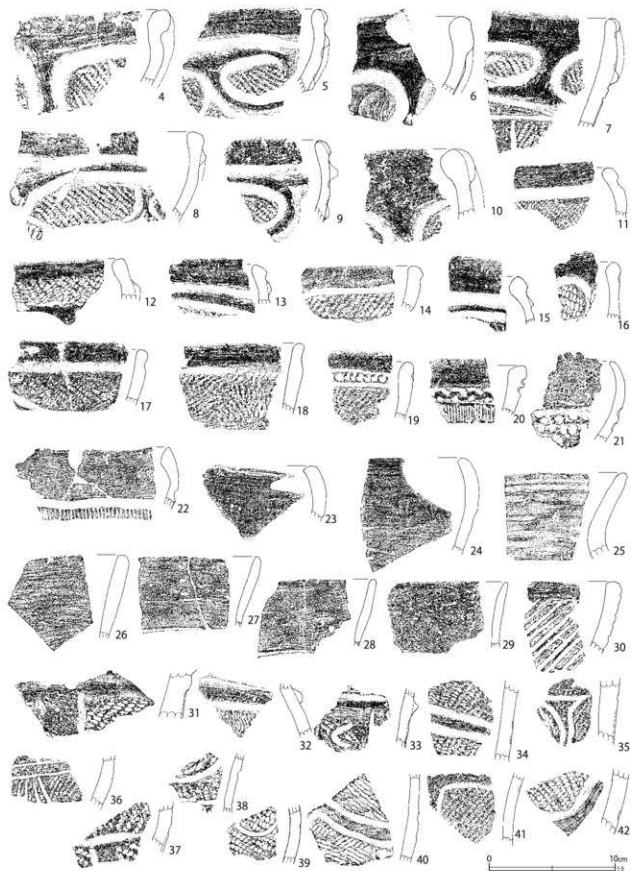
出土遺物は比較的多く、炉体土器及び主体を占

第22表 第5号住居跡柱穴計測表

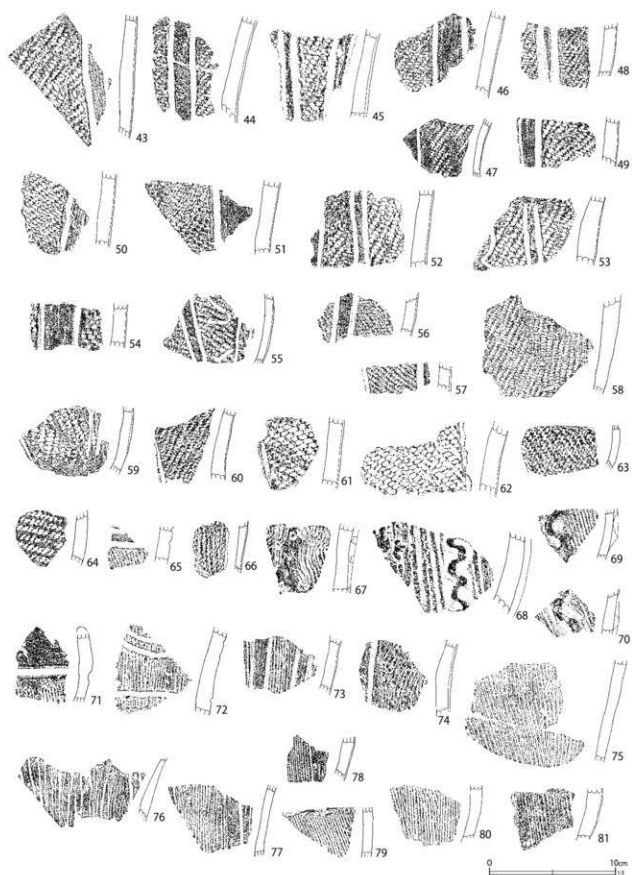
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	58	(41)	11
P2	37	(20)	8
P3	29	27	11
P4	31	28	13

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P5	28	21	29
P6	28	28	18
P7	26	25	30
P8	30	29	54

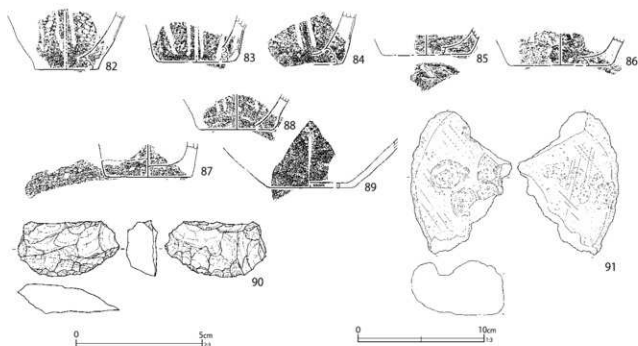
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P9	28	(24)	13
P10	29	28	37
P11	27	27	38
P12	25	(24)	21



第82图 第5号住居跡出土遺物(2)



第83图 第5号住居跡出土遺物(3)



第84図 第5号住居跡出土遺物（4）

める土器片より、本住居跡の時期は中期後葉加曽利EⅢ式期である。

1は深鉢の胴部である。沈線による懸垂文が施されるもので、懸垂文内は磨り消される。また、上部には口縁部文様帯下縁の沈線が残されている。

2はがけ土器である。頸部を巡る隆帯の上下に円形の刺突が連続して施され、その上位には斜行する沈線文が見られる。地文は5本単位の条線文で、全体的に被熱痕が著しい。

3は大型の浅鉢形土器で、口唇下を巡る沈線のみは無文土器である。

4～30は口縁部破片である。

4～17・31～37はキャリパー形土器で、貼付隆帯および沈線によって口縁部文様帯が構成されるものである。

18の口縁は、やや外反気味に作られているが、キャリパー形を呈すると思われる。口唇下を指頭等で少し凹ませた上に単節R Lの縄文が施される。

19～21・38～40は連弧文系の土器である。口縁部には交互刺突あるいは円形刺突文を連続施文し、胴部には弧状のモチーフが描かれる。

22～24は内湾する無文の口縁下に凹線が巡るもので、22の地文は条線文である。

25～29は幅広の無文の口縁が直立するもので両耳壺の可能性はある。

30は半截竹管状工具による斜めの並行沈線文が施されるもので、曾利系の土器であろう。

41・42は杵状のモチーフと磨り消し縄文が施されるもので、やや新しい様相を呈する。

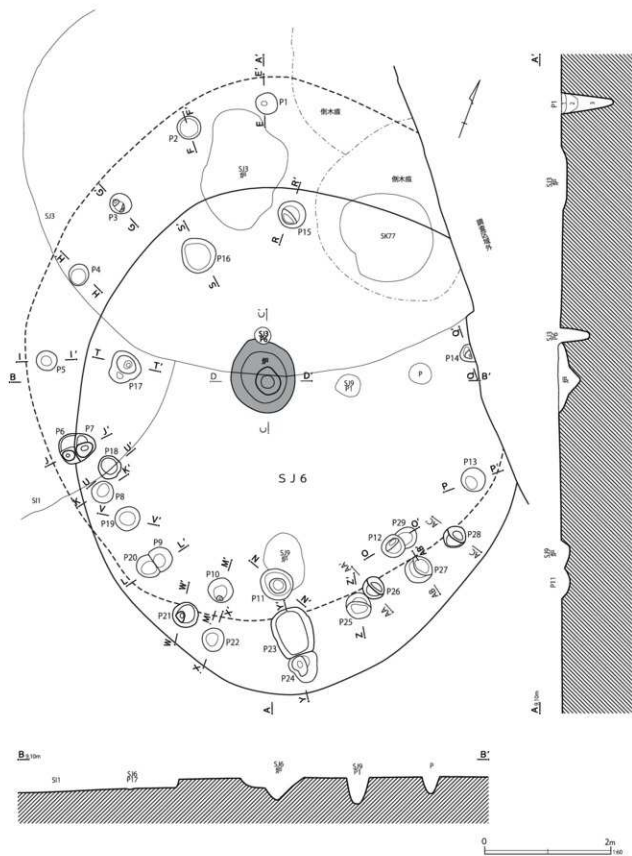
43～53は単節R L（51は複節R L R）の縄文が縦位施文される胴部破片である。

54～64は単節L R（63・64は複節L R L）の縄文が縦位施文される胴部破片で、54～56の懸垂文間は磨り消される。

65・66は地文に無節Lの撚糸文が施される。なお、65は2条の沈線が横走しており、連弧文系で

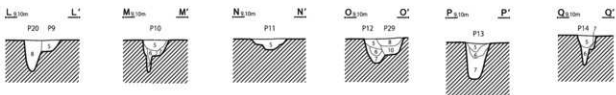
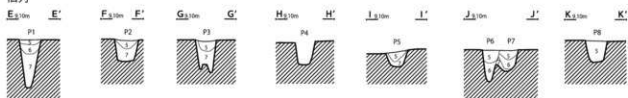
第23表 第5号住居跡出土遺物観察表

遺構名	棟号	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
SJ5	84	90	剥片	2.2	4.0	1.2	11.6	チャート	二次加工
SJ5	84	91	石皿	[11.4]	[8.0]	4.9	327.9	安山岩	が出土

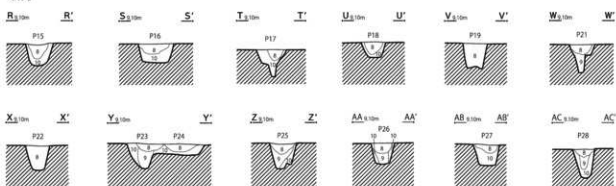


第85图 第6号住居跡(1)

旧列



新列



S J 6 ビット

5 黒褐色土 粘質 炭化物粒子少量 暗褐色土ブロック少量

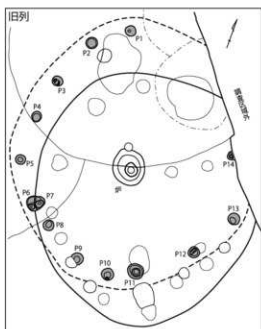
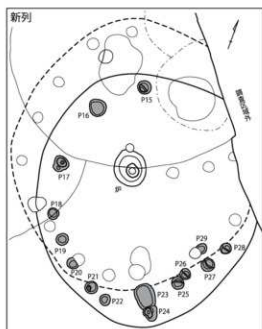
6 暗褐色土 粘質 暗褐色土ブロック多量 ややしまりに欠ける

7 暗黄褐色土 粘質 ロームブロック多量

8 暗褐色土 粘質 炭化物粒子微量

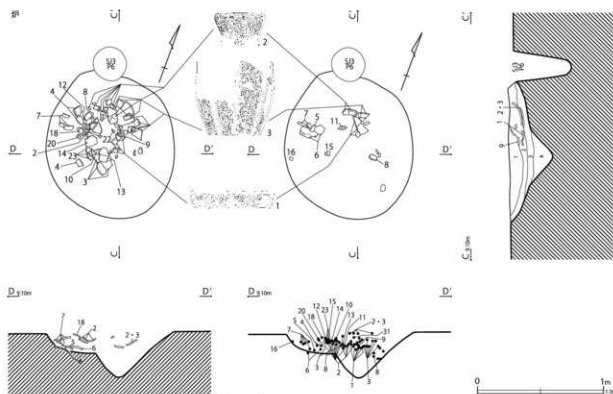
9 暗褐色土 粘質 暗褐色土ブロック少量

10 暗黄褐色土 粘質 ロームブロック少量



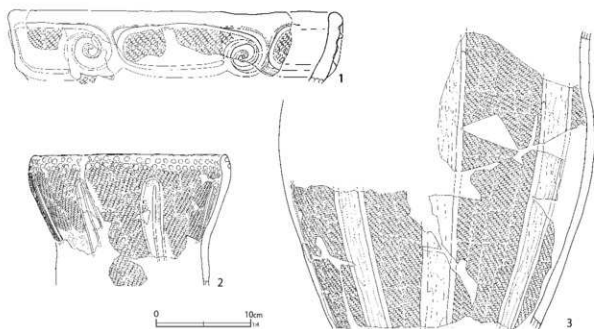
0 2m 1:60

第86図 第6号住居跡(2)

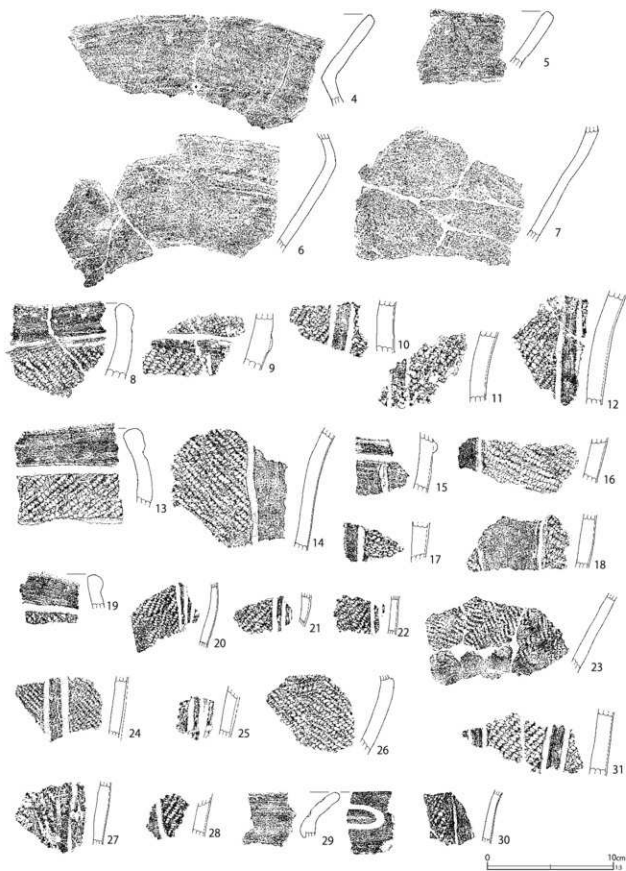


- S J 6 8¹
- 1 暗赤褐色土 シルト質 焼土粒子多量 ロームブロック・暗褐色土ブロック少量 しまりに欠ける
 - 2 暗褐色土 粘質 焼土粒子少量 焼土ブロック少量 炭化物粒子少量 土器大形破片含む
 - 3 暗褐色土 焼土粒子少量 炭土ブロック少量 炭化物粒子少量 土器大形破片含む
 - 4 暗黄褐色土 焼土粒子少量 炭化物少量 遺物含む

第87図 第6号住居跡 (3)



第88図 第6号住居跡出土遺物 (1)



第89图 第6号住居跡出土遺物(2)

あろう。

67～81は条線文を地文にもつものである。

67～70は貼付隆帯による懸垂文を有するもので、曾利式であろう。67の隆帯上には円形の刺突が施され、68～70は蛇行懸垂文である。

71は口縁近くの破片と思われる、口縁部の無文帯下端を凹線で画すものである。

72には2本沈線によって曲線状のモチーフが描かれ、73・74の懸垂文間は磨り消される。

90は二次加工の痕が認められる剥片である。

91は石皿の小片である。磨面は明瞭ではないが、漏斗状の凹みが明瞭で、裏面には敲打の痕が認められる。灰跡の近くから出土している。

第6号住居跡（第85～89図）

B-2・3グリッドに位置する。

調査区北東壁に掛かって検出されたもので、北東側の一部は調査区域外である。

掘り込みは確認できなかったが、灰跡を中心に30基のピットが検出された。これらのピットは、覆土の観察からP1～P14と、P15～P29の2グループに分類される。両ピット列は微妙に南北にずれることから、2軒の住居跡の重複とも見えるが、灰跡が単体であることや、それぞれのピット列に囲まれた空間の形状や大きさがほぼ等しいことから、意図的な建て替えを考えたい。

第5・9号住居跡と重複関係にあるが、いずれも本遺構より古いようである。

灰跡は、1.2m×1m程の掘り込みを有する地床灰で、1・2層を中心に多数の土器片が出土している。掘り込みには一部深い部分もあるが、土層の観察からは掘り方、あるいは古い時期の灰であると思われる。

柱穴は29本検出されたが、土層の観察から、1～3層を埋土とするもの（旧列）と、4～6層を埋土とするもの（新列）に分けられ、柱穴同士の切り合いから4～6層の方が新しいことが判明した。

出土遺物は比較的少ないが、灰跡出土土器等から、本住居跡は加曾利EⅢ式期に比定されよう。

1はキャリバー形土器の口縁部で、区画内には単節RLの縄文が施される。

2は口唇下に円形刺突が連続する連弧文系の土器である。地文は単節RLで、逆「U」字状の中に沈線を加えたモチーフが8単位施されている。

3は大型深鉢である。

4～23は灰跡からの出土である。4～7は無文の浅鉢、8～12はキャリバー形の土器で、被熱の痕跡が著しい。13～18も上記と同様の土器と思われるが、被熱の痕跡は認められない。

19～22は薄手の土器で、地文は単節RL。被熱痕が観察される。23は小型の土器で底部近くの破片。単節LRの縄文が斜位に施される。

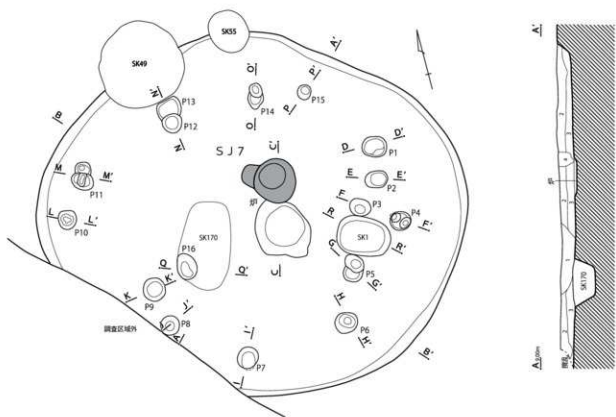
24～28・30は地文縄文と懸垂文が施される胴部破片で、29は浅鉢形土器の口縁であろう。

第24表 第6号住居跡柱穴計測表

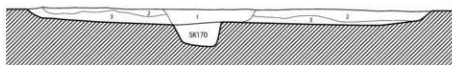
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	35	35	78
P2	38	37	34
P3	35	33	51
P4	35	(32)	37
P5	34	31	26
P6	48	(22)	50
P7	35	(35)	33
P8	35	34	32
P9	38	(30)	40
P10	41	39	52

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P11	50	49	17
P12	36	35	40
P13	38	38	59
P14	28	(21)	48
P15	46	43	33
P16	58	55	31
P17	51	50	36
P18	37	36	23
P19	34	33	40
P20	37	(28)	49

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P21	42	40	39
P22	37	35	90
P23	(76)	63	18
P24	(36)	36	41
P25	42	40	40
P26	36	34	40
P27	43	42	35
P28	37	36	47
P29	33	(25)	27

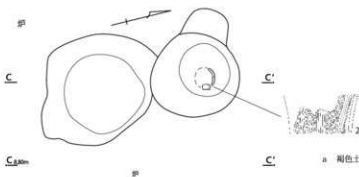


B 2.00m



B'

0 2m 1.00



C 2.00m



C 2.00m



a 褐色土 ロームブロック (φ20 mm) やや多 鉄分やや多 しまり強い
本遺構より新しい遺構の覆土

S J 7

1 暗褐色土 ロームブロック (φ20 mm) 多量 鉄分やや多
2 褐色土 ロームブロック (φ15 mm) 多量 鉄分やや多
3 明褐色土 ロームブロック (φ10 mm) 少量 しまり強い

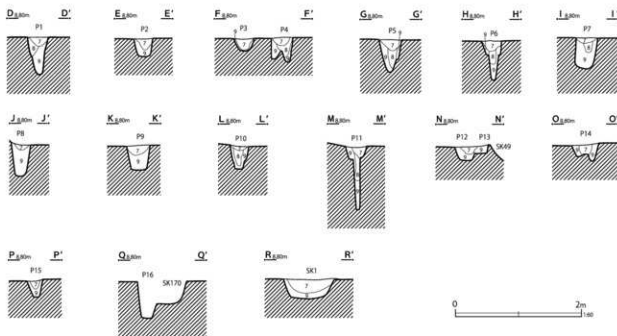
3P1

4 暗赤褐色土 赤皮粒子・焼土ブロック多量 シルト質
5 黄褐色土 ロームブロック多量 炭化物少量 粘質
6 暗褐色土 暗褐色土ブロック多量 炭化物多量 粘質

ビット・S K

7 黒褐色土 シルト質 炭化物粒子少量
8 暗褐色土 黒褐色土主体に暗褐色土ブロック含む
9 暗黄褐色土 シルト質 ロームブロック少量 しまりに欠ける
粘質 ロームブロック多量

第90図 第7号住居跡 (1)



第91図 第7号住居跡(2)

第7号住居跡(第90～93図)

C・D-3グリッドに位置する。

南西側の一部は調査区域外であるが、平面形は概ね6.3m×5.2m程の不整楕円形を呈する。

炉跡には埋設土器が残されていたが、土器片3片を残して抜き取られたようである。

柱穴は16本検出されたが、深さや配置からは、P1・4・6～8・11・16などが主柱穴の可能性が高い。

床面の確認段階で2基の土壌が検出されたが、西側の大型土壌は、本遺構に伴わない可能性が高く、第170号土壌として報告する。

出土遺物は多くないが、が体土器などから本住居跡は加曽利EⅢ式期に比定されよう。

1は小型のキャリバー形土器で、口縁部には隆帯によるモチーフが4単位認められる。地文は粗

い条線である。

3～11・18～23はキャリバー形土器で、貼付隆帯によって口縁部文様帯を構成するものである。

12～16は無文の口縁部破片である。

17は口唇下の沈線間に刺突が連続するもので、24・25とともに連文系土器であろう。

26～43は地文縄文と懸垂文が施される胴部破片である。

44～56は地文に条線文をもつものである。

57は堀之内2式である。

60は無芒の小型石鏃、61はチャート製のスクレイパーであるが、刃部の調整は粗い。

63は棒状の小型石器で、先端付近の一部に、敲打によると思われる剥離が認められる。

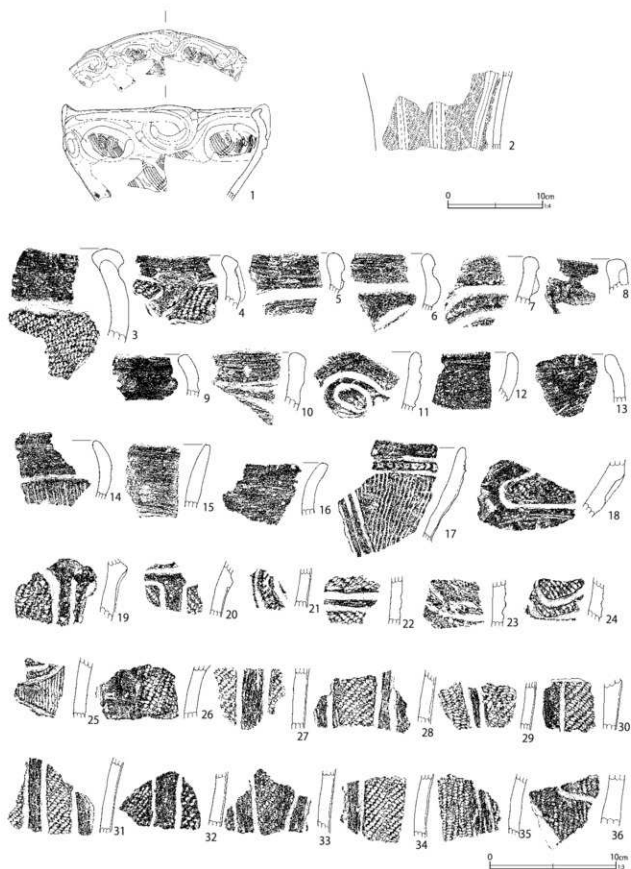
64・65は石皿の小片である。いずれにも漏斗状の深い凹みが顕著である。

第25表 第7号住居跡柱穴測定表

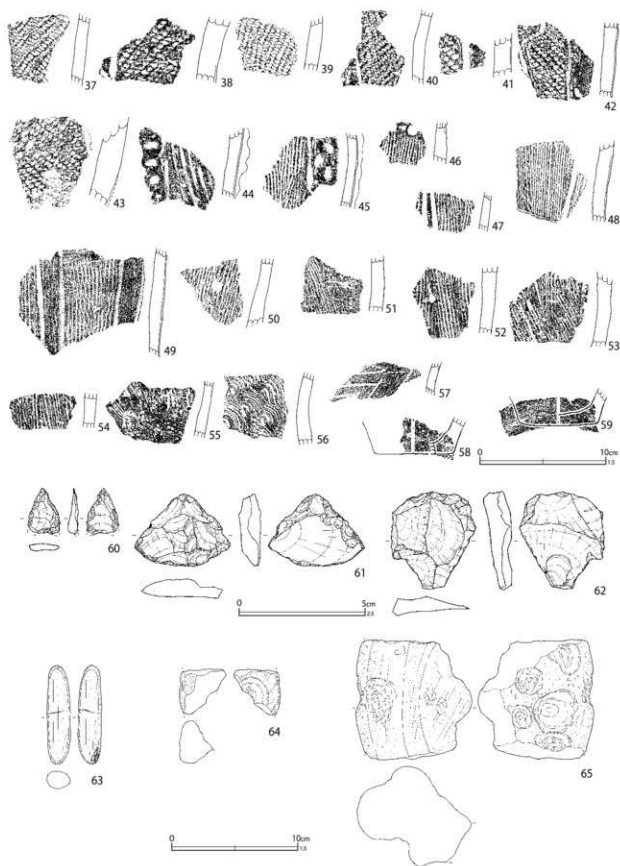
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	34	31	60
P2	28	27	29
P3	33	27	20
P4	32	32	37
P5	40	29	58
P6	37	35	57

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P7	33	31	45
P8	30	30	53
P9	36	35	53
P10	30	29	38
P11	44	26	105
P12	31	30	22

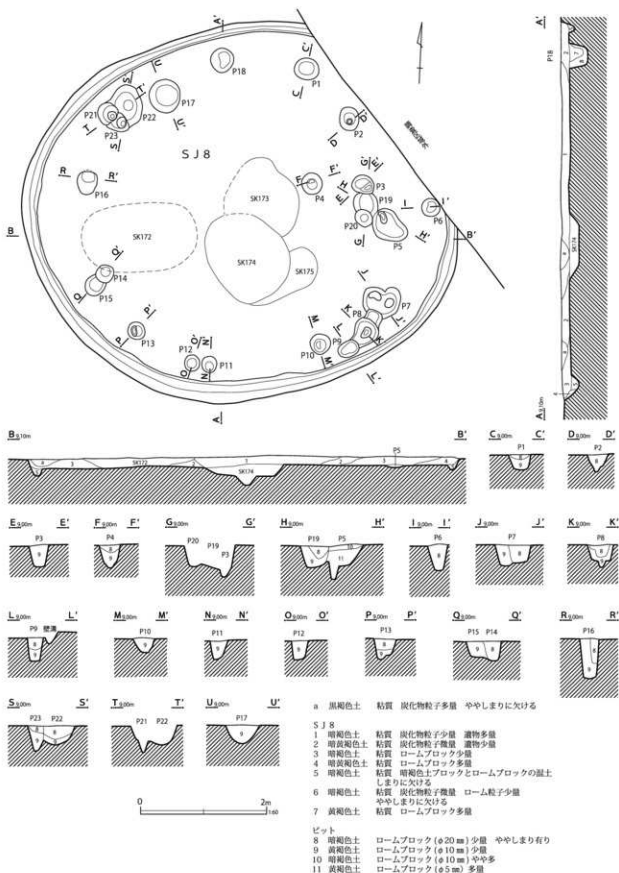
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P13	40	(25)	14
P14	41	21	23
P15	23	22	28
P16	43	32	57



第92图 第7号住居跡出土遺物 (1)



第93图 第7号住居跡出土遺物(2)



第94図 第8号住居跡

第26表 第7号住居跡出土遺物観察表

遺構名	棟図	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
SJ7	93	60	石鏝	1.9	1.3	0.4	0.8	チャート	脚部
SJ7	93	61	スクレイパー	2.9	3.8	0.9	8.0	チャート	
SJ7	93	62	剥片	3.2	3.9	1.1	12.2	チャート	
SJ7	93	63	礫石	7.9	1.9	1.5	32.5	片岩	
SJ7	93	64	石皿	[3.6]	[3.7]	3.4	32.1	安山岩	
SJ7	93	65	石皿	[9.6]	[9.2]	8.0	680.4	安山岩	

第8号住居跡 (第94・95図)

C-3・4グリッドに位置する。

北東側の一部は調査区域外であるが、平面形は直径6m程の円形を呈し、壁溝が全周する。

住居跡中央部分を第172～174号土壌に壊されており、炉跡は検出できなかった。

柱穴は23本検出されたが、深さや配置からは、P6・9・13・16・18・21などが主柱穴の可能性が高い。

出土遺物は多くないが、主体を占める土器片より、本住居跡の時期は、中期後葉加曽利EⅢ式期段階であろう。

1～8・17～20はキャリパー形土器で、貼付隆帯によって口縁部文様帯が構成されるものである。

9～12は無文の口縁部破片である。

13・14は口唇下に円形刺突文が巡るもので、23・24とともに連弧文系の土器である。

21・22には沈線でモチーフが描かれる。

25～45は地文縄文及び懸垂文が施される胴部破片である。

46・47は懸垂文のみが施される胴部下端の破片である。

第9号住居跡 (第96～98図)

B-3グリッドに位置する。

掘り込みは確認できなかったが、炉跡を中心に14基のピットが検出された。本遺構付近には、建て替えが考えられる第9号住居跡の他、第3～5号住居跡とも重複関係にあることから多数の柱穴が混在するが、それらとは覆土の違いによって分別される。

炉跡は、0.9m×0.6m程の不整楕円形の掘り込みを有し、底面は被熱のため赤く硬化していた。

柱穴は31本検出され、深さや配置からP1～6・8～13などが主柱穴の可能性が高い。

P14の東側で埋堊が検出された。確実ではないが、位置的に本遺構に伴うものと考えたい。

出土遺物は少ないが、埋堊を指標とすれば、中期後葉の加曽利EⅢ式期に比定されよう。

1は埋堊で、44cm×40cm程の掘り込み中に、正位に埋設されていたものである。単節LRの縄文が縦位に施され、懸垂文間は磨り消される。

2・3は無文の口縁で、2は大型の浅鉢形土器、3の口唇下には凹線が巡る。

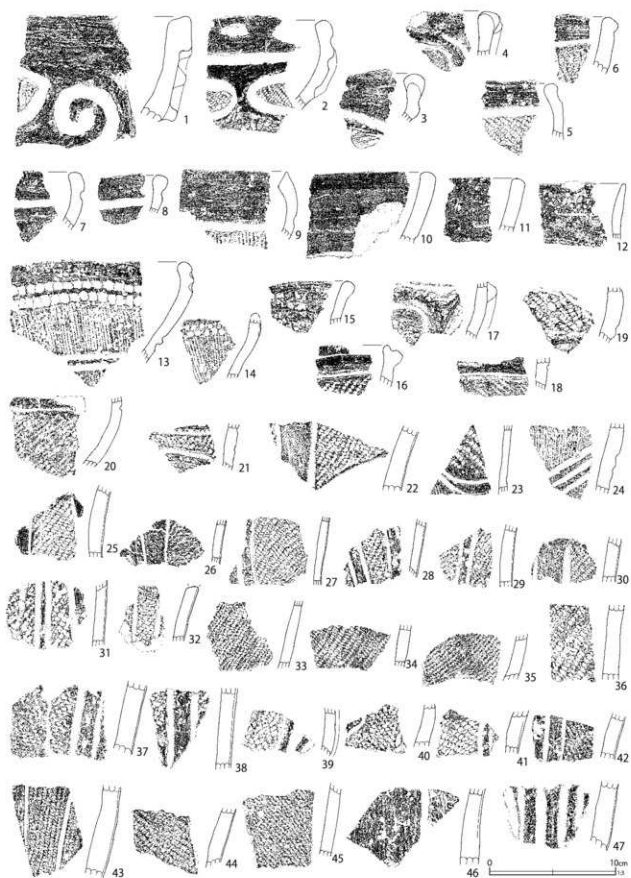
4・5は隆帯が貼付される口縁部文様帯である。

第27表 第8号住居跡柱穴調査表

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	39	35	24
P2	38	31	27
P3	35	30	50
P4	34	32	35
P5	61	43	53
P6	28	28	41
P7	60	(33)	33
P8	(60)	38	36

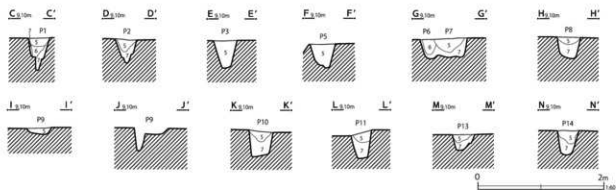
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P9	34	24	36
P10	32	32	23
P11	25	23	28
P12	25	24	25
P13	29	27	33
P14	28	27	31
P15	31	(27)	26
P16	36	30	63

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P17	53	50	29
P18	39	37	42
P19	39	(24)	34
P20	28	28	32
P21	32	32	42
P22	(28)	27	39
P23	(54)	44	30



第95図 第8号住居跡出土遺物

第96图 第9号住居跡(1)



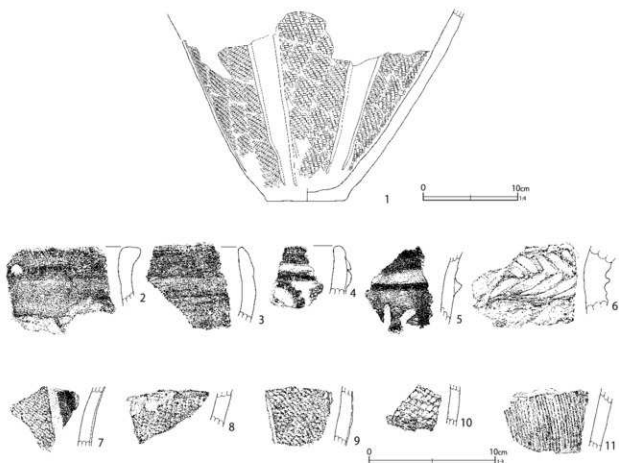
第97図 第9号住居跡(2)

第28表 第9号住居跡柱穴計測表

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	40	36	51
P2	36	36	37
P3	39	34	41
P4	34	34	22
P5	42	37	41

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P6	34	(30)	30
P7	(49)	46	28
P8	34	34	35
P9	52	38	36
P10	38	37	41

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P11	39	31	46
P12	37	34	36
P13	35	34	26
P14	32	31	39



第98図 第9号住居跡出土遺物

6は大型土器の頸部破片で、矢羽状の短沈線が施される曽利系の土器であろう。

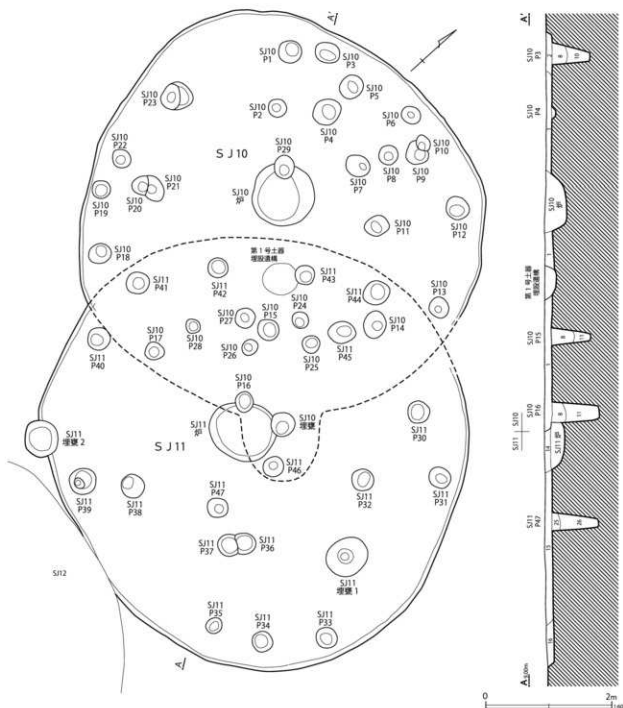
7～10は地文縄文の施されるもので、7・8は単節R Lで7は0段多条。9・10は単節L Rでいずれも縦位施文である。

11には条線文が施されている。

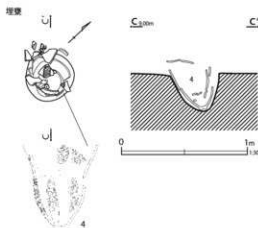
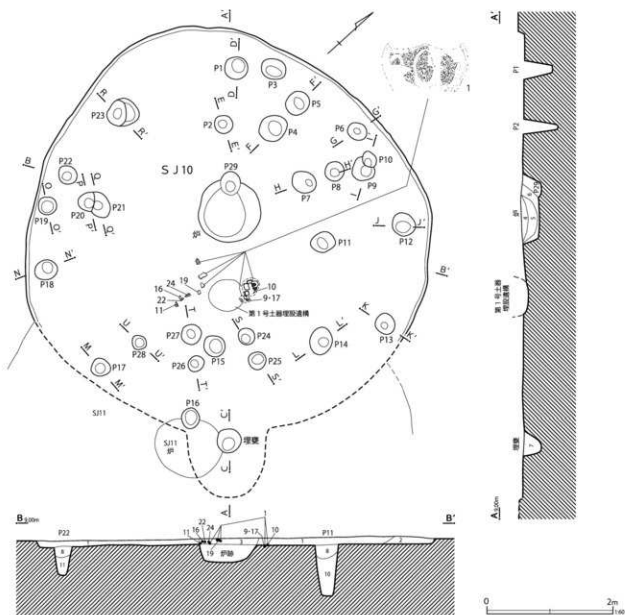
第10・11号住居跡 (第99～109図)

G-7・8グリッドに位置する。

2軒の住居跡が、北西―南東方向に重複して検出されたもので、調査も同時に行った。何れも掘り込みは浅く、覆土も明瞭ではなかったが、土層を検討した結果、灰跡と同範囲に焼土を含む層(3・14層)が分布することや、覆土とした層に

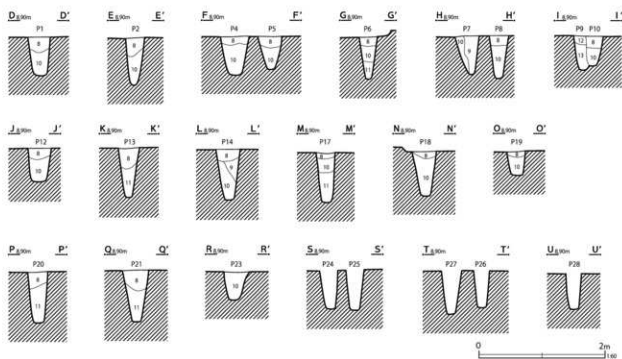


第99図 第10・11号住居跡

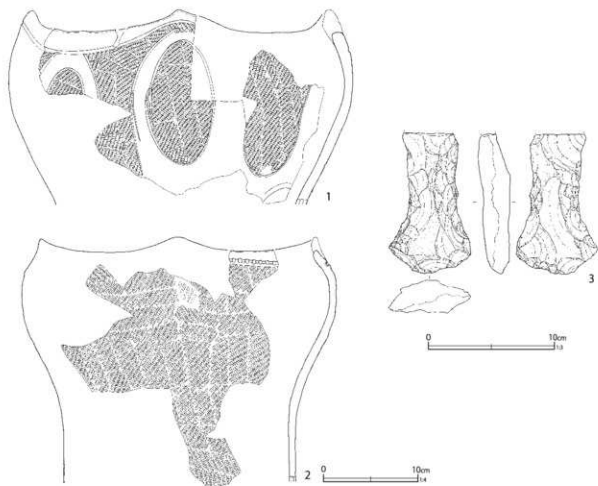


- S J 10
- 1 暗褐色土 ローム粒子やや多 炭化物微量
- 2 灰褐色土 ロームブロック (φ 20 mm) やや多 しまり強い
- 3 明褐色土 焼土粒子やや多 炭化物微量 ローム粒子少量
- 4 暗赤褐色土 粘質 焼土粒子多量 炭化物粒子少量 灰色粘土多量
- 5 赤褐色土 シルト質 焼土粒子・焼土ブロック多量 しまりに欠ける
- 6 暗褐色土 砂質 焼土ブロック・焼けたロームブロック多量 しまりに欠ける
- 埋没
- 7 暗褐色土 炭化物粒子・焼土粒子微量 暗褐色土小ブロック少量 ややしまりに欠ける
- ピット
- 8 暗灰褐色土 ロームブロック (φ 10 mm) 少量 ローム粒子少量
- 9 灰褐色土 ロームブロック (φ 5 mm) 少量 しまり弱い
- 10 暗灰褐色土 ロームブロック (φ 10 mm) 少量 ローム粒子少量
- 11 暗灰褐色土 ローム粒子少量 しまり弱い
- 12 暗灰褐色土 褐色土ブロック (φ 20 mm) やや多
- 13 暗灰褐色土 褐色土ブロック (φ 10 mm) 少量

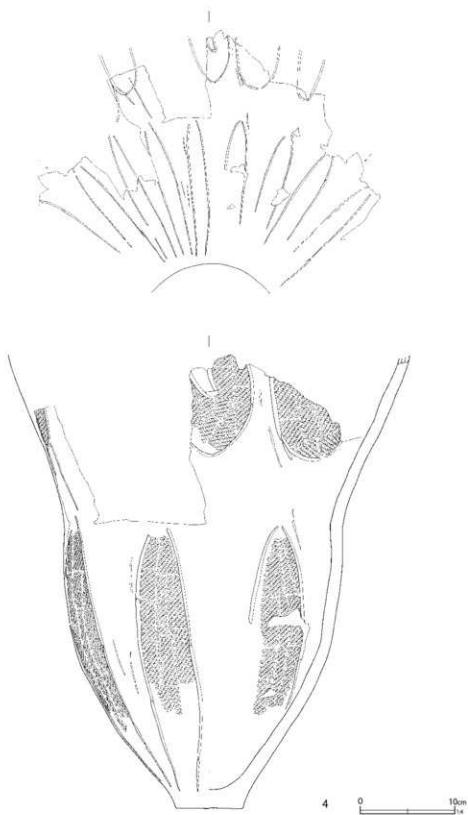
第100図 第10号住居跡 (1)



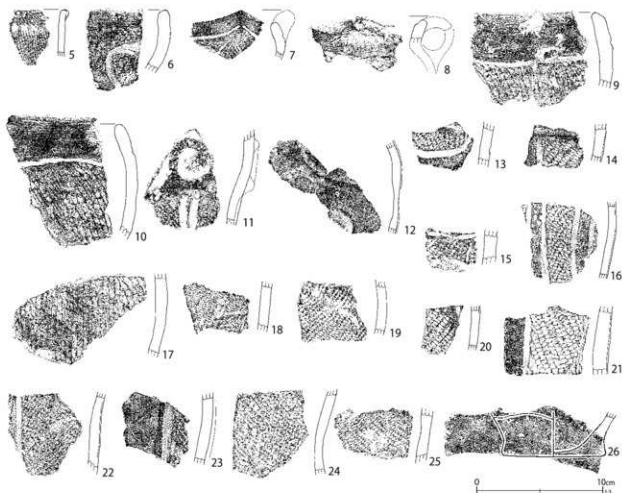
第101图 第10号住居跡 (2)



第102图 第10号住居跡出土遺物 (1)



第103图 第10号住居跡出土遺物（2）



第104図 第10号住居跡出土遺物（3）

多量のローム土を含むことから、1・2層及び15・16層は、いわゆる貼り床である可能性が高い。

なお、両者は重複関係にあるが、掘り込みが浅いため土層断面からの新旧の判定は難しく、第10号住居跡の柱穴としたもの（P16）が第11号住居跡の炉跡を壊している点や、それぞれの炉跡からの出土遺物の比較から、第10号住居跡の方が新しいと判断される。

第10号住居跡（第99～104図）

炉跡は、中央北西寄りに検出され、径1mほどの掘り込みを有する地床炉である。

柱穴は28本検出されており、いずれも深い。配置からは、内側のP2・4・7・11・20と、外側を回るP1・3・6・12・13・14・17・18・20の2列に分けられ、拡張の可能性もある。

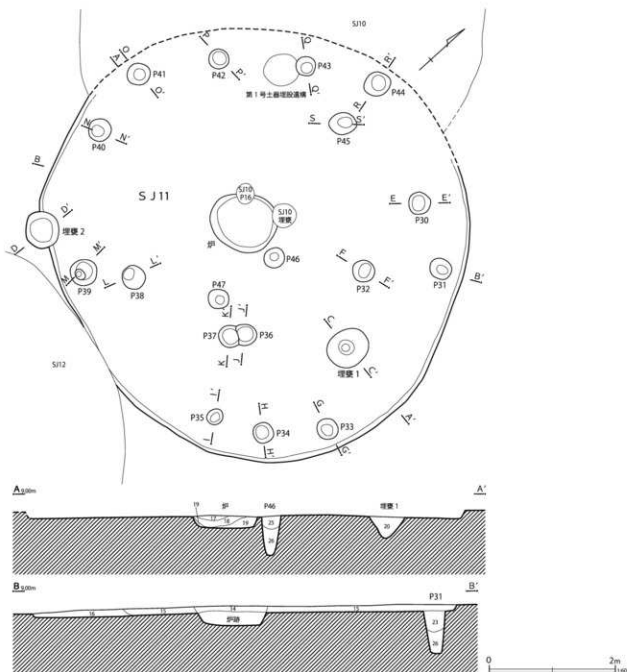
また、平面形は径6.4m程の不整形円形と思われる。

第29表 第10号住居跡柱穴計測表

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	35	34	60
P2	29	28	75
P3	40	32	62
P4	44	40	61
P5	37	34	52
P6	34	26	67
P7	42	34	61
P8	31	30	68
P9	35	(23)	54
P10	27	23	46

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P11	41	33	81
P12	37	35	52
P13	34	31	79
P14	45	37	81
P15	37	33	69
P16	32	29	75
P17	29	29	79
P18	36	30	71
P19	29	29	36
P20	30	(26)	80

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P21	41	(25)	81
P22	29	28	45
P23	50	45	46
P24	27	26	60
P25	28	26	63
P26	27	25	60
P27	31	31	69
P28	37	32	29



S J 11

- 14 明褐色土 焼土粒子やや多 炭化物微量 ローム粒子少量
 15 暗褐色土 ロームブロック (φ5 mm) やや多 炭化物微量
 16 暗褐色土 ロームブロック (φ5 mm) 多量 しまり強い

SP

- 17 暗赤褐色土 粘質 焼土粒子多量 灰色粘土多量
 18 暗褐色土 粘質 焼土ブロック少量 炭化物粒子少量 しまりに欠ける
 19 暗褐色土 シルト質 炭化物粒子少量 焼土粒子微量 暗褐色ブロック多量

埋蔵1

- 20 暗褐色土 粘質 暗褐色土ブロック多量 ややしりに欠ける

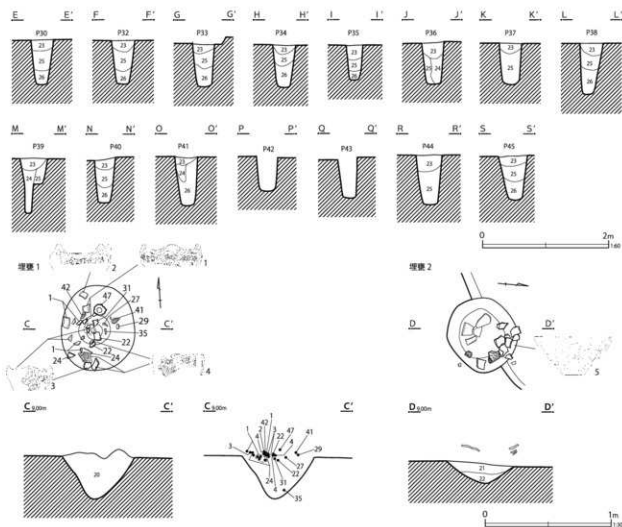
埋蔵2

- 21 暗褐色土 ローム粒子やや多 焼土粒子微量 炭化物微量
 22 暗赤褐色土 ローム粒子少量

ビット

- 23 灰褐色土 ロームブロックやや多 炭化物微量
 24 暗灰褐色土 粒状 均質 しまり弱い
 25 暗褐色土 褐色土ブロック (φ20 ~ 30 mm) やや多 しまり強い
 26 暗灰褐色土 ローム粒子少量 しまり弱い

第105図 第11号住居跡 (1)



第106図 第11号住居跡(2)

るが、P24～27と埋壁の配置から、南東側に張り出し部をもつ可能性もあろう。

住居跡の時期は、埋壁及び主体を占める土器片より、中期末葉の加曾利EⅣ式期である。

1は炉跡の南西側でまとまって出土したもので、連結する楕円形のモチーフが描かれる。

2は口唇部の無文帯下端に刺突文が連続するもので、地文は0段多条の単節LRである。

3は打製石斧である。

4は埋壁で、口縁部を欠損する。地文縄文は0段多条の単節LRで、モチーフ外は磨り消される。

5は撫糸文土器で井草式である。

6は口唇下から沈線による曲線的なモチーフが展開するもので、地文は単節RLである。

7～10は口唇部に無文帯をもち、緩い波状口縁となる土器で、8には環状の把手がつく。

11は貼付隆帯による口縁部文様帯の下端部。

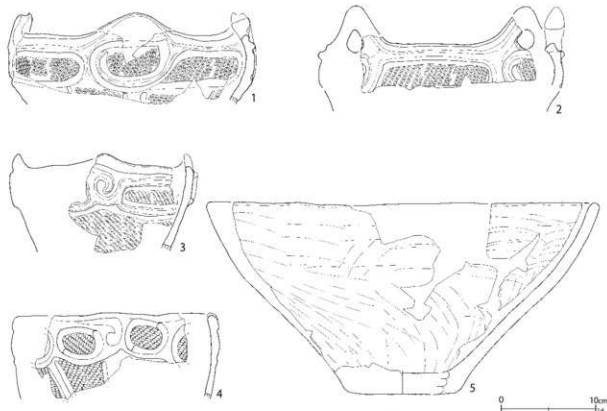
12は微隆線による曲線文が施される深鉢形土器の胴部破片と思われる。

13～15は沈線による口縁部文様帯の下端部。

16～25は縄文の施される胴部破片で、懸垂文間には磨り消される。

第30表 第10号住居跡出土遺物観察表

遺構名	採回	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
				(10.2)	(cm)		(g)		
SJ10	102	3	打製石斧		6.5	2.6	159.4	ホルンフェルス	



第107図 第11号住居跡出土遺物（1）

第11号住居跡（第105～109図）

炉跡は、ほぼ中央で検出され、径1 mほどの掘り込みを有する地床炉である。

柱穴は18本検出されており、いずれも深い。

埋甕は2か所検出されているが、いずれも破片状態での出土である。また、埋甕2としたものは、住居跡西側の壁に掛かって出土したもので、本遺構には伴わない可能性が高い。

住居跡の時期は、埋甕及び主体を占める土器片より、中期末葉の加曾利EⅢ式期である。

1～4は埋甕1とした掘り込みから出土したものである。いずれも隆帯による口縁部文様帯を有するもので、1・2は同一個体の可能性がある。

5は埋甕2で、無文の浅鉢形土器である。

6は燃糸文土器で、井草式である。

7～10・17・22には、隆帯が貼付される。

第31表 第11号住居跡柱穴計測表

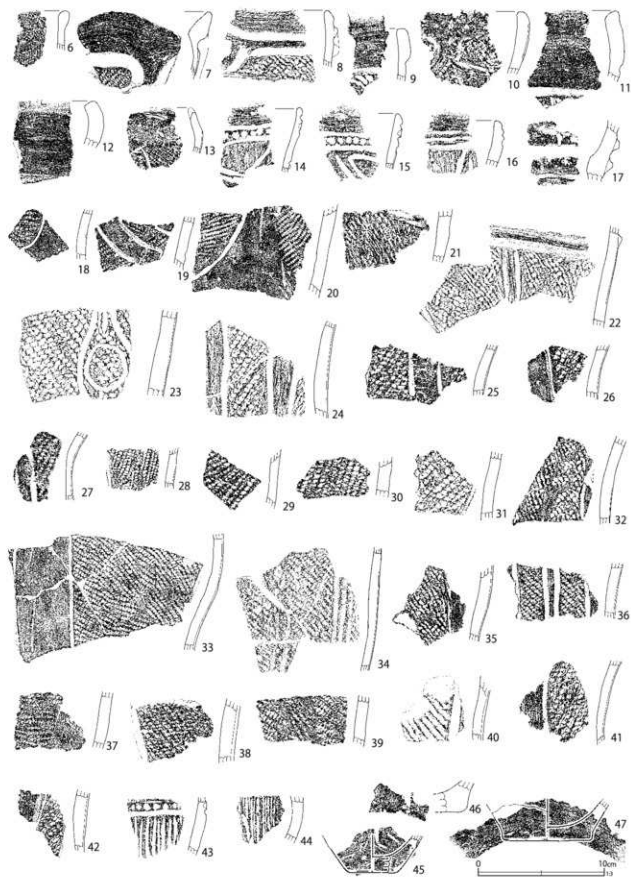
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	35	35	71
P2	34	32	67
P3	35	34	69
P4	34	34	67
P5	33	32	68
P6	25	25	65

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P7	34	(30)	67
P8	35	(33)	65
P9	37	35	81
P10	44	41	81
P11	36	34	68
P12	36	34	77

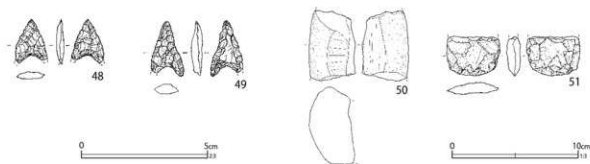
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P13	45	35	69
P14	40	37	79
P15	34	29	63
P16	32	32	75
P17	33	32	53
P18	31	30	64

第32表 第11号住居跡出土遺物観察表

遺構名	棟号	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
					(cm)		(g)		
SJ11	109	48	石鏃	[1.8]	[1.3]	0.3	0.5	チャート	
SJ11	109	49	石鏃	[2.2]	1.3	0.5	1.0	チャート	
SJ11	109	50	石鏃	[5.6]	[3.7]	6.3	150.9	安山岩	
SJ11	109	51	打製石斧	[3.0]	4.2	1.0	17.9	ホルンフェルス	先端部



第108图 第11号住居跡出土遺物 (2)



第109図 第11号住居跡出土遺物 (3)

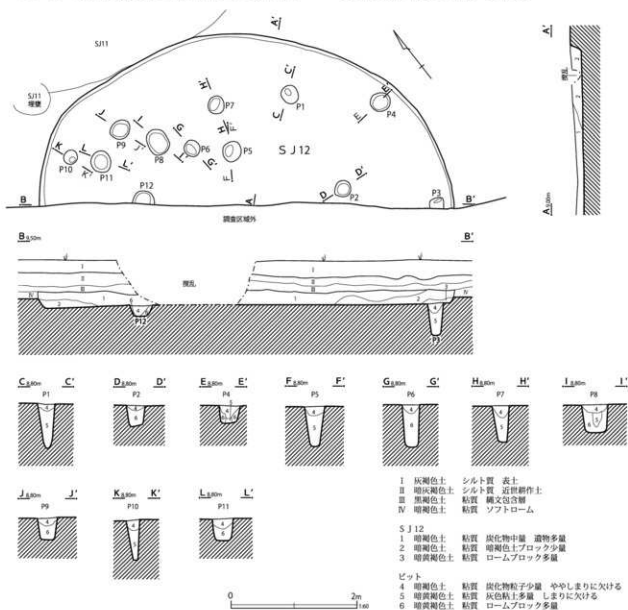
13は波状口縁で、口唇部の無文帯直下から沈線によるモチーフが展開するもので、やや新しい。

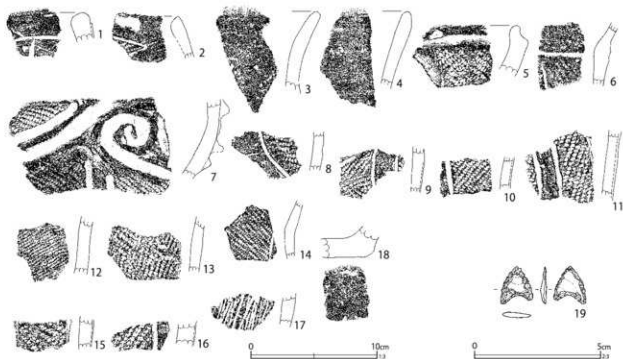
14～16・43は連弧文系の土器、23には大木系の

モチーフが描かれる。

24～40は地文縄文が施される胴部破片で、43・

44は地文に条線文が用いられる。





第111図 第12号住居跡出土遺物

石器は4点出土している。

48・49は小型の無茎石鏃で、基部に大きく抉りをもつ。50は石皿の小片である。51は小型打製石斧の先端部である。

第12号住居跡 (第110・111図)

G・H-7、H-8グリッドに位置するが、南西側半分は調査区域外で、北側の第11号住居跡を壊して造られている。

平面形は、ほぼ円形を呈すると思われるが、炉跡は検出されなかった。

柱穴は12本検出されたが、深さや配置からP1・3・7・10などが主柱穴の可能性が高い。

出土遺物は少ないが、主体的な土器片より、住居跡の時期は中期加曽利EⅢ式期と考えたい。

1・2は口唇直下に沈線文が施される。

3・4・6は幅広い無文の口縁が直立する。

5は後期堀之内1式の口縁部である。

7は貼付隆帯および沈線による口縁部文様帯を有するものである。

8・9には沈線文が施されるが、9は横位施文であり、後期の資料と思われる。

17は地文に条線文が施される。

19は小型の石鏃で、基部は無茎で抉りを有する。側縁には非常に細かい調整が施されている。

第33表 第12号住居跡柱穴計測表

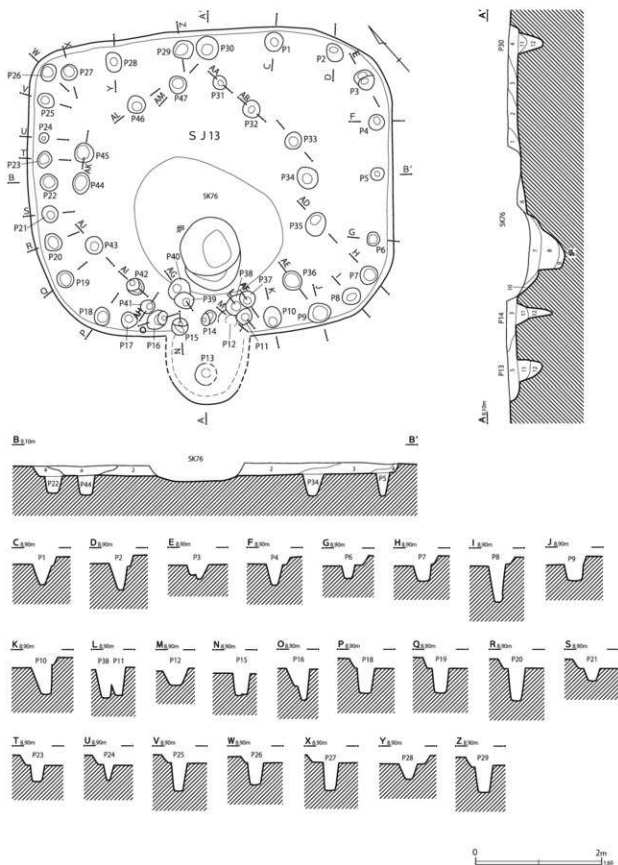
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	28	28	70
P2	28	27	30
P3	23	(19)	52
P4	32	29	29

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P5	33	29	65
P6	27	24	68
P7	27	27	58
P8	41	34	44

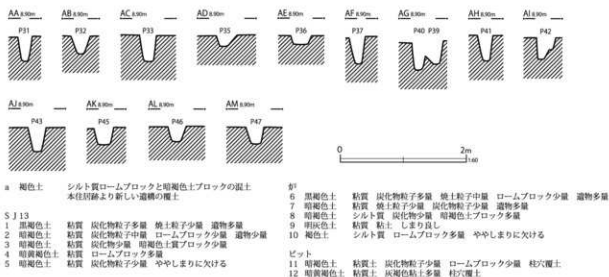
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P9	33	29	36
P10	22	21	63
P11	33	32	35
P12	35	(20)	17

第34表 第12号住居跡出土遺物観察表

遺構名	棟号	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
				(cm)			(g)		
SJ12	111	22	石鏃	1.5	1.3	0.3	0.4	チャート	



第112图 第13号住居跡(1)



第113図 第13号住居跡（2）

第13号住居跡（第112～115図）

G-8グリッドに位置する。

平面形は5.9m×5.8mの隅門方形を呈し、南西側に張り出し部を有するものである。

炉跡は南西寄りに検出されたが、第76号土壌によって大幅に壊されている。なお、炉跡の7層最上部から出土した土器（1・2・4・6・20・25・27・29・36）は、本遺構に伴うものである。

柱穴は47本検出され、うちP1～11・15～30の27本が壁に沿って配置される。また、P37～40及

びP13は入口部に関連するものであろう。

出土遺物は少ないが、本住居跡の時期は、炉跡の土器から加曽利EⅣ式期である。

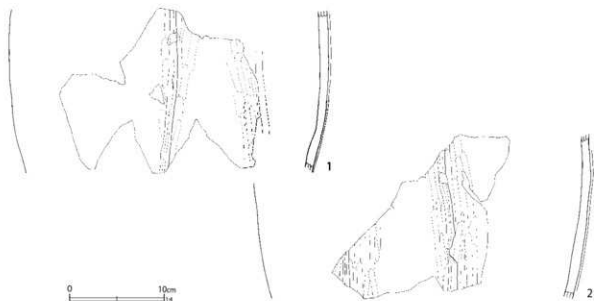
1・2・27は貼付された微隆帯が垂下する。

3～7は幅狭の口縁部無文帯をもつもので、3～5は波状口縁となる。

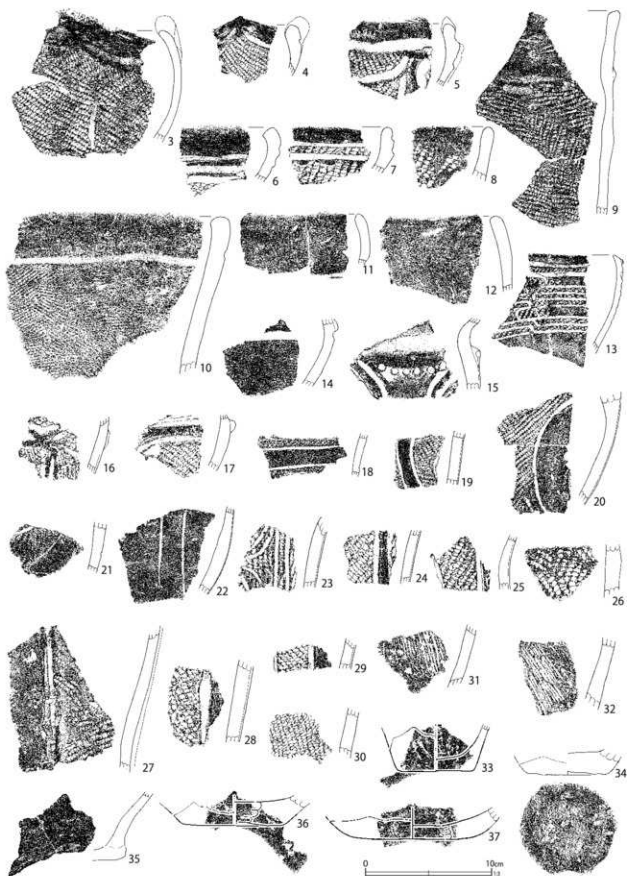
9は無文帯の下端を貼付隆帯で画し、下位は単節LⅡRの地文で、部分的に付加条が施される。

13は加曽利BⅠ式の口縁部破片である。

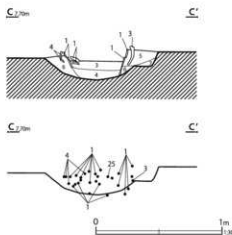
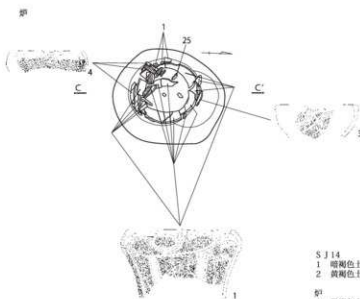
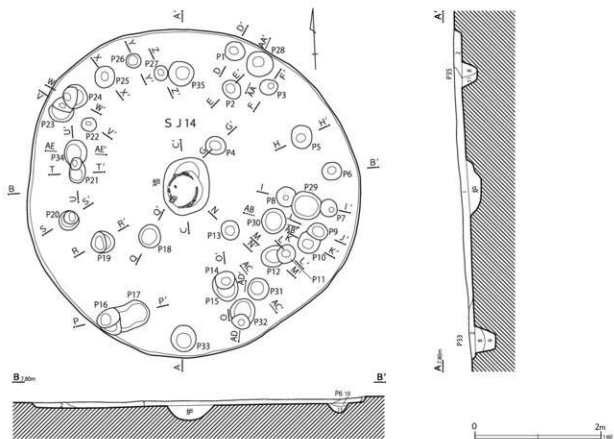
15は大きく外反する口縁部の下位に列点文が巡



第114図 第13号住居跡出土遺物（1）

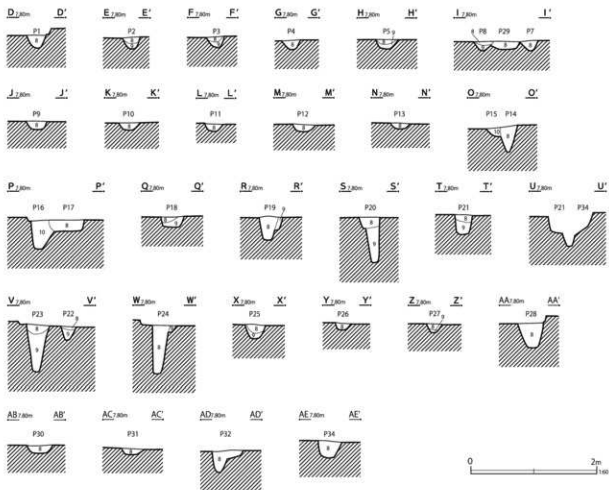


第115图 第13号住居跡出土遺物 (2)



- SJ14
- 1 暗褐色土 ロームブロック(φ10mm)少量 炭化物微量 しまりやや強い
 - 2 黄褐色土 ローム粒子やや多 炭化物微量 焼土粒子微量
- 50
- 3 黒褐色土 シルト質 炭化物少量 焼土中量 ややしまりに欠ける 遺物含む
 - 4 暗赤褐色土 シルト質 焼土・焼土ブロック多量 ローム小ブロック少量
 - 5 暗褐色土 シルト質 焼土粒子少量 炭化物粒子少量 ローム小ブロック少量
 - 6 暗褐色土 粘質 炭化物少量 暗褐色土ブロック少量
 - 7 暗黄褐色土 粘質 ロームブロック多量
- ピット
- 8 暗灰褐色土 ロームブロック(φ10mm)少量 炭化物微量 しまりやや強い
 - 9 暗黄褐色土 ローム粒子やや多 炭化物微量 しまり弱い
 - 10 黒褐色土 ローム粒子少量 炭化物微量 粘性あり
 - 11 暗褐色土 ローム粒子少量 しまり弱い

第116図 第14号住居跡(1)



第117図 第14号住居跡 (2)

り、沈線文が施される。堀之内1式であろう。

16・17はキャリバー形土器の口縁部下端。

18～21は沈線による曲線的なモチーフと磨り消し縄文が施されるものである。

23は沈線文が施される堀之内1式であろう。

24～30は地文縄文が施される胴部破片である。

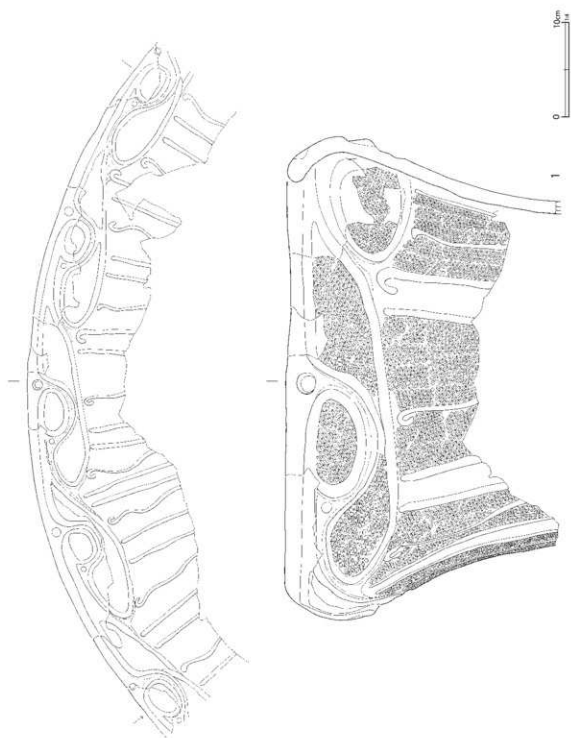
31・32は地文に条線文が用いられるものである。

第35表 第13号住居跡柱穴計測表

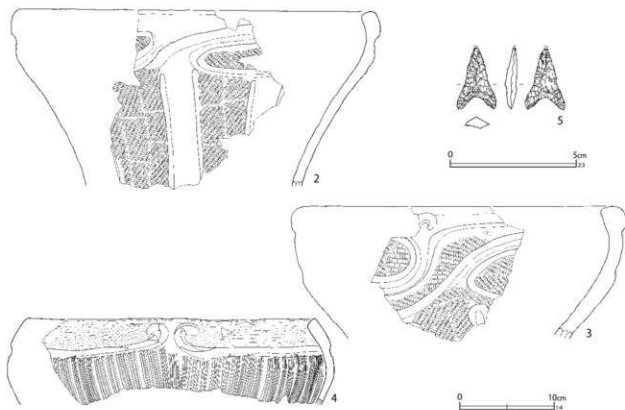
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	30	30	33
P2	28	26	41
P3	33	28	23
P4	26	25	33
P5	21	20	37
P6	22	20	21
P7	30	29	27
P8	31	31	59
P9	36	32	25
P10	33	27	46
P11	28	23	43
P12	39	不明	17
P13	35	(18)	30
P14	26	20	44
P15	26	26	41
P16	34	28	48

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P17	不明	不明	不明
P18	27	27	39
P19	28	26	38
P20	28	27	51
P21	26	25	18
P22	27	27	27
P23	26	22	27
P24	17	15	25
P25	26	23	45
P26	28	24	35
P27	26	25	45
P28	30	25	24
P29	33	30	43
P30	36	35	38
P31	22	21	40
P32	29	27	28

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P33	29	25	42
P34	35	32	35
P35	38	32	18
P36	31	30	14
P37	27	24	42
P38	32	(31)	45
P39	31	26	35
P40	35	(21)	45
P41	22	21	35
P42	28	25	34
P43	28	27	38
P44	35	27	30
P45	30	30	27
P46	29	28	24
P47	28	27	26



第118図 第14号住居跡出土遺物（1）



第119図 第14号住居跡出土遺物（2）

第14号住居跡（第116～121図）

2区で発見された遺構で、1～3・4グリッドに位置する。

重複する遺構はなく、平面形は直径約5.2mの円形を呈する。

炉跡は、遺構中央部で検出され、85cm×75cm程の楕円形の掘り込みを有している。炉の中央部には胴下半を欠いた大型の土器（第118図1）が正位に設置され、その周囲に更に別個体の破片（第119図2・3）が立てられていた。

柱穴は47本検出された。浅いものが多いが、深さや配置からは、P14・16・19・20・21・23・24・28・32・33などが主柱穴の可能性が高い。

本住居跡の時期は、炉体土器などから中期末葉の加曽利EⅢ式期である。

1は炉体土器である。口縁部にはS字状の区画文が4単位巡り、胴部には2本沈線と蕨手状の懸垂文が交互に8単位施されている。地文原体は複

節L R Lである。

2・3は1の周囲に立て並べられたもので、貼付隆帯による口縁部文様帯を有するキャリバー形土器である。いずれも地文には単節R Lの縄文が施されている。

4は幅狭の無文帯下端に沈線が巡り、以下に4条単位の条線文が施される。

6～22は口縁部破片である。

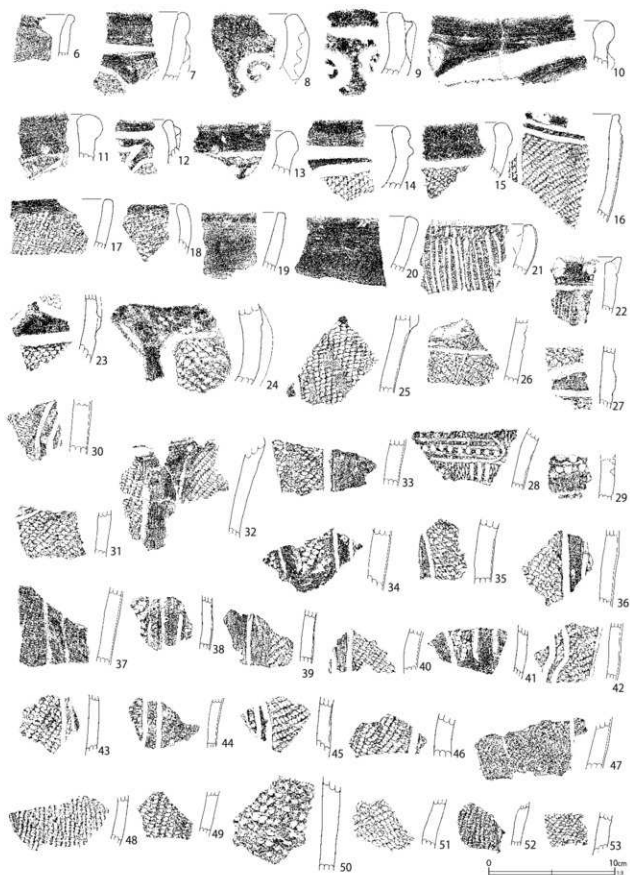
6は然糸文土器で、井草式である。地文は単節R Lの縄文で、口唇上にも施される。

7～15・23～27は貼付隆帯および沈線による口縁部文様帯を有するものである。

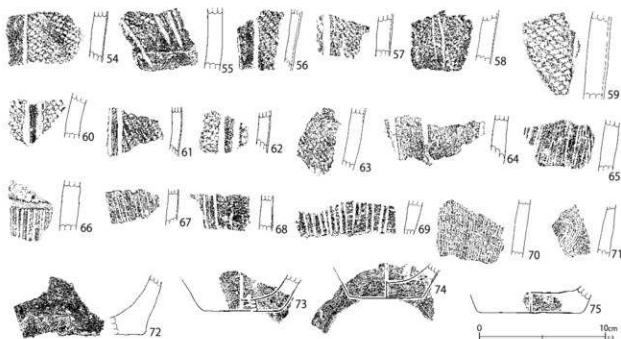
16は口唇直下を巡る2条沈線から懸垂文が垂下するもので、地文は単節R Lの縦位施文である。

17～20はやや内湾する口縁部破片で、17・18には縄文が施される。

21は外反する口縁部に半截竹管状工具による並行沈線文が施される曽利系の土器である。



第120图 第14号住居跡出土遺物 (3)



第121図 第14号住居跡出土遺物（4）

第36表 第14号住居跡柱穴計測表

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	32	30	22
P2	30	26	20
P3	26	26	20
P4	30	30	15
P5	37	33	17
P6	32	28	16
P7	27	27	17
P8	32	(27)	15
P9	31	25	13
P10	33	(27)	11
P11	30	28	13
P12	33	(26)	11

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P13	30	30	9
P14	31	27	42
P15	40	(20)	17
P16	42	37	46
P17	(48)	40	19
P18	35	34	16
P19	37	35	36
P20	31	30	72
P21	41	26	51
P22	23	23	22
P23	37	(33)	76
P24	38	38	78

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P25	32	32	23
P26	24	23	10
P27	23	22	14
P28	42	40	38
P29	43	(43)	13
P30	40	38	12
P31	34	34	11
P32	47	38	36
P33	42	39	34
P34	35	27	36
P35	40	38	26

第37表 第14号住居跡出土遺物観察表

遺構名	棟号	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
SJ14	119	5	石礎	(2.5)	1.6	0.5	0.9	黒曜石	

22は内削ぎの口唇下に沈線を巡らせるもので、地文は浅く細い条線文である。

28・29は頸部に円形の刺突が連続するもので、連瓦文系の土器と思われる。

30・31は沈線による曲線的なモチーフが展開する胴部破片である。

32～63は地文縄文と懸垂文、65～71は条線文が施されるものである。

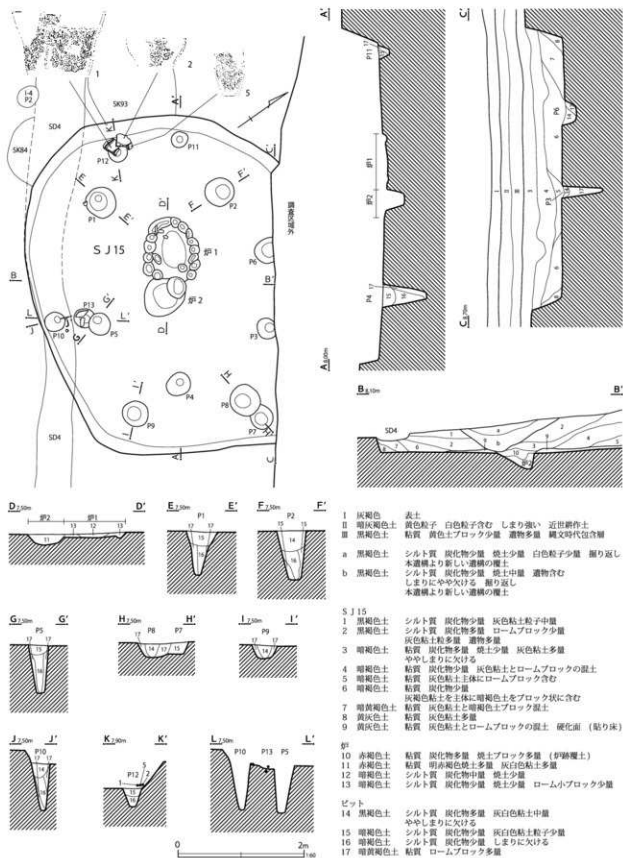
第15号住居跡（第122～126図）

2区で発見された遺構で、I-4・5グリッドに位置する。

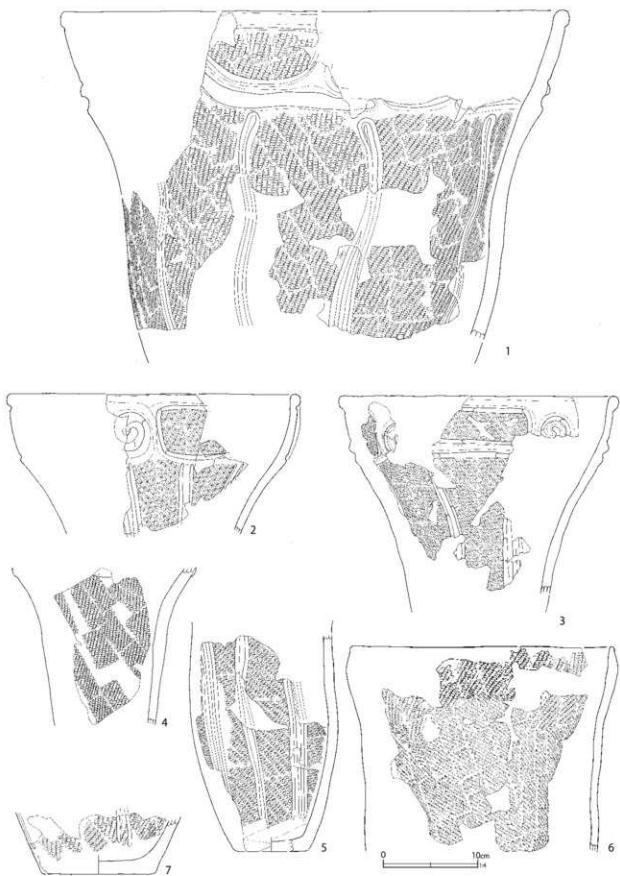
北東側の一部は調査区域外であるが、掘り込みは深く、平面形は不整形円形を呈するようである。

なお、土層断面でa・b層とした部分は、本遺構より新しい遺構の覆土である。

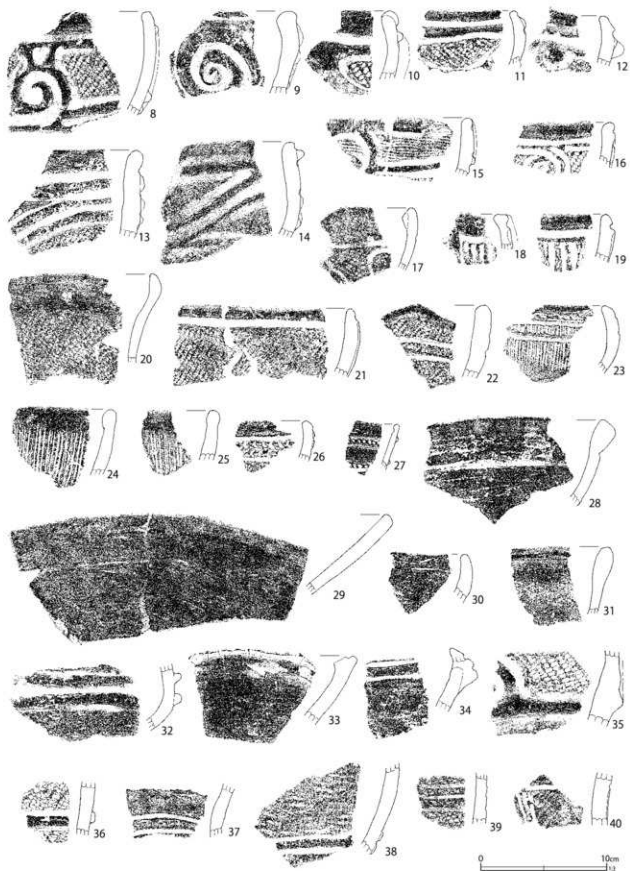
炉跡は、中央北西寄りです。2基の炉跡が隣接して



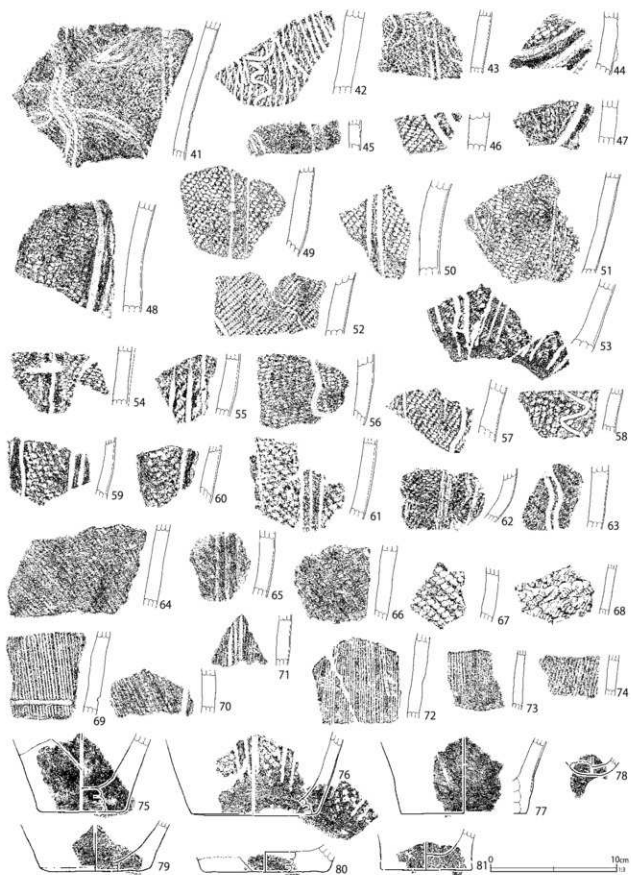
第122図 第15号住居跡



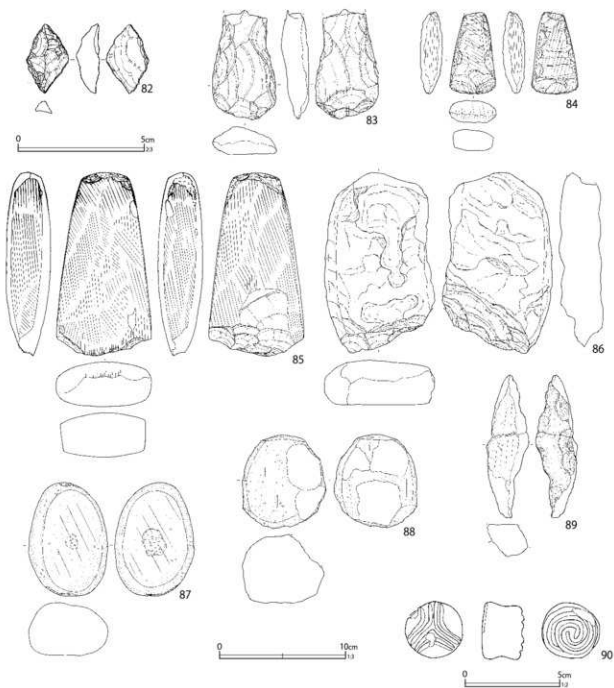
第123图 第15号住居跡出土遺物 (1)



第124图 第15号住居跡出土遺物 (2)



第125图 第15号住居跡出土遺物 (3)



第126図 第15号住居跡出土遺物（4）

検出され、土層の観察からは深い掘り込みをもつ
 炉2の方が新しいようである。なお、炉1とした
 ものは、浅い掘り込みの外周に沿って小さな窪み
 が連続しており、使用時には石や土器片等が配置
 されていた可能性がある。

柱穴は13本が検出されているが、深さや配置か
 ら、P1～5が主柱穴の可能性が高い。

なお、P13の周囲から複数の土器片（29・47・
 48・59・60・76など）が、また北西の壁近くから
 複数個体の土器（1～3・5）が出土しているが、
 これらは6とともに床面直上からの出土であり、
 本住居跡に伴うものである。

従って、上記土器などから、本住居跡の時期は
 中期末葉の加曽利EⅢ式期である。

第38表 第15号住居跡柱穴計測表

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	47	46	69
P2	45	43	77
P3	34	(27)	62
P4	39	34	69
P5	35	33	77

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P6	41	30	22
P7	36	32	20
P8	48	46	22
P9	41	40	21
P10	31	30	75

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P11	26	24	19
P12	30	30	30
P13	30	(24)	6

1は大型の深鉢で、口縁部に隆帯による区画文が巡り、地文は単節RLである。懸垂文はすべて緩く蛇行し、9単位施されるようである。

2・3・5は渦巻文と栴檀区画文を組み合わせた口縁部文様帯を有し、胴部には懸垂文が垂下する。地文は複節RLの縄文が施される。

6は床面直上の出土で、単節RLと無節Lの2種類の原体が用いられている。

8～19・35～40は貼付隆帯および沈線による口縁部文様帯を有するキャリバー形土器で、18・19は曾利系であろう。

20～25は口縁部文様帯をもたないもので、22は波状口縁、23～25は条線文が用いられる。

26は口唇下の沈線に刺突が連続するもので、連弧文系の土器であろう。

27は紐線文が施される。堀之内2式である。

28～34は無文の口縁部で、28・29は浅鉢形土器、34は堀之内式であろう。

41～47は胴部に沈線による曲線的なモチーフが描かれるものである。

48～67は地文縄文が施される胴部破片である。

68は0段多条の単節LRでループ文が施される。胎土に繊維痕が認められ、関山式であろう。

69～74には地文に条線文が用いられる。

82は石錐であろう。肉厚の黒曜石片を使用し、上下に錐部を作り出している。

83は打製石斧で、基部を欠損する。先端部の剥離は、使用に伴う欠損と思われる。

84は小型の磨製石斧としたが、全体的に研磨は不十分であり、表裏に片理による凹凸が顕著に残されていることから、未製品と思われる。

85は大型の磨製石斧で、丁寧な研磨が施された優品である。先端部は大きく欠損しており、基部にも着柄に伴うと思われる敲打痕が顕著に認められる。

86は炉から出土した長方形の大型石片である。

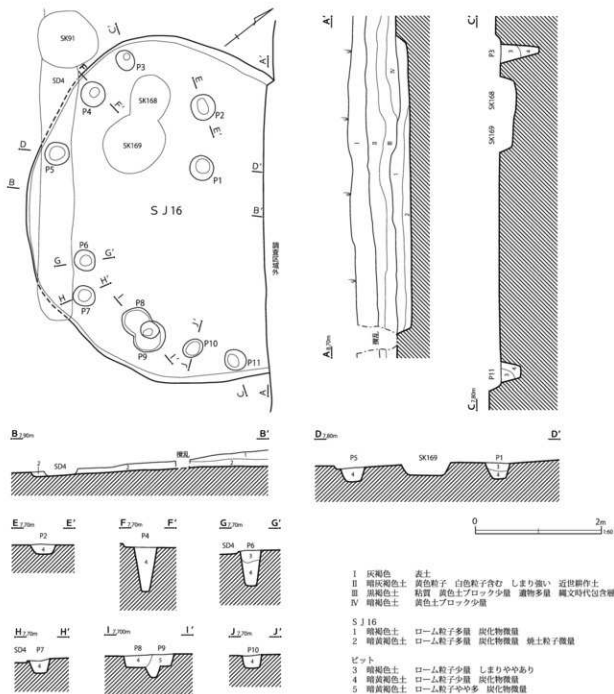
87・88は磨石で、いずれもが跡からの出土。

89は石皿の小片である。

90は土製耳飾りである。幅1.5mmほどで先端の少し尖った鉤状工具による沈線文が表裏に施される。

第39表 第15号住居跡出土遺物観察表

遺構名	棟号	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
					(cm)		(g)		
SJ15	126	82	石錐	2.8	1.7	0.9	2.6	黒曜石	
SJ15	126	83	打製石斧	(8.7)	5.0	2.2	98.3	黒色頁岩	
SJ15	126	84	磨製石斧	6.5	3.7	1.8	57.1	安山岩	
SJ15	126	85	磨製石斧	14.5	7.5	3.5	648.6	蛇紋岩	
SJ15	126	86	礫器	[14.4]	[8.8]	3.5	668.7	白雲母石英片岩	炉出土
SJ15	126	87	磨石	9.0	6.3	4.2	365.5	安山岩	炉出土
SJ15	126	88	磨石	7.5	6.7	5.7	325.7	安山岩	炉出土
SJ15	126	89	石皿	[11.4]	[3.3]	3.2	67.2	安山岩	



第127図 第16号住居跡

第16号住居跡（第127～129図）

2区で発見された遺構で、I・J-5グリッドに位置する。

南西側の一部を第4号溝跡によって壊されており、北東側三分の程は調査区域外である。

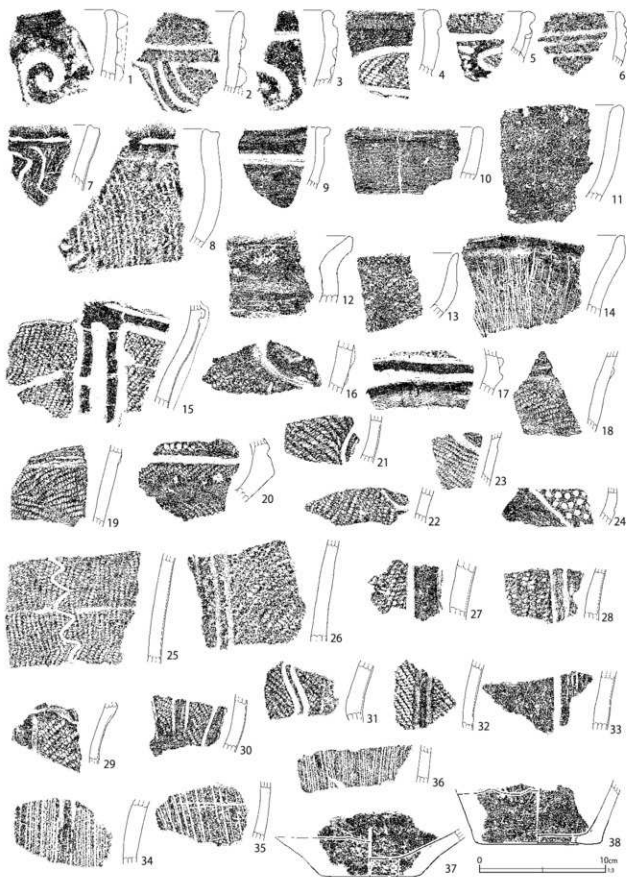
掘り込みは浅く、確認面自体が南西方向に傾斜しているようである。

が跡は検出されなかった。

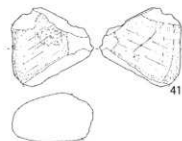
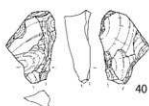
柱穴は11本検出されたが、深さや配置からは、P3・4・6・9などが主柱穴の可能性が高い。

出土遺物は少なく、いずれも破片資料のため所属時期の特定は難しいが、主体的な土器片より加曾利EⅡ式の新段階としておきたい。

1～5・15～19はキャリパー形土器で、貼付隆



第128图 第16号住居跡出土遺物 (1)



第129図 第16号住居跡出土遺物（2）

第40表 第16号住居跡柱穴計測表

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	39	37	27
P2	40	39	16
P3	32	27	61
P4	39	38	71

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P5	37	36	21
P6	34	33	57
P7	35	31	23
P8	45	(35)	21

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P9	53	47	37
P10	30	27	21
P11	33	32	31

帯による口縁部文様帯を有するものである。15は頸部付近の破片で、隆帯による懸垂文が垂下する。

6は口唇下に3条の沈線が巡り、その下位に弧状のモチーフが施されるようである。

7～9は角頭状の口唇をもつもので、7・8は口唇上に沈線が引かれる。後期縄文1式段階の土器であろう。

10～12は無文の口縁部破片で、12は大きく外反する浅鉢形土器であろう。

13・14は口唇直下に地文が施され、13は単節R Lの縄文、14は条線文である。

20は浅鉢形土器で、肩部を巡る沈線に沿って連続する刺突文が施され、屈曲部の下位には無文帯が残される。

21～24は沈線による曲線のモチーフが施されるもので、24はモチーフ内に円形刺突を充填している。

25～32は地文縄文が施されるもので、25には蛇行懸垂文が垂下し、原体は25～29が単節R L、30

～32は単節L Rである。

33～36は地文に条線文が用いられるものである。

39は石鏃で、片脚を欠損する。基部は無茎で、大きく挟りをもち、直線的な側縁も脚部で緩やかに湾曲する。

40はつまみ状の頭部をもつ石鏃で、錐部は断面三角形に作り出されるが、そのほとんどを欠損する。

41は磨石の破片である。

第17号住居跡（第130～132図）

K-14・15グリッドに位置する。

第111・136号土壌より新しく、第116号土壌に大きく壊されている。

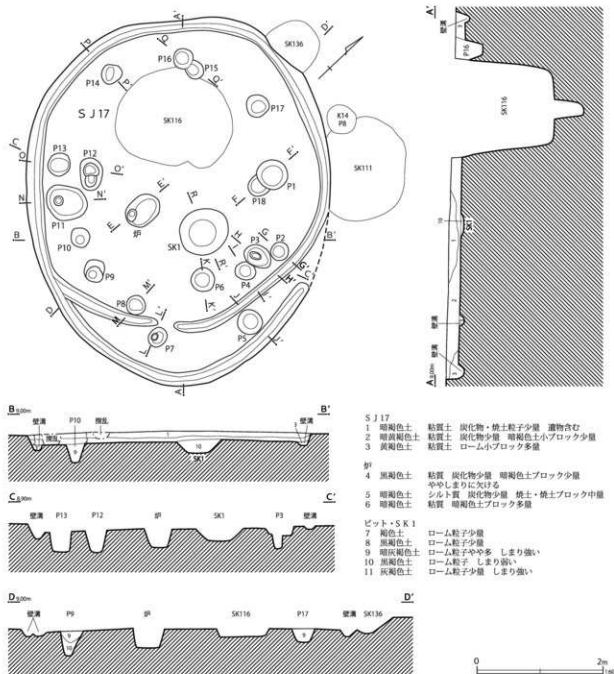
平面形は、北西～南東に長い不整形円形を呈するもので、掘り込みは20cm程である。

壁溝は基本的に全周するが、南東側で二重に検出されており、外側のものが新しい。

が跡は、遺構中央南寄りに検出され、南側をビット状の遺構で壊されているが、深さ25cm程の

第41表 第16号住居跡出土遺物観察表

遺構名	棟間	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
SJ16	129	39	石鏃	[2.5]	[1.4]	0.4	0.8	ガラス質黒色安山岩 チャート 安山岩	右脚欠損
SJ16	129	40	石鏃	[2.9]	2.0	1.0	5.6		先端部欠損
SJ16	129	41	磨石	[6.3]	[6.5]	3.9	175.7		



第130図 第17号住居跡（1）

掘り込みを有する。

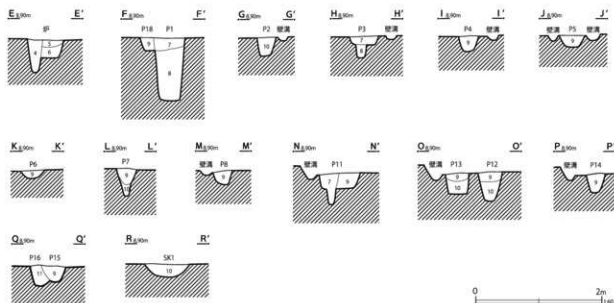
柱穴は18本検出されたが、深さや配置からは、P1・3・7～9・11・13・14・17などが主柱穴の可能性が高い。

出土遺物は少なく、いずれも破片資料であるが、主体的な土器片より本住居跡の時期は後期堀之内2式期であろう。

1・2・16～20は加曾利E式に比定されるもので、1は肥厚した口唇直下に凹線が巡る。2と20は無文。他には縄文が施文されている。

3は波頂下の隆部に刻目が施されるもので、口唇上にも沈線が引かれる。堀之内1式である。

4～9は外反する薄手の口縁部で、口唇内面には沈線が引かれる。4には紐線文が施される。



第131図 第17号住居跡（2）

第42表 第17号住居跡柱穴計測表

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	48	46	100
P2	30	27	30
P3	45	34	35
P4	32	(28)	25
P5	40	38	17
P6	38	36	14

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P7	32	28	44
P8	30	30	24
P9	36	34	39
P10	32	30	28
P11	66	54	50
P12	34	30	48

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P13	36	34	32
P14	32	30	29
P15	26	(24)	23
P16	32	30	21
P17	36	34	32
P18	32	(22)	22

4～6・11～13には沈線による幾何学文が描かれる。

10は口唇内面に数条の沈線を巡らせるもので、堀之内2式であろう。

14は内削ぎの口唇部直下の破片で、波状口縁となるものである。

15には細かい条線文が曲線的に描かれる。

21～23は縄文の施される胴部破片で、すべて単節LRの細かい縄文が横位に施文される。

24は地文に条線文が用いられるものである。

27は堀之内2式の把手である。

28・29は注口土器の注口部分である。

30は透明度の高い黒曜石の剥片である。

第18号住居跡（第133・134図）

J・K-13・14グリッドに位置する。

第19号住居跡に西側の壁が壊されている。

平面形は、直径4.9mのほぼ円形を呈し、20cm程の掘り込みを有する。

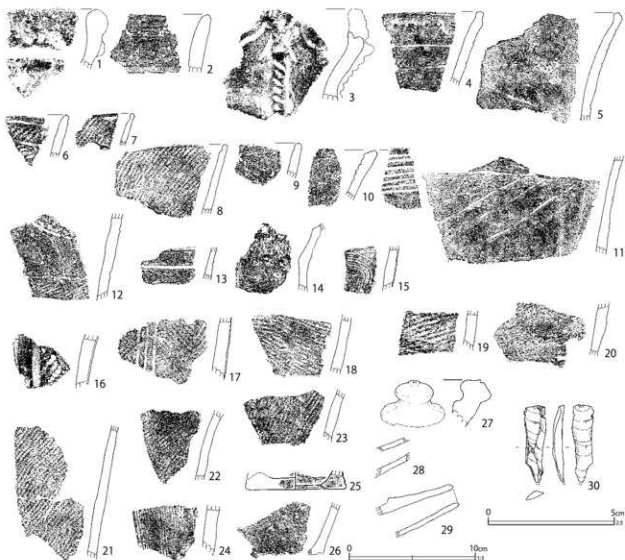
灰跡は、中央北西寄りに検出された。なお、6・8層としたものは、後世の攪乱である。また、7層下部に被熱による赤化が認められることから、7層部分が灰の本体で、9層は灰の下部構造と理解される。

柱穴は11本検出され、うちP1～9が主柱穴であろう。

出土遺物は少なく、いずれも破片資料であるが、

第43表 第17号住居跡出土遺物観察表

遺構名	棟号	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
				(cm)	(cm)		(g)		
SJ17	132	30	剥片	[3.1]	0.9	0.5	0.6	黒曜石	Pit 13 出土



第132図 第17号住居跡出土遺物

主体的な土器片より本住居跡の時期は中期末葉加曾利E IV式期であろう。

1～3は口唇下に幅狭の無文帯を残し、沈線による曲線的なモチーフが展開するものである。

4は隆帯によって無文帯を画すものである。

5・6は連弧文系の土器と思われる。

7・8は紐線文が施される堀之内式である。

14は曾利系の大形土器の頸部であろう。

15～17は口縁部下端に隆帯を巡らせる。

18～20は胴部に沈線による曲線的なモチーフが展開するもので、磨り消し縄文が用いられる。

21は地文に条線、22～26は縄文が施される。

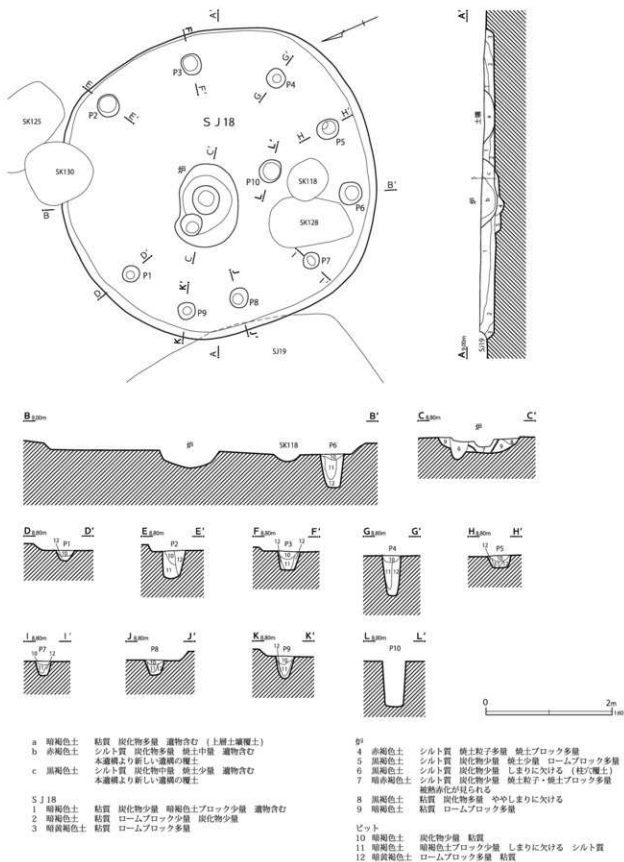
27・28は並行沈線によって幾何学文が描かれるもので堀之内2式である。

第42表 第17号住居跡柱穴計測表

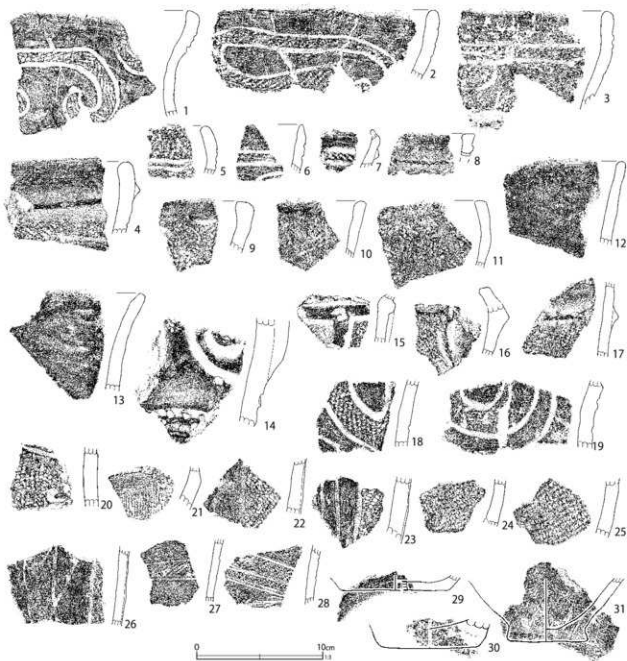
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	48	46	100
P2	30	27	30
P3	45	34	35
P6	38	36	14

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P7	32	28	44
P8	30	30	24
P9	36	34	39
P12	34	30	48

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P13	36	34	32
P18	32	(22)	22



第133図 第18号住居跡



第134図 第18号住居跡出土遺物

第19号住居跡 (第135・136図)

J-12・13・14グリッドに位置する。

第18号住居跡より新しく、北西壁は第1号炉跡に壊されている。

平面形は6.8m×6mの不整楕円形を呈するが、土層断面で3・4層としたものは炉跡より古いことから、いわゆる貼り床に相当するものである。

炉跡は、中央東寄りに検出され、径80cmほど

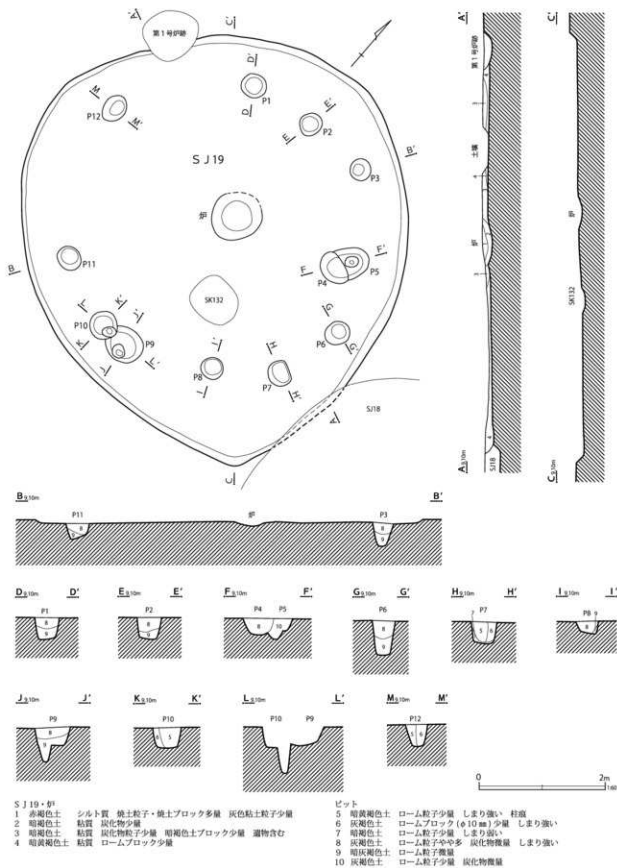
の浅い掘り込みの地床炉である。

柱穴は、壁に沿って12本が検出されている。

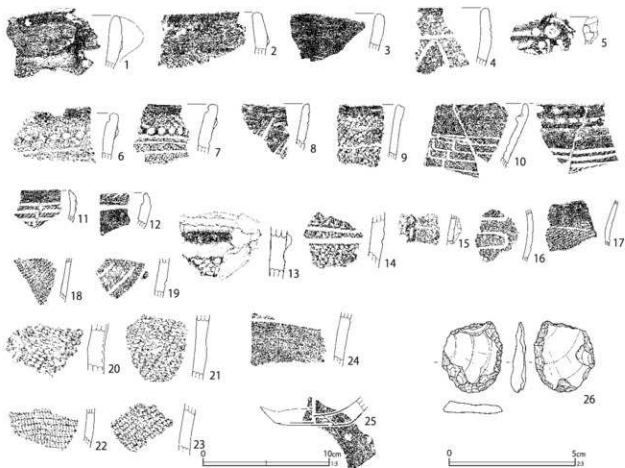
出土遺物は少なく、いずれも破片資料のため遺構の時期の特定は難しいが、第18号住居跡よりも新しいことから、後期堀之内式段階と考えたい。

1～4・13・20・21は加曾利EⅣ式段階に比定されるもので、1～3は幅狭の無文帯をもつ。

5・14は堀之内1式、6～9・15は堀之内2式



第135図 第19号住居跡



第136図 第19号住居跡出土遺物

であろう。5は突起、6・7には紐線文が施され、8は口唇直下から並行沈線文が斜行し、15には「8」字状の貼付文が見られる。

10～12・16～19は加曾利B式であろう。10・11は、沈線によるL状の横帯文が重層するもので、16・19には沈線文が施される。

14・22～24も後期の資料であろう。

26は楕円形の剥片の周縁に表裏から調整加工を施したもので、図の上部は欠損と思われる。

第20号住居跡 (第137・138図)

J-12グリッドに位置する。

掘り込みは確認できなかったが、炉跡を中心に11基のビットが検出されたもので、平面形は不明である。なお、4層としたものは、炉跡に切られていることから床面下に位置し、いわゆる貼り床に相当するものである。

炉跡は、径約60cm、深さ15cm程の掘り込みをもつ地床炉である。

第45表 第19号住居跡柱穴計測表

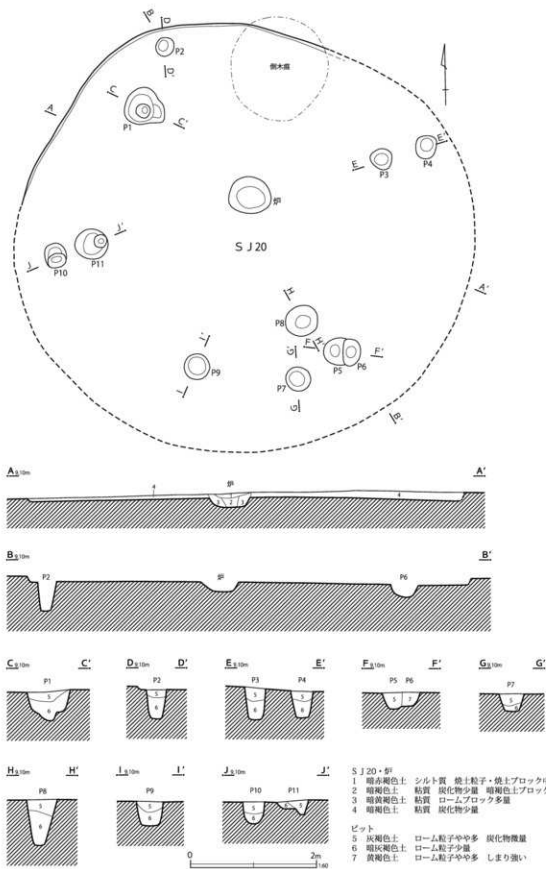
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	40	37	34
P2	37	34	36
P3	35	33	35
P4	53	(37)	27

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P5	48	(41)	34
P6	40	36	55
P7	40	33	41
P8	35	34	21

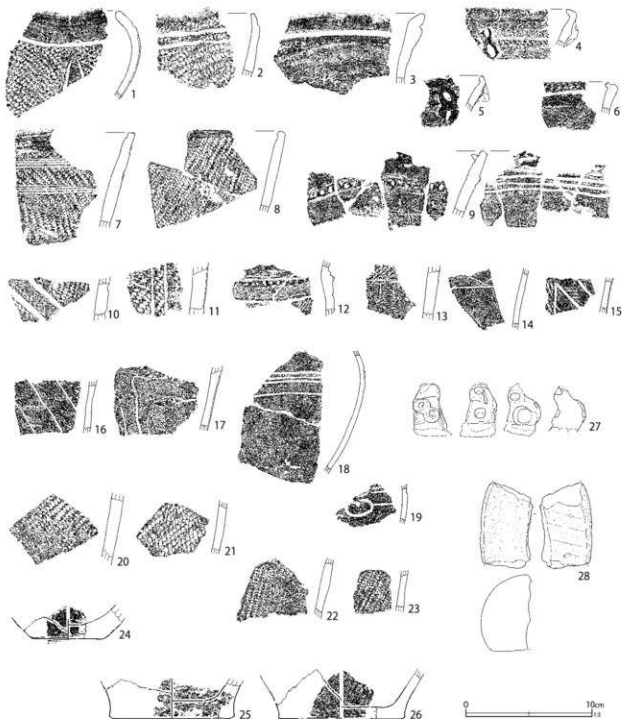
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P9	53	(52)	55
P10	45	44	72
P11	38	36	26
P12	45	34	35

第46表 第19号住居跡出土遺物観察表

遺構名	挿図	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
				(cm)			(g)		
SJ19	136	26	スクレイパー	2.9	2.4	0.6	4.0	チャート	



第137図 第20号住居跡



第138図 第20号住居跡出土遺物

第47表 第20号住居跡柱穴計測表

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	62	42	45
P2	27	27	44
P3	32	30	47
P4	34	32	39

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P5	40	26	19
P6	40	28	23
P7	37	36	26
P8	49	45	70

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P9	39	38	36
P10	37	33	31
P11	48	46	21

第48表 第20号住居跡出土遺物観察表

遺構名	棟図	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
				(cm)	(cm)		(g)		
SJ20	138	28	石皿	[6.8]	[4.2]	6.2	196.3	安山岩	

柱穴は11本検出され、深さや配置からはP 1～4・6・9・10などが主柱穴の可能性が高い。

出土遺物は少ないが、主体を占める土器片から本住居跡の時期は後期堀之内2式段階であろう。

1・2は内湾する口唇下に沈線が巡るもので加曽利EⅣ式である。

3～17は後期の堀之内式段階の土器で、3・10・11が堀之内1式、他は堀之内2式であろう。

4・5・9・12には紐線文が施され、4・5には「8」字状の貼付文が付される。

18・19は加曽利B 1式であろう。横走る沈線が施され、19には「の」字縄文が付される。

20～23も横位施文の縄文が施されるもので後期の資料であろう。

27は堀之内2式土器の環状の把手である。

28は石皿の小片である。表面の整形は、非常に丁寧に行われている。

第21号住居跡 (第139・140図)

I・J-11グリッドに位置する。

南東側を攪乱によって壊されるが、平面形は5.0m×4.6mの隅丸方形を呈するようである。

炉跡は、住居跡中央南寄りに検出され、深さ22cm程の掘り込みを有する。土層の観察からは、

4層上部が被熱のため赤化していることから、使用時にはその下位に土器等が埋設されていた可能性がある。

柱穴は、壁に沿って14本検出されているが、P 15・16は極端に深いことから、他の遺構の可能性はある。

炉跡の南側で埋没が出土している。

出土遺物は少ないが、炉跡出土土器や埋没から、本住居跡の時期は加曽利EⅣ式期であろう。

1・4・5は無文の口縁が内傾する小波状の土器で、1には尖頭状のモチーフが描かれる。

2・3はいわゆる両耳壺の把手である。

8・9も口縁の無文部を沈線で画す波状口縁の土器で、沈線によるモチーフ内は磨り消される。

10は沈線による弧状のモチーフが施されるもので連弧文系の土器であろう。

12・13は地文縄文に懸垂文が垂下するもので、懸垂文内は磨り消される。

14は地文に条線が用いられるものである。

6は暗赤色のチャートの剥片で、部分的に加工の痕が認められる。

7は周辺部が薄く作られた板状の石器で、研磨によるとと思われる平滑面が観察される。

第49表 第21号住居跡柱穴計測表

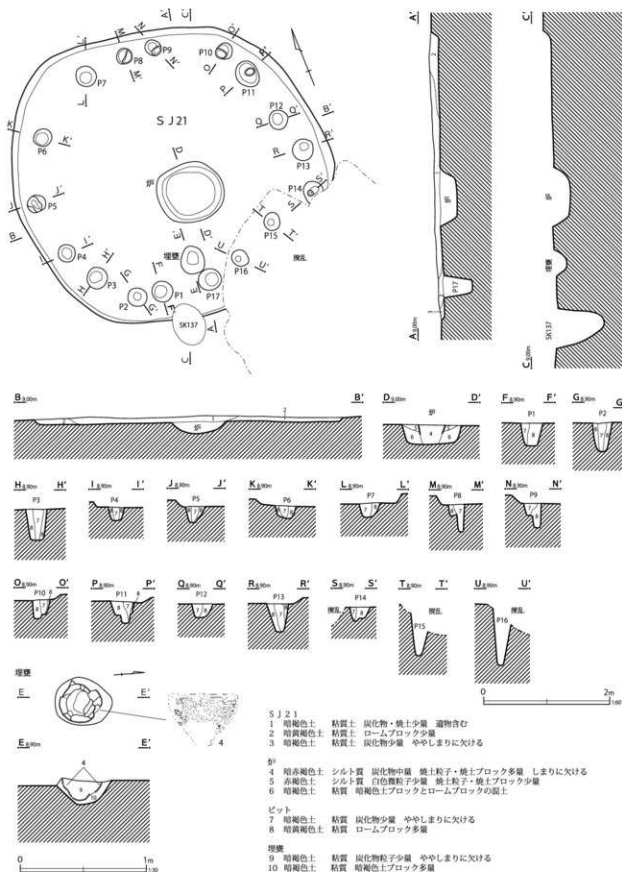
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	33	33	35
P2	30	30	45
P3	35	32	48
P4	28	27	20
P5	30	26	24
P6	29	29	20

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P7	32	32	22
P8	25	24	43
P9	27	23	39
P10	27	25	32
P11	43	35	33
P12	31	30	22

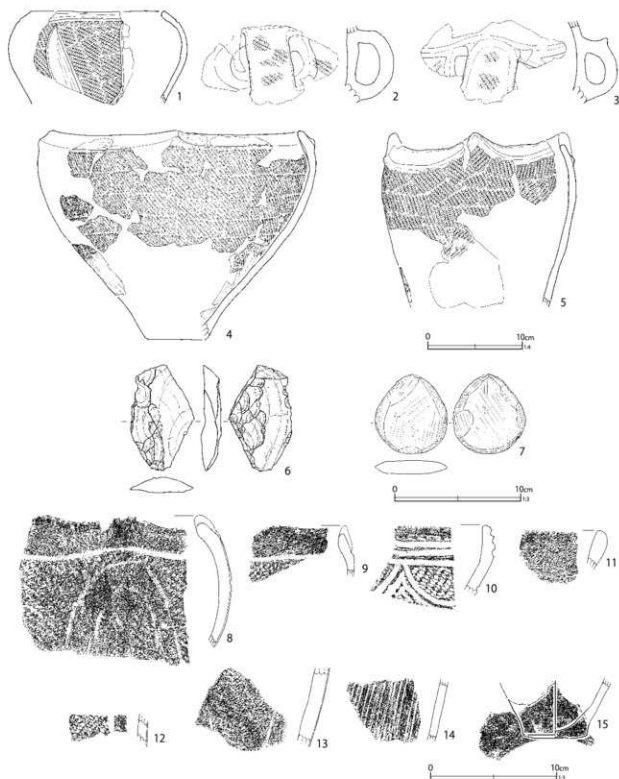
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P13	35	34	45
P14	32	23	22
P15	28	25	68
P16	27	25	91
P17	36	34	45

第50表 第21号住居跡出土遺物観察表

遺構名	棟図	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
				(cm)	(cm)		(g)		
SJ21	140	6	剥片	4.2	2.5	0.8	8.1	チャート	二次加工
SJ21	140	7	砥石	6.3	5.7	1.2	45.8	砂岩	



第139図 第21号住居跡



第140図 第21号住居跡出土遺物

第22号住居跡 (第141・142図)

J・K-14グリッドに位置する。

第17号住居跡の北西側に隣接して検出されたものであるが、西側の大部分が後世の攪乱によって

壊されており、南東の壁際に焼土が確認されたのみである。

北東方向に直線的に検出された壁と出土遺物から、8世紀後半段階の遺構の可能性がある。

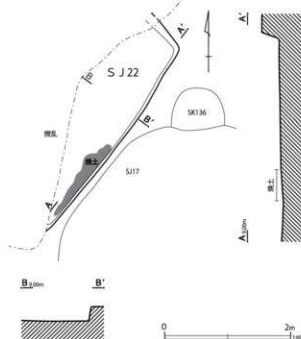
1は南比企産の須恵器坏口縁部で、細片7点が接合したものである。他に同一個体と考えられる底部細片も近くから出土しており、糸切痕を無調整で残す。

その他の遺物として、堀之内2式段階の縄文土器片が3点出土している。2・3は口縁下に紐線文が巡るもので、2には「8」字状の貼付文が見られる。4の地文は単節L Rである。

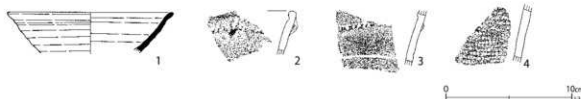
第23号住居跡（第143～148図）

I-10・11グリッドに位置する。

北西側を掘削によって大きく壊されており、北側の一部も調査区域外であるため、平面形は不明



第141図 第22号住居跡



第142図 第22号住居跡出土遺物

第51表 第22号住居跡出土遺物観察表

遺構名	棟号	番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存 (%)	焼成	色調	備考
					(cm)							
SJ22	142	1	須恵器	坏	(13.0)	[3.2]	-	BG	10	普通	-	南比企 細片化したものが接合

であるが、掘り込みは深く47cm程である。

また、遺構東側を、第6号溝跡によって大きく壊されている。

炉跡は遺構中央付近で検出され、1.2m×0.8mの浅い掘り込みを有する地床炉である。炉跡の南側床面から多数の土器片が出土しており、2個体の土器が復元された（第144図1・3）。

柱穴は9本検出されているが、深さや配置からはP2・3・5・8などが主柱穴の可能性が高い。

1は隆帯による口縁部文様帯をもつもので、おそらく4単位の波状口縁となる。波頂下に渦巻文を配し、その下位に2本乃至3本沈線による懸垂文が垂下する。内外面とも風化著しく、被熱に起因すると思われる。

3・29は口縁部文様帯をもたないもので、2本沈線による懸垂文が施される。地文は0段多条の単節R Lである。被熱の痕跡はない。

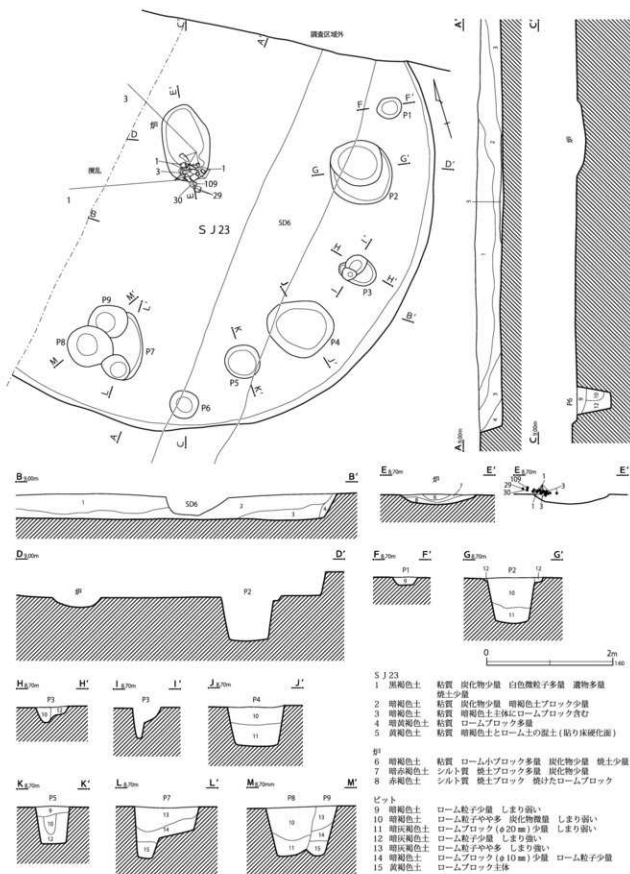
4～15・39～49は貼付隆帯による口縁部文様帯を有するキャリバー形土器で、13～15は波状口縁である。

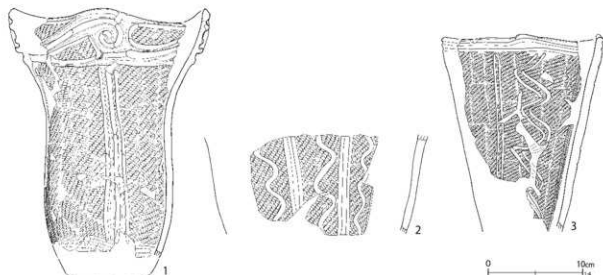
19～21・51～53は連弧文系の土器である。

22・23は内湾する口唇下に凹線を巡らせるもので、22には円形の刺突文が二段巡り、地文は条線文である。

27は単節L Rの縄文が施される環状の把手で、25～27は両耳壺と思われる。

28は大型の浅鉢形土器である。





第144図 第23号住居跡出土遺物（1）

30～35は堀之内1式段階の土器であろう。30・31は小波状の口縁で、口唇上に沈線が施され、突起部分には「の」字状の沈線文が配される。32～34は7、8本単位の条線文が施され、35には2本の沈線を用いた曲線的な文様が描かれる。

36は外反する口縁で堀之内2式、37・38・62は加曾利B式であろう。62の口縁には、径3mm程の孔が斜めに貫通している。

54・55は並行沈線を地文にもつ曾利系の土器、56～58は肩部が大きく外側に開く無文の浅鉢、59～61は加曾利E IV式段階の土器である。

63～65は幾何学的なモチーフの施される堀之内2式である。

66は本遺跡では唯一の出土例で、浮線文の施された諸磯b式の口縁部破片である。

67～74は地文に条線文が施されるもので、いずれも加曾利E式に伴うものとおもわれる。

75～105は地文縄文および懸垂文のみが施され

る胴部破片である。

106～113は底部破片を一括した。胎土・形状から、111～113が後期、他は中期であろう。

石器は9点出土している。

114は肉厚の剥片の端部に粗い調整を施したものである。調整の部位や形状から、小型の打製石斧の可能性もあろう。

115はチャート製の剥片で、部分的に加工の痕が認められるものである。

116は非常に小型の磨製石斧である。表面の調整は丁寧で、刃部は薄く作られ、使用のためか片減りが認められる。

117は定角式の磨製石斧で、大型品である。刃部側を大きく欠損するが、表面の調整は非常に丁寧で、基部には細かい敲打痕が認められる。

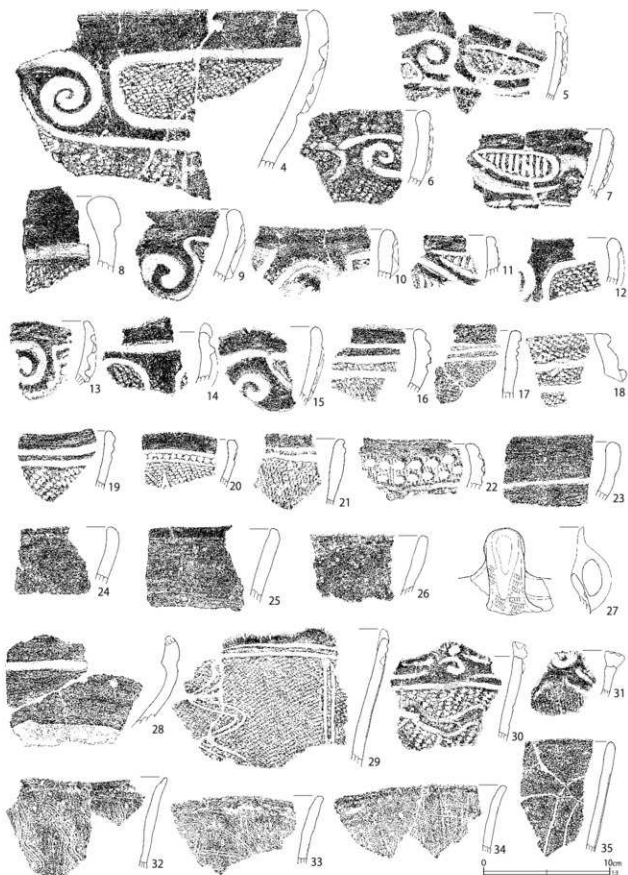
118は打製石斧で、大きく自然面が残る剥片を利用している。また、基部と先端部の剥離は粗く、周縁に比べて摩擦が少ないことから、使用に伴う

第52表 第23号住居跡柱穴計測表

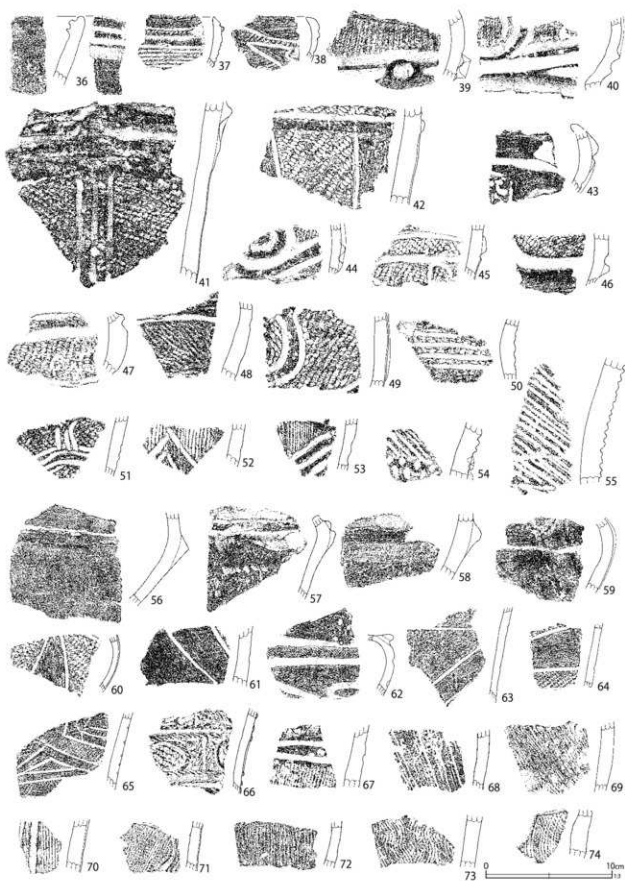
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	38	31	13
P2	100	95	70
P3	61	45	49

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P4	106	89	67
P5	55	52	59
P6	46	43	55

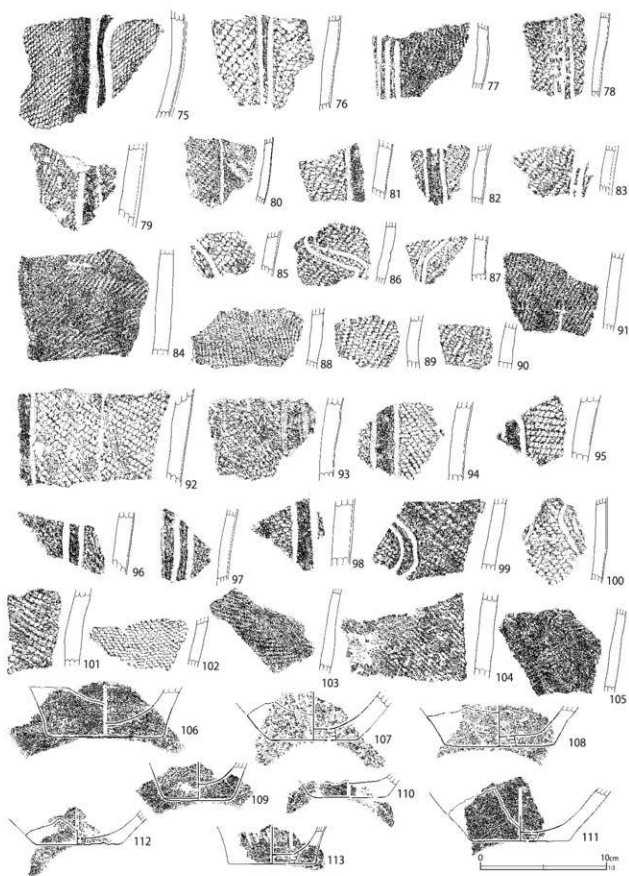
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P7	107	47	83
P8	72	63	78
P9	57	48	80



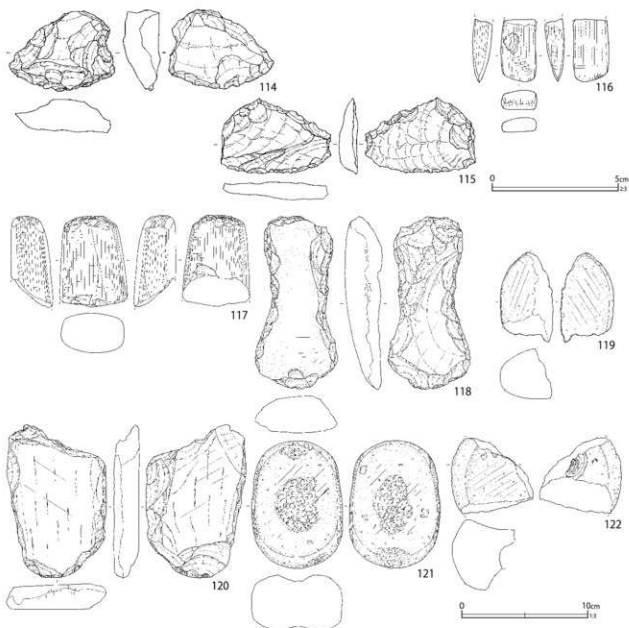
第145图 第23号住居跡出土遺物 (2)



第146图 第23号住居跡出土遺物 (3)



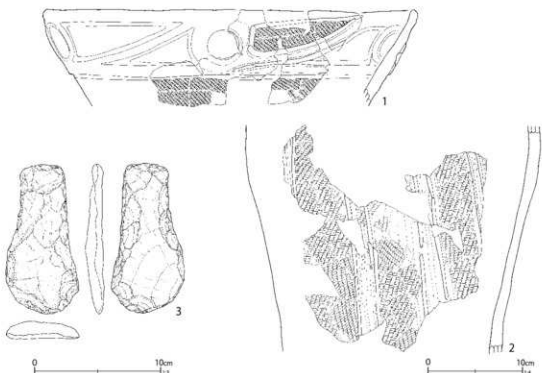
第147图 第23号住居跡出土遺物 (4)



第148図 第23号住居跡出土遺物（5）

第53表 第23号住居跡出土遺物観察表

遺構名	棟図	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
SJ23	148	114	スクレイパー	3.2	4.2	1.5	20.3	頁岩	二次加工
SJ23	148	115	刮片	3.0	4.4	0.8	10.6	チャート	
SJ23	148	116	磨製石斧	(2.5)	1.3	0.7	4.6	凝灰岩	
SJ23	148	117	磨製石斧	(7.2)	(5.3)	3.4	210.9	緑色凝灰岩	
SJ23	148	118	打製石斧	13.7	6.5	2.9	296.1	ホルンフェルス	9号跡 Pit 8出土
SJ23	148	119	磨石	(7.1)	(4.2)	4.2	124.3	安山岩	
SJ23	148	120	打製石斧	12.1	7.9	2.1	296.7	結晶片岩	
SJ23	148	121	磨石	10.1	7.2	4.5	499.1	安山岩	
SJ23	148	122	石皿	6.0	6.4	5.9	146.7	安山岩	



第150図 第24号住居跡出土遺物(1)

柱穴は9本検出されたが、深さや配置からP1・5・7・9などが本来の主柱穴として機能していたと思われる。

出土遺物は少なく、遺構の時期の特定は難しいが、主体を占める土器から加曽利EⅢ式期であろう。

1は直線的に外反する口縁に、隆帯による円文と区画文が施される。地文は単節R Lの横位施文である。

4～7・16～18はキャリバー形土器で、貼付隆帯による口縁部文様帯を有するものである。

8は口唇下の2本沈線間に交互刺突が施される

もので、連弧文系の土器である。

9～12は無文の口縁部破片で、9は鉢型の土器、12・19は両耳壺であろう。

2・20～31は地文縄文および懸垂文が施される胴部破片で、地文には2・20～24は単節R L、25～31は単節L Rが縦位に施文される。25・26・30は同一個体の可能性がある。

32～34は地文に条線が用いられるもの(32は貼付隆帯による懸垂文で、隆帯上には刻目)。

3は打製石斧で、完形品である。片面に大きく自然面を残す破片が使用され、両面から調整加工が施されているが、風化のため明瞭ではない。

第54表 第24号住居跡柱穴計測表

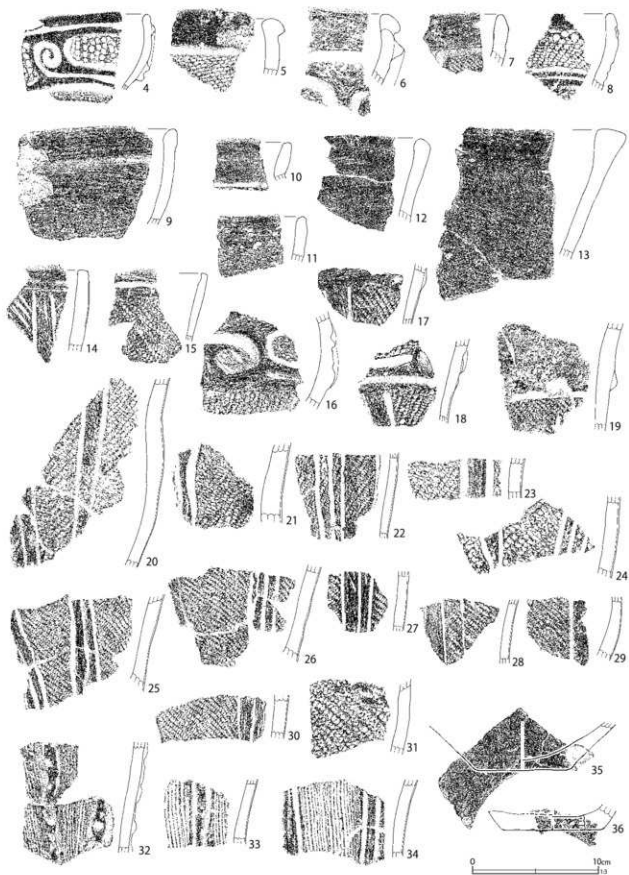
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	45	36	48
P2	64	42	65
P3	29	26	57

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P4	25	25	33
P5	30	28	42
P6	43	40	42

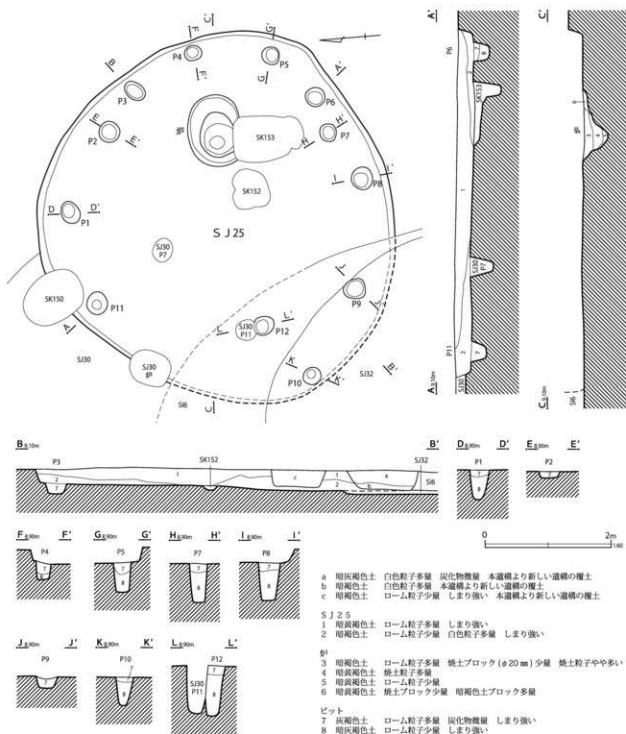
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P7	40	34	46
P8	32	30	16
P9	32	28	50

第55表 第24号住居跡出土遺物観察表

遺構名	挿図	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
				(cm)			(g)		
SJ24	150	3	打製石斧	11.9	5.8	1.5	105.6	頁岩	



第151图 第24号住居跡出土物 (2)



第152図 第25号住居跡

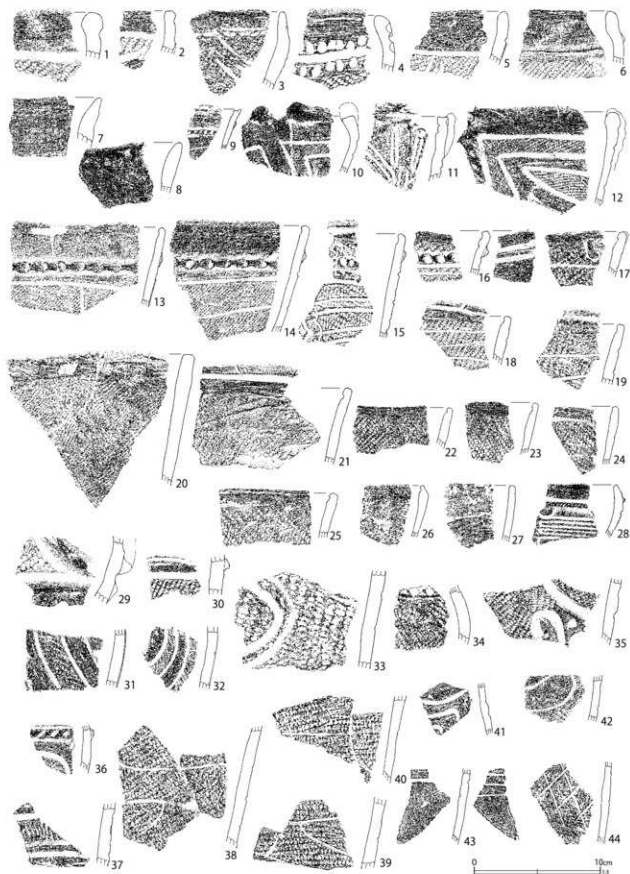
第25号住居跡 (第152～154図)

H・I-9・10グリッドに位置する。

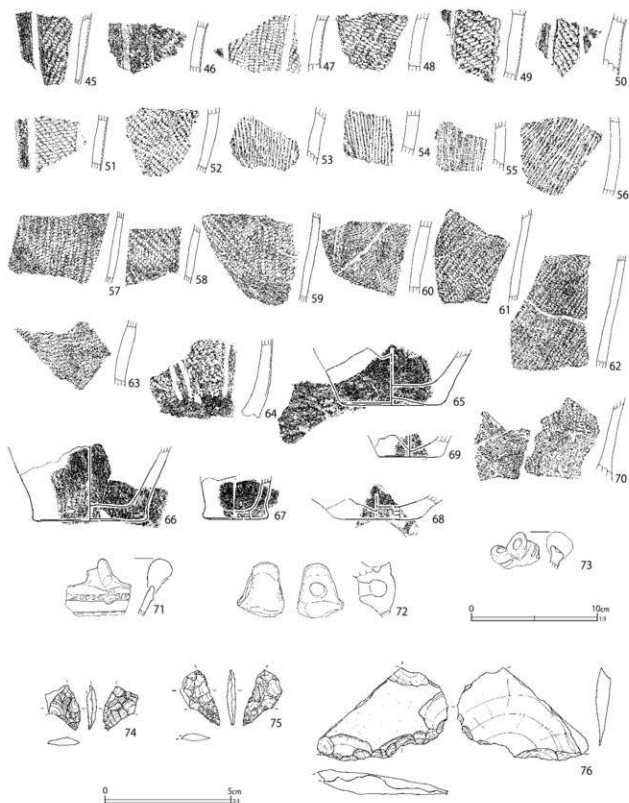
重複関係にある遺構は多く、西側から南側にかけて第30・32号住居跡、第6号竪穴状遺構と重複関係にあり、土層の観察等から両住居跡より新しいが、竪穴状遺構との関係は不明である。

炉跡は、遺構東寄りに検出され、深さ40cm程度の掘り込みを有する。なお、5層及び東側に浅く広がる。6層は掘り方に相当しよう。

柱穴は壁に沿って11本検出されたが、深さや配置からはP1・4・5・8・10・11などが主柱穴の可能性が高い。



第153图 第25号住居跡出土遺物 (1)



第154图 第25号住居跡出土遺物(2)

第56表 第25号住居跡柱穴計測表

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	37	29	47
P2	33	32	11
P3	35	26	16
P4	27	23	24

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P5	28	27	47
P6	31	30	26
P7	27	26	63
P8	36	33	59

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P9	35	32	20
P10	29	27	45
P11	37	36	24
P12	(32)	30	69

出土遺物は少なく、いずれも破片資料であるが、主体を占める土器片より、本遺構は加曽利B式期に属するものと考えられる。

1～8・29～35は中期後葉加曽利E式系の土器である。1・2・29・30は口縁部文様帯を有するキャリバー形土器で、3・4・34は口唇下に列点文が巡る連弧文系の土器である。

9は受口状の口唇部で、口唇下に紐線文が施される堀之内2式である。

10～28・36・38～44は後期中葉の加曽利B式の土器である。10～12は口唇に小突起を有し、13～16・36は紐線文が施されるものである。28は横帯文構成の土器で「の」の字文が見られる。38～42は沈線による曲線的モチーフが施されるもので、加曽利B2式であろう。44には沈線による斜格子文が施される。

37・45～56は加曽利E式段階と思われる胴部破片である。37は連弧文系の土器であろう。

57～63は後期に属する胴部破片である。57～59は単節RL、60～63は単節LRで、いずれも横位施文である。

71～73は土器の口縁につく突起で71・73は加曽利B式、72は堀之内式であろう。

74・75は石製の脚部の破片で、無茎の基部に大きく抉りをもつものである。

76は薄い横長の剥片に調整加工を施したもので、図の左側は欠損である。

第26号住居跡（第155～164図）

I・J-12・13グリッドに位置する。

本遺跡ではもっとも大型の住居跡で、96基の柱穴が検出された。平面形は、凡そ東西8m、南北6.5mの不整隅丸方形を呈し、南側に「ハ」の字状のビット列が付属するものである。

が跡は、南寄りに1基検出され、0.8m×0.7m程の掘り込みを有する地床炉である。

柱穴は、中央の居住部分で61基が複雑に重なり合って検出されたが、覆土の観察から3群に分類され、土層13～15層及び16～18層のものをA群、19～21層をB群、22～24層をC群とした。

なお、柱穴同士の重複関係からは、A群が最も新しいことが確認できるが、B群とC群の関係は明瞭ではない。

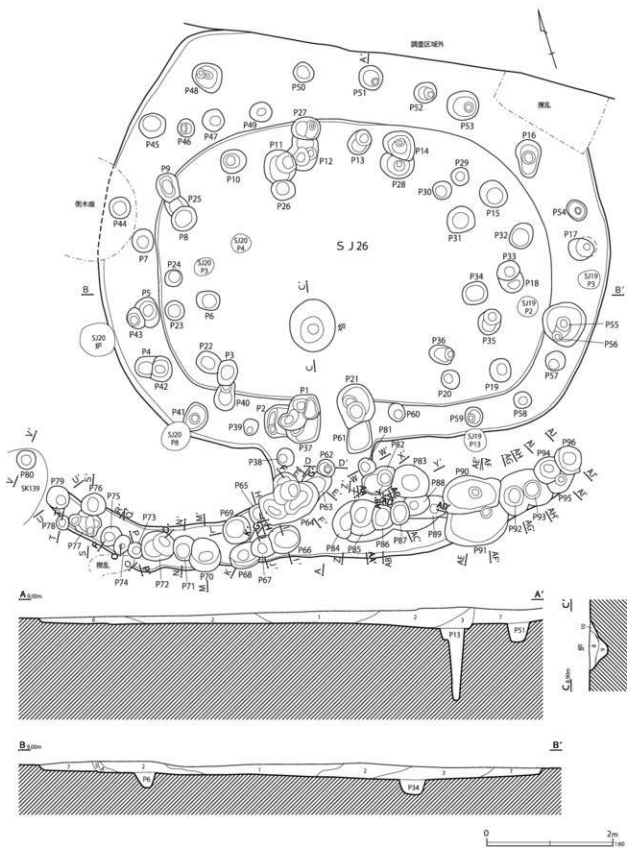
一方、床面には同心円状の段差が複数検出され、覆土の土層堆積状態を見ると、1～3層、4・5層、6・7層に分けることが可能である。先程の柱穴の配列と併せると、1～3層がA群、4・5層がB群、そして6・7層がC群に対応させることができそうである。従ってC群→B群→A群の順に変遷したものと思われる。

また、が跡が1基であることと、各群の柱穴列がほぼ同様の形状を呈していることから、1軒の住居の変遷の過程と考えたい。

なお、南側の「ハ」の字状のビット列については、残念ながら土層による分類はできなかったが

第57表 第25号住居跡出土遺物観察表

遺構名	採図	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
				(cm)	(cm)		(g)		
SJ25	154	74	石鏃	[1.7]	[1.4]	3.0	0.7	黒曜石	脚部
SJ25	154	75	石鏃	[2.2]	[1.6]	0.4	0.9	チャート	脚部
SJ25	154	76	剥片	[5.2]	[3.7]	1.0	12.9	黒色頁岩	二次加工



第155图 第26号住居跡 (1)

C群の柱六列に伴う掘り込みに連続して構築されていることから、最も古い段階から用意され、最終段階まで機能していたものと推測される。

出土遺物は比較的少ないが、主体を占める土器片より、本遺構の時期は加曾利B式期としたい。

1・2は加曾利B1式の鉢形土器である。

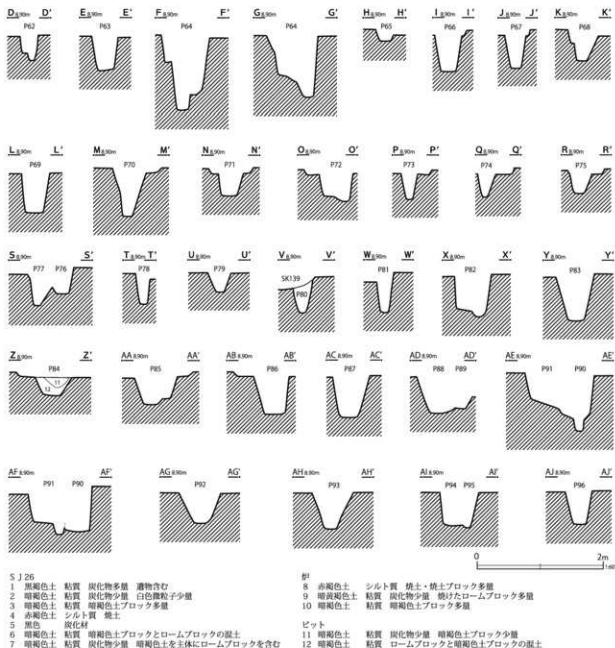
3は大型の石織で片脚と先端部を欠損する。

4は小型の打製石斧で、刃部には使用痕が認められる。

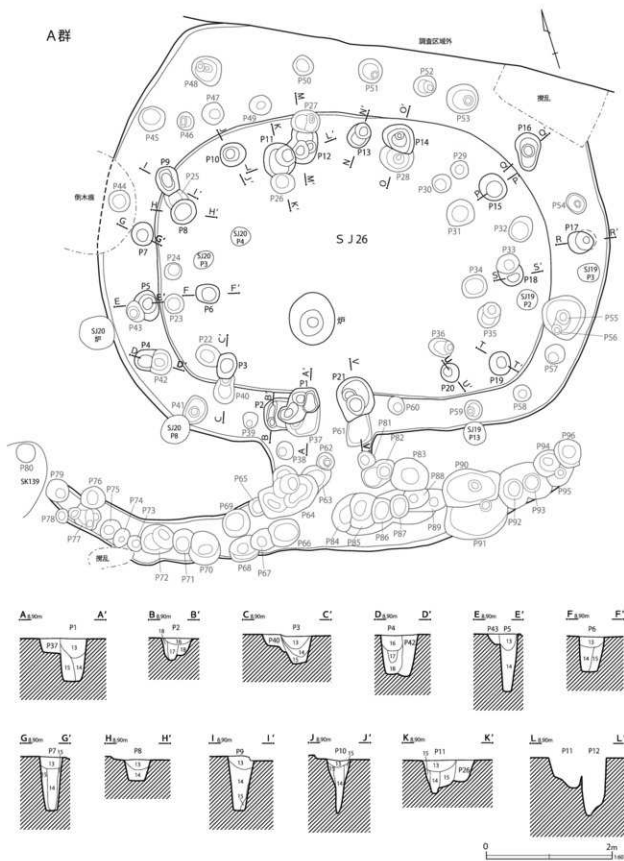
5・9・38~54は加曾利E式の土器である。5・

6は連弧文系の土器、7・38~41は貼付隆帯による口縁部文様帯を有するものである。

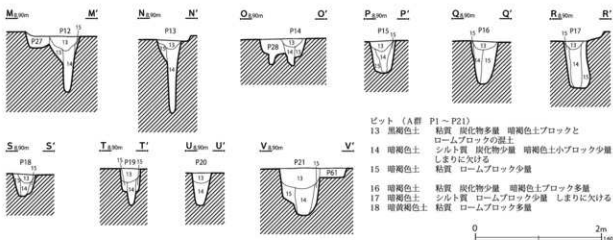
10~20・55~68は堀之内式である。10は波頂部につく把手である。11~13・55は紐線文が施されるもので、12の内面には沈線で渦巻文、55には「8」字状の貼付文が施される。15・16・56は口唇下に連続した円形刺突が施される。17~20・58~65には、沈線による三角形あるいはX状のモチーフが展開され、66~68には同じく沈線による鋸歯状のモチーフが描かれる。堀之内2式であろう。



第156図 第26号住居跡 (2)



第157图 第26号住居跡 (3)



第158図 第26号住居跡 (4)

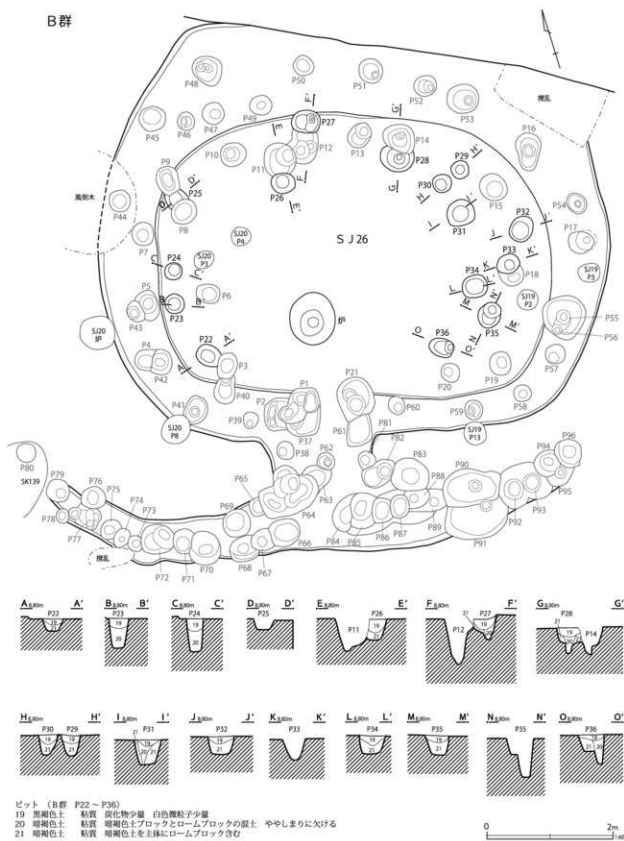
第58表 第26号住居跡柱穴計測表

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	72	50	68
P2	49	[23]	35
P3	40	30	44
P4	33	[26]	62
P5	49	[29]	89
P6	37	31	57
P7	37	35	85
P8	40	40	33
P9	[43]	34	86
P10	40	37	86
P11	52	(49)	49
P12	(49)	40	91
P13	41	32	116
P14	54	43	53
P15	45	41	50
P16	59	32	68
P17	39	34	75
P18	37	(23)	34
P19	36	35	47
P20	31	29	51
P21	[62]	59	75
P22	(37)	32	18
P23	31	30	45
P24	27	27	58
P25	33	[15]	20
P26	38	32	33
P27	45	36	38
P28	53	(32)	41
P29	28	27	26
P30	29	28	28
P31	45	41	39
P32	42	36	25

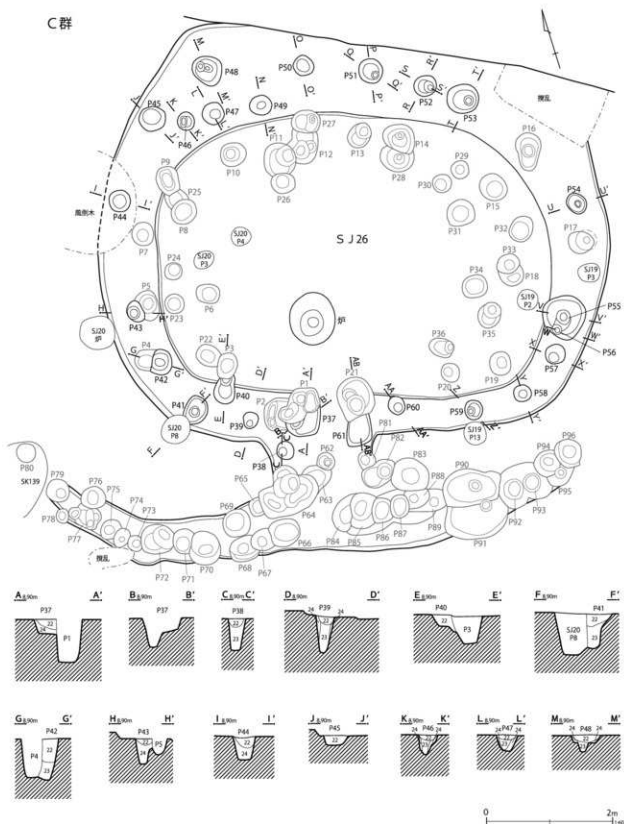
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P33	36	30	32
P34	39	36	25
P35	42	34	62
P36	38	28	41
P37	54	35	45
P38	[29]	27	50
P39	26	24	57
P40	(40)	28	21
P41	(41)	36	53
P42	39	[32]	66
P43	33	[24]	41
P44	35	34	38
P45	45	38	15
P46	28	25	26
P47	34	34	25
P48	48	45	32
P49	35	32	39
P50	33	33	38
P51	38	37	42
P52	36	33	59
P53	51	47	32
P54	33	29	43
P55	70	66	46
P56	16	15	7
P57	32	32	41
P58	28	26	53
P59	30	28	44
P60	29	25	40
P61	43	40	20
P62	[28]	27	39
P63	42	[20]	54
P64	97	77	97

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P65	28	[18]	17
P66	[48]	42	55
P67	33	33	51
P68	38	[36]	48
P69	44	44	71
P70	54	50	78
P71	39	[29]	36
P72	[51]	46	44
P73	27	[22]	40
P74	31	[23]	36
P75	34	[24]	32
P76	41	34	33
P77	52	[35]	46
P78	23	20	48
P79	37	36	31
P80	31	29	56
P81	[27]	26	65
P82	56	[34]	67
P83	60	[54]	77
P84	58	[31]	29
P85	57	[32]	44
P86	[40]	[30]	60
P87	[36]	[30]	65
P88	[40]	[35]	56
P89	[33]	27	50
P90	[88]	[55]	70
P91	98	[55]	49
P92	66	[40]	48
P93	66	[35]	57
P94	[38]	[36]	51
P95	[38]	[25]	55
P96	46	[42]	52

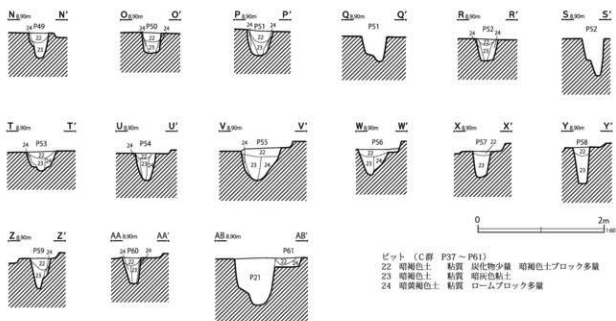
B群



第159図 第26号住居跡 (5)



第160图 第26号住居跡 (6)



第161図 第26号住居跡 (7)

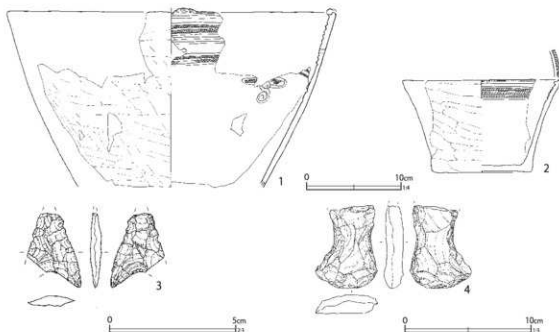
21～30・69～72は加曽利B式である。21～26は横帯文構成、27は紐線文の土器である。30には大きな鋸歯状のモチーフが描かれ、69には斜格子文が施される。

31～37・74～81は縄文のみが施される後期の土器で、すべて横位施文である。

86～89の底部には網代痕が残されている。

第59表 第26号住居跡出土遺物観察表

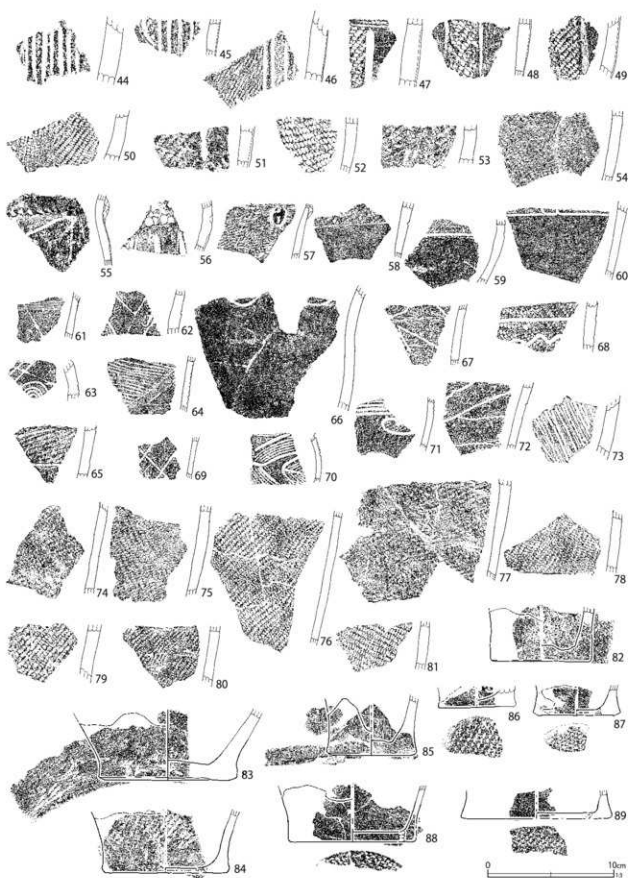
遺構名	挿図	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
SJ26	162	3	石鏃	[3.0]	[2.2]	0.5	2.4	頁岩	
SJ26	162	4	打製石斧	[6.6]	[4.9]	1.5	57.5	ホルンフェルス	



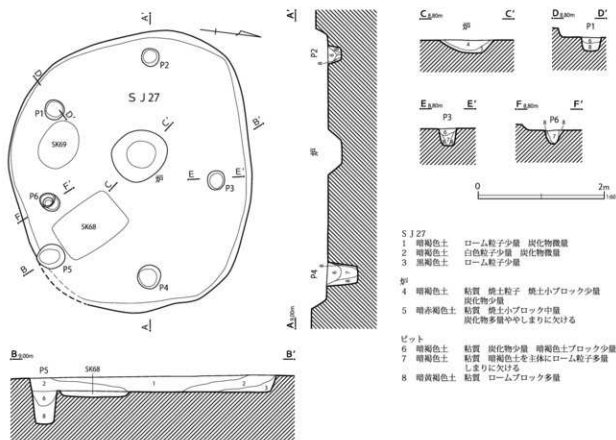
第162図 第26号住居跡出土遺物 (1)



第163图 第26号住居跡出土遺物 (2)



第164图 第26号住居跡出土遺物 (3)



第165図 第27号住居跡

第27号住居跡（第165・166図）

H-9グリッドに位置する。

平面形は4.6m×3.9mの不整楕円形を呈する小型の住居跡で、第69号土壌よりも古く、第68号土壌を壊して造られている。

炉跡は、中央部で検出され、深さ22cm程の掘り込みをもつ地床である。

柱穴は壁に沿って6本検出されている。

出土遺物は少ないが、主体を占める土器片より、本住居跡の時期は、加曾利EⅢ式期であろう。

1～11は口縁部破片である。

1～9・12～18は隆帯による口縁部文様帯を有するキャリバー形土器で7・8は波状口縁となる。

地文は12・18が燃糸文、17が条線文である。

19は沈線文内に細かい単筋LRの縄文が充填されるもので、堀之内2式であろう。

20～27は地文縄文及び懸垂文の施される胴部破片である。

28・29は地文に条線が用いられるものである。

30は3本沈線による曲線的なモチーフが描かれるもので堀之内1式であろう。

33は細長い自然石の破片を利用したもので、下端部に敲打痕および擦痕が認められる。

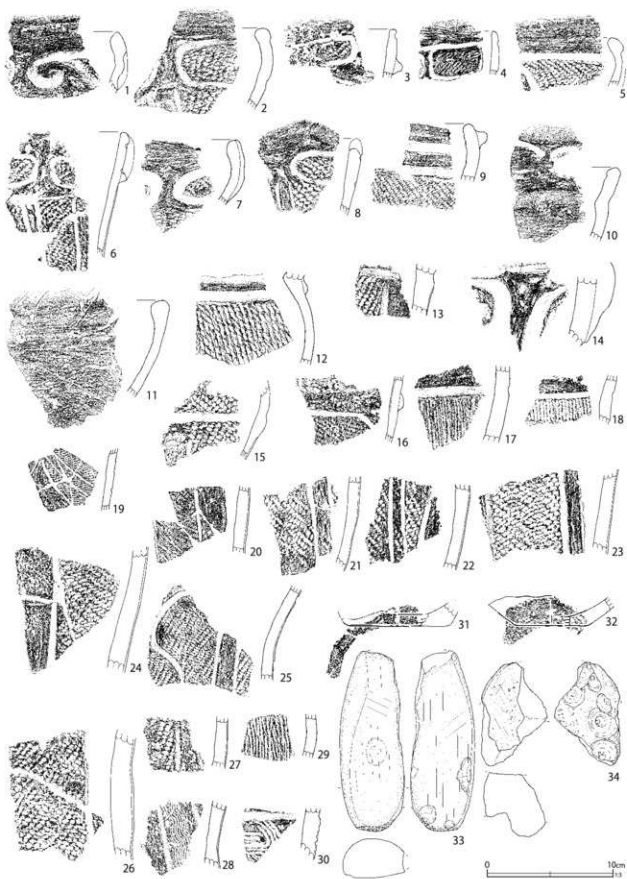
34は石皿の小片で、側縁部に当たる。上面は平滑に整えられ、裏面には漏斗状の凹みが顕著である。

第60表 第27号住居跡柱穴計測表

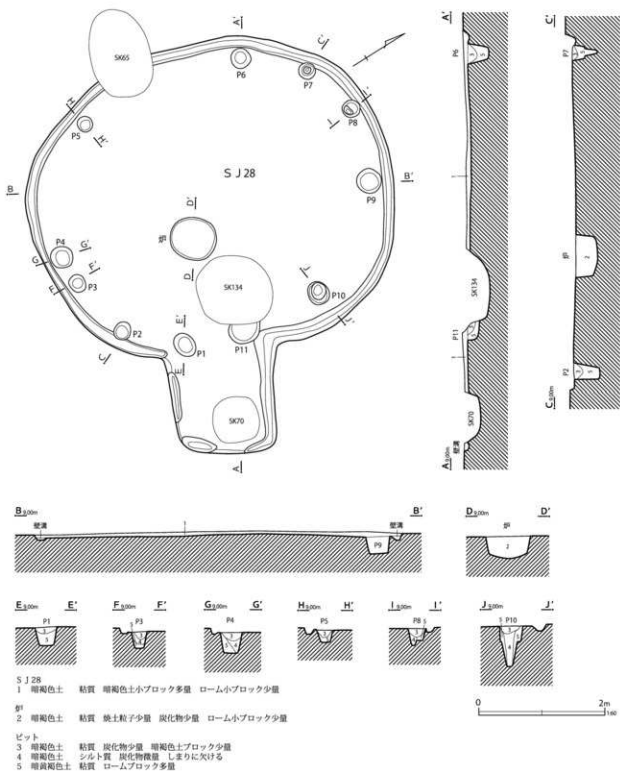
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	31	30	20
P2	28	27	20

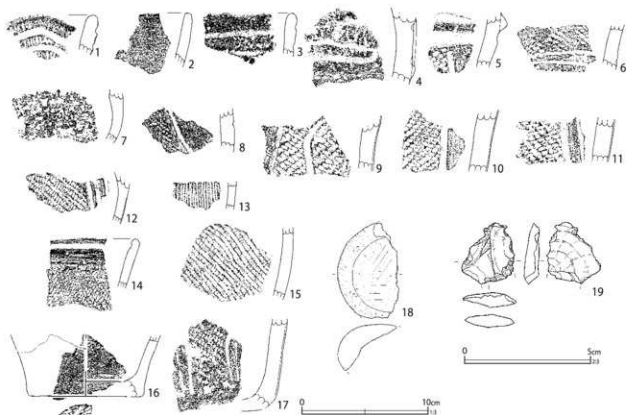
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P3	30	27	27
P4	37	36	50

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P5	44	39	52
P6	34	26	21



第166图 第27号住居跡出土遺物





第168図 第28号住居跡出土遺物

第28号住居跡 (第167・168図)

G・H-8・9グリッドに位置する。

第65・70・134号土壌と重複関係にあり、いずれも本遺構より新しい。

南東側に張り出し部をもつ柄鏡形の住居跡で、壁溝が全周するが、掘り込みは非常に浅い。

炉跡は、中央南東寄りに検出され、直径70cm、深さ36cmの円形掘り込みをもつ。

柱穴は壁に沿って11本が検出されたが、入口部の施設等は確認できなかった。

出土遺物は少なく、遺構の時期の特定は難しいが、主体を占める土器片より加曾利EⅢ式段階と考えたい。

1～13は加曾利E式段階のものである。

1は波頂部の破片で地文は条線文である。

3～7は口縁部文様帯を有するキャリバー形土器で、4は大型の土器である。

8 沈線で曲線的なモチーフが描かれる

9～12は地文縄文に懸垂文が垂下し、13には条線が用いられる。

14・15は後期堀之内式と思われる。地文は両者とも単節RLの横位施文である。

18は磨石の破片で、丁寧な整形が施される。

19はいわゆる縦型石匙で、下半を欠損する。側縁の調整はほとんど認められず、つまみ部の加工も粗い。

第62表 第28号住居跡柱穴計測表

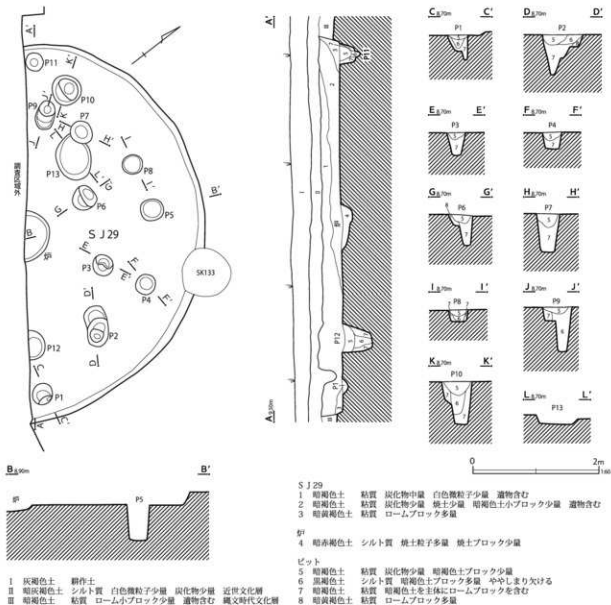
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	39	30	29
P2	36	29	42
P3	27	24	26
P4	34	34	32

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P5	26	23	18
P6	30	30	34
P7	26	24	38
P8	28	26	37

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P9	39	37	29
P10	37	33	64
P11	48	[31]	20

第63表 第28号住居跡出土遺物観察表

遺構名	棟図	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
				(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
SJ28	168	18	磨石	[7.6]	[4.8]	[3.7]	94.1	安山岩	
SJ28	168	19	石匙	[2.4]	2.1	0.6	2.5	チャート	



第169図 第29号住居跡

第29号住居跡 (第169～171図)

H・I-8・9グリッドに位置する。

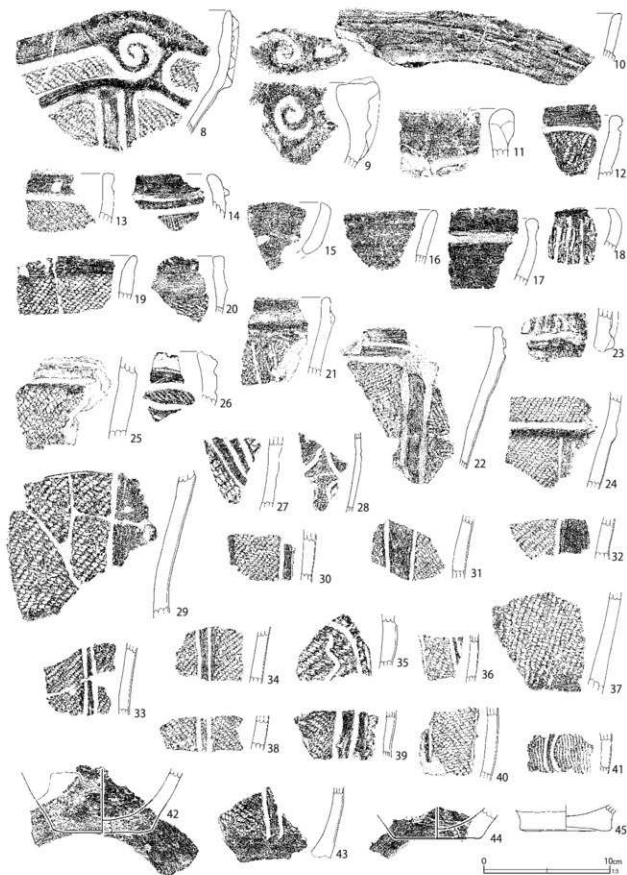
南西側のほぼ半分は調査区域外で、現況で5.8m、深さ約24cmを測る。

が跡は、遺構中央で検出されたが、南西側は調査区域外である。深さ13cm程の掘り込みをもつ地床好である。

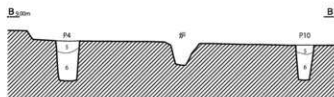
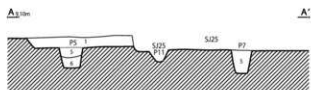
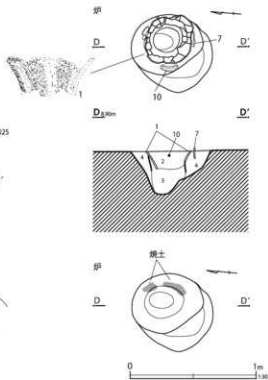
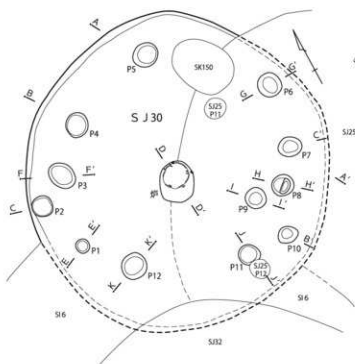
柱穴は13本検出されたが、深さや配置からP1・4・5・10及びP3・6・7・9・12を主柱穴と考えれば、二重に回る可能性も考えられよう。

本住居跡の時期は、主体を占める土器から加曾利EⅢ式期と思われる。

1・8・11～14・23～26は貼付隆帯による口縁部文様帯を有するキャリパー形土器で、8は波状



第171图 第29号住居跡出土遺物(2)



S J 30

1 暗黄褐色土 白色粒子多量 炭化物微量 しまり強い

2

暗褐色土 粘質 炭化物多量 ロームブロック少量

3

暗赤褐色土 シルト質 焼土ブロック多量 ややしまり欠ける

4

暗褐色土 粘質 暗褐色土ブロックとロームブロックの混土層

5

暗黄褐色土 ローム粒子やや多 炭化物微量 しまり強い

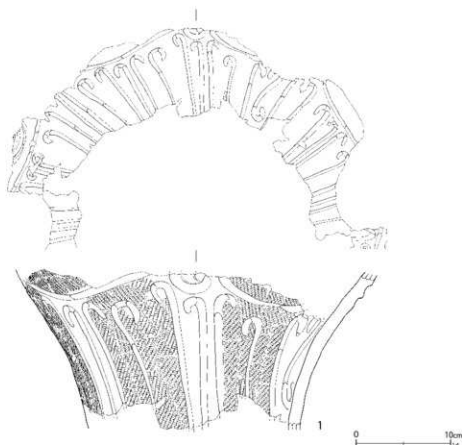
6

暗灰褐色土 ロームブロック (φ 10 mm) やや多

K-K'



第172図 第30号住居跡



第173図 第30号住居跡出土遺物（1）

は短く断面三角形に作り出される。

4は打製石斧の基部と思われる。

5は三角柱状の自然石を利用した敲石である。

6は長円形の磨石、7は石皿の小片である。

第30号住居跡（第172～174図）

H・I-9・10グリッドに位置する。

東側で第25号住居跡と、南側で第32号住居跡及び第6号竪穴状遺構と重複関係にあり、土層の観察から第25号住居跡より古いことは確認されたが、他の遺構との関係は不明である。

跡には土器が設置されていたが、土器の下部にある3層に焼土が多量に含まれ、また3層上部

が被熱のため赤化していることなどから、炉の使用途中で土器を設置したものと思われる。また、土器内面の上半部にも被熱痕が認められることから、設置後も使い続けられていたことがわかる。

柱穴は13本検出されたが、深さや配置からはP1・4・6・8・10～12などが主柱穴の可能性が高い。

本住居跡の時期は、炉体土器から加曾利EⅢ式期と考えられる。

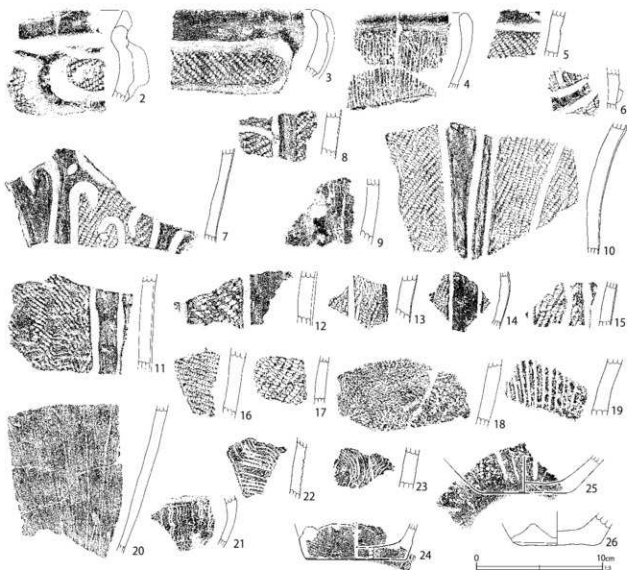
1および7は炉体土器で、接合はしなかったが同一個体と思われる。口唇下に配された4単位の渦巻文を緩く波状につなぐ区画文には、部分的に

第66表 第30号住居跡柱穴計測表

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	23	21	58
P2	34	33	34
P3	49	36	23
P4	39	36	64
P5	42	37	31

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P6	39	36	55
P7	39	30	37
P8	35	35	48
P9	34	34	68
P10	33	27	56

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P11	33	(29)	71
P12	34	29	71
P13	41	40	37



第174図 第30号住居跡出土遺物（2）

渦文が施されるようである。地文は単節R.L.が用いられ、口縁部付近では横位に施文され、胴部には蕨手状の懸垂文が多用される。

2・3・5・6は貼付隆帯による口縁部文様帯を有するものである。

4・19は平行沈線が施される曾利系の土器。

9には貼付隆帯による懸垂文が垂下する。

8・10～17は地文縄文および懸垂文が垂下する胴部破片で、8には曲線的なモチーフが認められ、13には条線文が併用される。

18は4、5条単位の無節Lによる撚糸文が斜位に疎に施文される。

20～23は地文に条線が用いられるものである。

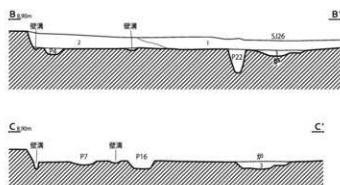
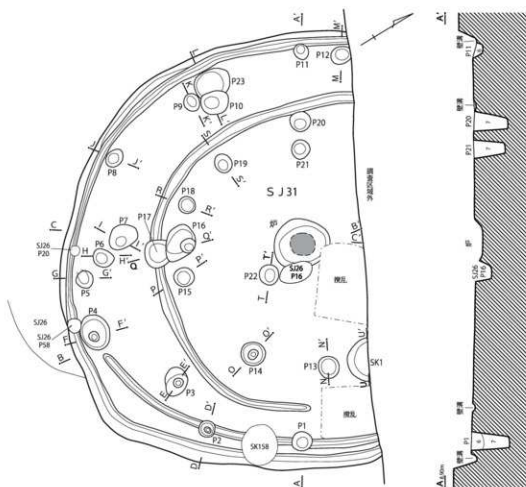
第31号住居跡（第175～177図）

J-12・13グリッドに位置し、北側の一部は調査区域外である。

西側の上層に第26号住居跡が重複しており、一部の柱穴の影響を受けているが、土層断面の観察からも第26号住居跡よりも古いことが確認された。

壁溝が内外に2列検出され、それに伴って柱穴列もP1～12とP13～20の2列が確認されたが、土層観察の結果、外側のものが新しく、住居の拡張に起因するものと思われる。

なお、柱穴は22本検出されているが、深さや配置からはP1～3・5・7・10、及び15・16・19・20などが主柱穴の可能性が高い。



- S J 31
- 1 暗褐色土 炭化物少量 白色微粒子 焼土ブロック少量遺物含む (粘質土)
 - 2 暗褐色土 白色微粒子多量 暗褐色土ブロック多量 (粘質土)
 - 3 赤褐色土 シルト質 白色微粒子少量 焼土ブロック多量
- ピット
- 4 暗褐色土 粘質 炭化物少量 白色微粒子少量
 - 5 暗褐色土 粘質 しまり欠ける
 - 6 暗褐色土 粘質 暗褐色土ブロック多量
 - 7 黒褐色土 シルト質 しまり欠ける 炭化物少量
 - 8 暗褐色土 粘質 暗褐色土ブロック多量
 - 9 暗褐色土 シルト質 白色微粒子多量
 - 10 暗褐色土 粘質 炭化物少量 ややしまり欠ける
- S K 1
- 11 暗褐色土 粘質 暗褐色土ブロック多量

0 2m 1:100

第175図 第31号住居跡 (1)

が跡は、遺構中央付近で検出されており、深さ12cm程の浅い掘り込みをもつ地床がである。

また、調査区の境界部分で土塊状の掘り込み (S K 1) が検出されたが用途は不明である。

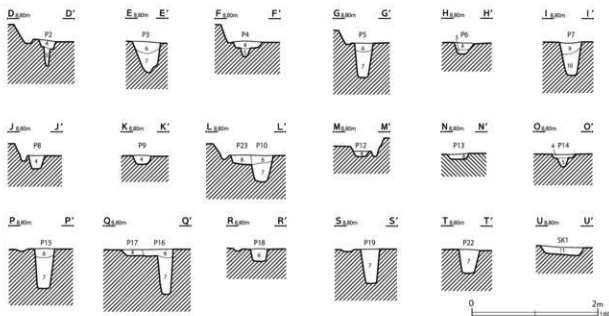
出土遺物は少ないが、主体を占める土器片より、本住居跡の時期は加曾利EⅢ式期であろう。

1～3・8は貼付隆帯による口縁部文様帯を有するもので、1は大型の土器である。

4・5は内湾する無文の口縁部である。

6には単節LRの縄文が縦位に施文される。

9・10は浅鉢形土器の肩部である。



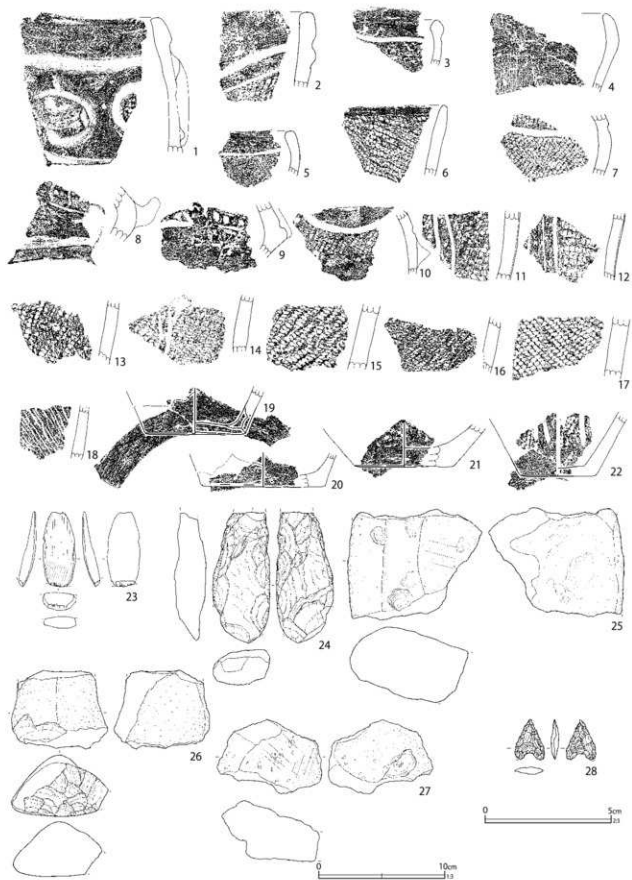
第67表 第31号住居跡柱穴計測表

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P9	30	27	14
P10	49	39	45
P11	27	26	17
P12	(35)	30	17
P13	37	37	10
P14	41	40	21
P15	33	32	66
P16	66	48	77

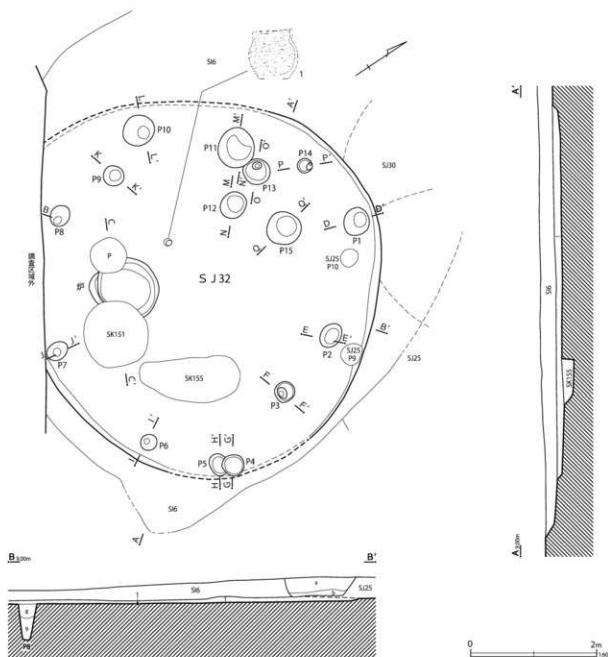
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P17	48	[46]	11
P18	29	29	21
P19	31	27	59
P20	35	34	59
P21	32	31	53
P22	35	33	38

11～17は地文縄文が施される胴部破片、18には条線が用いられる。

第68表 第31号住居跡出土遺物觀察表

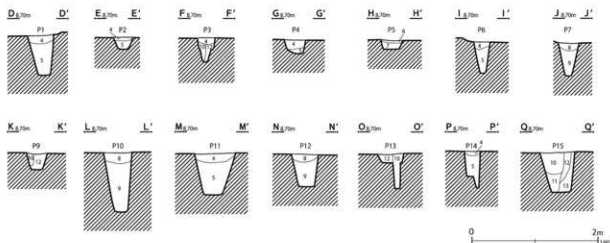


第177图 第31号住居跡出土遺物



- a 暗灰褐色土 白色粒子多量 炭化物微量 本遺構より新しい遺構の覆土
 b 暗褐色土 白色粒子多量 本遺構より新しい遺構の覆土
- S J 32
 1 風褐色土 白色粒子少量 しまり強い
- g1
 2 赤褐色土 シルト質 焼土ブロック多量
 3 暗褐色土 粘質 焼土粒子 焼土ブロックとロームブロックの混土層 しまりに欠ける
- ビット
 4 灰褐色土 ローム粒子やや多 しまり強い
 5 暗黄褐色土 ローム粒子少量 しまり弱い 炭化物微量
 6 暗黄褐色土 ローム粒子少量 しまり強い
 7 暗褐色土 ロームブロック (φ5 mm) 少量
 8 暗褐色土 ロームブロック少量 (φ5 mm) ローム粒子少量 しまり弱い
 9 暗黄褐色土 ロームブロック少量 (φ20 mm) しまり強い
 10 暗黄褐色土 ローム粒子少量
 11 灰褐色土 ローム粒子少量
 12 暗褐色土 褐色土ブロック (φ20 mm) やや多 しまり強い
 13 暗灰褐色土 ロームブロック (φ10 mm) 多量 しまり強い

第178図 第32号住居跡 (1)



第179図 第32号住居跡（2）

第32号住居跡（第178～180図）

I-9・10グリッドに位置し、南西側の一部は調査区域外である。

北側で第25・30号住居跡及び第6号竪穴状遺構と重複関係にあり、土層の観察から第25号住居跡及び第6号竪穴状遺構より古いことは確認されたが、第30号住居跡との関係は不明である。

炉跡は、中央南寄りに検出され、直径約1m、深さ26cm程の掘り込みを有する。

柱穴は15本検出されたが、深さや配置からはP1・3・6～8・10・11などが支柱穴の可能性が高い。またP13・15なども深く、注意されよう。

出土遺物は少なく、また小破片であるが、主体を占める土器片より、本住居跡の時期は加曽利EⅢ式期と考えたい。

1は小型の壺形土器で、器面は粗く整形され、内面に赤彩の痕跡がある。

3は無文の口縁部破片で、浅い凹線が巡る。

4・5・12～14は口縁部に文様帯を有するキャリバー形土器である。

6・15は沈線が施される曽利系の土器であろう。

8・11は口唇部および頸部に連続刺突文が巡るもので、連弧文系の土器と思われる。

9は堀之内式の土器で、単節LRの太い縄文が横位に施文されている。

10は胴部に磨り消し縄文と曲線的なモチーフが展開するもので、やや新しい様相を呈する。

16～24は地文縄文が施されるもので、16～19が単節RL、20～24が単節LRである。

25・26は後期の土器と思われ、25は単節LR、26は複節LRLの縄文が横位に施される。

27は地文に条線が用いられるものである。

28・29は無文の胴部破片で、28は浅鉢形土器。

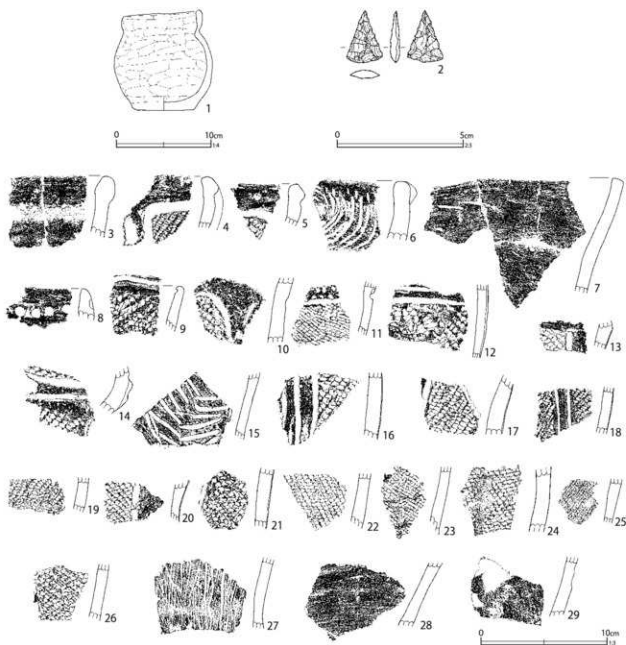
2は小型石鏃で、完形品である。基部は無茎で緩やかな丸みを帯びる。側縁・基部とも調整は丁寧で細かい。

第69表 第32号住居跡柱穴計測表

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	43	42	65
P2	40	31	17
P3	32	30	38
P4	35	33	22
P5	35	(19)	17

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P6	27	25	49
P7	35	26	53
P8	35	30	56
P9	32	32	27
P10	51	48	94

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P11	64	57	67
P12	43	39	52
P13	43	41	56
P14	24	23	49
P15	54	50	63



第180図 第32号住居跡出土遺物

第33号住居跡（第181・182図）

J-11・12グリッドに位置する。

浅い谷状の地形（土層断面 a・b 層）に掘り込まれた遺構で、南側半分は調査範囲外となっており、北側も大きく攪乱を受けている。

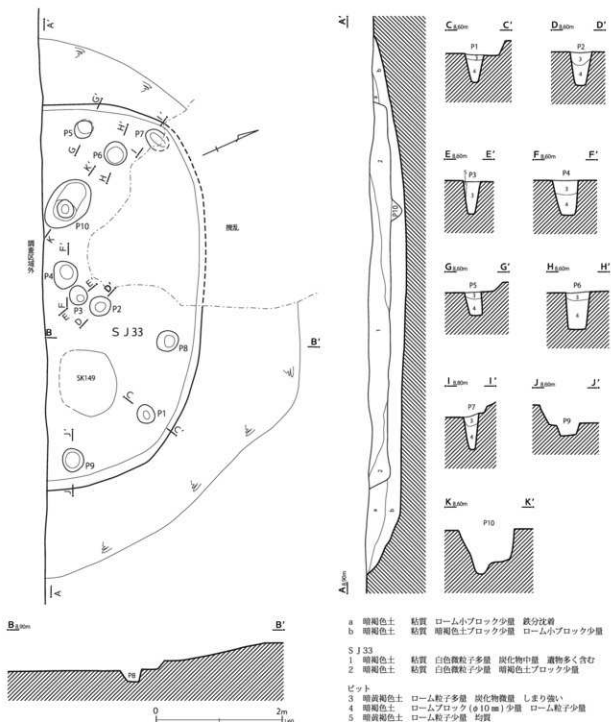
炉跡や壁溝は検出されなかった。

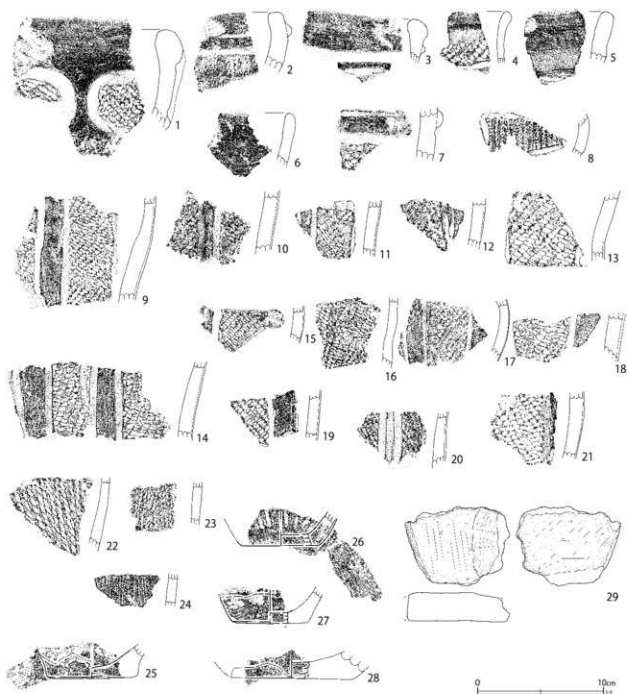
柱穴は10本検出されたが、深さや配置からはP 1・5～7などが主柱穴の可能性が高い。また、P 2～4・10などの深い掘り込みも見つかっており、北側に重複する遺構の存在も考えられよう。

出土遺物は少ないが、主体を占める土器片より本住居跡の時期は加曽利EⅢ式期であろう。

第70表 第32号住居跡出土遺物観察表

遺構名	挿図	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
					(cm)		(g)		
SJ32	180	2	石蔵	2.0	1.4	0.4	0.8	チャート	





第182図 第33号住居跡出土遺物

第71表 第33号住居跡柱穴計測表

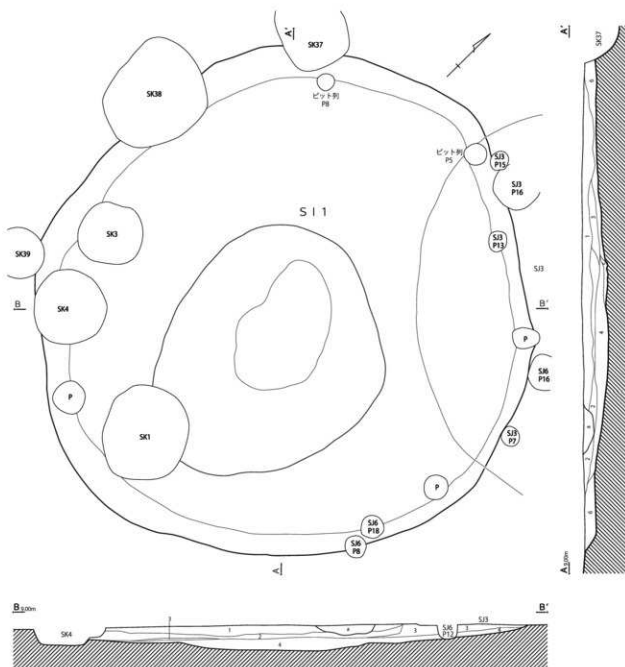
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P1	30	27	47
P2	35	31	51
P3	30	29	51
P4	43	39	55

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P5	31	26	37
P6	37	36	60
P7	28	(28)	56
P8	36	32	19

	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P9	36	35	19
P10	88	60	71

第72表 第33号住居跡出土遺物観察表

遺構名	挿図	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
					(cm)		(g)		
SJ33	182	29	石皿	(6.3)	(8.3)	2.4	195.2	流紋岩	



- a 黒褐色土 粘質 炭化物粒子中量 遺物含む ややしまりに欠ける
土壌層土 本遺構より新しい遺構の覆土

- S11
1 暗褐色土 粘質 炭化物粒子中量 土器多く含む
2 暗黄褐色土 粘質 ロームブロック多く含む ややしまりに欠ける
3 褐色土 シルト質 褐色土ブロックとロームブロックの混在
4 灰褐色土 ロームブロックと灰褐色粘土の混在
5 灰褐色土 粘質 灰褐色粘質土多量 炭化物粒子中量 ややしまりに欠ける
6 黄褐色土 シルト質 ロームブロック多量

0 2m
1:40

第183図 第1号竖穴状遺構